

平成19年5月31日・6月1日
教育研究会要録
大学・附属共同研究紀要

学びを強め確かにする学習の創造

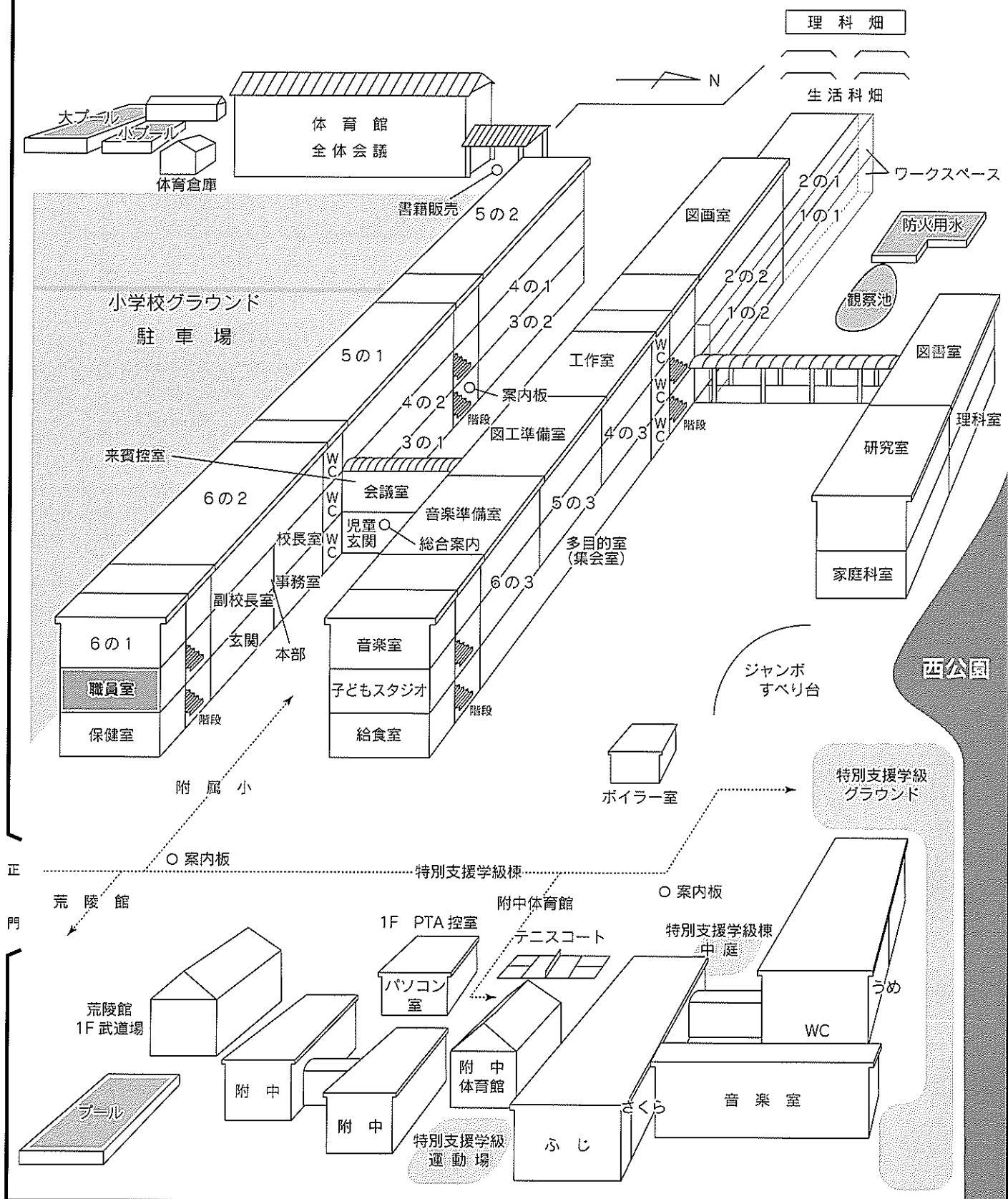
学びの体験を活かす3つの統合による授業づくり



福岡教育大学附属福岡小学校

研究会会場図

※下靴のままお上がりください。



ごあいさつ

福岡教育大学 学長 大後忠志

福岡教育大学附属福岡小学校の平成 19 年度研究発表会の開催にあたりまして、ひとことごあいさつを申し上げます。

本学は、九州地区で唯一の教員養成大学として、教員にふさわしい人材育成を中核に、地域とともに歩む大学をめざしているところです。

その中で、各附属学校は、その役割についても先導的研究実験校としての任務を確実に果たしていくことが、大きな使命の一つであると考えています。特に、大学と連携して研究開発を行うことは今後ますます重要となり、その成果は、この研究発表会を通して、それぞれの公立学校に還元されるものであることが強く求められています。

本年度の研究発表会は、主題を「学びを強め確かにする学習の創造－学びの体験を活かす3つの統合による授業づくり－」と設定して、その研究成果を世に問うものであります。公開授業はもちろん、教科等の発表、学習指導協議会、教育対談、全体講演と、2日間にわたる多彩な内容となっています。昨年度までの研究を基盤に、発展的に継続研究してきた成果が発表されるものと期待しています。

今回の研究発表会が地域の学校のみならず、我が国における初等教育実践の進展に少しでも寄与できれば、これに優る喜びはありません。ご参会された皆様のご指導・ご助言を切にお願いする次第であります。

最後になりましたが、ご多用の中、ご講演をお引き受け下さいました京都ノートルダム女子大学教授の加藤明先生に深く感謝申し上げます。また、司会者・指導助言者としてご協力下さいました諸先生にも心より御礼申し上げます。

今回の研究発表会を機会に附属学校を中心に、本学と各地域の公立学校及び教育関係機関との連携を深めてまいりたいと考えております。

関係する皆様より一層のご支援をお願い申し上げまして、ごあいさつと致します。

は じ め に

現在、教育への社会的関心の高まりとともに、様々な教育改革について活発に議論されているところです。平成14年度全面実施の現行学習指導要領についても、次期の改訂にむけて大幅な見直しが叫ばれています。こうしたなかで、学校はそれぞれ特色あるカリキュラムを構想し、実施していくことが求められています。

本校では、これまで長年にわたり、教育課程の編成、実施、評価に関する研究実践を積み重ね、その使命に相応しい先駆的・先導的研究成果を公にしてきました。

平成16年度からは今日的な教育課題を解決するために人間が生きる側面に着眼し、研究主題を「豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造」として取り組んでまいりました。その中で、子どもたちの学びの姿を「生活」、「文化」「人間」に類型化して、各教科等固有の役割の明確化や、子どもの学ぶ意義を強める自己開発との統合、さらには確かな学力の育成をねらいとした他者との「協働」による学習の展開と、年度ごとに目標を定めてその成果を公表し、多くの賛同を得てきたところです。これらの成果は、著書「子どもが本気になる授業づくり～新しい時代の単元・題材づくりから発問・板書まで～」(明治図書)として刊行しております。

今年度からは、これまでの研究成果を踏まえつつもさらに発展させるため、研究主題を「学びを強め確かにする学習の創造」と新たに設定しました。その初年度にあたる本年度は「関連」、「系統」、「補完」をキーワードに、学びの体験を統合し、授業づくりに活かす方法を整理して取り組むこととしました。それが副主題「学びの体験を活かす3つの統合による授業づくり」です。

今回の研究成果の発表会開催にあたり、多くの方々から本校と発表者への直接的、間接的なご指導・ご支援と励ましを頂戴いたしました。ここに深く感謝申し上げますとともに、今後につきましても引き続き倍旧のご厚情を賜りたく、切にお願い申し上げます。

平成19年5月

校 長 鈴 木 清 一

目 次

ごあいさつ	1
はじめに	2
目 次	3
日程と内容（第1日目）	4
日程と内容（第2日目）	6
本校研究の歩み	8

公開授業及び全体会の部(第1日目)

学習指導案（午前）	9
全 体 会	28
学習指導案（午後）	29
学習指導協議会	50
教育シンポジウム	50

公開授業及び全体会の部(第2日目)

学習指導案（午前）	51
全 体 会	76
学習指導案（午後）	77
テーマ別協議会	92
全 体 講 演	92

研 究 紀 要 の 部

研究紀要の部目次	93
研究全体構想	94
各教科等部要項	112
特別支援教育部要項	172
帰国子女教育部要項	182
おわりに	189
平成19年度研究同人	190

第1日目 5月31日(木) の日程

I 学習指導の部(午前)

▼ 学 習 指 導 (9:15～10:00)

学年 組	教科領域等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
2年2組	国 語 科	どのようにかかわり合っているのかな?～サンゴの海の生きものたち～	光延 正次郎	2年2組教室
3年1組	社 会 科	しょうかいしよう!わたしたちのまち福岡市	高瀬 雄大	3年2組教室
4年1組	算 数 科	収納名人～円と球の直径や半径を調べて～	永尾 健	4年1組教室
4年2組	理 科	変身する水のゆくえ～見えない水をつかまよう～	福原 伸治	理 科 室
5年1・3組	家 庭 科	日曜の朝はおまかせ!とっておきのモーニングスーパ	長門 直子	家 庭 科 室
6年2・3組	図画工作科	くらしにおしゃれな空間を～創造インテリア～	北田 尚雄	工 作 室

▼ 特別支援学級と通常学級の交流学習指導 (9:15～10:00)

1年1組 1・2年ぶじ組	体 育 科	うまく あてよう よけよう! ころころドッジボール	渡邊 正則 下川 勝彦	附属中体育館
-----------------	-------	------------------------------	----------------	--------

▼ 特別支援教育学習指導 (9:15～10:00)

5・6年梅組	算 数 科	グラフでくらべよう!わくわくボウリングゲーム	弘松 英樹	特学棟音楽室
--------	-------	------------------------	-------	--------

II 全体会の部(午前)

▼ あ い さ つ (10:20～10:35)

福岡教育大学学長 大 後 忠 志
校 長 鈴 木 清 一

▼ 主 題 発 表 (10:35～11:05)

・ 学びを強め確かにする学習の創造

ー学びの体験を活かす3つの統合による授業づくりー

研 究 主 任 北 田 尚 雄

▼ 特 別 支 援 教 育 発 表 (11:05～11:25)

・ 状況に応じたことばを使う国語科学習

ーストーリーのあるごっこ遊びを取り入れた学習の展開ー

特別支援教育部国語科 諏訪原 佳 子

▼ 教 科 等 発 表 (11:25～11:45)

・ 自然のしくみを実感する理科学習

ー比較検討活動を位置付けた学習の展開ー

理 科 部 今 泉 伸 一 郎

▼ 児 童 発 表 (11:45～12:00)

・ 創り出そう! 私達のハーモニー

指 導 者 有 川 陽 子

Ⅲ 学習指導の部(午後)

▼ 学 習 指 導 (13:00~13:45)

学年 組	教科領域等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
1年1組	音 楽 科	もりのどうぶつのリズムをつくろう	有川 陽子	音 楽 室
1年2組	生 活 科	つくろう!コトコトカーレース	塚本 正典	1F2階・ワークスペース
2年1組	算 数 科	身体ものさしで見つもり名人になろう	田中 健悟	2F1階・ワークスペース
3年2・3組	理 科	植物のそだちをついせきしよう	今泉伸一郎	理 科 室
4年1・3組	体 育 科	つくろう!楽しもう!リズムピクス	久保 勝美	附属中体育館
4年2組	道 徳	友だちのためになるには?	木下 美紀	4年1組教室
5年1組	学級活動	ウォークラリー集会でGo!	黒澤 真二	5年1組教室
5年2組	社 会 科	どうする?これからの米づくり	高良 祐治	5年2組教室
6年1組	国 語 科	わたしはこう考える~優先席は必要か?~	平川 洋一	6年1組教室

▼ 特別支援教育学習指導 (13:00~13:45)

3・4年2組	国 語 科	あかずきんちゃんごっこ~おばあさんをたすけよう~	諏訪原 佳子	特学棟音楽室
--------	-------	--------------------------	--------	--------

▼ 授業づくりの基礎・基本を明確にする学習指導協議会 (14:00~15:00)

会 場	教科領域等	司 会 者	指 導 助 言 者
6年1組	国 語 科	古賀市立舞の里小学校 教諭 松 本 剛	古賀市教育委員会 学校指導室室長兼指導主事 水 上 栄 一 福岡教育大学 准教授 河 野 智 文
5年2組	社 会 科	久山町立山田小学校 教諭 國 崎 真 一	古賀市立花見小学校 校長 西 邦 彰 福岡教育大学 教授 豊 島 啓 司
2年1組	算 数 科	前原市立雷山小学校 教諭 二 串 英 一	春日市立春日原小学校 校長 山 下 英 俊 福岡教育大学 教授 飯 田 慎 司
理 科 室	理 科	福岡市立簗子小学校 教諭 山 下 真 弓	福岡市立世丘小学校 校長 谷 友 雄 福岡教育大学 准教授 安 藤 秀 俊
1年2組	生 活 科	福岡市立七隈小学校 教諭 松 田 伸 治	みやま市立下庄小学校 校長 堀 直 樹 福岡教育大学 教授 津 川 裕
音 楽 室	音 楽 科	太宰府市立太宰府西小学校 教諭 木 村 宏 子	久留米市立城島小学校 校長 丸 山 誠 二 郎 福岡教育大学 准教授 原 田 大 志
図 画 室	図画工作科	福岡市立愛宕小学校 教諭 宮 野 直 哉	福岡市立有田小学校 校長 田 中 和 隆 福岡教育大学 教授 阿 部 守
附属中学校	体 育 科	小郡市立のぞみが丘小学校 教諭 岩 城 一 磨	宗像市教育委員会 教育政策課長兼指導主事 脇 田 哲 郎 福岡教育大学 教授 相 部 保 美
家庭科室	家 庭 科	福岡市立舞松原小学校 教諭 篠 原 裕 子	福岡市立東住吉小学校 校長 小 嶋 悦 子 福岡教育大学 教授 甲 斐 純 子
5年1組	特 別 活 動	大野城市立大野小学校 教諭 高 倉 修	宗像市立河東西小学校 校長 大 嶋 正 紹 福岡教育大学 教授 高 田 清
4年1組	道 徳	福岡市立千早小学校 教諭 大 近 正 博	久留米市立合川小学校 校長 萩 尾 耕 一 福岡教育大学 教授 堺 正 之
特学棟 梅組教室	特別支援 教育	福岡市立当仁小学校 教諭 鹿 田 崇 之	福岡市立福岡中央特別支援学校 校長 高 井 敏 雄 福岡教育大学 教授 納 富 恵 子 教授 猪 恵 美 子

Ⅳ 全体会の部(午後)

▼ 教育シンポジウム (15:20~16:20)

「子どもたちの^{がくよく}学欲向上のために」

ーメディアや家庭から学校に期待することは?ー

- 教育報道出版社 代表取締役社長
- RKB毎日放送 事業部副部長
- 本校研究部

梶 浦 真 氏
青 山 治 美 氏
高 良 祐 治

▼ あ い さ つ

副校長 三 原 英 喜

第2日目 6月1日(金) の日程

I 学習指導の部(午前)

▼ 学 習 指 導 (9:15～10:00)

学年 組	教科領域等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
1年2組	体 育 科	たのしもう！ジャングルランナー	久保 勝美	附属中体育館
2年2組	生 活 科	つくろう！ふ小ふくふくプラザ	塚本 正典	2年2組ワークスペース
3年1組	学級活動	教生先生ウェルカム集会の内容を決めよう	黒澤 真二	4年1組教室
3年2組	国 語 科	伝えよう、からし明太子の味のひみつ	平川 洋一	3年2組教室
4年1・3組	音 楽 科	旋律にのせて、ボイスリズムアンサンブルをつくろう	有川 陽子	音 楽 室
5年1・3組	英語活動	Let's make a pizza!	永尾健・長門直子 セバウンかおり Matthew Love	子どもスタジオ
5年2組	算 数 科	だまし絵づくりをしよう～三角形・多角形をしきつめて～	島川 二郎	5年2組教室
6年1組	総 合	命の輝きを	木下 美紀	6年1組教室
6年2・3組	理 科	生活で活かされる水溶液の性質	今泉伸一郎	理 科 室

▼ 特別支援教育学習指導 (9:15～10:00)

さくら・梅組グループ	算 数 科	でためをあわせよう！ツーサイコロすごろく	諏訪原 佳子	特学棟音楽室
さくら・梅組グループ		なんじがなにをするの？～ぼくのわたしのせいかつよう～	下川 勝彦	ふじ組教室
さくら・梅組グループ		いくらはらうの？～ただしくはらっておかいもの～	原田 敏男	さくら組教室

II 全体会の部(午前)

▼ あ い さ つ (10:20～10:35)

初等教育研究部委員長
校 長 鈴 木 清 一

▼ 主 題 発 表 (10:35～11:05)

・学びを強め確かにする学習の創造

－学びの体験を活かす3つの統合による授業づくり－

研究副主任 下 川 勝 彦

▼ 教 科 等 発 表 (11:05～11:25)

・数理的な処理のよさを実感する算数科学習

－収集・分析活動を取り入れた学習の展開－

算数科部 永 尾 健

▼ 児 童 発 表 (11:30～11:45)

・創り出そう！私達のハーモニー

指導者 有 川 陽 子

Ⅲ 学習指導の部(午後)

▼ 学 習 指 導 (12:45~13:30)

学年 組	教科領域等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
2年1組	体 育 科	とんで かわして すりぬけじんとり	渡邊 正則	附属中体育館
4年2組	社 会 科	つくろう! あらつ防災調査レポート	高瀬 雄大	4年1組教室
5年2組	国 語 科	筆者の意図を読み取ろう~生き物全体のつながりとは~	平島 健二	5年2組教室
6年1組	算 数 科	平均データで比べよう	田中 健悟	6年1組教室
6年2組	総 合	祝! 築城400年, わたしのまちの福岡城プロジェクト	高良 祐治	6年2組教室

▼ 帰国子女教育学習指導 (12:45~13:30)

3~6年 3組合同	国際交流タイム	世界の音楽を奏でよう ~民族楽器と民族衣装で着飾って~	永尾 健 有川 陽子 長門 直子	子どもスタジオ
--------------	---------	--------------------------------	------------------------	---------

▼ 特別支援教育学習指導 (12:45~13:30)

ふくじ組 くら組 梅組	合同生活単元学習	ふじ・さくら・梅まつりをしよう!	下川勝彦, 原田敏男, 諏訪原佳子, 弘松英樹	特学棟運動場
-------------------	----------	------------------	----------------------------	--------

▼ 保健養護部実践提案部会 (12:45~14:45)

会 場	提 案 者	司 会 者	指 導 助 言 者
4年2組 教 室	福岡市立西高宮小学校 (前 本校養護教諭) 養護教諭 島山佳子	二丈町立福吉中学校 養護教諭 森田常子	聖マリア学院大学 非常勤講師 筑紫 味子 福岡教育大学 保健管理センター所長 宮田 正和

▼ テーマ別協議会「教師の授業力アップの基礎・基本」 (13:45~14:45)

会 場	協議会	協 議 会 テ ー マ	提 案 者
附属小 講 堂	指導力アップの 授業づくりA	子どもの問いをうみだし, 学びを旺盛にする授業づくり ~板書や発問の工夫~	高良 祐治 高瀬 雄大
6年1組 教 室	指導力アップの 授業づくりB	子どものやる気を出す, 教材教具を工夫した授業づくり ~算数科の授業づくりを中心に~	田中 健悟 島川 二郎
5年2組 教 室	指導力アップの 授業づくりC	読解力をつけるための授業づくり ~国語科の授業づくりを中心に~	光延正次郎 平島 健二 平川 洋一
理科室	指導力アップの 授業づくりD	子どもの知的好奇心をよび起こす 教材の工夫 ~理科の授業づくりを中心に~	今泉 伸一郎 塚本 正典 福原 伸治
3年2組 教 室	心といのちの 授業づくり	豊かな心といのちについて子どもと考える授業づくり ~道徳の授業づくりを中心に~	木下 美紀 黒澤 真二
4年1組 教 室	体力向上の 授業づくり	子どもたちの体力を高める授業づくり ~体育科・家庭科の授業づくりを中心に~	久保 勝美 渡邊 正則 長門 直子
子ども スタジオ	帰 国 子 女 教 育	帰国子女教育をどのように進めたらよいか	永尾 健 有川 陽子
特学棟 梅組教室	特 別 支 援 教 育	明日から使える特別支援教育の授業づくり ~教材・教具のアイデア~	原田 敏男 弘松 英樹 下川 勝彦 諏訪原 佳子

Ⅳ 全体会の部(午後)

▼ 全 体 講 演 (15:00~16:20)

「今, 求められる教育の方向と教師の授業力」

全 体 講 師 京都ノートルダム女子大学 教 授 加 藤 明 先生

▼ あ い さ つ

副校長 三 原 英 喜

本校研究のあゆみ

年度			
23	○学習効果判定の理論と実際	59	○自己実現の喜びを生み出す学習内容の検討 — 学習実態の多様性に即応する学習指導 —
24	○カリキュラムの構成と実際	60	○自己実現の喜びを生み出す学習指導法 — 子どもの個性が生きる指導 —
25	(発表会なし)	61	○自己実現の喜びを生み出す学習指導法 「学習の個性化をめざす指導法の開発」 (明治図書から出版)
26	○学習深化の指導	62	○自己実現の喜びを生み出す学習指導法 — 学習の個性化をめざす学習過程 —
27	○学習深化の指導	63	○自己実現の喜びを生み出す学習指導法 — 「学習の個性化」をめざす授業の改造 — 「感動体験を中核とした生活科の授業づくり」 (明治図書から出版)
28	○学習深化をめざす指導	平成 元年	○個が生きる授業の創造 — 自己理解の学習過程 —
29	○学習指導における諸問題の再検討	2年	○個が生きる授業の創造 — 考えを確かにする活動構成 —
30	○学習指導における新課題の再検討	3	○個が生きる授業の創造 — 考えを深める自己吟味活動を通して — 「個が生きる授業づくり」 (北大路書房から出版)
31	○学習指導深化をめざす新課題の究明	4	○生きる喜びを生み出す授業の創造 — 思い・願いをもって問いつづける 活動づくり —
32	○組織化をめざす学習指導法の究明	5	○生きる喜びを生み出す学習の創造 — 思いをあらわしていくよさを 実感する活動の展開 —
33	○組織化をめざす学習指導法の究明	6	○生きる喜びを生み出す学習の創造 — 自分のよさを実感する表現活動の展開 —
34	○学習指導の系統化	7	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 — 新しい教育課程における教科領域の 学習の具体化 —
35	○改訂指導要領による学習指導の諸問題	8	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 — 子供主体の活動からみる教育課程の編成 — 「新時代の授業を創る」(明治図書から出版)
36	○考える子どもを育てる指導法の究明	9	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 — 子供主体の活動からみる教育課程の編成 —
37	○考える力をのばす学習指導法の考察	10	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 — 活動や体験を基盤にした学習の総合化 — 「学習創造」(算数・人間・障害児教育) 出版
38	○考える力をのばす学習指導法の考察	11	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 — 子供と創る教科・総合的学習の展開 — 「学習創造」(理科・図画工作・音楽) 出版
39	○考える力をのばす学習指導法の考察	12	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 — 知恵と心情をはぐくむ教科・総合的 調和的展開 — 「学習創造」(国語・体育) 出版
40	○考える力をのばす学習指導法の考察	13	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 — 調和的に展開する教科領域・総合的 学習像の明確化 — 「新世紀の学力づくり」(明治図書) 出版
41	○考える力をのばす学習指導法の考察 「授業における思考訓練」(明治図書から出版)	14	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 — 教科・総合の学びを連動する〈ふくおかプラン〉の展開 —
42	○教科の本質に立脚した学習指導法の考察 「思考をのばす学習過程の評価」(明治図書から出版)	15	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 — 「自己探究」の学びを拓く〈ふくおかプラン〉の展開 — 「評価で変えるカリキュラムづくり」(明治図書) 出版
43	○(発表会なし)	16	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 — 「生活・文化・人間の学び」を位置付けた〈ふくおかプラン〉の構想 —
44	○現代化をめざす指導法の究明 — 教材の現代的価値と児童の実態と 反応に基づく指導内容の検討 —	17	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 — 自己探究と「生活・文化・人間の学び」を統合する〈ふくおかプラン〉の展開 —
45	○現代化をめざす指導法の究明 — 基本的内容にせまらせる学習の開発 —	18	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 — 協働を中核とした学習の展開 —
46	○現代化をめざす指導法の究明 — ひとりひとりを生かす 合理的な学習指導のしくみ —	19	○学びを強め確かにする学習の創造 — 学びの体験を活かす3つの統合による授業づくり —
47	○現代化をめざす指導法の究明 — 学習の連帯化をはかる指導のしくみ —		
48	○現代化をめざす指導法の究明 — 連帯性を育てる学習指導のしくみ —		
49	○現代化をめざす指導法の究明 — 連帯の力で学びとる姿勢の形成をはかる 学習指導のしくみ — 「学習を連帯化する指導法」 (明治図書から出版)		
50	○現代化をめざす指導法の究明 — 学びとる力の育成をはかる学習指導のしくみ —		
51	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 — 操作を通した学習の構造化 —		
52	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 — 操作を通した学習指導の展開 — 「できるまで育てる」(秀巧社から出版)		
53	○「できるまで育てる」学習指導の計画と運営 — 交流でよりよい操作を身につける学習指導 — 「自由活動の時間」(秀巧社から出版)		
54	○現代化をめざす指導内容と指導法の実証的究明 — 教材の価値にせまらせる操作学習の評価 —		
55	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 — 見直し活動を生かした操作学習の深化 —		
56	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 — 自己を見直し、考えを深める 指導のしくみ —		
57	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 — 自ら見直し活動に取り組む、 自己を深める指導のしくみ — 「学ぶ喜びを生み出す授業」 (北大路書房から出版)		
58	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 — 個が生きる課題づくり —		

公開授業及び全体会の部

第1日目 午前の部

学習指導案

▼ 学 習 指 導 (9:15～10:00)

学年 組	教科領域等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
2年2組	国 語 科	どのようにかわり合っているのかな?～サンゴの海の生きものたち～	光延 正次郎	2年2組教室
3年1組	社 会 科	しょうかいしよう!わたしたちのまち福岡市	高瀬 雄大	3年2組教室
4年1組	算 数 科	収納名人～円と球の直径や半径を調べて～	永尾 健	4年1組教室
4年2組	理 科	変身する水のゆくえ～見えない水をつかまえよう～	福原 伸治	理 科 室
5年1・3組	家 庭 科	日曜の朝はおまかせ!とっておきのモーニングスूप	長門 直子	家 庭 科 室
6年2・3組	図画工作科	くらしにおしゃれな空間を～創造インテリア～	北田 尚雄	工 作 室

▼ 特別支援学級と通常学級の交流学習指導 (9:15～10:00)

1年1組 1・2年ぶ組	体 育 科	うまく あてよう よけよう! ころころドッジボール	渡邊 正則 下川 勝彦	附属中体育館
----------------	-------	------------------------------	----------------	--------

▼ 特別支援教育学習指導 (9:15～10:00)

5・6年梅組	算 数 科	グラフでくらべよう!わくわくボウリングゲーム	弘松 英樹	特学棟音楽室
--------	-------	------------------------	-------	--------

情報を比べて事柄の意味を確かにする国語科学習

第2学年2組 国語科学習指導案

指導者 光 延 正 次 郎

単 元 どのようにかかわり合っているのかな?～サンゴの海の生きものたち～

指導観

本単元について

本単元は、事柄の順序に気を付けながら、海の生きものたちのかかわり合いを読むことをねらいとしている。具体的には、①海の生きものたちがどのようにかかわり合っているのか明らかにすること、②文と写真を結び付けたり、自分の体験を重ねたりしながら、かかわり合うとどんないいことがあるのかつなぐこと、③かかわり合いを「〇〇〇作戦」と短文にまとめること、が主な学習内容である。子どもたちは、生活科の学習で多くの人々とのかかわりにより自分が成長したことを学習している。よって、生活科での学習体験を補完しながら、読み深めていくと考える。

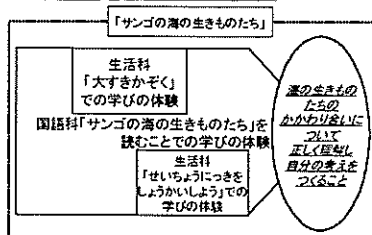
本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、いくつの事柄がどんな順序で書かれているのか考えながら読むことはできるようになってきた。しかし、事柄と事柄とをつないで関係まで読むまでには至っていない。これは、事柄の関係を考えながら読む読み方が身につけていないからである。そこで、国語科学習の充実期にあたり、知的能力も発達し、学校等での学習体験により自主性も増してくるこの期に本単元を設定する。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、つかむ段階では、まとめと生活科での学習体験とを比較させて読みの課題を導く。ふか

補完による学びの体験の統合



める段階では、生活科での自分の学習体験を重ねながら、読みの課題を追究させる。

目 標

- 1 課題をもって「サンゴの海の生きものたち」を読み、海の生きものたちのかかわり合いについて読み取ったことを進んで話し合うことができる。
- 2 事柄の順序を考えながら、写真や自分の学習体験を手がかりにして、海の生きものたちのかかわり合いを読み取ることができる。

計 画 (約6時間)

時	主 な 学 習 活 動	時間
つ	1 「サンゴの海の生きものたち」のまとめと学習体験を比べて気付いたことを話し合う。 ○ サンゴの海の生きものたちのかかわり合い(作戦)に向かう課題意識をもつこと ※ 海の生きものたちのかかわり合いなどあるのか考えさせる。	1
か	2 読みの課題に沿って、段落ごとにサンゴの海の生きものたちのかかわり合い(作戦)について読む。 (1) イソギンチャクとクマノミのかかわり合いを読む。 ○ イソギンチャクとクマノミは互いに守り合って暮らしていることを読むこと ※ 文と写真を結び付けたり、学習体験を手がかりにしたりさせる。	4
ふ	(2) ホンソメワケベラと大きな魚のかかわり合いを読む。 ○ ホンソメワケベラは大きな魚の体に付いた虫を掃除するがその虫が食べ物になっていることを読むこと ※ 文と写真を結び付けたり、学習体験を手がかりにしたりさせる。	②
め		本
る		時
		2
		/
		2
ま	3 海の生きものたちへのお手紙を書く。 ○ サンゴの海の生きものたちのかかわり合いに対する自分の考えをつくること ※ 初めて知ったことやおもしろいと思ったことを書かせる。	1

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- ホンソメワケベラと大きな魚のかかわり合いについて自分が読み取ったことを進んで話し合うことができる。
- 写真や学習体験を手がかりにして、ホンソメワケベラと大きな魚のかかわり合いを読み取り、「〇〇〇作戦」と命名することができる。

1 ホンソメワケベラと大きな魚の写真から、ホンソメワケベラと大きな魚のかかわり合いを予想し話し合う。

- ホンソメワケベラと大きな魚のかかわり合いを読んで見つけたという思いをもつこと

☆ ホンソメワケベラと大きな魚はどのようにかかわり合っているのかな。お話と写真をしっかり読んで絶対に読み取るぞ。

本時のめあて

ホンソメワケベラと 大きな魚の かかわり合いを くわしく
よんで 〇〇〇さくせんと なまえを つけよう。

2 写真を手がかりにしたり、動作化したりしながらホンソメワケベラと大きな魚のかかわり合いを読み取る。

- (1) 「大きな魚がしてもらうこと」と「ホンソメワケベラがしてもらうこと」が、どこに書かれているか色シールを貼る。

- 事柄の順序をとらえること

☆ 「大きな魚がしてもらうこと」から「ホンソメワケベラがしてもらうこと」へという順序で書かれていたぞ。

- (2) 写真を手がかりにしたり、動作化したりしながらホンソメワケベラと大きな魚のかかわり合いについて話し合う。

- ホンソメワケベラと大きな魚がかかわり合うと、互いにどんないいことがあるのかとらえること

☆ 大きな魚は体に付いた虫を掃除してもらい気持ちよくなるし、ホンソメワケベラはその虫を食べてお腹いっぱいになるんだ。

大きな魚はホンソメワケベラにしていること
大きな魚は体や口についている虫を、ホンソメワケベラに、きれいにそうじしてもらいます。
ホンソメワケベラが大きな魚にしていること
ホンソメワケベラは、大きな魚の体や口についている虫を、食べ物としてもらいます。
大きな魚は体に付いた虫を掃除してもらい気持ちよくなるし、ホンソメワケベラはその虫を食べてお腹いっぱいになるんだ。

3 イソギンチャクとクマノミと比較しながら、ホンソメワケベラと大きな魚のかかわり合いを、「〇〇〇作戦」と短文にまとめる。

- かかわり合いを自分の言葉で説明すること

☆ 協力作戦です。わけは、お互いに協力して一つのことをしているからです。

準備

教師側：前時までの流れ図、写真、色シール、文カード、学習プリント

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ ホンソメワケベラと大きな魚のかかわり合いを知りたいと表現（話す・書く）している。

【支援】

- ※ イソギンチャクとクマノミのかかわり合いを、流れ図をもとに想起させる。
- ※ イソギンチャクとクマノミの写真とホンソメワケベラと大きな魚の写真を比較させて、かかわり合いを予想させる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 「大きな魚がしてもらうこと」には赤シールを、「ホンソメワケベラがしてもらうこと」には青シールを貼っている。

【支援】

- ※ まず、「大きな魚がしてもらうこと」が書かれているところと、「ホンソメワケベラがしてもらうこと」が書かれているところを定規を使って四角で囲ませる。
- ※ 次に、「大きな魚がしてもらうこと」には赤シールを、「ホンソメワケベラがしてもらうこと」に色の違うシールを貼らせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 大きな魚は体に付いた虫を掃除してもらい気持ちよくなるし、ホンソメワケベラはその虫を食べてお腹いっぱいになるので、互いにいいことがあると発表している。

【支援】

- ※ かかわり合うと互いにどんないいことがあるのか、写真を手がかりにしたり、動作化したりしながら話し合わせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ ホンソメワケベラと大きな魚のかかわり合いを「〇〇〇作戦」と自分で考えて命名して表現（話す・書く）している。

【支援】

- ※ 前時までの作戦と比較させながら、「〇〇〇の作戦」と短く命名させる。

第3学年1組 社会科学習指導案

指導者 高 瀬 雄 大

小 単 元 しょうかいしよう! わたしたちのまち 福岡市

指 導 観

本小単位について

本小単位は、お互いに違う地域に住んでいる友達に自分が住んでいる地域を紹介することを通して、地域の様子は場所によって違いがあることをとらえられることをねらいとしている。そのために、自分が住んでいる地域の、住宅や店、田畑が集まる場所と周辺の道路との関係や、バス、鉄道などの交通機関と他地域との結び付きの様子を調べたり、それらを学校周辺の様子と比較したりすることを通して、福岡市内の土地利用は、地形や交通の様子にかかわりがあることをとらえることができるようにする。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、前小単位「あらつのまちをたんけんしよう」の学習において、学校周辺の道路を歩き、平野部で生活しやすいことや交通が発達して便利な場所であることをとらえることができている。この学びをつないで、人々の生活は、土地の様子によって違っていることをとらえることができるようにしたい。

本単元の指導について

系統による学びの体験の統合

しょうかいしよう! わたしたちのまち 福岡市

学校周辺を見学し、
地図をつくる
学びの体験

福岡市内の
特色ある
場所を見学し、
地図をつくる
学びの体験

地形や交通
事情に着目し、
土地利用
の様子を
とらえる

学校周辺を歩いて気付いたことをもとに土地の利用の特色がわかる地図を作成した学びを生かして、自分の家の近所の地図を作成し、地形や交通の様子、公共施設等の場所を観点として土地利用の違いを比較し、福岡市の様子をとらえさせる。

目 標

- 1 土地の違いに着目し、共通点や差異点を明らかにしながら意欲的に比較しようとする。
- 2 住んでいる地域を地図にまとめる活動を通して地域の様子は地形や交通事情などによって違うことをとらえることができる。

計 画 (約11時間+課外)

段階	主 な 学 習 活 動	時間
つ か む	1 地域によって土地の様子が違うことについて話し合う。 (1) 学校周辺と家の近くの様子を比べて気付いたことを話し合う。 ○ 大きな道路や駅の近くに家やお店が集まっていることに気付くこと ※ 自宅付近の道路やお店の様子を写真やイラストで提示する。	3 ①
	(2) 福岡市の様子を見学し、気付いたことを話し合う。 ○ 大きな道路がどの方角にも延びていることに気付くこと ※ 福岡タワーから市内を展望する。	②
し ら べ る	2 自宅周辺の様子を調査する。 (1) 自分の家の近くを絵地図にまとめる。 ○ 幹線道路に住宅や店舗が密集し、駅やバス停で遠くの街とつながっていること ※ 道路が記された自宅周辺の白地図を配付し、見学したものを書き込ませる。 (2) 学校周辺の様子や道路周辺の建物の様子を比べる観点にする。 ○ 地形の様子や道路周辺の建物の様子を比べる観点とすることをとらえること ※ 作成した地図を使って比較を行う。	5 ④ + 課 外
	3 福岡市全体の紹介地図を作成する。 ○ 山間部や海岸部は幹線道路が少なく、田畑が広がっていること ※ 航空写真で早良区南部や西区北部の様子を確認させながら地図を作成する。	① 本 時
ま と め る		3

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 学校周辺と自宅周辺の違いを比較し、共通点や差異点を意欲的に説明しようとするができる。
- 幹線道路の周辺に住宅地や店舗が集中していることや交通が発達している様子はどちらも同じであることをとらえることができる。

1 自宅周辺で見つけたもの（場所）について話し合う。

- 幹線道路に住宅や店舗、公共施設（病院、公民館等）が集まっていたことに気付くこと

- ☆ ぼくの家付近には、バスが通る大通りにレストランやコンビニがあって、たくさんの車が通っていたよ。
- ☆ 私の家の近くにも大通りはあったけど、工場や倉庫がいっぱいあったよ。

本時のめあて

学校の周りや家の近くの地図をくらべて、同じところやちがうところを見つけよう。

2 学校周辺と自宅周辺の共通点や差異点について考える。

- (1) 自宅がある区ごとに分かれて見つけたものを話し合う。

- 道路のつながりや周辺の土地利用が異なることに気付くこと

<中央区>

- ☆ 大きな道路にバスが通ってどこにでも行くことができるよ。

<早良区>

- ☆ ドーム、シーホーク、図書館、博物館が近くに集まっているから休日とはとても車が多いんだね。

<西区>

- ☆ すぐ近くは山になっているからとても静かな所だよ。

<城南区>

- ☆ 川や池の近くに田んぼや畑があってお米や野菜を作っていた。
- ☆ お寺や神社がたくさんあって、古い家がいっぱいあったよ。

- (2) 学校周辺との差異点と共通点を考える。

- それぞれの土地のよさを生かして人々が生活していることに気付くこと

- ☆ 大きな道路にバスや地下鉄があるのは似ている。
- ☆ 大きな道路は同じだけど、博多区は工場や倉庫が並んでいるところが違っていた。
- ☆ 平たい土地というのは同じだけど、城南区や南区は田畑があってお米や野菜を作っていたので、場所によってちがうなと思った。

3 土地利用の仕方についてまとめる。

- 大きな道路や交通機関の広がりや観点をすることに気付くこと

- ☆ 家やお店が大きな道路や駅の近くに集まるのは住む人が便利だからだということが比べてわかった。
- ☆ 早良区の山の方や西区の海沿いはどんな様子かは分からなかったののでくわしく調べてみたい。

○ 準備

教師側： 学校周辺の地図、福岡市の航空写真

児童側： 見学ノート、自分の家の近所の地図

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自宅周辺の見学で気付いたことをメモしたノートをもとに、学校周辺と同じもの（マンションや家などの住居やお店など）があったかどうかを書いている。

【支援】

- ※ 見学した場所の地図や写真を提示して、説明しやすくする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自宅周辺で見つけた物や場所について説明するための地図をもとに、説明することができている。

【支援】

- ※ 自宅周辺の地図を提示し、住宅やお店が集まっている場所や、田畑が広がっている所など、土地の使い方に特色がある所を中心に説明することができるよう補足する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 学校周辺と自宅周辺の地図を比較しながら、道路の周辺に住居や店が集まっていることを比較しながら共通点として述べていること

【支援】

- ※ 自分の家の近くの場所にはどんな特色があるのかを明らかにするために学校周辺と自宅周辺の地図を提示し、共通点や差異点について比較しやすくさせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 共通点から福岡市の土地利用の様子についてまとめていること

【支援】

- ※ 航空写真を提示して、山間部や海沿いの道路状況に気付かせ、追究意欲を高めさせる。

2つの数値を関係づけて生活をよりよくする算数科学習

第4学年1組 算数科学習指導案

指導者 永 尾 健

単 元 収納名人！円と球の直径や半径を調べて！（かわり方）

指 導 観

本単元について

本単元は、身の回りから円や球を見つけ、半径や直径を測定することができるようにすることをねらっている。また、円の性質やコンパスの有用性に気づくことをねらっている。そこで、「円と球」の直径や半径の測定をおこないながら、茶わんや調味料のビンなどの直径や半径を測定し、収納箱や引き出しにしまう方法を考えるといった生活場面への活用をしていく。これは、身の回りのまわりものから、円や球の形を見つけ、円や球の直径や半径を生活場面に生かすことができるようになると考える。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、第1学年「いろいろなかたち」の学習で、身の回りから形を見つけ、積み木を積んだり、並べたりして、弁別しながら円や球の特徴を捉えてきている。しかし、円や球が、直径や半径などの要素で定まり、測定をすることができることは知らない。そこで、実生活場面の課題を取り上げた本単元が大切であると考えている。

本単元の指導について

系統による学びの体験の統合

新しい単元・題材

第4学年「円と球」の学習で、身の回りから形を見つけ、積み木を積んだり、並べたりして、弁別しながら円や球の特徴を捉えてきている。しかし、円や球が、直径や半径などの要素で定まり、測定をすることができることは知らない。そこで、実生活場面の課題を取り上げた本単元が大切であると考えている。

本単元の指導にあたっては、収納の広さと収納するもの（茶わんやコップ、調味料など）の直径との関係を考える学習である。まず

収納する箱や引き出しの幅と収納する円や球のものの関係を捉える。さらには、さまざまな収納場面を考えながら、収納するものの形を抽象化して取り出し、直径を測定しながら収納の仕方を考える。このように、円の直径の測定方法やコンパスの使い方や円の描き方をもとに2つの量の「かわり方」のきまりを生かす、系統の学びを行う。

目 標

- 1 収納場所の幅と円や球の形をした収納するものの大きさを測定し、かわり方のきまりを使って収納のしかたについて進んで調べることができる。
- 2 収納する2つのものの直径を2次元の表にまとめ、かわり方のきまりを使って効率的な収納の組み合わせ方について考えることができる。

計 画（約5時間）

段階	主 な 学 習 活 動	時間
見 い だ す	1 円や球のものの整理整頓の仕方について考える。 ○ 円や球は整理整頓がしにくい性質であり、直径とのかかわりがあること ※ 円や球の性質に着目させる。	1
試 み る	2 収納の幅と大小の円や球の形をした収納するものとの関係を考える。 (1) 円の直径の変化にともなう2つの円の変わり方をいかして考える。 ○ 大小の円の直径の和が一定であること ※ 2つの円形の組み合わせを並べることによって「かわり方」に着目させる。 (2) 三角形の収納のつくり方について調べる。 ○ 仕切りの増え方が差が一定であること ※ 仕切り板数と個数の関連をさせる。 (3) 収納する幅と円形の物の直径の関係について調べる。 ○ 収納する円形の物の個数と直径が積で一定であること ※ 収納の幅40cmから逆算して、1つ当たりの円や球の大きさを考えさせる。	3 ① 本 時 ①
広 げ る	3 変わり方の考えを生かし、自分の自宅にある収納（食器棚や調味料を入れる棚など）収納の仕方について考える。 ○ 変化にともなって直径が変わること ※ 増え方や減り方などに着目し、2つの数量を関連をさせる。	1

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 正方形の箱におさまる2つの円の直径を変えながら、いろいろな大きさの収納の場合について意欲的に調べることができる。
- 2つの量を取り出し、2次元の表にかき表し、2つの量のともなった変化に着目しかわり方のきまりを捉え、式に表すことができる。

1 収納をする2つの円形の物の直径のかわり方について、どのような関係があるのかを話し合う。

- 1つの円の直径が変わることによって、もう一方の円の直径がともなって変わること

☆ 2つの直径の変わり方にきまりがありそうだね。

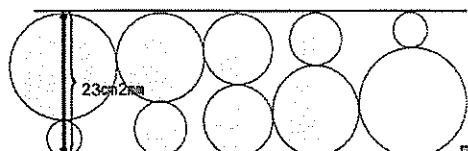
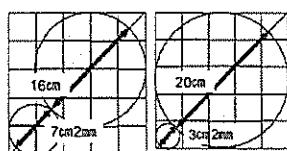
本時のめあて

収納される2つの円形の直径のかわり方に着目して、円形の物の収め方について考えよう。

2 収納をする円形のものの2つの量のかわり方について、表にまとめ、2量の間を考える。

(1) 収納する円形のものを組み合わせ、2つの量の間を考える。

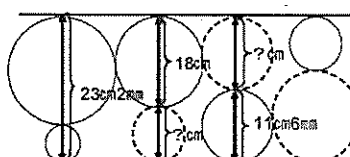
- 組み合わせられた2つの円の規則性から2つの円の直径の和は同じ長さであることがわかり、表にまとめること



大きな円の直径	20 cm	19 cm	18 cm	?
小さな円の直径	3 cm 2 mm	4 cm 2 mm	5 cm 2 mm	?
2つの直径の和	23 cm 2 mm	23 cm 2 mm	23 cm 2 mm	23 cm 2 mm

☆ 収納をする2つの円の組み合わせを並べると、2つの円の直径を合わせた長さが同じになるぞ。

(2) 収納をするものの組み合わせがない場合の円形の見つけ方についてかわり方のきまりを使って考え、円形をつくる。



- 収納する2つの円形の直径の和は、合わせるとすべて同じになることを生かして、逆算して半径を求め円形をつくること

☆ 2つの直径をたせば、23 cm 2 mmと同じ長さになるから 18 cmの円形との組み合わせることのできる円形は直径 5 cm 2 mmの円だ。

3 他のものでも、同じような考えを用いることができるのかを確認、表から読み取り式に表すよさについて話し合う。

- 表から読み取ったきまりを使えば、いろいろな収納場面でも活用できることがわかり、きまりを見いだそうとすること

☆ 表に表し、きまりを見つければ、整理整頓するものの大きさが変わったとしても簡単に片付けができるね。

準備

教師側：学習ノート、様々な直径の長さの円形

児童側：コンパス、ものさし

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 収納をする円形をした1つのものの直径が変わると、もう一方の半径も変わること気付いている。

【支援】

- ※ 2つの円の直径の増え方や減り方に着目させる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 2つの円形の組み合わせを揃えさせ、並べることによって、一方が小さくなれば、もう一方が大きくなることに気づいている。

【支援】

- ※ 2つの円の直径の和が一定であることに気付かせるために、2つの円の組み合わせを並べさせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 2つの量を表にまとめて比較することによって、増え方のきまりがわかることをつかんでいる。

【支援】

- ※ 2つの円形をした直径がともなって変わること単純な場面をもとにして考え、2つの直径を表まとめさせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 10 cm四方の正方形に内接する2つの円の場合をもとに考えた2つの円の半径の和が同じであることから、2つの量の関係を読み取ることができることに気付いている。

【支援】

- ※ 表をたててよこに見ながら2つの量の関係を捉えさせたり、正方形の中に内接する2つの円を描かせ、2つの円の直径の関係に着目させる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 2つの数のかわり方の規則性を見つければ、どんな状況でもいかなることができることに気付いている。

【支援】

- ※ かわり方のきまりを使えば、容易に一方の数が決まれば、もう一方の数も決まることに気付かせるために、収納が広くなった場合のことを考えさせる。

第4学年2組 理科学習指導案

指導者 福原伸治

単元 変身する水のゆくえ～見えない水をつかまよう～

指導観

本単元について

本単元は、身近な生活の中で頻繁に使用している物質の一つである「水」について振り返り、温度の変化に関わってどのように変化しているのかについて調べることを通して、見えなくても水が存在することに気づき、温度の変化と水の状態について互いに納得できる考えをもつことをねらいとしている。

とくに水や氷と違い、水蒸気に関して、目に見えないものを物質としてとらえられるようにしたい。

目標

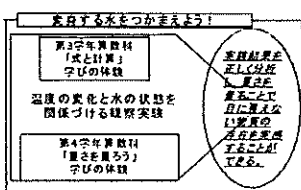
- 1 水が水蒸気や氷になる様子を観察し、温度と水の変化との関係などを調べ、水の状態変化についての考えをもつことができるようにする。
- 2 水は、水面や地面などから蒸発し、水蒸気になって空気中に含まれるとともに、結露して再び水になったり、温度によっては水蒸気や氷に変わったりすることを理解できるようにする。

計画（約10時間）

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、日常の生活において、鍋などが泡を立てて沸騰する様子から、温度を変化させることで、水の状態が変化することを感覚的に身に付けている。しかし、沸騰させて水分を蒸発させる機会はなく、現象として知ってはいても、科学的な思考による理解にまでは至っていない。目に見えない水蒸気を、算数で学習した内容をもとに、目に見える形で表させたい。事象の変化とその要因について関係づけられるようになるこの時期に本単元を行い、目に見えない水蒸気を実感させたい。

本単元の指導について



- 水を沸騰させた時、見えなくなった水蒸気をビニール袋に集めるが、見た目では測り取ることができない場面

面で、算数科で学習した「重さを量ろう」と「式と計算」の内容を生かしながら、へった分の水の量だけを量り取らせ、水が気体となって移動しているだけで重さに変えれば全体の量として変わらないことで、水蒸気の存在を実感させていく。（補完）

段階	主な学習活動	時間
つかむ	1 水が沸騰する様子を観察する。 ○ 温度の変化と水の状態の変化と関係があることに気づき、学習課題をもつこと ※ 鍋にお湯を煮立たせ、泡立つ様子やその時の様子で気付いたことなどをもとに話し合い、調べたいことを出し合う。	1
つる	2 温度を高くすることによって、見えなくなった水の状態について調べる。 (1) 水の温度を高くしていくとどうなるのかについて話し合う。 ○ 水が気体になり見えなくなる状態を蒸発といい、その時の水の温度は100℃近くでとまることをとらえること ※ ビーカーを使って水を沸騰させ、泡が出ている様子について観察する。 (2) 蒸発して空気中に出てしまう水蒸気を集め、なくなった水の量と比較する。 ○ 水蒸気は冷やすと水にもどり、蒸発してもなくならないことをとらえること ※ 試験管の水を沸騰させ、水蒸気を集めるビニール袋の大きさを変えながら、見えなくなった水の量を測定する。	4 ② 本時
ひろげる	3 水の温度を下げた時について調べる。 ○ 水は0℃から凍ることをとらえること ※ アルミパイプに氷を入れて、試験管の中の水が冷える様子を観察する。	5

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 自分の手でビニール袋を使って水蒸気を集める実験を通して、意欲的に目に見えない水蒸気を量り取ろうとすることができる。
- 水蒸気をビニール袋に集めて、水の状態に戻してから測定する活動を通して、目に見えない水蒸気の実在を理解することができる。

1 水の温度を高くしたときの様子について振り返り、見えなくなった水の行方について調べるという課題をつかむ。

- 沸騰することでなくなってしまった水が、なくなったのか、見えないだけで存在しているのかということ

- ☆ 沸騰するときには湯気が出ていたから空気の中に混じった。
- ☆ 見えなくなったんだから、なくなったんじゃないか。
- ☆ 手をかざすとぬれて水がついたから空気の中にまだある。

本時のめあて

水の温度を上げて、へった水とあわのゆくえを調べよう。

2 同じ予想をした友だちと班を組み、水の温度を高くして、全体の重さを測定したり、観察して気付いたことなどを出し合ったりしながら、水の行方について話し合う。

- (1) 班ごとに、自分たちで実験を行い、水を沸騰させて、試験管の中の水が無くなった後、ビニール袋の中味について観察し、ガラス管の中に残っている水とビニール袋の中に残っている水の重さを測定する。

- 試験管の中の水はなくなっても、ビニール袋の中に空気のような状態で移動し、冷やされてまた水にもどること

- ☆ 小さい袋ではすぐに穴が空いてしまって集めきれない。
- ☆ 大きい袋をつけたら、全部ふくらむほどではなかった。先の方には、だんだん水がたまっていった。

	フラスコの水の重さ	袋の水の重さ
ふっとうする前	50グラム	0グラム
ふっとうした後	2グラム	48グラム

- (2) 実験して得られた結果から、無くなった水の重さとビニール袋に現れた水の重さを比較して気付いたことを話し合う。

- 水の温度を上げると、蒸発して見えなくなってしまうが、水そのものが無くなったわけではなく、気体となって残ること

- ☆ 見えなくなった水もなくなった訳じゃなく、空気の中に混じってしまっただけで、ちゃんとあるんだな。
- ☆ 無くなったように見えた水も、重さで見ると残っているんだ。

3 温度を高くしたときの水の行方についてまとめ、さらに、次の時間で調べていきたいことについて話し合う。

- 水は温度が高くなると蒸発して水蒸気になり目に見えなくなるが、冷やすと水になり目に見えるようになること

- ☆ 水は無くなったみたいに見えても必ず空気の中にある。
- ☆ 今度は反対に、水を冷やしてみてもうなるか確かめたい。

準備

教師側：学習の流れ図

実験集計表（板書用）

児童側：実験器具一式

電子天秤

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 前時で実験した活動を振り返り、沸騰している様子を観察したことをもとに、自分なりの予想を書いたり、発表したりできている。

【支援】

- ※ 前時までの学習の流れ図を提示することによって、自分がかんた学習課題を想起しやすくする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分の予想をもとにビニール袋を選択し実験を行ったり、得られた結果からさらに、他のビニール袋を選択して実験したりして、何度も確かめることができている。

【支援】

- ※ 考えが似ている子ども同士で班構成をすることで、選んだ袋での事件結果から、次の袋を選ぶ観点を明確にもって活動できるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 黒板に板書された実験結果の集計表を見ながら、自分の実験結果だけでなく、友達の実験結果とも比較してみえなくなった水が、なくなったのではなく、空気のように存在していることを実感することができている。

【支援】

- ※ 全員の結果を、黒板に掲示することによって自分が調べたことの有効性を感じられるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 実験結果の考察から、温度の変化と水の状態について考え、自分の言葉で学習のまとめと次時での活動について書けている。

【支援】

- ※ 学習のまとめを、大きなモデル図で指さしながら提示し、学級の中でさらに課題となっているところについて気付けるようにする。

第5学年1・3組 家庭科学習指導案

指導者 長 門 直 子

題 材 日曜の朝はおまかせ! ~とおききのモーニングスープ~

指 導 観

本題材について

本題材は、家族のモーニングスープを作る活動を通して、食品の栄養的な特徴を知り、食品を組み合わせる必要があることや、調理は家族との触れ合いを深め、家庭生活を豊かにすることに気付かせることをねらいとしている。

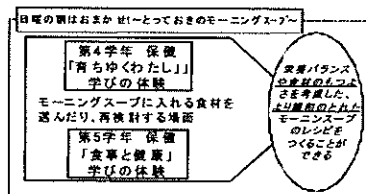
また、自分が家族のためにできることを進んで見つけ、家族の一員として仕事を分担し、工夫する楽しさを実感することもねらいとしている。家庭生活への関心を高め、主体的に家族に協力しようとする態度を育てることにつながると考える。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、これまでに、家庭生活をよりよいものにするために家庭の仕事があることや家族の一員として仕事を分担し、工夫することが自分の生活を変え、家族の願いを実現することにつながることに気付いている。また、家族のためにフルーツ盛り合わせを作る活動を通して、自分も家族の一員として役立つことができるという喜びを実感するなど、家庭生活への関心をもち始めている。

そこで、日頃食事を作ってもらう側である子どもが家族のためにとっておきのモーニングスープを作ることで、さらに家族の一員としての意識を高め、主体的に家庭生活にかかわろうとする意欲を高めていくと考える。

本題材の指導について



○ 各自の朝食調べをもとに、自分の課題を解決するための情報収集を行う際、第4学年で学ん

だ保健「のびゆくわたし」の食事と健康での学びの体験を想起させることで、栄養のバランスを考えた食事の必要性をより意識させ、家族に合ったこだわりのモーニングスープづくりにつなげる。(補完)

目 標

- 1 家族のためのモーニングスープ作りを通して、調和のよい食事のとり方がわかり、日常の食事に関心をもつことができる。
- 2 食品に合った材料の洗い方や切り方、はかり方などについて理解し、簡単な調理を使って料理をすることができる。

計 画 (約6時間)

階	主 な 学 習 活 動	時 間
2	1 朝食調べをもとに、各自の家庭の食生活を振り返り、課題をつくる。 (1) 一日の食事調べを行い、自分たちの食事の仕方について話し合う。 ○ 自分の食生活の実態がわかること ※ 3つの栄養群の色シールを使って自分たちの食事を分類させる。	2
①	(2) 調和のよい食事について話し合う。 ○ 自分の課題をもつこと ※ 既習の保健の学びの体験も想起させ、GTの話から野菜のよさを考えさせる。	①
3	2 課題解決のための情報収集を行い、自分の課題解決に合うようなスープの作り方を追究する。 (1) 自分の課題を解決する。 ○ 自分のスープの作り方がわかること ※ 野菜の切り方や味付けの情報を掲示し課題別の交流の場を設定する。	3
①	(2) 課題解決のための調理実習をする。 ○ 基礎的技能を獲得すること ※ 野菜別グループで実習を行い、自信をもってスープを作れるようにする。	①
1 + 課外	3 家族のためにこだわりのモーニングスープを作る。 ○ 家族のための工夫がわかること ※ 家庭実践カードを記入させ、実践意欲を継続させる。	1 + 課外

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 自分の朝食調べをもとに、バランスのとれた調和のよい食事の仕方がわかる。
- 野菜は火を通すことで、かさが減ったり、やわらかくなったりなどの変化があり食べやすくなることを実感することができる。

○ 準備

教師側：試しの実験の野菜・調理道具
保健の学び(模造紙)

野菜100gの写真 食品群表

児童側：朝食調べシート

1 前時までにわかった自分たちの食事についての問題点を再確認し、本時のめあてについて話し合う。

(1) 朝食調べを通して分かったことについて話し合う。

○ 朝食に野菜を食べていないことに気付くこと

- ☆ 朝は忙しくて、なかなか朝食が食べられない。
- ☆ よく見たら、パンだけという日も朝はたくさんあるよ。

(2) 本時のめあてについて話し合う。

○ 栄養のバランスがとれた食事をする必要があること

- ☆ 100gを毎朝食べるのは、絶対無理だと思う。
- ☆ でも、保健の学習でも3つの栄養群をバランスよく食べるって習ったから、何とか食べる方法はないのかな。

— 本時のめあて —

栄養のバランスのある朝食について考え、自分の課題を見つけよう。

2 栄養バランスのよい朝食をとるための方法について考える。

(1) 野菜が朝食でうまくとれない理由を考え、友達と意見を交流しながら自分の課題を見つける。

○ 自分の課題をしっかりとつかむこと

- ☆ わたしが野菜を食べれないのは、野菜のにおいが苦手だから。だから、もしにおいが消えたら食べることができるかもしれない。
- ☆ 私はたくさん食べれないから、少なかったら食べられるよ。

(2) 教師実験や試飲を通してスープのよさを体験する。

○ スープのよさを実感すること

- ☆ あれっ、野菜はなんかもさもさしてたけど、スープにしたら、なんだかトロっとした食感になってるね。食べやすいよ。
- ☆ 量が減ったから、前より野菜を多く食べることができる。
- ☆ においも消えてるから、食べやすいよ。

(3) スープのよさや野菜のよさについて、専門家の話(GT)を聞く。

○ スープのよさや野菜のよさを知ること

- ☆ へえ、野菜をゆでた汁には栄養が溶け出しているから、スープだとその栄養も、全部とることができるんだ。すごいね。
- ☆ 他の材料とも混ぜて作れるんだね。わあ、早く作ってみたいな。

3 栄養バランスのとれた食事について話し合い、学習のまとめをする。

○ 次時の活動のイメージをもつこと

- ☆ 単身赴任のおとうさんも簡単に作れるスープレシピを作ってみたいな。
- ☆ スープづくりってどうやるんだろう。早く知りたいな。

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分の朝食調べカードを見直しなが、自分の朝食についての問題点を見直している。

【支援】

- ※ 3つの栄養食品群の表を提示し、栄養バランスに着目させる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 一食分の野菜を見ながら、どうやったらその分量を食べることができるか考えている。
- ◎ 保健学習を想起しながらバランスよく食べる大切さを再認識している。

【支援】

- ※ 保健学習での学びが分かる掲示を準備し、想起させる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 野菜がとれない理由を、再度朝食調べや前時の学習シートを見直しなが意見を述べている。

【支援】

- ※ 野菜がとれない理由を黒板で整理し、自分の課題をはっきりさせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ スープの変化を見たり、試飲したりの体験を進んで味わっている。
- ◎ GTの話をうなずいたり、メモをとったりしながら聞いている。

【支援】

- ※ GTとの打ち合わせを入念に行い、スープのよさや野菜のよさ等の新しい情報を準備する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ スープのよさや野菜のよさについての感想を書きまとめることができ自分の課題も書けている。

【支援】

- ※ 机間巡視をし、子どもたちの学びのよさについて賞賛していく。

住まいをコーディネートする学びとオリジナルのインテリアを創造する学びをまとめる図画工作科学習 第6学年2・3組 図画工作科学習指導案

指導者 北 田 尚 雄

題 材 くらしにおしゃれな空間を～創造インテリア～

指 導 観

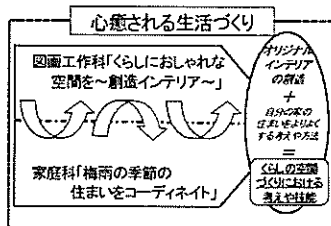
本題材について

本題材は、夏の季節に向けて、自分のくらしにおしゃれでさわやかな空間を作っていく。ここでは、主材料である和紙の特徴を生かしながら、機能的な作品をつくる構想力や、色や形の構成力を培うことをねらいとする。具体的には①オリジナルインテリアをつくるために、自分の表現テーマに合わせてつくりたいものを発想し、材料や方法を選択しながら楽しく表現すること、②作品と風や光の組み合わせの美しさやおもしろさを生かしながら、色や形を構成していくこと、③表現過程において家に展示したり家族と話し合ったりしながら表現を高めていくことである。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、これまでにベニア板を使った立体構成やスチレン版画による表現を通して、色構成や、材料の特徴を生かした活動をした経験がある。そこでは、自分の作品や表現方法をよりよくしていこうとする意識は高い。また、家庭科において、梅雨の時期のさわやかな住まいをコーディネートしていく学びの体験を同時期に行っている。そこで、くらしの中に造形的な技能や考えを活かしていくことは、タイムリーで価値があると考えられる。

本題材の指導について



本題材の指導にあたっては、家庭科の「さわやかなすまいをコーディネート」の学習と関連させていくようにする。そこで、構想段階において、家庭科において自分のくらしを見つめた

ことから、インテリアをつくる目的と、どのようなものをつくっていくかの見通しをもたせるようにする。表現段階では、表現と家においての展示鑑賞を相互に行い、それまでの表現を見直ししながら、表現を練り上げていくようにする。最後に鑑賞段階では、実際にインテリアを展示しおうちの方とともに空間構成していくようにする。

目 標

- 1 くらしの中のインテリアのよさに気づき、自分の生活空間に、おしゃれでさわやかなインテリアをつくり出す造形活動を楽しむことができる。
- 2 インテリアの作品と、生活空間との組み合わせを工夫しながら、テーマに合わせて材料の選択、形や色を構成を考えて表現することができる。

計 画 (約8時間)

階	主 な 学 習 活 動	時
構 想 段 階	1 くらしの中のインテリアと出会い、どのような作品をつくるか計画を立てる。 ○ インテリアのよさに気づき、表現の見通しをもつこと ※ 家庭科での学びの体験を想起させ、これからの表現のヒントにさせる。	2
	2 自分の表現構想にしたがって、竹材や和紙を主材料にインテリアをつくる。 (1) 竹材や和紙で、インテリア作品を形づくったり、彩色したりする。 ○ 主材料の特徴を生かし表現すること ※ 子どもの構想に合わせた、インテリアのヒント資料の提示 (2) 自分の家に作品を展示し、まわりの空間の感じを考えて鑑賞する。 ○ 作品と空間の構成について考えること ※ 実際に家で展示させ、家族の評価ももらえるようにする。 (3) 自分の表現テーマやくらしの空間に合うように再表現する。 ○ 表現を見直し、再度、形の構成や彩色をすること ※ 模擬の場に展示しながら表現させる。	5 ② 本 時 ①
鑑 賞 段 階	3 完成したインテリアの作品について、友達と見合うとともに、実際のくらしの空間に展示し鑑賞する。 ○ 自分の表現のよさを味わうこと ※ 光や風など実際の場面や空間を模擬的につくり、友達と鑑賞させる。	1 + 課 外

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 暮らしの模擬の場において、作品を展示した感じから、これまでの表現を見直し、新たな表現の課題を設定して、彩色したり、形の再構成をしたりすることができる。
- 自分や友達の作品や表現のよさに気づき、それを生かして新たな表現を考えることができる。

- 1 自分の作品を模擬の場に展示し、光や風などの環境との調和からこれまでの作品のよい点や問題点について話し合う。

- 自分の家に展示したときのことを考えながら、これまでの表現について見直すこと

- ☆ さわやかなランプをイメージしてつくっているけど、光にあてるとまだ、色にさわやかさが足りないなあ。
- ☆ 風が吹いたときに、ゆらゆら動くようなインテリアにしているために、竹材や和紙の組み合わせ方を工夫していこう。

本時のめあて

自分の表現テーマがもっと表せるように、光や風などの効果を生かして、色や形を工夫しながら表現していこう。

- 2 作品と光や風の組み合わせから思いついた表現方法から、もっと自分の表現のテーマが表されるように作品をつくっていく。

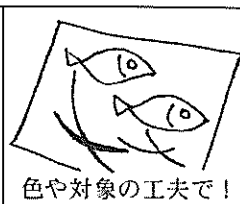
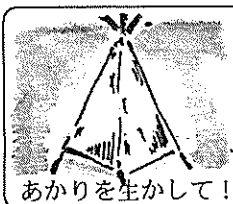
- (1) 作品と光や風を組み合わせたときの感じから、これからの表現方法について話し合う。

- 作品と環境的要素を組み合わせた感じから、新たな表現内容や方法を発想し、これからの表現の見通しをもつこと

- ☆ 光を灯してみたけど、灯りが強すぎるのもっと色をのせていってぼんやりとした淡いあかりになるようにしよう。
- ☆ 風で揺れたときに動くだけでなく、さわやかな音になるように他の材料を組み合わせてみたらよそさうだぞ。

- (2) 新たに思いついた表現方法に合わせて、材料や方法を選択し、もっと表現のテーマが表されるように作品をつくりかえていく。

- 光や風の効果を生かし、自分の家のなかにおいた時をイメージしながら、作品の形や色を構成していくこと



- 3 これまでできた作品から、自分の表現テーマについて、どのような材料選択や表現の工夫をしたかを話し合う。

- 本時の表現活動をふり振り返り、選択した材料や対象、方法のよさについて明らかにし、次時の表現の見通しをもつこと

- ☆ 風にゆれる光のシェードに緑や青を基調にした葉っぱをデザインしていったら、おしゃれなシェードになったよ。

準備

教師側：作品、制作カード、和紙、竹材、縄、接着剤、ヒント資料

児童側：スモック、造形バック

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分の作品を、配置を考えながら模擬の場に展示し、これまでの表現で気に入っているところや、まだ、不十分なところを友達と話し合っている。

【支援】

- ※ 暮らしのなかの環境づくりとして、光や風と作品を組み合わせる模擬の場を提供する。
- ※ 同じような環境で、展示する子どもたちで、同質グループをつくり、お互いの作品やこれまでの表現のよさや問題点について話し合う活動を設定する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 模擬の場における試しの活動をもとに、材料選択や新たな表現について話し合い、自分の表現の見通しをもっている。

【支援】

- ※ 自分の作品を、設置していこうと考えている暮らしの中の空間がイメージでき、これからの材料選択や、表現に生かせるように、家庭科の資料を参考にさせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 光や風を当てたときの作品の感じを確かめながら、材料や色の特徴を生かして、自分のテーマに合うように形や色で表現している。

【支援】

- ※ 色の組み合わせ表や、自然をテーマにした資料を提示し、さわやかさや気持ちよさといったテーマに合わせた表現のヒントにさせる。
- ※ 風や光で影響する付加材料を提供する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 本時の活動からできた作品を見て、自分の表現のよかったことや頑張ったことを発表したり、聞いたりしている。

【支援】

- ※ 実際に光や風を当ててみながら、どのような表現をしたかを、全体で交流できるようにする。

逃げる、跳ぶ動きをつなぎながらふじ組の友達となかよくゲームを楽しむ体育科学習 第1学年1組、第1・2学年ふじ組 体育科学習指導案

指導者 下川 勝彦 渡邊 正則

単元 うまく あてよう よけよう! こころドッジボール

指導観

本単元について

本単元の「こころドッジボール」は、守備側が時間内に相手の攻撃をかわして残った人数で得点を競うゲームである。本題材は、友達と一緒にゲームを楽しむなかで、ボールを転がしたり避けたりする動きを身に付けることをねらいとしている。主な学習内容は、①相手に向かって転がしたり転がってきたボールを避けたりするなどのきまりや手順を理解すること、②相手や味方の方向に素早く移動する動き、相手が転がしたボールに反応して避ける動きを発揮し身に付けること、などである。

目 標

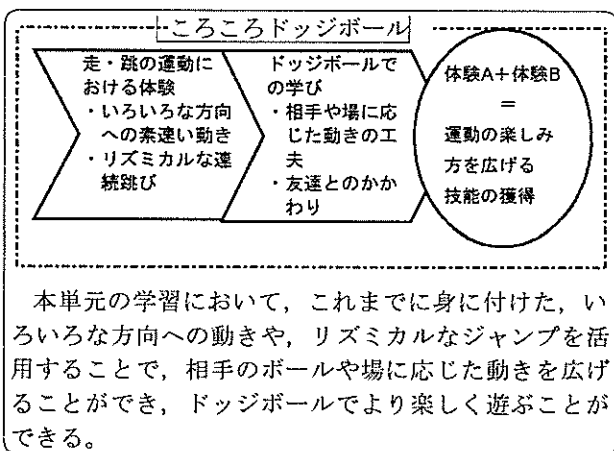
- 1 活動の仕方ややくそくを理解して、1組やふじ組の友達とお互いのがんばりや動きのよさを認め合いながら動きを広げて、こころドッジボールを楽しむことができる。
- 2 逃げる方向が広がるコートの特徴に応じて、動く方向や速さ、ジャンプのタイミングを考え、相手の転がすボールを巧みに避ける動きを広げることができる。

計 画(約6時間)

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、休み時間には、ボールを使って友達とあてっこをしたりしている。その中では相手をねらって当てたりとんできたボールを上手に避けたりしている。しかし、ボールを転がしたり投げたりする力は、個人差が大きく遊びの体験も様々である。このことから易しい内容から学習を展開することが必要である。また、ふじ組の子どもたちとかかわることは、日常生活や行事等を通してできつつある。そこで、投げたり避けたりの技能や友達とのかかわりをよくすることで楽しさがまず本単元を通して技能や関わりを高め、強めさせたい。

本単元の指導について



段階	主 な 学 習 活 動	時間
であう	1 「こころドッジボール」と出会い、試しのゲームをする。 ○ ゲームの手順や決まりをとらえ、ボールを避ける等の動きを体験すること ※ 活動の手順を提示し、モデル演示によりきまりや動き方をとらえさせる。	2
つ	2 ボールを転がしたり避けたり等の動きの課題に取り組み、ゲームを楽しむ。 (1) コートの中にプレイする位置が決まっている場でゲームを楽しむ。 ○ 友達と一緒にボールを転がす、避ける動きをとらえること ※ 逃げる位置が固定している場を設定する。	3
く	(2) プレイする位置が縦と横に広がったコートでゲームを楽しむ。 ○ ボールに素早く反応して左右に避けたりジャンプしたりする動きを生み出すこと ※ コートの縦と横に逃げる場所を設定する。	①
り	(3) プレイする位置がフリーな場で役割を交代しながらゲームを楽しむ。 ○ ボールに素早く反応して移動したりジャンプしたりする動きを創り出すこと ※ コートを自由に逃げるように設定する。	① 本時
だ	3 これまでの活動を振り返り、ゲーム大会をする。 ○ 今までに体験した活動の場から動きを想起し、ゲーム大会で発揮すること ※ 動きの高まりがわかる声かけや賞賛をしたり、子どもたち同士のよさの出し合いをさせたりする。	①
す		
いかす		1

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 1の1やふじ組の友達と声をかけ合ったり簡単なアドバイスをしたりして楽しくゲームに参加することができる。
- プレイする位置が縦と横に広がったコースの特徴を考え、相手の転がすボールを避けるために、動く方向を広げたり、動く速さやジャンプのタイミングを工夫したりすることができる。

○ 準備

教師側：ゲーム対戦表、得点板、手順表
コート図、ストップウォッチ
ソフトバレーボール、ケンステップ、ゼッケン

<各活動の子どもの見取りと支援>

1 コートの中央にいる相手を当てる「ころころドッジボール」を行い、新たなコートでのゲームの動きを話し合う。

- これまでの場での動きから、新たな場で転がってきたボールを避ける動きについてとらえること

☆ あたらしい コートで あいてに あてたり はやく にげたりして たのしく みんなで ゲームを しよう。

本時のめあて

- ・よこに うごいたり とんだりして ボールをよけよう。
- ・あいてを よくみて はやく ころがして あてよう。

2 チームに分かれて「ころころドッジボール」を楽しむ。

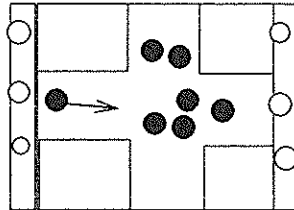
(1) 本時の新たなコートでチームに分かれて、はじめのころころドッジボールを楽しむ。

- 相手の位置やボールの動きを見て、強くボールを転がしたりボールに当たらないように素速く反応して避けたりすること

☆ つよく ボールを ころがすぞ。
そして はやく にげるぞ。

ころころドッジボールのきまり

- ・ラインからでない。
- ・あたったら1回休み。
- ・時間内に残った人数が得点になる。



(2) 一人一人の動きの課題に応じてチームの中で転がす動きやボールを避ける動きを身に付け、再びゲームを楽しむ。

- 相手の位置を素早くとらえて転がしたりボールをよく見て素早く左右に避けたりジャンプして避けたりする動きを発揮すること

☆ はやく ころがしたり にげたりして とくてん するぞ。
あいての なげる ようすも よくみて よけるぞ。
じょうずに とびこして あたらないように するぞ。

3 ゲームの結果を知り、動きを発揮したことを発表しあう。

- 得点を数えて勝敗をとらえながら、よかった転がし方や避け方をふり返ること

☆ うまく ころがしたり よけたり できたよ。
ともだちに こえを かけて もらって じょうずに よける
ことが できたよ。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ これまでのゲームとちがうコートでの動き方を発言したり動きを具体的に表現したりして、ゲームでの課題をとらえている。

【支援】

- ※ これまでのコートでゲームをしながら動きを賞賛する。
- ※ 新たなコートの提示や変化した場合のきまりを提示し、ゲームへの意欲をもたせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 教師や友達の声かけやあいての動きやボールの動きに応じて工夫しながらボールを投げたり避けたりしている。

【支援】

- ※ ゲームの中で賞賛や助言をしながら、よい動きをつかませる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分で判断して転がす方を向いたり相手の動きをみたりして、転がってきたボールに素早く反応して、その場で跳んだり左右に避けたりしている。

【支援】

- ※ チームの練習で、転がし方や避け方をくり返し身に付けさせる。
- ※ 要領がつかめない子には、友達同士で声かけをさせたり、教師がタイミングをつかませたりする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 得点を数えて結果をとらえ、得点につながった動きを思い出して再度演示している。

【支援】

- ※ 得点板を提示することと身についた動きのモデルの演示をする。

友達とかかわりながらボールを転がしたり避けたりしてゲームを楽しむ体育科学学習
第1・2学年ふじ組 体育科学学習指導案（1年1組との交流学习）
 指導者 下川 勝彦（T1） 渡邊 正則（T2）
 題材 うまく あてよう よけよう！ こころドッジボール

指導観

本学級の子どもたちについて

本学級は、1年生4名、2年生2名の計6名の子どもたちで構成されている。ゲームについては、きまりについて簡単な程度は理解できるが、的のような目標に向かって投げたり転がしたりすることは不十分という実態がある。そこで、ゲームを通して友達とかかわりながらボールを転がしたり避けたりする動きを身に付けさせたい。そして、ゲームを楽しむことができるようにしたい。このことは、たくましい体力を育てる上でも意義深い。

本題材について

本題材の「こころドッジボール」は、守備側が時間内に相手の攻撃をかわして残った人数で得点を競うゲームである。本題材は、友達と一緒にゲームを楽しむなかで、ボールを転がしたり避けたりする動きを身に付けることをねらいとしている。主な学習内容は、①相手に向かって転がしたり転がってきたボールを避けたりするなどのきまりや手順を理解すること、②相手や味方の方向に素早く移動する動き、相手が転がしたボールに反応して避ける動きを発揮し身に付けること、などである。

本題材の指導について

本題材の指導にあたって、「であう」段階では、新しいゲームに出合わせ、活動の手順や方法、きまりをとらえさせる。「つくりだす」段階では、6人ずつのチームに分かれて対戦し、ボールを転がす、避ける動きを自分で創り出すことができるようにする。そして、友達同士で声をかけ合い、避けるタイミングや方向などを教え合い、協力して活動することをねらっていく。「いかす」段階では、今までの活動を活かしてゲーム大会を行い活動をした満足感や達成感を味わわせたい。

目標

- 1 1年1組の友達とかかわりながら、こころドッジボールを楽しむことができる。
- 2 ボールを見て前後左右に素早く体を動かして避ける動きをつかみ、相手が転がしてきたボールを巧みに避ける動きを身に付けることができる。

計画（約6時間）

階	主 な 学 習 活 動	期
であう	1 「こころドッジボール」と出会い、試しのゲームをする。 ○ ゲームの手順やきまりをとらえ、ボールを避ける等の動きを体験すること ※ 活動の手順を提示し、モデル演示によりきまりや動き方をとらえさせる。	2
	2 ボールを転がしたり避けたり等の動きの課題に取り組み、ゲームを楽しむ。 (1) コートの中にプレイする位置が決まっている場でゲームを楽しむ。 ○ 友達と一緒にボールを転がす、避ける動きをとらえること ※ 逃げる位置が固定している場を設定する。 (2) プレイする位置が縦と横に広がったコートでゲームを楽しむ。 ○ ボールに素早く反応して左右に避けたりジャンプしたりする動きを生み出すこと ※ コートの縦と横に逃げる場を設定する。 (3) プレイする位置がフリーな場で役割を交代しながらゲームを楽しむ。 ○ ボールに素早く反応して移動したりジャンプしたりする動きを創り出すこと ※ コートを自由に逃げるように設定する。	3 ① 本時 ①
いかす	3 これまでの活動を振り返り、ゲーム大会をする。 ○ 今までに体験した活動の場から動きを想起しゲーム大会で発揮すること ※ 動きの高まりがわかる声かけをする。	1

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 1年1組の友達とかかわりながら、プレイする位置が縦と横に広がったコートで、素早く向きを変えて転がしたり、ジャンプして避けるなどの動きを発揮することができる。

aグループ：動作補助や声かけを受けながら、ボールを転がす、避ける動きを生み出すことができる

bグループ：声をかけ合いながら、自分から向きを変えて転がしたりジャンプしてボールを避けたりすることができる。

- 1 コートの中央にいる相手をあてる「ころころドッジボール」を行い、新たなコートでのゲームの動きを話し合う。

- これまでの場での動きから、新たな場で転がってきたボールを避ける動きについてとらえること

☆ あたらしい コートで あいてに あてたり はやく にげたりして たのしく みんなで ゲームを しよう。

本時のめあて

- ・よこに うごいたり とんだりして ボールをよけよう。
- ・あいてを よくみて はやく ころがして あてよう。

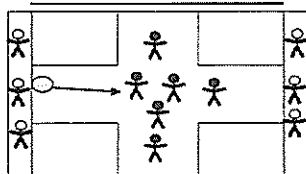
- 2 チームに分かれて「ころころドッジボール」を楽しむ。

- (1) 本時の新たなコートでチームに分かれてはじめてのころころドッジボールを楽しむ。

- 相手の位置やボールの動きを見て、強くボールを転がしたりボールに当たらないように素早く反応して避けたりすること

☆ つよく ボールを ころがすぞ。
そして、はやく にげるぞ。

ころころドッジボールのきまり
・ラインからでない。
・あたらしたら1回休み。
・時間内に残った人数が得点になる。



- (2) 一人一人の動きの課題に応じてチームの中で転がす動きやボールを避ける動きを身に付け、再びゲームを楽しむ。

- 相手の位置を素早くとらえて転がしたりボールをよく見て素早く左右に避けたりジャンプして避けたりする動きを発揮すること

☆ はやく ころがしたり にげたりして とくてん するぞ。

aグループ	bグループ
ねらった相手にボールを転がす動き、ボールを見ながら避ける動きを発揮すること	素早く相手に向かって転がす動き、ジャンプしたり素早く左右に避ける動きを発揮すること

- 3 ゲームの結果を知り、動きを発揮したことを発表し合う。

- 得点を数えて勝敗をとらえながら、よかった転がし方や避け方をふり返ること

☆ うまく ころがしたり よけたり できたよ。

準備

教師側：ゲーム対戦表、得点板、手順表
コートの図、ストップウォッチ
ソフトバレーボール、ケンステップ、ゼッケン

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ これまでのゲームとちがうコートでの動き方を発言したり動きを具体的に表現したりして、ゲームでの課題をとらえている。

【支援】

- ※ これまでのコートでゲームをしながら動きを賞賛する。
- ※ 新たなコートの提示や変化した場でのきまりを提示し、ゲームへの意欲をもたせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 教師や友達の動作補助を受けたり声かけに応じたりしながらボールを転がしている。また、ボールをよく見ながら避けている。

【支援】

- ※ ゲームをしながらボールの転がし方や避け方を動作補助や声かけによりつかませる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分で判断して転がす方を向いたり転がってきたボールに素早く反応してその場で跳んだり左右に避けたりしている。

【支援】

- ※ チームの練習で転がし方や避け方を繰り返し身に付けさせる。
- aグループ
 - ・主に動作補助やモデル演示により動きを身に付けさせる。
- bグループ
 - ・主に教師の声かけにより自分で判断させながら動かせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 得点を数えて結果をとらえ、得点につながった動きを思い出して再度演示している。

【支援】

- ※ 得点板をを提示することと身に付いた動きのモデル演示をする。

ゲーム活動を楽しみながら、グラフに表す手順やよみ方を身に付ける算数科学習

第5・6学年梅組 算数科学習指導案

指導者 弘 松 英 樹

題 材 グラフで、くらべよう! わくわくボウリングゲーム

指導観

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、5年生4名、6年生3名の計7名で構成されている。これまでの学習から、ゲームの結果等を簡単な図表に表したり、その結果をよみとったりする経験をしてきている。「図表」の実態は(AG)○や×の記号の意味がわかる子ども、(BG)○や×を使って表に表し、結果が判断できる子ども、と段階に差がある。図表でも、グラフを作ったり、そのよさを感じたりしている経験は少ない。

目 標

- 1 ゲームの結果を図表に表すことに関心をもって遊ぶことができる。
- 2 ゲームの結果をグラフに表す活動を通して(AG)記録の手順がわかり、結果をよみとること(BG)記録の手順がわかり、グラフの高さから結果をよみとり、その方法のよさに気付くこと、ができる。

計 画 (約4時間)

本題材について

本題材は、ボウリングゲームに取り組み、その結果を図表に記録する経験を繰り返し行い、その記録の手順や結果を比較、判断する力を身に付けることをねらいとしている。具体的には、①ボウリングゲームで勝敗を明らかにするために、図表に表すことに意欲的に取り組むこと、②ゲームの1回ごとの結果をグラフに表し、結果を量的に判断すること、③図表に表す際の正確さや結果について自信をもつことなどである。このような学習は、行為を記録に残して、一層わかりやすく表し、比較・判断するということを生活に活用できる知恵として身に付けさせる上で価値がある。

本題材の指導について

本題材の指導にあたっては、3つのボウリングゲームを設定し、時間ごとに違うルールของเกมをしながらも、個々の実態に応じたグラフへの記録の支援を行い、結果をよみとり、比較・判断させる。そして、グラフに表せば、計算しなくても勝敗が一目でわかるよさに気付かせる。また、1つのゲームごとに、記録する量は増えながらも、1回ごとに記録し、総計で比べるということは共通して行う、変化と繰り返しを重視した学習を展開する。

段階	主 な 学 習 活 動	時間
つ か む	1 ボウリングゲームを知り、実際に試しのゲームをする。 ○ ゲームをしながら記録することの必要性を感じる ※ 記録がなく勝敗がわからないという不十分さを感じさせる。	1
	2 ボウリングゲームをして、その結果を図表に記録する活動を繰り返す。 (1) 1投ごとの倒れた本数を記録するゲーム1を行う。 ○ グラフに記録していけば、回数を多く繰り返しても容易に勝敗が判断できるよさに気付くこと ※ 手順カードを用いて、ゲームと記録の繰り返しができるようにする。 (2) 1回につき2投し、その合計を記録するゲーム2を行う。 ○ 数が2投の合計になっても、グラフに表して処理し、そのよさを感じることが ※ グループに応じて、倒れたピンの数や投げた回数がわかる支援を行う。	2 ① 本 時
わ か る	3 1本ずつのピンに点数があり、その合計点数を記録するゲーム3を行う。 ○ これまでの記録の仕方をいかし、結果を点数でも表したり、よみとったりできること ※ 合計を出す個別のシートを準備する。	1

全 体 会 （ 1 日 目 ）

▼ あ い さ つ（10：20～10：35）

福岡教育大学学長 大 後 忠 志
校 長 鈴 木 清 一

▼ 特別支援教育発表（11：05～11：25）

・状況に応じたことばを使う国語科学習
ーストーリーのあるごっこ遊びを取り入れた学習の展開ー

特別支援教育部 諏訪原 佳子

▼ 主 題 発 表（10：35～11：05）

・学びを強め確かにする学習の創造
ー学びの体験を活かす3つの統合による授業づくりー
研究主任 北 田 尚 雄

▼ 教 科 等 発 表（11：25～11：45）

・自然のしくみを実感する理科学習

ー比較検討活動を位置付けた学習の展開ー

理 科 部 今 泉 伸 一 郎

▼ 児 童 発 表（11：45～12：00）

・創り出そう！私達のハーモニー

指導者 有 川 陽 子

第1日目 午後の部

学習指導案

▼ 学 習 指 導 (13:00～13:45)

学年 組	教科領域等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
1年1組	音 楽 科	もりのどうぶつのリズムをつくろう	有川 陽子	音 楽 室
1年2組	生 活 科	つくろう！コトコトカーレース	塚本 正典	1年2組・ワークスペース
2年1組	算 数 科	身体ものさしで見つもり名人になろう	田中 健悟	2年1組・ワークスペース
3年2・3組	理 科	植物のそだちをついせきしよう	今泉伸一郎	理 科 室
4年1・3組	体 育 科	つくろう！楽しもう！リズムピクス	久保 勝美	附属中体育館
4年2組	道 徳	友だちのためになるには？	木下 美紀	4年1組教室
5年1組	学級活動	ウォークラリー集会でGo!	黒澤 真二	5年1組教室
5年2組	社 会 科	どうする？これからの米づくり	高良 祐治	5年2組教室
6年1組	国 語 科	わたしはこう考える～優先席は必要か？～	平川 洋一	6年1組教室

▼ 特別支援教育学習指導 (13:00～13:45)

3・4年・5組	国 語 科	あかずきんちゃんごっこ～おばあさんをたすけよう～	諏訪原 佳子	特学棟音楽室
---------	-------	--------------------------	--------	--------

ストーリーをもとにしたリズムづくりに、言葉のもつリズムの楽しさをくわえる音楽科学習 第1学年1組 音楽科学習指導案

指導者 有 川 陽 子

題 材 森のどうぶつのリズムをつくろう！

指 導 観

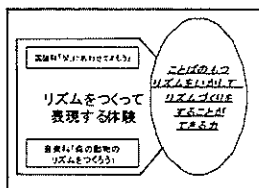
本題材について

本題材は、拍の流れにのって、言葉に合った簡単なリズムをつくって表現することをねらいとする。具体的には、①動物の友達を紹介する言葉を拍に合わせて調子よくリズムをつくって表現すること②友達のつくったリズムをみんなで一緒に表現して合わせる楽しさを味わうことである。このように、拍にのって調子よく表現する心地よさを本題材で味わわせることで、友達と合わせることの楽しさを感じさせたり、音楽の基本となるリズム感を養わせたりしていくことにつないでいく。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、元気に歌を歌って楽しむことができています。しかし、歌っている途中で友達とずれてしまうなど、一人で楽しんでいる姿がまだ見られる。そこで、リズム感覚が養われてくるこの期に、自分で考えた言葉にリズムをつくって、拍を感じながら表現したり、友達と合わせたりする楽しさを味わわせたい。

本題材の指導について



本題材の指導にあたってはストーリーの中の動物になりきらせ、友達紹介を拍の流れにのって表現させていきたい。そのために、ピクニックに一緒に行く友達を紹介するというストーリーを提示し、国語科の学習を生かして調子よく読むという目的意識をもたせて学習を展開していく。拍の流れにのって、調子よく言葉や文章をクラスみんなでや個人で表現できるようになったり、さらに、拍やみんなと合わせる心地よさを感じさせたりする。

目 標

- 1 自分でつくった動物の友達を紹介する言葉や文章を、調子よくリズムをつくって表現することができる。
- 2 拍を刻む音を聴きながら、自分でつくったリズムや、友達のつくったリズムを表現し、拍にあったり、友達と声を合わせたりする心地よさを感じることができる。

計 画 (約4時間)

段階	主 な 学 習 活 動	時間
つむ	1 「うたに あわせて あいうえお」を表現する。 ○ 拍の流れにのって表現したり、リズムが伴っていたりすることを知ること ※ 子どもたちが表現した言葉のリズムを教師が、リズム譜（円が四分音符、半円が八分音符）に置き換える。	1
つむく	2 ストーリーを拍の流れにのって表現できるよう言葉や文章にリズムをつくって表現する。 (1) 友達を紹介する場面（3場面）以外の言葉や文章にリズムをつくる。 ○ 拍の流れにのってリズムをつくること ※ 拍を刻む音を、つくる間流しておき、拍感を意識できるようにさせる。 (2) 森の動物の友達を紹介する場面（3場面）の言葉や文章にリズムをつくる。 ○ 拍の流れにのってリズムをつくること ※ 手拍子を打たせて、言葉や文章を言うことでリズムを意識できるようにする。	2
ひろげる	3 言葉や文章に合わせてつくったリズムをストーリーに沿って発表する。 ○ 拍の流れにのって、友達と調子よくつないで発表すること ※ 発表グループをつくり、お互いに聴き合える場や、一緒に体験できる場を設定する。	1

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 拍を刻む音を聴きながら、森の動物の友達を紹介する場面の言葉や文章にリズムを表現し、拍に合う心地よさを感じることができる。
- 拍の流れにのって、リズムの付いた言葉や文章を調子よく表現することができる。

1 ストーリーや、友達を紹介する言葉や文章を振り返って、本時のめあてについて話し合う。

○ 言葉のリズムを楽譜に表すことができることを確認すること

- ☆ 円と半円でリズムが分かるんだったな。
- ☆ リズムをたくさんつくりたいな。
- ☆ 友達紹介をリズムにするんだったな。

本時のめあて

ピクニックにいっしょにいくともだちを、みんなにリズムよくしょうかいしよう！

2 森の動物の友達を紹介する場面の言葉や文章にリズムをつくる。

♪提示するストーリー

① 今日は楽しいピクニック
みんなと楽しいピクニック

② ぼく（私）の友達を教えるね

③ 友達を紹介する言葉や文章が入る

④ 今日は楽しいピクニック

(1) クラスみんなで、言葉や文章にリズムをつくる。

○ 手拍子を打ちながら、拍の流れにのって表現すること

☆ 体の大きなくまろう



からだのおおきなくまろう

(2) 自分でつくった森の動物の友達紹介にリズムを付ける。

○ 手拍子打ちながら、拍の流れにのって表現すること

☆ 歌の上手なことりさん



うたのじょうずなことりさん

3 クラスの友達に森の動物の友達紹介をする。

(1) 友達紹介ゲームをする。

○ 手拍子をしながら、たくさんの友達に伝えること

☆ 5人の友達に紹介できたよ。

☆ タンタンの音に合わせて紹介することができたよ。

(2) 友達の紹介したよさを出し合う。

○ 拍の流れにのっているよさを発表すること

☆ ○○さんの紹介は、タンタンの音に合っていてよかったです。

○ 準備

教師側：ストーリーを書いたカード、挿絵、リズム譜、拍を刻む音、学習の流れ図、紹介カード

児童側：言葉や文章を書いたカード

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

◎ 前時につくったリズム譜を見て、言葉や文章を表現している。

【支援】

※ 教師が拍を手拍子で打ち、全員で前時につくった言葉を表現させる。

【子どもの見取りの観点】

◎ 友達紹介のリズムをつくりたいという意欲をもっている。

【支援】

※ 友達の動物の挿絵を提示し、紹介したい気持ちを高めさせる。

【子どもの見取りの観点】

◎ 拍の流れを感じて、手拍子を打ちながら言葉や文章にリズムをつくっている。

【支援】

※ 子どもたちがつくったリズムを、教師が円や半円のリズム譜に表す。

【子どもの見取りの観点】

◎ 拍に合わせて、つくったリズムのある文章を表現している。

【支援】

※ グループ毎に表現させて、拍に合わせて表現できているかを見取る。

【子どもの見取りの観点】

◎ 手拍子をしながら、友達に森の動物の紹介をしている。

【支援】

※ リズム譜に表し提示する。

【子どもの見取りの観点】

◎ 拍の流れにのって表現しているよさを発表している。

【支援】

※ 発表前に、拍の流れにのっているよさとみんなで合わせられるよさがあることを伝える。

いくつかの長さの考えを生かして、動くおもちゃの仕組みに気付く生活科学学習

第1学年2組 生活科学学習指導案

指導者 塚 本 正 典

単 元 つくろう! コトコト カーレース

指 導 観

本単元について

本単元は、身近にある物を使って遊びを工夫し、みんなで遊びを楽しむことができることをねらいとしている。具体的には、①ゴムや磁石を使って遊びを創り出すこと、②遊ぶ場所を変えたり、使う物を変えたりして遊びを工夫すること、③遊び方やルールを工夫しながら、友達と楽しく遊ぶことである。ゴムの大きさや巻数、おもりの大きさや数の条件を変えることで、おもちゃの動きが変わる仕組みに気付く、科学的な見方や考え方の素地となる。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、友達とかかわって遊びたいという思いをもっており、小グループでの遊びができるようになってきている。しかし、多くの友達とかかわりながらルールを守って遊ぶ楽しさを味わうまでにはいたっていない。そこで、子どもたちが友達と競争したり、一緒に作り変えたりする楽しさを味わいながら、みんなとかかわって遊ぶよさや約束の大切さに気付く、楽しく生活をつくることができるようにする。このことは、気付きを自分の生活に生かす子どもを育てる上で大変意義深い。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、身近にあるゴムや磁石を使って、みんなで遊びを楽しむことができることをねらいとしている。そこで、算数との統合（補

14ページによる学びの様子

生活科
「つくろう! コトコトカーレース」

算数科
いくつかぶんではかろう、

遊びの工夫
友達との
かわり

完)を図り、巻く回数やおもりの重さに違いで、いくつかの表し方で進む長さを調べながら、友達と楽しくかわられるようにする。

目 標

- 1 身近なゴムや磁石で動くおもちゃに関心を持ち意欲的に作り方を工夫しながら、友達と楽しく遊ぶことができる。
- 2 ゴムや磁石で動くおもちゃづくりを通して、速く長く動く仕組みや友達とかかわる楽しさに気付くことができる。

計 画 (約11時間)

段階	主 な 学 習 活 動	時間
であう	1 ゴムや磁石で動くおもちゃに出会い、おもちゃづくりの計画を立てる。 ○ 動くおもちゃを作りたいという意欲をもち、ゴムや磁石の動力に気付くこと ※ 動きの仕組みや楽しさに気付くよう、実際に楽しく遊ぶ場を設定する。	3
ふかめ	2 友達と楽しく遊びながら、ゴムや磁石で動くおもちゃを作る。 (1) ゴムや磁石で動くおもちゃを作る。 ○ ゴムや磁石で動く仕組みに気付くこと ※ おもちゃに必要な材料や道具を準備し作る場や試す場、作り方を視聴するビデオコーナーを設定する。 (2) おもちゃがより長く、速く動くように工夫して作りかえる。 ○ より長く、速く動くように、ゴムの巻き方やおもりの大きさを変えるよさに気付くこと ※ おもちゃを作りかえたり、動かしたりするコーナーの設置と、グループごとに進む距離を競う場を準備する。	6 ③ ③ 本 時 1 / 3
いかす	3 コトコトおもちゃレースを開く。 ○ 学習の達成感を味わい、これから楽しく作りかえながら友達とかかわる意欲をもつこと ※ おもちゃの様々なよさに気付くよう、互いのよさを評価する場を設定する。	2

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 自分のおもちゃが速く動くように意欲的に作りかえたり、工夫して進んだ長さをいくつかの考えで発表したりすることができる。
- おもちゃを作りかえる活動を通して、ゴムの大きさや巻き方、おもりの大きさを変えた動きの違いや友達と楽しく遊ぶよさに気付くことができる。

1 自分が作ったおもちゃをもとに、もっと速く、長く動くように作りかえる視点について話し合う。

- 自分のおもちゃがより長く速く動くように作りかえたいという意欲を高め、作りかえる見通しをもつこと

☆ ぼくのおもちゃは、おもりの大きさを変えて、もっと長く動くように作りかえたいです。

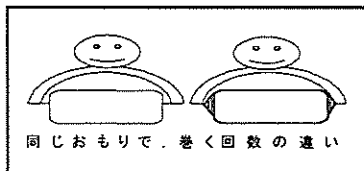
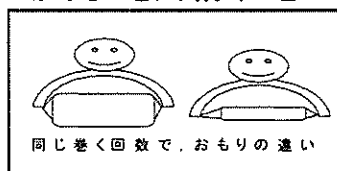
本時のめあて

おもちゃを つくりかえて、もっとはやく ながくうごくひみつをさがそう。

2 工夫した点の紹介をもとに、自分のおもちゃを作りかえる。

(1) グループごとに、自分のおもちゃを作りかえる。

- ゴムやおもりの大きさを変えると、動く速さや動く距離に違いがあることに気付くこと



☆ わたしのおもちゃが、もっと速くうごくように、大きなゴムにしてみたいな。

☆ ぼくは、おもりを変えたらもっと速くなると思うので、大きなおもりを使ってみたいです。

(2) おもちゃの工夫について紹介し、友達の考えを生かして再び作りかえる。

- 工夫した友達のおもちゃのよさに気付くこと

☆ ゴムを20回巻いた時は、2つ分の青色のところまで進みました。

☆ 小さいおもりは、1つ分で赤色のところだけど、大きいおもりは、3つ分の黄色のところでした。

3 作りかえた自分のおもちゃのよさや、これからの学習について話し合う。

- 自分のおもちゃがもっと速く動くように作りかえて、友達と楽しく遊びたい意欲をもつこと

☆ わたしは、〇〇さんのおもちゃがとてもよく動いたので、もっと話を聞いてみたいです。そして、よく動くように作りかえて、友達と競走をしてもっと遊びたいです。

準備

教師側：材料や道具のコーナー

試しのコーナー

児童側：おもちゃ、道具

各活動の子どもの見取りと支援

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分のおもちゃを作りかえたいことを意欲的に発表している。

【支援】

- ※ 実際に、自分のおもちゃを提示しながら、動きの様子について説明する場や実際に動かす場を設定する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分のおもちゃを作りかえるところについて、見通しをもっている。

【支援】

- ※ ゴムの巻き方や数、おもりの大きさを変えたおもちゃを実際に動かす場を設定したり、動きのちがうおもちゃの動力の様子を比べる場を設定したりする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ ゴムの大きさや数、おもりの大きさを変えて、意欲的に作りかえたり、友達と比べながら、動きの違いを見つめたりしている。

【支援】

- ※ ゴムの巻き方やおもりの大きさを変えると、進む長さの違いが出ることに気付くことができるよう、グループごとに作り変えながら、もともなる長さのいくつ分で、距離を調べる場を設定する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分が作りかえた点について、ゴムの巻き方、大きさ、磁石の大きさの視点から、自分のおもちゃをもとに、具体的に順序よく説明している。

【支援】

- ※ ゴムやおもりの条件を変えた動きの違いに気付くことができるよう、巻いた回数やおもりの大きさにより進む長さの違いが色ごとにいくつ分で測る場を設定する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分のおもちゃを具体的に作りかえる視点や、友達と一緒に遊びたいことを意欲的に発表している。

【支援】

- ※ おもちゃがもっと速く長く動くように作りかえたい意欲を高めることができるよう、動力となるものを変える視点を提示する。

長さの見積もりを通して、2桁の加法や減法を旺盛に活用する算数科学習

第2学年1組 算数科学習指導案

指導者 田 中 健 悟

単 元 身体ものさしで見つもり名人になろう（長さ）

指 導 観

本単元について

本単元のねらいは、簡単な場合の長さの測定ができるようになることである。具体的には、①長さの普遍単位（cm、mm）を知り、ものさしを用いた測定ができるようになること、②長さの量感を身に付けること、である。ここでは身体の一部を使った長さの見積もりを教材化し、数と計算の領域での学びの体験の系統を重視する。具体的には、①体の部位の長さをもとに見積もりができること、②長さの加法・減法を取り入れ、2位数の加法・減法の筆算を活用して問題を解決できるようにすること、である。

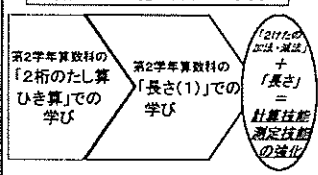
本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、第1学年において、直接比較、間接比較、任意単位による測定を学習してきた。しかし、普遍単位の必要性に気付いたり、長さの量感をもちたりするまでには至っていない。そこで、普遍単位の必要性に気付かせるとともに、身体の一部を使って見積もりをすることの有用性がわかる指導を行っていきたい。

本単元の指導について

系統による学びの体験の統合

身体ものさしで見つもり名人になろう



本単元は、普遍単位による長さの測定技能と量感の育成をねらいとしている。そこで、見いだす段階では、任意単位による測定値の比較場

面を通し、普遍単位の必要性から普遍単位を導入する。試みる段階ではものさしによる長さの測定ができるようにする。広げる段階では、身体の一部の長さでの見積もりを通して、前単元で用いた計算を活用しながら見積もりの精度を高める。

目 標

- 1 身の回りのものの長さを調べる活動を通して、長さを普遍単位で測定し比較することに意欲的に取り組むことができるようにする。
- 2 長さを普遍単位で測定する必要性に気づき、その単位で測定する有用性がわかるとともに、ものさしを用いて測定することができるようにする。

計 画（約8時間）

段階	主 な 学 習 活 動	時間
見 い だ す	1 複数の魚の大きさの表し方について話し合う。 ○ 魚の大きさを普遍単位であるcmの長さで表すこと ※ 複数の魚の大きさを同時に比べ、順位付ける比べ方を話し合う場を設定する。	2
	2 身の回りにあるものの長さをものさしで測定し、記録をまとめる。 (1) 紙面上に表されたものの長さを、端の点と点を結んで直線をつくり、その長さを数の線のものさしで測定する。 ○ cmやmmを基準としたものさしで長さを測定する技能を身に付けること ※ cmやmmの単位の数の線のものさしで長さを測定させ、30cmものさしの仕組みを理解できるようにする。	4
試 み る	(2) 身の回りのものの長さについて調べ、記録をノートに書きまとめる。 ○ 長さに対する量感を身に付けること ※ 記録をノートに書きまとめながら見積もる際の基準となる長さをもつことができるようにする。	②
広 げ る	3 身体の一部の長さを測定し、それをもとに身の回りのものの見積もりを行う。 ○ 身体の一部の長さをもとに、たしたりひいたりしながら見積もりができること ※ 身体の一部を利用して見積もりと実測を行い、見積もりのよさを実感させる。	2 本 時 2 / 2

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 自分の身体の部位の長さを基準として計算で身の回りのものの長さを見積もることに意欲的に取り組むことができる。
- 身体の部位の長さを基準として計算で長さの見積もりをする際、長さに応じて身体ものさしを選び、誤差を少なくすることができる。

1 前の時間に測定した身体の部位を利用して、計算でおよその長さを見積もる方法について話し合う。

- 身体の部位の長さを利用し、それらを組み合わせて計算すれば、およその長さを見積もることができることに見通しをもつこと

☆ 手のひらのはばやうでの長さなどを使えば、だいたいの長さの見積もりができそうだな。

本時のめあて

自分のからだのいろいろな長さをつかって、およその長さの見積もりが上手にできるようになろう。

2 身の回りから取り出し色テープに置き換えた長さを、自分の身体の部位の長さを利用して見積もる。

- (1) 青テープ（机の横の長さ）について試しに体の部位を使って見積もり、見積もりの仕方について話し合う。

・親指の幅 1 cm位 ・指の長さ 5 cm位 ・手のひらの縦 11 cm位
・足 15 cm位 ・腕（肘まで） 25 cm位 ・腕（肩まで） 40 cm位

- 体の部位を使い、たし算やひき算をしておおよその長さを見積もることへの見通しをもつこと

☆ 机の横の長さは、うでの長さ 2 つ分と手のひらの長さ 1 つ分位なので、 $25 + 25 + 10$ の長さだな。計算すると 60 cm になるから見積もった長さは 60 cm 位だな。

☆ 短い身体ものさしで見積もると、見積もりの結果が本当の長さと随分違ってくるんだな。

- (2) 赤、黄色、緑、白テープ（身の回りから取り出したいろいろなもの）の長さを身体の部位を上手に使うて見積もり、その後、ものさしを使って実測する。

- 長いものに対しては身体の部位で長いところを使い、短いものに対しては身体の部位で短いところを使って長さを見積もること

☆ 見積もりの結果と本当の長さとの違いを少なくするには、長いところには、長い身体ものさしを使い、短いところには、短い身体ものさしを使って、見積もると実際の長さに近くなるな。

3 身の回りの長さの上手な見積もり方について話し合う。

- 長さを見積もる際に、上手に見積もるには、求めようとする長さにあった身体ものさしを用いることで、たし算やひき算の回数が減り、誤差が少なくなること気付くこと

☆ 身体ものさしは、だいたい決めた長さが多いから、だいたいの長さの組み合わせが少ない方が、上手に見積もれるんだな。

準備

教師側：身体部位を利用して見積もるのに適した長さをもつもの

児童側：30cmものさし、これまで調べた長さを書き込んだノート

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

- ◎ ものさしを用いず見積もりを行う際に、目測による見積もりよりも見積もりの精度を上げるために身体部位を基準に考えようとしている。

【支援】

※ 前時に記録した身体部位の長さを黒板上に提示し、単なる目視による見積もりよりも精度が高くなることを見通すことができるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 同じ長さのいくつ分で考えたり、異なる身体部位の長さを組み合わたりしながら、たし算やひき算の計算を使って見積もりをしている。その際、できるだけ見積もりの誤差が少なくなるようにしようとしている。

【支援】

※ 青テープの長さを自分の身体部位の長さを上手に測る対象のテープに沿わせることができない児童については、自分の身体部位の長さを絵に置き換えたものを使用させ、活動に対する困難性を減らす。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 長いものに対しては、長い身体ものさしを使い、短いものに対しては、短い身体ものさしを使って、見積もる対象に応じて身体ものさしを使い分けながら見積もりをしている。

【支援】

※ 赤、黄色、緑、白の4種類のテープを、身体ものさしの長さを使い分けて見積もることができるように、数値の設定を工夫しておく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 誤差を少なく見積もるためには、計算の回数を少なくした方がよいことを発言している。

【支援】

※ ものさしを数多くした場合と少なくした場合とを提示し比較させ、上手な見積もり方を話し合わせる。

植物の成長をグラフや表で比べ、成長のきまりを見出す理科学習

第3学年2・3組 理科学習指導案

指導者 今 泉 伸 一 郎

単 元 植物のそだちをついせきしよう

指 導 観

本単元について

本単元のねらいは、実が食べられ丈が大きくなるなどの期待感をもってオクラ、ホウセンカ、ヒマワリを育て、育ち方を比べながら調べる。そして植物の成長には一定の順序があり体のつくりが根、茎、葉からできていることをとらえることである。

目 標

- 1 数種類の植物を育て、植物の育ち方の規則性や体のつくりを比べながら調べることができる。
- 2 植物の育ちには一定の順序があり体は根、茎、葉からできていることに気付くことができる。

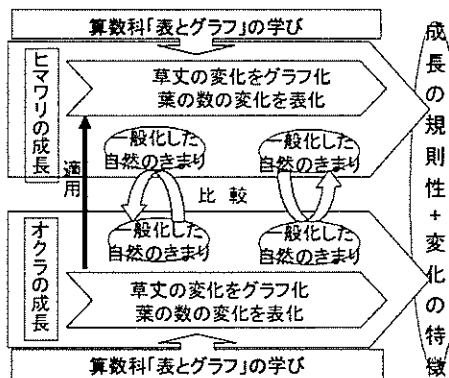
計 画 (約12時間)

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、生活科で草花や野菜類を育てた経験をもち、植物の育ち方について気付いている。しかし、種から実が実る植物は育てていないため、発芽から茎の伸長の様子については観察していない。また、植物の育ち方の規則性という面でのとらえはできていない。そこで、3種類の植物の部位との変化に着目し比べながら観察していく。

本単元の指導について

植物の成長の規則性や体のしくみに気付かせるため植物を育て、観察を行う。その際、伸びた茎の丈を紙テープで測りとり棒グラフにして表す。また、葉の数や大きさに着目し、変化を表で表す。このように算数科での表とグラフの学びを補完し、植物の成長の共通点を観念に観察し、植物の育ち方の特徴に気付くようにする。



時	主 な 学 習 活 動	期
つ	1 植物の種の大きさや形から成長の仕方 や大きさについて話し合う。	3
か	○ 植物を育てる課題意識をもつこと ※ 生活科で植物を育てた体験をふり返ら せ、考えの対立が起きるようにする。	
む	2 オクラ、ホウセンカ、ヒマワリを育て、 育ち方の特徴や体のしくみを一定期間ご とに継続観察し表やグラフに記録する。	6
	(1) 植物の茎の長さや葉の数に変化に着目 して成長の規則性をまとめる。	③
つ	○ どの植物も、最初は緩やかに、やがて急 激に大きくなっていくこと ※ 丈を紙テープで写し取り、グラフ化す ることで規則性に気付くようにする。	本 時 3 ／ 3
く	(2) 植物の根に着目して、成長の規則性を まとめる。	②
る	○ 植物の変化の規則性に気付くこと ※ 植物の根を観察しに変化の様子を図に まとめるようにする。	
	(3) 体の仕組みに着目してオクラ、ホウセ ンカ、ヒマワリを比べて観察する。	①
	○ 植物は、根、茎、葉からできていること ※ 体の仕組みに着目して観察させる。	
ひ	3 植物の枯れていく様子や実が熟してい く様子を観察する。	3
ろ	○ 植物は実が熟し、種を残して、やがて 枯れていくこと ※ 成長が止まることと実が熟していく様 子に着目して観察させる。	
げ		
る		

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- オクラ、ハウセンカ、ヒマワリの育ち方の特徴を丈の長さや葉の数の増え方や大きさに着目して意欲的に調べることができる。
- 植物は、最初は緩やかに成長するが、次第に急激に丈の長さや葉の大きさ、葉の枚数が増えて成長していくことがわかる。

1 オクラ、ハウセンカ、ヒマワリを育ててきてこれまでに分かった丈の長さや葉の数、葉の大きさについて発表する。

- 前回と前々回の植物の丈の伸び方と葉の数の増加について発表し、本時観察する葉の変化について予想すること

☆ オクラの丈の伸びは、前回と前々回とでは 10 cm の差があったので、今日の観察は、前回と同じ時間が経っているから、同じように 10 cm くらい伸びているはずだ。

☆ 前回まで葉が増えた数は前々回に比べると約 10 枚多かった。前回と同じ時間が経っているから約 10 枚ほど増えているはずだ。

本時のめあて

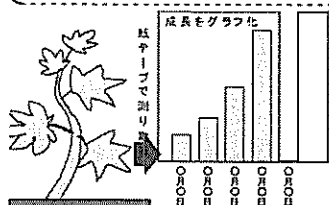
オクラ、ハウセンカ、ヒマワリのせい長のしかたをくきの長さをはかったり、葉の数を数えたりしてくらべよう。

2 自分が育てているオクラ、ハウセンカ、ヒマワリの成長を丈の伸びや葉の数の増え方を観点に比べて観察する。

- (1) オクラ、ハウセンカ、ヒマワリそれぞれの植物の茎の丈の伸びを前回と比べて観察する。

- オクラ、ハウセンカ、ヒマワリの茎の丈の伸びは、前回や前々回よりもさらに大きくなっていること

☆ おや、オクラは前回よりも 20 cm 大きくなっている。前は、10 cm、前々回は 4 cm だから、どんどん大きくなっている。



【葉の数の変化】

	○月○日	○月○日
オクラ	2 枚	2 5 枚
ハウセンカ	2 枚	5 6 枚
ヒマワリ	2 枚	1 9 枚

- (2) オクラ、ハウセンカ、ヒマワリの成長を葉の数の増加や大きさを視点に前回と比べて観察する。

- 植物の葉の増加は、前回や前々回と比べると、さらに枚数が多くなっていることに気付くこと

☆ おや、オクラは前回よりも 20 枚葉の数が多くなっている。前は 10 枚、前々回は 6 枚だから、どんどん大きくなっている。

3 植物の成長の仕方の特徴について話し合う。

- 植物には、最初は子葉、次に本葉が出て緩やかに成長し、やがて、葉の数や大きさが茎の丈が急に大きくなっていくものがあること

☆ 表やグラフから植物は、最初の方やゆっくりと大きくなるけれども途中から急に大きくなっていくんだね。

準備

教師側：紙テープ

児童側：学習模造紙、自分が育てている
オクラ、ハウセンカ、ヒマワリ

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ これまでの成長の伸びから本時観察する成長の伸びを予想し、対立する点から調べる目的をもっている。

【支援】

- ※ 前回の観察と前々回の観察したときと同じ期間が空いていることに着目させる。
- ※ 茎の丈の伸びや葉の数の増加が前回とどう変わるかについて予想させ、考えの対立が起きるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分が育てている植物の前回、前々回の伸びと比べ植物の茎の成長について考えをノートに記録している。

【支援】

- ※ 植物の茎の丈の伸びを紙テープで写し取り、棒グラフに貼り付けて前回の伸びと視覚的に比べられるようにする。算数科「表とグラフ」の学びを補完する。
- ※ 前回と今回の観察時の茎の丈の伸びとを比べて、自分が育てている植物の成長に気付かせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分が育てている植物の前回、前々回の葉の数の増え方を比べて植物の成長について新たな考えをノートに記録している。

【支援】

- ※ 植物の葉の数の増加を数え、表に記録し前回の伸びと視覚的に比べられるようにする。算数科「表とグラフ」の学びを補完する。
- ※ 葉の大きさをノートに写しとり、前回と比べてどう変化したのかについて気付くようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ オクラ、ハウセンカ、ヒマワリなどの植物の成長の仕方についてその共通点から植物の成長の規則性を一般化している。

【支援】

- ※ グラフや表をもとに結果を説明し、植物の成長について発表させる。
- ※ オクラ、ハウセンカ、ヒマワリの成長とを比べ、共通点から植物の茎の丈の伸びの特徴に気付かせる。

リズムや保健の学びをくわえて運動を創造しながらリズムカルな動きをつくる体育科学習 第4学年1・3組 体育科学習指導案

指導者 久保 勝 美

単 元 つくろう!楽しもう!リズムビクス

指 導 観

本単元について

本単元のねらいは、軽快な音楽に乗ってリングやボールなどの用具をタイミングよく操作したり、用具や仲間の動きに合わせて自分の体をいろいろに動かししたりして楽しむことである。具体的には、①軽快な音楽に乗って用具や友達に動きを合わせるリズムビクスを楽しむこと、②軽快な音楽に乗って用具や友だちに合わせた動きができること、③能力や楽しみ方に応じて用具の種類や操作の仕方、仲間の視点からリズムビクスをつくることである。

目 標

- 1 軽快な音楽に乗ってリングやボールなどの用具をタイミングよく操作したり、用具や仲間の動きに合わせて自分の体をいろいろに動かししたりすることができる。
- 2 自分やともに運動する仲間の能力や楽しみ方に応じて用具の種類や操作の仕方、仲間の視点からリズムビクスをつくることができる。

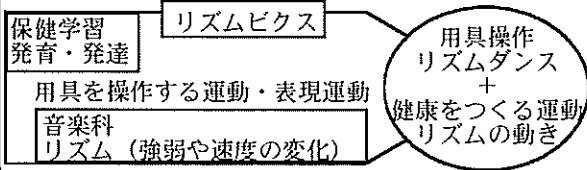
計 画 (約6時間)

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、軽快な音楽に合わせて体を動かし、規則的に置かれたリングに合わせて連続跳びをしたりするなどリズムカルな動きを楽しむ経験をしてきている。また、音楽科では強弱や速さの変化のある音楽を聴いたり、演奏したりしてきている。また、保健の学習では健やかに成長するためには適切な運動が必要であることを学んできている。そこで、挑戦や創造の楽しさを求めるなかで強弱や速さの変化がある音楽に応じて動きをつくる本単元は生涯運動・スポーツからみても価値がある。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、保健学習での発育・発達と音楽科でのリズムの学びを補完させる。そして、運動をつくりつつ音楽や友達の変化に応じてタイミングや大きさを変化させるリズムの動きを中心に楽しさを追究する活動を連続・発展させる。



段階	主 な 学 習 活 動	時間
であう	1 簡単なリズムビクスを試し、楽しみ方について話し合う。 ○ リズムビクスの必要性や楽しみ方の把握と楽しさを体験すること ※ リズムビクスを試す活動と成長・運動について話し合う活動を設定する。	1
	2 用具や動きのつくり変えを繰り返してリズムビクスをつくり、楽しむ。 (1) 1人でリズムビクスを楽しむ。 ○ リズムビクスを楽しむ用具操作と身体操作の基本的な動きの習得すること ※ 用具操作の複雑さとアクセントの付け方から難しさを段階的に設定する。	4
	(2) リズムビクスの用具の種類や操作の仕方、仲間の人数を変えながら楽しむ。 ○ 能力や楽しみ方に応じたリズムビクスの再構成と習得した動きを活用すること ※ 子どもの求めに応じて仲間の人数や用具や動き方の組合せなどによる多様な場を設定するとともに、強弱や速さが変化する音楽に合わせる活動を設定する。	① ③ 本時 2 3
あじわう	3 まとめの交流会を開き、つくったリズムビクスや動きについて話し合う。 ○ リズムビクスのよさを明確にすること ※ これまでにつくったリズムビクスをみんなで楽しむ活動を設定する。	1

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 軽快な音楽に乗ってリングやボールを操作したり、用具や仲間の動きに合わせて方向やタイミングを合わせて動くことができる。
- 動きや用具の種類、組み合わせを変えて、友達と動きを合わせるリズムピクスをつくることができる。

1 強弱変化のある音楽に合わせて動く楽しさと用具や動きを仲間とともに工夫してリズムピクスをつくる楽しみ方について話し合う。

- 仲間の人数を増やしたり、動きや用具を組み合わせたりしてリズムピクスの続きをつくる見通しをもつこと

☆ ペアでリングをころがす動きやボールをバウンドパスする動きを組み合わせるリズムピクスの続きをつくって楽しみたい。

本時のめあて

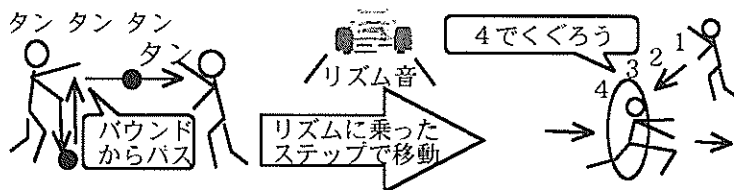
用具の使い方や動き方を変えて、友だちと動きを合わせるリズムピクスの続きをつくってできるようになる。

2 ペアで用具、動きを組み変えながらリズムピクスを楽しむ。

- (1) リズム音に乗ってリズムピクスづくりを楽しむ。

- ペアで動きを組合せながら強弱がはっきりしたリズムパターンのリズム音に合わせたリズムピクスの動きの習得すること

☆ 友だちと声を出し合って、リングを転がすタイミングを合わせたり、転がす強さを調整するとうまくいきそうだ。



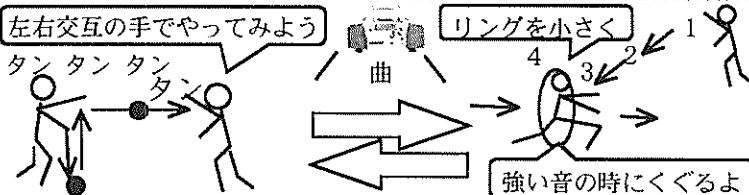
《サンバリズムでのボール操作》

《4拍でリングをくぐる》

- (2) 強弱や速さが変化する軽快な音楽に乗って用具や友達と動きを合わせるリズムピクスづくりを楽しむ。

- リングを転がしたりボールをパスし合ったりなど習得した動きを音楽に合わせて活用する動きを定着・発展させること

☆ リズム音に合わせてつくったリズムピクスの動きや場をつくり変えて強弱や速さが変化する軽快な音楽に乗って楽しみたい。



3 つくったリズムピクスのミニ発表会を開いて楽しみ、楽しさとつくった動きやリズムピクスについて話し合う。

- リズムピクスづくりと動きのよさを明らかにすること

☆ 友達と音楽でつながり心を合わせるとうまいいった。転がす位置を遠くしてもどんどんできるようになったので楽しかった。

準備

教師側：リズム音と音楽

リングやボールなどの用具

動きをつくる補助具

児童側：学習ノート

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ これまでに経験したリズムピクスの楽しさの内容を把握している。

【支援】

- ※ リズムに合った動きをしているリズムピクスのモデルを提示する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ ペアで行うリズムピクス像と動きをつくる見通しをもっている。

【支援】

- ※ 音楽の強弱変化に合わせて動きや用具を工夫したモデルを提示する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ ペアで軽快なリズム音に合わせて用具を操作したり、用具の動きに合わせてたりする動きができる。

【支援】

- ※ 用具操作の複雑さやアクセントの付け方によって難しさを段階的に操作できる用具を提示する。また、用具操作の動きを取り出してつくる場を設定する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ リングを転がす位置を選んだり、動きや用具の組合せを変えたりするなどして全力でやっと成功する程度の難しさにしている。

【支援】

- ※ リズム音に戻る場や動きを取りだして試す場を設定する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 音楽のリズムパターンを手がかりにペアの友だちとタイミングを合わせたり、素早く動いたりしている。

【支援】

- ※ 強弱を付けたリズムパターンを声に出しながらリズムに乗っている動きのモデルを提示するとともに、膝の動きなど体の使い方を比較させる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ つくったリズムピクスと動きのよさを明らかにしている。

【支援】

- ※ モデルペアのリズムピクスを提示するとともに、絵図によって子どもの気づきを整理する。

自分と他者の関係を調和的にみる視点を対話にくわえ信頼友情の価値をとらえる道徳学習 第4学年2組 道徳学習指導案

指導者 木下美紀

主 題 友だちのためになるには？

指導観

本主題について

本主題は、友達と互いに信頼し合う、助け合う大切さを理解することをねらいとしている。本主題は中学年2－(3)の内容である。信頼は、人と人を結ぶ絆である。友情は、信頼が共に向けられたものであり、優しい思いやりと励ましとそれに答えようと努力する相互関係の中で深まっていく。その際、自分や他者を相互に見て、よりよい人間関係を調整していく力が必要である。本主題における統合は、特別活動の自他の見方をとらえ、調整していく学習をまた、対話の際、同時期に行われる国語科の話し合うことの学び方を生かしていく（補完）。

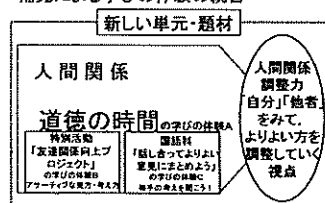
本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、友達どうし仲良くする大切さを知っている。しかし、友達に対して忠告することについてはなかなかできないことが多い。これは、友達関係が崩れるのを恐れるあまり、相手の成長を願って忠告することが大切なことに十分気付いていないからだと考える。そこで、相互信頼のもと忠告ということから、他者の視点から、友達との関係を調整していく力を育てたい。

本主題の指導について

本主題の指導にあたっては、子どもの体験を意識した問題の状況を把握するためのシミュレーション1、学級会后、話し合う場面を創造的に演技するシミュレーション2を設定する。その際、国語科での

補完による学びの体験の統合



話し合うことの学び方と特別活動での自他を調和的にとらえる視点を生かしていく「補完」としての知の統合をめざす。

目 標

- 1 道徳的な問題場面において、とりうる行為を想定し、演技していく対話型シミュレーションを通して、自分の友達関係を見直すことができる。
- 2 資料『大きな絵はがき』を通して、友達関係を深めるために、相手の成長を願って相手のあやまちを伝えていく大切さをつかむことができる。

計 画（約2時間）

段階	主 な 学 習 活 動	時間
見 つ め る	1 2枚の絵と資料『大きな絵はがき』から今の自分の友達関係について話し合う。 (1) 2枚の絵から自分の友達関係を考える。 ○ 友達と自分のかかわりについての気持ちをもつこと ※ 2枚の絵（友達に忠告する絵、見守る絵）を提示し、話し合わせる。 (2) 資料『大きな絵はがき』を読み、自分だったら伝えるか考え、話し合う。 ○ 資料から自分の立場を決定すること ※ シミュレーション1で、伝えるか家族での話し合いの場を再現させる。	1
	2 資料『大きな絵はがき』を通して、信頼友情の大切さについて話し合う。 (1) シミュレーション2で手紙を書き、伝える二人の役を演じる。 ○ 信頼友情の価値をとらえること ※ 関係が崩れてしまうのか、演技で確かめさせ、信頼の大切さに気付かせる。 (2) 自分の友達関係を見直す。 ○ 信頼友情の価値をとらえること ※ 児童作文（忠告）を活用する。	1 本 時
生 か す	3 これからの友達関係を見つめていく。 ○ 実生活での価値の実現への実践意欲を高めること ※ 友達と笑顔でかかわる子どもの画像をプレゼンテーションで提示し、実践意欲を高める。	事 後 学 習

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 忠告という道徳的な問題場面において、その後の行為を想定して演技し、解決していく対話型シミュレーション2を通して、自分の友達関係を見直すことができる。
- 資料『大きな絵はがき』を通して、自分と相手の視点を考慮し、相手の心情を押し量り、友情を深める大切さをつかむことができる。

○ 準備

教師側：場面絵、資料、言葉カード、2枚絵（忠告する）、集会活動の2枚絵、友達同士の写真

児童側：道徳ノート、心のノート

<各活動の子どもの見取りと支援>

- 1 事前の学習（シミュレーション1）で出てきた課題について発表し、その解決方法を話し合う。

○ 友達と自分の友達関係についての気がかりをもつこと

- ☆ はっきり伝えた方が友達のためになる。
- ☆ 友達の思いを大切に、今回は黙っておいた方がいい。

本時のめあて

友達とシミュレーションをして実際に確かめて、本当の友達について考えよう。

- 2 資料『大きな絵はがき』を通して、自分の友達関係と比べて、そのよさから、信頼友情の大切さについて話し合う。

- (1) シミュレーション2で、3日後広子が正子に手紙を書き、それを読む場面を演技し、そのときの気持ちを話し合う。

○ 自分と他者の視点からよりよい関係を調整していく大切さを実感すること

- ☆ 忠告しても友達関係は崩れない。信じているから。
- ☆ きつとわたしの気持ちは伝わる。相手のことを思っているから自分の気持ちと友達の気持ちを考えて、よりよい方を考えていく。

- (2) 資料後半から、相手を信じ伝える大切さ（忠告）を話し合う。

○ 友達の成長を願って忠告することの信頼友情の価値をとらえること

- ☆ やっぱり相手のことを思う気持ちを伝えていくのが大切。
- ☆ 主人公のような友達関係を築いていきたい。それが親友。

- (3) 友達とほほえむ心のノートのページの写真から、自分の友達関係を見直す。

○ 信頼友情の価値を自分とのかかわりでとらえること

- ☆ 自分だけの思いじゃなくて、相手の友だちのことを考えていくことが大切だよ。
- ☆ 自分も相手も笑顔になる友達関係でいたい。

- 3 友達と力を合わせている学級会活動の写真を見て、これからの友達関係を考え、発表する。

○ 実生活の場での価値の実現への実践意欲を高めること

- ☆ わたしは、今まで友達関係が崩れるのを心配していたけれど、きつと気持ちは伝わるので、信じて分かり合いたい。
- ☆ 次の学級会活動でも、みんなで力を合わせて、自分も友達も笑顔の集会ができるようにしたい。きつとできると思う。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 友情に関する実態調査や前時学習の流れ図を見たり、記述した友達カードを見たりして、自分の知りたい友情に関することを発言している。

【支援】

- ※ シミュレーション1で出てきた疑問（伝えたら友達関係が崩れるか）について自分の考えを表出させ、実際にシミュレーション2で演技して確かめたいという意欲を高める。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 主人公の心情の変化を自分の体験と結んで予想し、記述している。
- ◎ 広子が正子の気持ちを気遣い、他者の視点を重視し、自分との調整を図って創造的に演技をしている。

【支援】

- ※ シミュレーション2は、次のような設定にする。①3日後、広子が正子に手紙を書く。②手紙の内容は、伝えない方（絵はがきのお礼）、伝える方（絵はがきのお礼＋料金不足）、③それぞれで広子、正子役になって、手紙を読み、演技する。④心見つけカードに自他の視点で心情を吟味する。⑤グループで対話する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ やはり相手にまちがいを伝えた方が相手のためにも自分のためにもなることを記述している。
- ◎ 資料と同じような経験をもつ友達との対話で、信頼友情についての見方・考え方を深めている。

【支援】

- ※ シミュレーション2の自分の考えと、主人公の考えを比較させ、忠告するよさについてとらえさせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分と友達との笑顔の写真のプレゼンテーションを見て、友達カードに記述し、発言している。

【支援】

- ※ 信頼友情の価値のよさを具体的にとらえさせるために、友達と楽しそうに活動する笑顔の映像をプレゼンテーションで視聴させる。

学校行事や理科，総合的な学習での活動がチェックポイントづくりにくわる学級活動 第5学年1組 学級活動指導案

指導者 黒 澤 真 二

題 材 ウォークラリー集会でGo!

指 導 観

本題材について

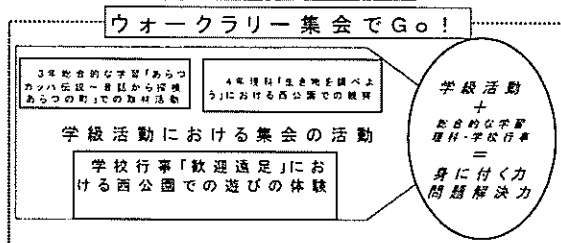
本題材は，集会づくりを通して，学級の友達とのかかわりを広げ，学級目標の具現化を図ることをねらいとしている。具体的には，①集会を行い，学級の友達の輪を広げたいという願いを共有化すること②集会の内容や方法を話し合うことで，友達とかかわり合い，お互いの考えのよさを取り入れながら集団決定できること③集会の過程で役割分担を行い，責任をもって活動することの大切さを実感できることである。ウォークラリーは，実践の準備段階において，たくさんの人とかかわることができ，実践活動ではチームとして協力して問題を解くことで，一人一人に責任感や協調性ををもたせることができる。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは，学級のスローガンである“目標に向かってLet's Go!(5-1)”を決め，学級目標具現化に向かって実践活動を行っている。しかし，休み時間の様子を見ると男子と女子が分かれて少人数で遊ぶ場合が多い。話し合いの活動については計画委員会を中心に話し合いの準備を行い，会を進行するなど話し合いの仕方を学習しつつある。

本題材の指導について

補完による学びの体験の統合



3年総合的な学習，4年理科，5年学校行事での西公園の活動経験がくわることで，集会をより自分たちでつくり上げていく実践活動が展開される。

目 標

- 1 学級の友達の輪を広げるウォークラリー集会にするためにはどうしたらよいかを話し合い，友達と協力して実践活動ができる。
- 2 今までの学級活動で身に付けたペアや小グループ，学級全体での話し合いの仕方を生かし，役割を分担しながら実践活動ができる。

計 画 (約5時間)

段 階	主 な 学 習 活 動	時 間
つ	1 ウォークラリー集会のめあてや見通しについて話し合う。	1
く	○ 学級集会の目的や集団決定していく内容を明らかにすること	
る	※ 4月に行われた歓迎遠足や理科での西公園の活動を想起させ，西公園でウォークラリーをする意欲をもたせる。	
決	2 ウォークラリー集会のルールを話し合い，実践活動の準備を行う。	3
め	(1) 2つの原案によるウォークラリー集会のルールについて話し合い，実践する。	②
る	○ チェックポイントや順位の決定の仕方について話し合い，実践すること	本
	※ 歓迎遠足や理科，総合的な学習における西公園での活動の経験がチェックポイントづくりに生かされるようにする。	時
	(2) 「学級全体のかかわりを広げるために学年ウォークラリーを運営するときの留意点は何か」を話し合う。	1
	○ 臨機応変に対応する重要性を知ること	/
	※ 活動計画書をもとに準備していく。	2
行	3 学年ウォークラリー集会を実践する。	1
う	○ 友達とのかかわりを広げることや西公園のよさを知ることというめあての観点に基づいて実践活動を行うこと	
	※ 集会後の感想を交流し，達成感や有用感を味わわせるとともに，今後の学校行事にも生かすことができるようにする。	

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- ウォークラリー集会のルールをどうするかを違う意見の友達とペア交流し、お互いの考えのよさを認め、取り入れることができる。
- 全体交流、違う考えの友達とお互いの考えを出し合い、よさを認め合うペア交流、全体交流という本時の話合いの進め方がわかる。

1 教師の話聞き、今日の話合いの大切なところを話し合う。

- 教師の話で、男女のかかわりが広がるようなウォークラリー集会のルールを決め、アドベンチャースクールに生かすという目的を確認すること

☆ ウォークラリー集会のルールをしっかりと話し合うぞ。

本時のめあて

- ・ 男女のかかわりが広がるか
- ・ 西公園のよさを知ることができるか

2 全体場で意見交流した後、違う考えの友達とペア交流し、新たな考えを出し、全体場で集団決定する。

- (1) チェックポイントについてと順位の決定の仕方について全体で意見交流する。

- 情報収集活動したことをもとに2つの原案に対して賛成意見や反対意見を述べること

〈原案例〉チェックポイントは4つで、男女で問題を解く

チェックポイントは8つで、時間の誤差は1分につき減点5点等

☆ チーム内で協力することが大切だね。

- (2) 自分とは違う考えの案に賛成の友達とペア交流を行い、お互いの考えのよさを情報収集する。

- 自分が賛成している理由を述べることで、相手を説得し、納得してもらえるように根拠に基づいて話すこと

☆ 時間を守るためには、自然に男女で協力するのではないかな。

- (3) ペア交流をもとに新たな考えを出し合い、めあての観点に基づき、全体で集団決定する。

- 新たな案と今までの案を比較し、どちらの案がよりめあてを具体化しているかを考えること

☆ 男女でのかかわりを大事にしながら西公園の歴史や自然のすばらしさをウォークラリーで感じたいな。

3 本時のまとめとして教師の話聞き、話合いを自己評価、相互評価する。

- 実際に自分たちでウォークラリー集会を実践し、よかった点や不十分な点を確認すること

☆ ウォークラリー集会のルールも決まったので、まずは、自分たちで実践して、ルールがどうなのかを確かめ、成果や課題を学年でのウォークラリー集会に生かしていきたいな。

○ 準備

教師側：学習の流れ図、付箋

児童側：話合いノート、情報収集ノート

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分の話合いにおける抱負をしっかりとつとめ、何のための集会かを真剣に考えている。

【支援】

- ※ 西公園全体の地形が分かるような拡大地図と今までの活動経験からの情報収集ノートを用意する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 2つの原案には、それぞれよい点と不十分な点があることに気付いている。

【支援】

- ※ 全体的な傾向として2つの原案に対して同じぐらいの賛成意見があるということを確認する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分の考えを友達にわかってもらうように説明・説得したり、友達の考えに納得・共感したりしながら自分達の考えをまとめるためにペア交流している。

【支援】

- ※ 歓迎遠足での遊びの体験や理科、総合的な学習での観察や取材の経験が、チェックポイントづくりに生かされるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 男女のかかわりという観点と西公園のよさを知るという2つの観点とも大切であることをとらえている。

【支援】

- ※ 原案の違いを付箋で比べ、どちらがよりめあてに合っているかを視覚的にわかりやすいようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 友達の考えに触れ、自分の考えに取り入れたよさを味わっている。

【支援】

- ※ 友達の頑張りを書いた感想を紹介し、実践への意欲付けを図る。

これからの米づくりを考えるために、米づくり経営シミュレーション活動をくわえる社会科学習 第5学年2組 社会科学習指導案

指導者 高 良 祐 治

小単元 どうする?これからの米づくり

指導観

本小単元について

本小単元は、米づくりが抱える様々な問題点をどのように克服していくべきか考えることで、米づくりに従事している人々が、消費者のニーズに応じて安全でおいしい米づくりのために工夫していることをとらえることをねらいとしている。改正食糧法や従事者の高齢化、米の輸入など、米づくりを取りまく状況は厳しい。その様な現状のなか、行政や稲作農家が、消費者のニーズに応えようと「安全」「コスト削減」「おいしさ」など様々な工夫を行っていることを調べ、これからの米づくりについて考えることは、米を主食とする上からも価値がある。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、本大単元の導入の食料生産地調べや、庄内平野の米づくりの学習で、食料生産に自分の食生活が支えられていることに気付いている。しかし、生産現場が消費者のニーズなどの状況に合わせて様々な取り組みをしていることには気付いていない。昨今「食農教育」の重要性が叫ばれるなか、主食である米が、これからどのように生産されようとしているのか調べることは意義深い。

本単元の指導について

関連・補完による学びの体験の統合

総合的な学習の時間
「再発見!日本の米文化」における米づくり体験
社会科「どうする?これからの米づくり」における農家経営シミュレーション活動
算数科「数と計算」の技能

これからの米づくりに必要な安全でおいしい米をつくるために、米づくりが求められることを実感している

米づくりの問題点を気がかりに、米づくりの現状を経営シミュレーション活動を通して追究する。その際、総合の米づくり体験を関連させて考えたり、算数の数と計算の技能で補完したりしながら農家の現状を把握することで、今後の米づくりの在り方を考えていく。

目 標

- 1 米づくりを取りまく現状調べや米づくり経営シミュレーション活動を通して、これからの米づくりの在り方について考えることができる。
- 2 安全でおいしい米をつくらうと取り組んでいる人々の様子を調べることで、米づくりに従事している人々の工夫や努力をとらえることができる。

計 画 (約9時間)

段階	主 な 学 習 活 動	時間
つ か む	1 米づくりを取りまく現状を調べる。 ○ 日本の米づくりの現状が厳しいものであることをとらえること ※ 自給率、外米輸入、従事者の高齢化や減少、改正食糧法について調べさせる。	2
さ ぐ る	2 これからの米づくりについて調べる。 (1) 米づくり経営シミュレーション活動を行い、米づくりの現状を調べる。 ○ 米づくりにはお金がかかり、気象条件にも左右されやすいことをとらえること ※ 米生産費、労働時間、気象条件、収益などからシミュレーションを行う。 (2) 米づくりにかかわる人たちとこれからの米づくりについて座談会を開く。 ○ 立場ごとの米づくりへの取り組みや思いを調べること ※ 生産者、県、販売者などからそれぞれの立場の考えを聞き取る場を設定する。 (3) これからの米づくりについて話し合う。 ○ 現状や将来性を踏まえたこれからの米づくりの在り方を考えること ※ 米づくり対策会議を実施する。	5 ② ② ① 本時
つ く る	3 これからの米づくりの在り方について自分たちの考えを発信する。 ○ 自分の考えをまとめ、評価すること ※ 学習で出会った方々へ発信し、評価をいただけるようにしておく。	2

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- これからの米づくりの在り方を「経済性」と「安全性」の観点から調べ、考えることができる。
- 米づくりに従事する人々が、消費者のニーズに応えるために様々な工夫や努力を重ねていることをとらえることができる。

1 2つの立場からこれからの米づくりの問題点を明らかにする。

- 安全性と安さの求めがあることを確認し、課題をとらえること

〈消費者のニーズ〉

毎日食べるものだから、少しでも安い方が助かる。

〈経済性〉

毎日食べるものだから、安全なお米が食べたい。

〈安全性〉

- ☆ シミュレーションで、米づくりは結構お金がかかることがわかったのに、安い米をつくるのは大変だな。
- ☆ 安全のためには、無農薬がいいけど、自分たちも米づくりをしてみてすぐに草がはえてくることがわかったから手間がかかるので、たくさんはつくれない。

本時のめあて

これからの米づくりは、どのようなことを大切にすべきか話し合う「米づくり対策会議」を開こう。

2 これからの米づくりの方向性をどうすべきか話し合う。

- (1) 安さを追求した場合と安全性を追求した場合のメリット・デメリットを整理する。

- どちらにもメリット・デメリットがある二律背反性に気付くこと

〈米づくりの方向性とメリット・デメリット〉

方向性	メリット	デメリット
経済性	・大量生産が可能 ・作業効率が上がる ・農業従事者の高齢化や減少に対応できる	・広い面積が必要 ・農業機械代の負担増 ・農薬を使わざるを得ない ・外米にはかなわない
安全性	・付加価値がつき、高く売ることができる ・安心して売ることができる	・広い面積は無理 ・労働費が増加する ・高齢化・農業人口減少 ・病気が心配

- (2) これからの米づくりの方向性について話し合う。

- 米づくりの状況から、今後の米づくりの在り方を考えること

- ☆ 作り手が減っていく現状を考えれば、少ない人数で広い面積を作っていく効率的な米づくりを目指すべきだ。
- ☆ 外米が入ってくることに対抗するには、安全性が重要だ。
- ☆ どちらも大切だけど、実現にはとても課題が多いな。

3 米づくり対策会議の成果を確かめる。

- 話し合ったことの活用法の見通しをもつこと

- ☆ わたしたちの考えを農家や県の農政課の人たちにも伝えよう。

○ 準備

教師側：農業経営シミュレーションの結果

総合で栽培中の稲 米の価格

児童側：生産者や県の農政課の方などへの取材ファイル

〈各活動の子どもの見取りと支援〉

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 消費者のニーズが二極化していることに気付いたことを発言したり、ノートに書いたりしている。
- ◎ シミュレーションの結果や米づくりの体験から消費者のニーズに応えることが簡単なことではないという問題点に気付いた発言をしたり、ノートに書いたりしている。

【支援】

- ※ スーパーの特価の米の値段と無農薬の米の価格を提示する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 「安い米づくり」と「安心な米づくり」の観点から、生産者の立場でメリットとデメリットを表に整理している。

【支援】

- ※ これまでの追究をいかしながら考えることができるように、学習の流れ図を提示する。
- ※ 2つの米づくりの事例を提示しながら具体的に考えることができるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ たくさんのメリット・デメリットのなかから「どの理由が最も重要だと考えるか」を明確にしながらか自分の考えを決めている。

【支援】

- ※ どのメリット・デメリットを理由に考えをつくらしているのかわかるように板書で整理する。
- ※ これまでの追究で出会ってきた人々の写真も提示し、米づくりに携わる人々の思いも大切にさせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分たちが考えてきたことをこれまでにこの学習で出会った方々へもぜひ伝えたいという思いを発言したりノートに書いたりしている。

【支援】

- ※ これまでのGTが「みんなの考えをぜひ聞いてみたい」と話していることを伝える。

第6学年1組 国語科学習指導案

指導者 平 川 洋 一

単 元 訴えよう!わたしの考え～優先席は必要か～

指 導 観

本単元について

本単元は、福岡市地下鉄の職員の方と出会い、現在地下鉄に設置されている優先席は本当に必要なかという問いを受け、優先席使用の実態や意識調査を行いながら、公的施設利用についての自分の考えをつくりだす。そして、坂本さんへの応えとして考えを訴えていく意見文に書きまとめ、全校児童、ひいては利用者全体に、公的施設利用のマナーの在り方を投げかけていくことができるようにする。

目 標

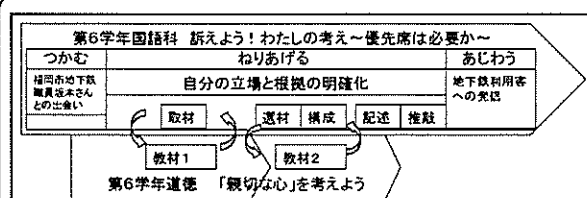
- 1 地下鉄職員の方からの投げかけをもとに、優先席使用について考えを深めていく求めをもって、意見文の表現を高めようとすることができる。
- 2 優先席使用についての自らの考えを効果的に伝えるための材料の選択と構成の在り方を追究しながら、意見文をまとめることができる。

計 画 (約10時間)

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、「書くこと」の学習において、必要な材料を集め、事実と意見を区別して書くという既習経験をもっている。読み手に伝えたい内容(要旨)を述べるために、多面的に事例を挙げたり、読み手への効果を考えながら構成を工夫したりすることについて学びを深めていく必要がある。

本単元の指導について



本単元の指導にあたっては、学びの統合として、国語科と道徳を関連させる。道徳の2教材で高めた主題「親切心」の観点を土台として、国語科で追究していく地下鉄利用の実態の面から自分の優先席の必要性についての考えをつくらせる。単元構成にあたっては、地下鉄職員の方との出会いをもとに課題意識をもたせ、必要・不必要という立場を決めさせて討論会を位置付ける。討論会では、譲り合う心は必要だという道徳の学びを共通の土台として、相互の立場の根拠の妥当性を話し合わせていく。

段階	主 な 学 習 活 動	時間
つかむ	1 福岡市地下鉄の職員の方と出会い、優先席使用について学習課題を話し合う。 ○ 優先席があることが本当にいいことなのか、課題をもつこと ※ 地下鉄の優先席の使用状況や必要ないという乗客の声を話していただく。	1
ねりあげる	2 発信していく意見文をねりあげる。 (1) 意識調査や実地調査を行い、個で選材構成して意見文①を書きまとめる。 ○ 「事実」と「意見」を書き分けること ※ 「必要・不必要」という立場とその根拠を明らかにさせる。 (2) 意見文①を職員の方へ発信し、見直しの方向を伺い意見文②の構想を立てる。 ○ 見直しの方向から情報収集すること ※ 必要・不必要の両面をとらえた、より多面的な見方で考えをつくるための見直しの方向を話していただく。 (3) 見直した構想をもとに、意見文②を記述・推敲し書きまとめる。 ○ 事実と意見を書き分けること ※ 推敲の観点をモデルからつかませる。	8 ② ③
あじわう	3 ねりあげた意見文を発信する。 ○ 目的を達成できた自分や書いて伝えることの有用性を実感すること ※ 職員の方から具体的な感想をいただき地下鉄利用の声として啓発するポスター等へ活用していただくよう依頼する。	1

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 地下鉄を利用する人たちに優先席を使用するときの考えを訴えようという求めをもって、表現を高めていこうとすることができる。
- 討論会で明らかになった事実と意見のつながりの妥当性をもとに、自己の意見文に反証材料を加えて構想を見直すことができる。

- 1 地下鉄職員の方から意見文①についての感想・評価を伺い、より多面的に見直していく方向について話し合う。

○ 反証の事実を効果的に位置付ける必要感をもつこと

- ☆ 自分の立場の根拠だけでなく、反対の立場の考えも取り上げて、自分の考えがよく伝わる意見文にしていきたいな。

本時のめあて

優先席の使用の在り方について、自分の考えとその根拠をはっきりするように、反対の立場の友達と話し合って意見文を見直そう。

- 2 必要・不必要の両面をとらえて、意見文②の構想をねりあげる。

- (1) 必要・不必要の立場に分かれて、それぞれが主張する事実と考えを聞き合う討論会を行う。

○ 互いの示す事実と考えにつながりがあるか吟味すること

- ☆ なるほど、反対の立場の人の論ももっともなところがあるな。

あとん白 い大おな優あ 必要
るにで分 る切年く先る ない
意やか← に寄て席同
味るら しりもなで
がこ進 てを'どは

かのがらく優 てが譲 デ意 必要
で悪にせ先 き無り ー識 要
はくマば席←てく合←タ 調 である
ななナ'を いなう 査 の
いるーさな るつ心

- (2) 討論会で明確になった互いの論をもとに、反証材料を取り入れて意見文②の論を見直す。

○ 反対の立場の論で「納得できるもの」や「否定できるもの」を選んで、構想に取り入れること

- ☆ 優先席がなくても進んで譲ることに価値があると思います。

結論	反証の材料と問題点	事実①と考える	事実②と考える
これを利用する機に、優先席をなくし、利用者全体に譲り合いの心とそれを実行していくべきである。	優先席があるからこそ譲り合いは、優先席があるからではなく、自分から進んで行うからこそ価値があるのだ。	優先席があるからこそ譲り合いが生まれるという考えもある。	各車両の八分の一は優先席が設けられている。本来、譲り合う心があれば、優先席など必要ではないはずである。
		地下鉄に優先席が存在している。	私は疑問に感じていた。

- 3 職員の方から、討論会を受けた構想の見直しについての評価を伺い、反証材料を取り入れたことを確かめる。

○ 意見文①から高まった「反証材料の取り上げ方」を確かめ、論構成の1つとして一般化すること

- ☆ 反証材料の問題点まで入れることができ、構想が高まったな。

○ 準備

教師側：付箋紙、学習プリント

児童側：意見文①の原稿

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 職員の方の感想・評価をもとに、多面的な見方への必要感をもち、発言したり書き込んだりしている。

【支援】

- ※ 子どもが前時までにまとめた意見文①の問題点をもとに、坂本さんから、より多面的な見方を取り入れていく方向性を語っていただく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 意見文①で取り上げた事実と意見を区別して、発言している。
- ◎ 反対の立場の材料の納得できる点や問題点を指摘している。

【支援】

- ※ 討論会において、「互いの論を聞き合う場」、「質疑応答の場」、「相互交流の場」を位置付け、互いの論を板書で整理する。
- ※ 職員の方にも質問させ、その応答から、事実と考えを見直させる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 討論会で明らかになった事実と意見のつながりが妥当であるものについて、付箋紙の色を区別して書き出している。
- ◎ はじめのまとまりに「事実1」と「考え」、次のまとまりに「事実2」と「考え」、3つめのまとまりに「反証材料とその問題点」、結びのまとまりに「結論」を位置付け、構成をねりあげている。

【支援】

- ※ 自分の立場を支える事実とつながりのある意見、反証材料、結論を、付箋紙を提示して色分けさせる。
- ※ 他の事象を扱った4段構成の論立てを示し、参考にさせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 見直した事実と意見の区別、効果的な材料の位置付けをペアの相手に説明している。

【支援】

- ※ 前時にまとめた意見文①において同様の問題点を抱えていたペアを編成し、説明し合う場を位置付ける。

遊びの中でやりとりをしながら相手がわかるように伝える特別支援教育国語科学習 第3・4学年さくら組 国語科学習指導案

指導者 諏訪 原 佳 子

単 元 あかずきんちゃんごっこ～おばあさんをたすけよう～

指 導 観

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、ことばの表出については発音が不明瞭で主に指さしや一語文で話す子ども、主語＋述語の二語文で話す前後のつながりがなかったり詳しく話したりできないのでうまく伝わらない子ども、多語文でのやりとりができるが一方向的であったり決まったパターンであったりする子どもがいる。どの子どもも人とのかわりを好み、自分から働きかけていく。しかし、うまく伝わらずにあきらめてしまうことも多い。

目 標

- 1 赤ずきんちゃんごっこの活動に見通しをもち、進んで取り組むことができる。
- 2 ことばを依頼するときの言い方に変えて伝えること理由などを付け加えて伝えることができる。
(AG)「～してください。」の言い方
(BG)「～を～してください。」の言い方
(CG)「～だから～してください。」の言い方

計 画 (約5時間)

本単元について

本単元はオオカミに食べられそうになったおばあさんを助けるために、オオカミに言われた食べ物や飲み物を探しに行く。その中で、おばあさんを助けたいという意欲をもって活動し、くまにお願いをしたり、質問をしたりする。そのときに相手がわかるように依頼の形にことばを変えたり、詳しく伝えたりできるようになることをねらっている。ごっこ遊びの中でことばを使うことで、ことばと状況をつなげてとらえることができ、生活の中で、状況に応じてことばを使うことにつながっていく。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、みとおす、つかむ、ひろげるの3つの段階で行う。みとおす段階では赤ずきんがおばあさんを助けようとする紙芝居を見せ自分たちはどうするかを話し合い、学習の見通しと意欲をもたせる。つかむ段階では、依頼する必要がある状況の中でことばを依頼の形に変えたり、詳しく伝えたりさせる。相手としてくま(教師)が登場し、個に応じて声かけなどを変える。ひろげる段階ではパーティーの材料を探しに行き、前時まで身に付けたことばから合うものを使うようにさせる。

階	主 な 学 習 活 動	時 間
み と お す	1 赤ずきんちゃんの紙芝居を見る。 ○ 話の内容をとらえて活動の見通しをもち、おばあさんを助けにいくという意欲をもつこと ※ 子どもたちの活動に沿って赤ずきんちゃんの話を作りかえた紙芝居の提示	1
	2 おばあさんを助けに行く。 (1) オオカミに言われた道具を探す。 ○ わかるような伝え方をとらえること ※ 困ったときに助けてくれるくまの登場 (2) オオカミに言われた飲み物を探す。 ○ (AG) 動詞と身振りでの伝え方 (BG) 量を表すことばの付け加え (CG) 必要な物の聞き方 ※ ヒントカードの提示と状況の設定	3 ①
	3 おばあさんを助け出したお祝いにパーティーをする。 ○ 複数のことばの中から状況に応じたことばをとらえること ※ 今まで使ったヒントカードの提示と、パーティーの準備の場面設定	1 ① 本 時

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- おばあさんを助けるためにオオカミに言われた食べ物を探しに行くという活動の見通しをもって意欲的に取り組むことができる。
- (AG) 「〇〇をとってください。」の言い方
(BG) 「△△の〇〇を□□してください。」の言い方
(CG) 「～だから〇〇はどこですか。」の尋ね方

1 前時に飲み物を探したことを思い出し、今日は何を探しに行くのか話し合う。

- おばあさんを助けるためにオオカミから言われた食べ物を探しに行くことをとらえること

☆ おばあさんを 助けるために 食べものを 探しに行くぞ。

☆ わからないときは くまさんに 聞けばいいんだな。

本時のめあて

オオカミに いわれた たべものを さがして おばあさんを たすけよう！

2 森へ食べ物を探しに行く。

- (1) ヒントカードを見ながらくまさんに話して食べ物を手に入れ、オオカミに渡す。

- 状況とそれに合うことば、簡単な言い方をとらえること

Aグループ	Bグループ	Cグループ
○「とる。」のことばの意味と使い方をとらえること	○名詞+「とってください。」の言い方をとらえること	○「名詞+どこですか。」の尋ね方をとらえること

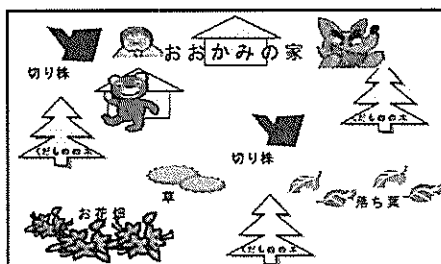
☆ このことばを 使えばいいんだな。

- (2) ヒントカードを見ないでくまさんに話して食べ物を手に入れ、オオカミに渡す。

- 状況とそれに合うことば、詳しい言い方をとらえること

○名詞+「とってください。」の言い方をとらえること	○形容詞+名詞+「とってください。」の言い方をとらえること	○理由+名詞+「どこですか。」の尋ね方をとらえること
---------------------------	-------------------------------	----------------------------

☆ くわしく 言った方が 伝わるぞ。



- ① オオカミからの手紙をもらう。
- ② くだものを探しに行く。
- ③ くまさんに聞いたり、お願いしたりする。
- ④ くだものを手に入れる。
- ⑤ 新しい手紙をもらう。

3 オオカミに食べ物を渡しておばあさんを助け出す。

- おばあさんを助けたという達成感を味わうこと

☆ やった！おばあさんを 助けだせたぞ。

準備

教師側：赤ずきんちゃんの紙芝居、
手順表、ヒントカード、
赤ずきんちゃんの帽子、ランゲージパル、音声カード

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ おばあさんを助けたいことや食べ物を探しに行くことを発言している。

【支援】

- ※ 赤ずきんちゃんがおばあさんを助けるために食べ物を探している場面の紙芝居の提示

【子どもの見取りの観点】

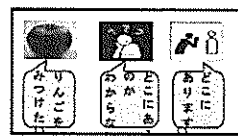
- ◎ くまに話しかけている。
- ◎ ヒントカードを見ながら、ことばを言っている。(AG) 「とってください。」と言っている。(BG) 「りんごをとってください。」と言っている。(CG) 「〇〇はどこにありますか。」と尋ねている。

【支援】

- ※ 取りたいけれども手が届かないなどの一人ではできない状況の設定
- ※ 個に応じたヒントカードの提示
(AG) 動作の絵とことばを示した音声カードの提示



- (BG) (CG) 思考の流れを順番に示し、ことばで説明したカードの提示
- ※ 手紙と一体になったヒントカードの提示



【子どもの見取りの観点】

- ◎ ヒントカードを見る時間が減ったり、ヒントカードを見ずに頼んだり聞いたりしている。
- ◎ くまからの問いかけに対して相手に伝わるように、して欲しいことだけでなく、詳しく伝えている。

【支援】

- ※ 一人ではできない状況の設定
- ※ くまがヒントカードを持ち必要に応じて提示する設定

【子どもの見取りの観点】

- ◎ おばあさんを無事に助け出せたことを喜び、表現している。

【支援】

- ※ おばあさんからのお礼のことば

学 習 指 導 協 議 会

教 育 シ ン ポ ジ ウ ム

テーマ

「子どもたちの学欲向上のために」

ーメディアや家庭から

学校に期待することは？ー

○シンポジスト

教育報道出版社 代表取締役社長 梶 浦 真 氏

RKB毎日放送 事業部 副部長 青 山 治 美 氏

○コーディネーター

本 校 研 究 部 高 良 祐 治

第2日目 午前の部 学習指導案

▼ 学 習 指 導（9：15～10：00）

学年 組	教科領域等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
1年2組	体 育 科	たのしもう！ジャングルランナー	久保 勝美	附属中体育館
2年2組	生 活 科	つくろう！ふ小ふくふくプラザ	塚本 正典	2年2組教室・ワークスペース
3年1組	学級活動	教生先生ウェルカム集会の内容を決めよう	黒澤 真二	4年1組教室
3年2組	国 語 科	伝えよう、からし明太子の味のひみつ	平川 洋一	3年2組教室
4年1・3組	音 楽 科	旋律にのせて、ボイスリズムアンサンブルをつくろう	有川 陽子	音 楽 室
5年1・3組	英語活動	Let's make a pizza!	永尾健・長門直子 セバウンかおり Matthew Love	子どもスタジオ
5年2組	算 数 科	だまし絵づくりをしよう～三角形・多角形をしきつめて～	島川 二郎	5年2組教室
6年1組	総 合	命の輝きを	木下 美紀	6年1組教室
6年2・3組	理 科	生活で活かされる水溶液の性質	今泉伸一郎	理 科 室

▼ 特別支援教育学習指導（9：15～10：00）

さくら・梅組グループ	算 数 科	でためをあわせよう！ツースイコロすごろく	諏訪原 佳子	特学棟音楽室
さくら・梅組グループ		なんじはぶこをするの？～ぼくのわたしのせいかびよう～	下川 勝彦	ふじ組教室
さくら・梅組グループ		いくらはらうの？～ただしくはらっておかいもの～	原田 敏男	さくら組教室

遊びやゲームの運動経験をつないで楽しみながら巧みな動きをつくる体育科学習

第1学年2組 体育科学習指導案

指導者 久保勝美

単元 たのしもう!ジャングルランナー

指導観

本単元について

本単元のねらいは、ジャングルに見立てた幅や高さ、方向が連続して変化するコースの上下左右に設置された障害物を避けながら進む動きを楽しむことである。具体的には、①ジャングルに見立てたコースを正確に、素早く走り進むジャングルランナーの活動を楽しむこと、②コースの変化や用具に応じた動きができること、③能力や楽しみ方に応じて用具の種類や設置の仕方から自分に合ったジャングルランナーのコースを選ぶことである。

目標

- 1 ジャングルに見立てた幅や高さ、方向が連続して変化するコースの上下左右に設置された障害物を避けたりバランスをとったりしながら進むなど正確に素早くいろいろに動くことができる。
- 2 自分の能力や楽しみ方に応じて用具の種類や大きさ、距離、幅、曲がり具合、得点からジャングルランナーの場を選ぶことができる。

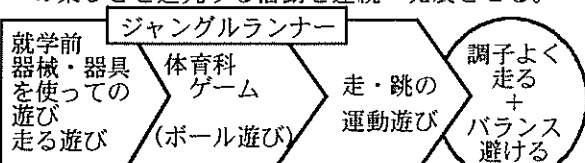
計画（約6時間）

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、これまでにまっすぐに全力で走ることや、体をぶつけないように気を付けたりバランスをとったりしながらジャングルジムを登り降りするなどの経験をしてきている。また、体育科ではころがってくるボールを避けたり捕ったりする遊びを経験している。これらのことから、楽しさを求めるなかで幅や方向が連続して変化するコースや障害物に合わせて動きをつくることができる。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、就学前のジャングルジムでの遊びや走る遊びや体育科学習でのゲームでの運動体験をつなぐ（系統）。そして、難しさが異なるジャングルランナーの場において調子よく走る動きと障害物に合わせて避けたりバランスをとったりする動きづくりを繰り返させてジャングルランナーの楽しさを追究する活動を連続・発展させる。



段階	主な学習活動	時間
であう	1 簡単なジャングルランナーを試し、楽しみ方について話し合う。 ○ ジャングルランナー楽しみ方の把握と楽しさの経験 ※ ジャングルランナーを試す活動と楽しさについて話し合う活動を設定する。	1
	2 避ける・バランスの動きづくりを繰り返してジャングルランナー楽しむ。 (1) 曲がりくねったコースでのジャングルランナーを楽しむ。 ○ 連続して走る方向を変える基本的な動きの習得 ※ 曲がり方の大きさからコースの難しさと得点を段階的に設定する。 (2) 枝が生い茂り、橋があるコースでのジャングルランナーを楽しむ。 ○ 能力や楽しみ方に応じたジャングルランナーの選択と習得した動きの活用 ※ 子どもの求めや能力に応じて用具の大きさや組合せによる多様な場を設定するとともに場を選択する活動を設定する。	4
つ		
く		
る		③ 本 時 2 / 3
あ じ わ う	3 まとめのジャングルランナー大会を開き、コースや動きについて話し合う。 ○ 選んだコースや動きのよさの明確化 ※ これまでに楽しんだジャングルランナーをいろいろに楽しむ活動を設定する。	1

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- ジャングルの枝や橋に見立てた障害物を避けたり、バランスをとったりしながら正確に素早くコースを進む動きができる。
- 自分の能力や楽しみ方に合ったコースを選び、枝や橋があるジャングルランナーを楽しむことができる。

1 ジャングルランナーの楽しさと茂った枝と橋があるジャングルランナーのコースでの楽しみ方について話し合う。

- コース上の上下左右の空間に障害物があったり、幅が狭く傾いている橋があるジャングルランナーを楽しむ見通しをもつこと

☆ 枝に当たらないようにジャングルジムやボール遊びのときのように枝をよく見て、体を動かさないといけいない。橋は両手を広げてやるとうまく渡れそうだな。

本時のめあて

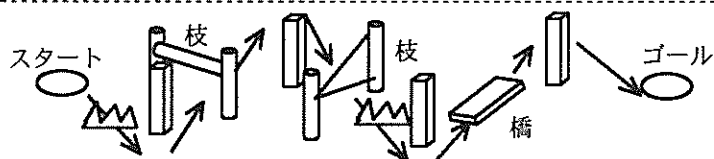
えだがしげり はしがある じゃんぐるらんなーの こーすを
えらび あたらないように いそいで たくさんくてんしよう。

2 枝が茂り橋があるジャングルランナーを楽しむ。

- (1) コースを選び、枝に当たったり橋から落ちないようにバランスをとったりしてジャングルランナーを楽しむ。

- 能力に合ったコースの選択とコースの上下左右の空間に連続して設置された障害物をさけたり、橋を渡ったりする動きの習得

☆ 枝をよく見ながら自分の体の場所を考えたり、両手を広げてバランスをとりながら進むとうまくいきそうだな。



※ 枝や草に当たらないように ※ 橋から落ちないように

- (2) 坂道をころがるボールをキャッチできるように素早く障害物を避け進むジャングルランナーを楽しむ。

- 空間にある障害物を避けたり傾きのある狭い場所を通ったりするなど習得した動きを素早く活用する動きの定着と発展

☆ 枝に当たったり橋から落ちたりしなくなったから「ごろごどきどきタイマー」を使って得点することを楽しみたいな。



3 選んだジャングルランナーの楽しさとジャングルランナーでゴールするためにつくった動きについて話し合う。

- ジャングルランナーでの動きのよさを明らかにすること

☆ 失敗した所に気をつけて何度も挑戦したら、素早く体を動かしてどんでんできるようになったので楽しかった。

準備

教師側：難しさが異なる複数のジャングルランナーのコース

ごろごどきどきタイマー

児童側：学習ノート

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 茂った枝と細くなった橋があるコースでの楽しみ方を把握している。

【支援】

- ※ これまでよりも茂った枝と細くなった橋を提示する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 茂った枝を避け細くなった橋を渡る動きの見通しをもっている。

【支援】

- ※ 茂った枝を避け、細くなった橋を渡る動きのモデルを提示する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ コースの上下左右の空間に茂った枝や細くなった橋を渡ってゴールする動きができている。

【支援】

- ※ 用具の配置や大きさなどから難しさが異なるコースを複数設定しておく。また、避ける、渡る動きを取り出していく場を設定する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 枝の茂り具合や橋の細さ、傾き具合から全力でやっとな成功する位の難しさのコースを選んでいる。

【支援】

- ※ コースの難しさに応じてゴールできたら点数を与えると同時に、適切な難しさについて助言する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 枝や橋などに合わせて避けたりバランスをとったりしながら正確に素早く動き、ゴール（ころがるボールをキャッチ）している。

【支援】

- ※ 体を傾けたり両手を広げたりしている動きのモデルを提示するとともに、体の使い方を比較させる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ ジャングルランナーの楽しさと動きのよさを明らかにしている。

【支援】

- ※ 楽しさについて話し合う活動を設定するとともに、絵図によって子どもの気付きを整理する。

相手を思いやる心をくわえ、人との適切な接し方に気付く生活科学学習

第2学年2組 生活科学学習指導案

指導者 塚 本 正 典

単 元 つくろう! ようちえんさんと なかよしのわ

指 導 観

本単元について

本単元は、自分の生活が、地域の人々や様々な場所をかかわっていることがわかり、人々との適切な接し方や安全な生活ができることをねらいとしている。具体的には、①自分たちの生活が地域の様々な場所や人とかかわっていること、②幼児への配慮や元気な挨拶等の適切に接することができること、③遊び方や使い方を考えて安全な生活を行うことができることである。そこで、あらつのまちの幼稚園を取り上げ、園児と交流を繰り返す活動を仕組むことで、人への接し方や安全な使い方を実感的に気付くことができると考える。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、あらつのまちたんけんを通して、様々な建物やそこで働いている人がいることや、自分とのかかわりから、様々な施設や人々とふれあうよさに気付いている。そこで、あらつのまちの幼稚園児との交流を通して、進んで挨拶をしたり、相手の立場になって考えながら楽しくふれあったりすることができるようにする。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、幼稚園児とふれあいを通して、あらつのまちに親しみを持ち、適切に接することができることをねらいとしている。そこ

補完による子どもの学びの統合

生活科
「つくろう! ようちえんさんと
なかよしの わ」

道徳2-(2)
思いやり
相手を思いやって

人との
ふれあい
相手のことを
思うやさしさ

で、道徳との統合(補完)を図り、幼稚園児との交流を繰り返す中で、相手のことを考えたかかわりの大切さを実感することができる。

目 標

- 1 あらつのまちの幼稚園の様子に関心をもち、意欲的に園児と交流をしながら、人とのかかわり方を考え、楽しくふれあうことができる。
- 2 幼稚園児とのふれあいを通して、地域の様々な人や場所とかかわっていることや相手のことを考えた接し方に気付くことができる。

計 画 (約12時間)

段階	主 な 学 習 活 動	時間
であう	1 まち探検で見つけた幼稚園に出会い、ふれあう計画について話し合う。 ○ 幼稚園施設や園児の様子に気付くこと ※ 幼稚園で園児が熱心楽しく活動をしている様子に出合ったり一緒に遊ぶ場を設定したりする。	3
ふかめ	2 ふれあいの計画をもとに、園児との交流を繰り返し進める。 (1) グループごとに幼稚園児と読み聞かせを通して、ふれあう。 ○ 幼稚園児とふれあうよさと楽しくする工夫について新たな課題をもつこと ※ 相手意識をもって、グループごとに交流の場を設定する。 (2) 見直しの視点をもとに計画を立て、幼稚園児と交流を進める。 ○ 楽しくわかりやすくできるように、幼稚園児の気持ちになって、楽しくふれあう工夫に気付くこと ※ 幼稚園児の立場から楽しくわかりやすくできるように、見直しの視点をもとに、ふれあいの場を設定する。	6 ③ 本 時 3 / 3 ③
いかす	3 幼稚園児を招待し、なかよし読み聞かせ会を開く。 ○ 幼稚園児とふれあい、仲良くなれたよさと親しみを持ち、自分の成長つこと ※ 幼稚園児を招待し、なかよし読み聞かせ会を開く準備をする。	3

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 幼稚園児と楽しくふれあうために、本の選択の視点や読み聞かせの工夫を意欲的に発表することができる。
- 幼稚園児とのふれあいについて見直す活動を通して、相手の立場になった考える読み聞かせの工夫に気付くことができる。

1 自分が決めたふれあい計画をもとに、幼稚園児が楽しく活動できる工夫について話し合う。

- 自分の相手の幼稚園児がもっと楽しくふれあえるように、もっと工夫して遊びたい意欲を高め、見直す見直しをもつこと

☆ ぼくの相手の〇〇くんは、楽しい昔話がすきだといっていたから、昔話を選んで、はきはきと大きな声で読んであげよう。

本時のめあて

ようちえんのともだちと、もっとたのしくなるように、よみきかせのくふうしよう。

2 グループごとに見直しの視点から、読み聞かせを進める。

(1) グループごとに、読み聞かせや遊びを進める。

- 相手によくわかるように、楽しくなるように進めるふれあいの工夫に気付くこと



活動の例

読み聞かせ 紙芝居
クイズ

☆ ぼくは、楽しい本の読み聞かせをしたいと思います。読み聞かせをする時は、本がよく見えるように、工夫しました。

☆ わたしは、本を読みながら、クイズを出すともっと楽しくなるので、簡単なクイズを考えました。

(2) 工夫したことについて発表し、自分のふれあい計画について紹介する。

- 自分の相手である幼稚園児を意識して、楽しくなるふれあえるルールや聞かせ方の工夫に気付くこと

☆ わたしは、楽しくできるように、聞き方やクイズのルールを簡単にして読み聞かせをしました。

☆ ぼくは、大きな声ではっきり読むことや、話がよくわかるようにゆっくり読むことを工夫しました。

3 自分が見直し工夫したふれあい計画をもとに、これからの活動について話し合う。

- 自分が見直ししたふれあい計画をもとに、はやく一緒に幼稚園児と楽しく遊びたいという意欲をもつこと

☆ ぼくは、早く幼稚園にいったら、〇〇ちゃんに、本を聞かせてあげたいです。きっと喜んでくれると思います。

準備

教師側：読み聞かせコーナー、幼稚園児の写真

児童側：本、道具

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分が考えた読み聞かせや遊びの仕方について意欲的に発表している。

【支援】

- ※ 幼稚園児との楽しかった交流について発表できるよう、活動の様子の写真を提示する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 読み聞かせや遊びの仕方について工夫することや見直ししていくことを意欲的に発表している。

【支援】

- ※ 幼稚園児との交流について課題を見だし発表することができるよう、幼稚園児の表情や活動の様子の写真を提示する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 相手意識して、大きな声ではっきり読み聞かせをしたり、楽しくなるようなルールの工夫をしながら意欲的に活動を進めている。

【支援】

- ※ グループごとに、読み聞かせや遊びの仕方を互に見合う場や見直しの視点を提示する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 相手のことを意識して、大きな声で分かりやすく伝えていこうという読み聞かせの工夫や、楽しく簡単にできるようにルールの工夫について意欲的に発表している。

【支援】

- ※ 工夫した点や楽しくなる視点が明確になるよう、具体的に実演の場を設定する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分が見直ししたことをもとに、これからの幼稚園児とのふれあいで意欲的に取り組もうとすることを発表している。

【支援】

- ※ 早く一緒にかかわりたいという意欲をもつことができるよう、幼稚園からの手紙を提示する。

体育科でのルールづくりが集会の活動の楽しさを広げる視点としてくわわる学級活動 第3学年1組 学級活動指導案

指導者 黒 澤 真 二

題 材 教生先生ウェルカム集会の内容を決めよう

指 導 観

本題材について

本題材は、教生先生との歓迎会を通して、学級の友達と協力して活動し、学級目標の具現化を図ることをねらいとしている。具体的には、①歓迎会を行い、教生先生と早く仲良くなりたいという願いを共有化すること②歓迎会の内容を話し合うことで、自分とは考えの違う友達の意見も参考にして集団決定できること③集会の過程で、自分たちで計画し、実践するよさを味わうことである。教育実習入所式を来週にひかえ、タイムリーな題材である。しかも、全員が教生先生との出会いを楽しみにしており、自分から興味をもって活動することが期待できる。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、学級の合い言葉“光かがやけ！3年1組”を決め、実践活動を行ってきている。この間、集会の活動でみんなで実践することの楽しさを学んできた。話し合いの活動については、教師の指導のもとに計画委員会が中心になり、話し合いの準備を行い、学び方を学習しつつある。集会の実践活動では、意欲的に活動する反面、自分以外の友達のことを考えて行動するまでには至っていない。

本題材の指導について

探究による学びの体験の統合

教生先生ウェルカム集会

体育科「キックハンドベースボール」でのルールづくり、人間関係づくり

学級活動の集会の活動における話し合いの活動、実践活動

学級活動
+
体育科
=
身に付く力
自律理解
能力

体育科のゲームで学んだルールづくりが教生先生ウェルカム集会での教生先生も楽しんでいるかという観点として強化され、めあてにそった話し合いの活動や実践活動が展開される。

目 標

- 1 教生先生が喜んでくれるウェルカム集会にするためにはどうしたらよいかを体育科の学習や試しの活動を根拠に話し合い、実践活動ができる。
- 2 今までの学級活動で身に付けた司会の仕方、話し合いの進め方を生かし、教師の助言を得ながら、実践活動ができる。

計 画（約4時間）

段階	主 な 学 習 活 動	時間
つ く る	1 教生先生ウェルカム集会（宝引っ越しゲーム）の見通しについて話し合う。 ○ 教生先生の歓迎会を自分たちの手で成 功させたいという意欲をもつこと ※ 今までの歓迎会を想起させ、成果と課 題を振り返ることができるようにする。	1
決 め る	2 試しの活動をもとに情報収集を行い、 よかった点や不十分な点を意見交流しな がら集団決定する。 (1) 原案について試しの活動を行う。 ○ 原案のよさや不十分な点をめあての観 点にそって情報収集活動すること ※ 情報収集ノートに原案の不十分な点と 改善点を書くことができるようにする。 (2) 付加・修正されたルールについて試し の活動を行い、グループで意見交流し、 集団決定する。 ○ 前回の反省を踏まえた内容であること ※ 試しの活動での情報収集活動を根拠に 集団決定ができるようにする。	2 ① ① 本 時
行 う	3 教生先生ウェルカム集会を実践する。 ○ 教生先生も楽しんでいるかというめあ ての観点にそって実践活動を行うこと ※ 教生先生ウェルカム集会後の感想を交 流し、達成感や有用感を味わわせるとと もに、お別れ会にも学級としての成長を 見せることができるようにする。	1

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 試しの活動による情報収集活動や体育科「キックハンドベースボール」でのルールづくりの体験をもとに全体交流やグループ交流を行い、教生先生ウェルカム集会の内容を集団決定することができる。
- 教師の助言を得ながら司会を進めるとともに、友達の考えも取り入れる本時の話合いの進め方を理解することができる。

1 前時の試しの活動における反省点から問題の共通化を図り、新たに考えたルールの見通しについて話し合う。

○ めあての観点にそって話し合うという意識をもつこと

☆ 来週が集会なので、今日の話合いでしっかり決めるぞ。

本時のめあて

教生先生に喜んでもらえるようなウェルカム集会の内容を決めよう。

- ・教生先生も楽しめるか
- ・3年1組のチームワークのよさを伝えられるか

2 教生先生ウェルカム集会で行う宝引っ越しゲームについて付加・修正されたルールで試しの活動を行い、グループや学級全体で意見交流し合い、集団決定する。

(1) 付加・修正されたルールで試しの活動を行う。

○ 宝（ボール）やパイプの種類を変えたり、宝を落としたらその場からやり直したりすること

〈基本のルール〉グループごとに与えられた宝（ピンポン玉）をパイプを使って、流しソーメン状態でスタートからゴールまで協力して運ぶ。1チーム6～7人＋教生先生1人の6チーム。

☆ 前回の試しの活動では、自分たちのチームが勝つことを優先して活動していたことが反省点だったな。

(2) 道具を変えたり、ルールが付加・修正されたりすることで、変更する前と比べてよくなったのかをグループで意見交流する。

○ 体育科でのルールづくりの体験や試しの活動をもとに自分の考えを友達に述べるようにすること

☆ ハンドベースで道具を選べたように、宝を変えた方が作戦として誰がどのボールを運ぶかを考え、楽しかったね。

(3) めあての観点に基づき、付け加えるルールについて学級全体で集団決定する。

○ どのルールを採用するかをめあてにそって決めること

☆ 教生先生の立場からもより楽しめる集会にしたいな。

3 教師の話聞き、ふり返りノートに書く。

○ 教生先生ウェルカム集会を成功させるために、教生先生の立場から考えたよさに気付くこと

☆ 来週の教生先生ウェルカム集会では、教生先生にも喜んでもらえるように、みんなで力を合わせて取り組んでいきたいな。

準備

教師側：学習の流れ図、集会で使う道具（ボール、パイプ、バケツ、フラフープ）教生先生のテープ

児童側：話合いノート、情報収集ノート

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

◎ 前時の試しの活動で、自分たちが夢中になって勝敗にこだわっていたという課題がわかっている。

【支援】

※ 前時の試しの活動での成果や課題がわかる学習の流れ図を用意する。

【子どもの見取りの観点】

◎ 前回の試しの活動での反省をもとに新たに付加・修正されたルールで試しの活動を行い、意欲的に情報収集活動を行っている。

【支援】

※ 前回のルールと比較しやすい情報収集ノートを用意する。

【子どもの見取りの観点】

◎ 体育科でのルールづくりの体験や試しの活動での事実から自分の考えをグループの友達に説明したり、友達の考えに納得したりしている。

【支援】

※ 体育科「キックハンドベースボールを楽しもう」の学習の流れ図を用意し、自分たちが工夫したルールづくりを想起できるようにする。

【子どもの見取りの観点】

◎ 「教生先生も楽しめるか」という観点から取り入れる集会のルールについて集団決定している。

【支援】

※ 補助の先生に教生先生の立場から試しの活動に参加してもらい、情報収集活動を行うことができるようにする。

【子どもの見取りの観点】

◎ 教生先生の立場から内容を決めることができたよさを味わっている。

【支援】

※ 教生先生からのメッセージを紹介し、実践への意欲付けを図る。

感動をもとに伝えたいことの中心をくわしく表現する国語科学習

第3学年2組 国語科学習指導案

指導者 平 川 洋 一

単 元 伝えよう!～からし明太子、味のひみつ～

指 導 観

本単元について

本単元は、からし明太子工場見学で得た感動をもとにして、福岡を訪れる観光客に伝えたい内容をはっきりさせて、くわしく表すことができるようにすることをねらいとしている。指導の重点としては、伝えたい事柄ごとにまとまりをつくること、その中の中心的な事柄を選んで、感動が伝わるように思いや様子をふくらませて書くことである。

目 標

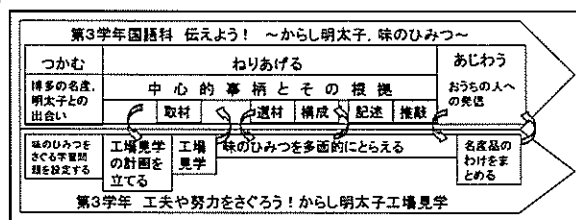
- 1 からし明太子の味のひみつに課題をもって、それを追究していこうとする求めをもって、パンフレットの表現を高めようとすることができる。
- 2 経験したことのなかから、福岡を訪れる観光客に伝えたい感動を明らかにし、様子や思いをくわしく表すパンフレットにまとめることができる。

計 画 (約10時間)

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、経験したことの順序にそって、五感を働かせて感じ取ったことを加えてくわしくしながら表現する学習を行ってきている。3年生の学習をふまえ、時間的な順序のまとまりを意識しながら、そのなかの中心を明らかにすることや様子や思いでふくらませることについて学びを深め、その有用感を味わわせていく必要がある。

本単元の指導について



本単元の指導にあたっては、学びの統合として国語科と社会科を関連させる。社会科の学習で追究していく「からし明太子工場でつくり出される味のひみつ」についての取材計画を国語科で明らかにしていく。工場見学で得たからし明太子の味のひみつについて社会科で多面的にとらえ、国語科では福岡を訪れる観光客に伝えたいことの中心を明らかにし、様子や思いがくわしく書かれたパンフレットまとめていくことができるようにしたい。

段階	主 な 学 習 活 動	時間
つかむ	1 からし明太子について既知の知識を出し合い、学習課題を話し合う。 ○ からし明太子がどうして福岡の名産品なのか追究していく課題をもつこと ※ おうちの人に博多の名産品やからし明太子について、聞き取りをさせておく。	1
ねりあげる	2 パンフレットをねりあげる。 (1) 見学の視点や質問計画をねり、個で情報収集し、パンフレット①をまとめる。 ○ 経験したことの順に書きまとめること ※ 初めー中ー結びの構成を提示する。 (2) パンフレット①を土産売り場の方へ発信し、見直しの方向を伺い、パンフレット②の構想を立てる。 ○ 伝えたいことの中心を明確にすること ※ いちばんのひみつを明確にするための見直しの方向を話していただく。 (3) 見直した構想をもとに、構成をねりあげ、パンフレット②をまとめる。 ○ 経験した事柄のなかから中心をはっきりさせ、様子や思いをくわしくすること ※ 記述・推敲モデルを提示する。	8 ② ③ 本 時 2 / 3 ③
あじわう	3 ねりあげたパンフレットを発信する。 ○ 目的を達成できた自分や書いて伝えることの有用性を実感すること ※ 土産売り場の方から具体的な感想をいただき、感動を伝えるための書き表し方という観点で一般化させる。	1

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- からし明太子が博多の名産品である理由を観光客に知らせたいという求めをもって、表現を高めていこうとすることができる。
- モデルをもとに明らかになった中心の決め方とふくらませ方とともに、自己のパンフレットの材料を見直すことができる。

準備

教師側：モデル文①，モデル文②
付箋紙，学習プリント
色シール

児童側：パンフレット①の原稿

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

- 1 工場見学の様子を順序よく書いた文と、中心を意識して思いや様子をふくらませて書いた文を比べ、見直していく観点を話し合う。

○ ひみつの中心を決め、くわしく書いていく必要感をもつこと

☆ いちばんのひみつをはっきりさせて、観光客のみなさんに味のひみつがくわしく伝わるパンフレットにしていきたいな。

本時のめあて

からし明太子のいちばんの味のひみつが、かん光客のみなさんにくわしく伝わるように、モデルをもとにパンフレットを見直そう。

- 2 見学順のまとまりから、いちばんのひみつのわけをくわしくする。

(1) モデル文②をもとに、中心を選ぶ観点と様子をくわしくする観点について、学級全体で話し合う。

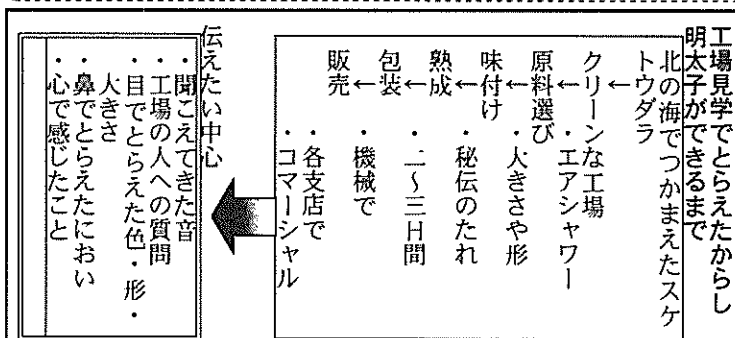
○ 中心を選ぶ観点として「いちばん心に残っていること」をとらえ、感動をふくらませる観点として「目で見たこと」「耳で聞いた音」「工場の人に聞いたこと」「鼻でかいだこと」や「手ざわり」「心で思ったこと」をとらえること

☆ なるほど、目や耳や手でいろんなことを感じたから心に残ったんだね。そのことを書いていくといいんだな。

(2) 全体で吟味した観点をもとに、個で中心を選び、様子や思いを具体化して付箋紙に書き出す。

○ 観点をもとに感動の中心をはっきりさせ、様子や思いを考えると

☆ あのおいしそうな色のひみつをくわしくしていこう。



- 3 中心をえらんで、様子や思いを付加することができたか、ペアで確かめる。

○ 中心の選び方や位置付け方、様子や思いをくわしくする方法について整理すること

☆ 伝えたいことがはっきりしてその様子がくわしくなったぞ。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 土産売り場のお店の方からの感想・評価をもとに、中心をはっきりさせる必要感をもって、発言したり書き込んだりしている。

【支援】

※ 経験したことの順序でまとめたモデル文①と中心部分をくわしく書いたモデル文②を比較提示し、どちらが適切か話し合わせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ モデル文①から中心を決める必要性を感じ、発言している。
- ◎ モデル文②から、中心となるまとまりの必要性やそのまとまりの具体化の必要性を発言している。

【支援】

※ モデル文①と②を板書に比較提示し、どちらがいか話し合わせ、ちがいを明確にとらえさせる。

※ モデル文②のよさについて話し合わせ、どんな観点をくわしくしていけばいいのか明確にさせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自らの感動や伝えたいいちばんの味のひみつを根拠に、中心となるまとまりを決め、色シールを貼り付けている。

- ◎ 中心となるまとまりに、様子や思いを書き加えてくわしくしている。

【支援】

※ 色シールや数色の付箋紙を提示し、様子や思いを色分けさせる。

※ くわしくする観点をもとに、見学時の写真やメモをふり返らせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 中心としたわけや書き加えた様子や思いを友達に説明している。

【支援】

※ 同じ問題点をもっていたペア同士で、見直した点について説明し合うようにし、改善された点に互いに色シールを貼り合うようにする。

ストーリーをもとにしたボイスリズムアンサンブルづくりに身体表現をくわえた音楽科学習 第4学年1・3組 音楽科学習指導案

指導者 有 川 陽 子

題 材 ボイスリズムアンサンブルをつくろう!

指 導 観

本題材について

本題材は、旋律（ハイホー）にリズム伴奏をつくり、ボイスリズムアンサンブルで表現することをねらいとしている。具体的には、①ハイホーを聴き、リズム伴奏をつくること②それぞれのリズム伴奏の音を決めること③拍の流れに合わせてボイスリズムアンサンブルを演奏することである。演奏の際に、身体表現をくわえることで、拍の流れや強弱を身体で感じることができるよさがある。

目 標

- 1 ハイホーの曲のリズム伴奏を、身体表現をくわえて、拍の流れや、強弱を身体で感じながらつくることができる。
- 2 グループの友達とハイホーの曲をボイスリズムアンサンブルで、拍の流れにのって表現することができる。

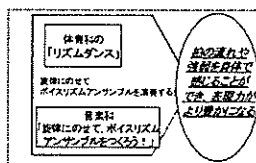
計 画（約6時間）

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、歌ったり、演奏したりすることに興味をもって取り組むことができる。また2部合唱にも取り組み、音の重なる美しさを追究していきたいという気持ちももっている。しかし、まだ、相手の声を聴いて和声をつくっていくことに自信がもてないでいる。そこで、本題材において、リズム伴奏を声で重ねる体験を通して、音の重なる楽しさを味わわせたい。また、リズム伴奏を身体表現をくわえながらつくすることで、拍の流れや強弱を意識させて表現を高めさせたい。

本単元の指導について

練習による学びの体験の統合



本題材の指導にあたっては、楽器を魔法使いに奪われてしまい、演奏会を前に困っている楽団員がいるというストーリーを提示し、学習を展開していく。「つかむ段階」で、ストーリーを伝えボイスリズムアンサンブルの鑑賞曲を聴かせる。「つくる段階」では、楽団員を助けたいという目的意識をもたせ、リズム伴奏を身体表現をくわえてつくり、さらに、音色を考えて友達とともに演奏をつくり上げさせる。

段階	主 な 学 習 活 動	時間
であう	1 ストーリーを聞いたり、「ハイホー」（ボイスリズムアンサンブル）を鑑賞したりする。 ○ ドラム演奏やボイスリズムアンサンブルを鑑賞したり、体験したりして楽しさを感じる ※ ストーリーと鑑賞によりボイスリズムアンサンブルづくりへの意欲を高める。	1
つ	2 ボイスリズムアンサンブルをつくる。 (1) リズム伴奏と音色をつくる。 ○ 身体表現をくわえて、リズム伴奏をつくること ※ 「ハイホー」の楽譜やリズムパターンを見ることができるコーナーを設定し、参考にできるようにする。	4 ②
く	(2) 旋律に合わせて、ボイスリズムアンサンブルを表現する。 ○ 拍の流れや強弱に気をつけて演奏すること ※ 身体表現をくわえて、身体で拍の流れや強弱を感じさせ、表現がより豊かになるようにさせる。	② 本 時 2 / 2
る	3 ボイスリズムアンサンブルの発表会を開く。 ○ 友達の演奏のよさを感じる ※ 聴く観点（拍の流れにのっているか、縦の線が合っているか、声のバランス（強弱）はよいか）を提示する。	1
ひろげる		

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 身体表現をグループで工夫して拍の流れや強弱を身体で感じることができる。
- つくったボイスリズムアンサンブルを「ハイホー」にのせてグループの友達と表現することができる。

- 1 つくったボイスリズムアンサンブルを振り返った後に、「ハイホー」を歌い、本時のめあてについて話し合う。

○ 「ハイホー」が2拍子であることを意識すること

- ☆ 「ハイホー」は2拍子だから、1, 2, 1, 2に合わせて演奏しないとイケないね。
- ☆ 私たちがつくったボイスリズムアンサンブルを早く合わせて演奏してみたいな。
- ☆ 伴奏がグループで違うからいろいろな感じの「ハイホー」が聴けそうだな。

本時のめあて

「ハイホー」につくったボイスリズムを合わせて演奏しよう！

- 2 つくったボイスリズムアンサンブルを「ハイホー」にのせる。

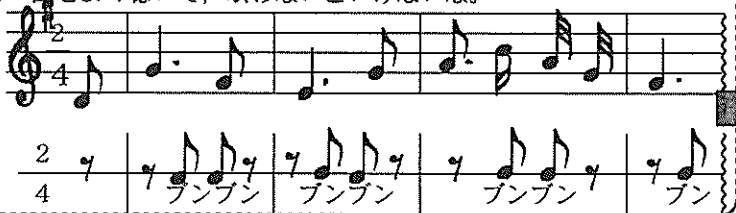
♪ 提示するストーリー

- ① ドレミファ楽団のみんなは、演奏会に向けて練習していました。
- ② ある日、魔法使いが演奏がうるさいとこの世の楽器を全部消してしまいます。楽団員は、悲しみに暮れました。
- ③ 4年1・3組のみんなに、すてきなアイデアを演奏と一緒にもらいました。
- ④ 声だけの演奏会を開きました。演奏会は大成功となりました。

- (1) 「ハイホー」に合わせて、自分の担当のボイスリズムアンサンブルを演奏する。

○ ハイホーの歌の旋律を聴きながら、自分の担当のリズム伴奏を表現すること

- ☆ 曲をよく聴いて、歌わないといけないな。



- (2) グループで、曲に合わせて演奏する。

○ 拍の流れや強弱に気を付けて演奏すること

- ☆ 体を動かしながら、演奏すると、みんなと合わせやすいな。

- 3 旋律にのせて、ボイスリズムアンサンブルを発表する。

○ 旋律と友達のリズムを意識して聴き、アドバイスやよさを出し合うこと

- ☆ 曲とずれないで演奏していたよ。
- ☆ もっと、体を大きく動かしたらいいよ。

○ 準備

教師側：拡大楽譜（ハイホー）、リズム譜、ストーリーと挿絵、学習プリント、学習の流れ図、
児童側：つくったアンサンブルの楽譜

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ つくったリズムアンサンブルを楽譜を見ながら演奏している。

【支援】

- ※ 教師が、手拍子で拍を打って、リズム伴奏を演奏させて、2拍子を意識付けさせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ ボイスリズムアンサンブルをしたいという意欲をもっている。

【支援】

- ※ ストーリーに、発表する場を設定し相手意識をもたせておく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ ボイスリズムアンサンブルで演奏会を成功させたいという意欲をもっている。

【支援】

- ※ ストーリーをもとに、楽団員の気持ちを発表させたり、声も楽器の一つであることを鑑賞曲を通して確認させる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 拍の流れを意識した動きをして、演奏している。

【支援】

- ※ 旋律担当役の歌に合わせて練習させる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 身体表現をくわえて、拍の流れや強弱の変化を意識して表現している。

【支援】

- ※ 強弱の変化を、拡大楽譜に書き込んでおき意識させる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 身体表現をくわえて、ボイスリズムアンサンブルを表現している。

【支援】

- ※ 聴く観点を提示して、(拍の流れにのっているか、縦の線が合っているか、声のバランス(強弱)はよいか)を意識させるために、みんなで動きを合わせて演奏をさせる。

シミュレーション的な活動をもとに英語に触れる楽しさを実感できる英語活動学習

第5学年1・3組 英語活動指導案

指導者 永尾 健・長門 直子・セバウンかおり・Matthew Love

題材 Let's make a pizza!!

指導観

本題材について

本題材は、日常何気ない食事場面において、必要とされる語彙を用いながら英語を活用することをねらいとする。そこで、「Let's make a pizza!」の学習では、ピザをつくったり、飲み物をそろえたりする過程において、トッピングするものを選択し購入するまでのお店の人とのやりとりを英語で行う。また、店員に勧められた飲み物をほしいうものを購入するという、これまで一方的な英語の活用場面を取り入れたものを、双方向のやりとりを行いながら英会話を楽しんでいく題材である。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、第4学年までに、数や物の尋ね方や尋ねられた場合の数や物の名前を応える答え方を通して英語に親しんできている。また、3組の子どもたちの滞在国では、母語、または、第2言語として英語を活用していた現状があり、友達との交流によって英語が広く用いられていることを実感するとともに、英語が国際社会の中で生きていく力として大切であると考えます。

本題材の指導について

本題材の指導にあたっては、ピザづくりを教材に楽しみながら英語に親しみ、積極的に触れていくことをねらいとする。そこで、導入段階では、昼食時を想定し、ピザをつくる場面に出合わせる。次に、展開段階では、ピザのトッピングを購入するときの会話の仕方を捉える。さらに、ピザと合わせて、飲み物を店員に勧められる場の設定をする。終末段階では、トッピングをする物を店員さんに数と物の名前を伝えて購入し、大きなピザを完成させる場を設定する。その際、ALT、HRT、友達と協力してピザを完成させなければならない仕組みをもたせる。

目標

- 1 英語を使いながら、HRT、ALTの先生、友達とコミュニケーションを積極的に図り、グループのピザを完成させることができる。
- 2 選択した食べ物の名称や飲み物の名称、個数など英単語を理解するとともに必要に応じてHRT、ALTに英語で尋ね会話を楽しむことができる。

計画（約4時間）

段階	主な学習活動	時間
見 い だ す	1 ピザの材料の購入の仕方についてのゲームをする。 ○ ピザの英単語を理解し、ピザの材料の注文をするための英会話をする事 ※ 歌やカードで親しめるようにする。	1
試 み る	2 「Can I have a slice of pizza, please?」「I'd like ~.」等の構文を使いゲームをして遊ぶ。 (1) ピザを必要に応じて、数やトッピングする物の名前を用いて、ゲームを行う。 ○ 注文をするときの構文と尋ねられたことに対して応える構文とを理解すること ※ ピザの個数とトッピングする物の名前などの語彙に着目させる。 (2) 店員さんに「Anything else?」と勧められたときの飲み物を注文するゲームをする。 ○ ALT、友達とコミュニケーションを図り、積極的に活動していること ※ カードを選択し、表現(注文)させる。	2
広 げ る	3 ピザと飲み物を注文する場合を組み合わせゲームをする。 ○ 身に付けた言語材料を活用したりALTや友達と協力して活動できること ※ カードを選択して、注文する物が予想できないようにさせ、HRT、ALT、友達との交流をもとに解決する必要性をもたせる。	1 本 時

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- これまでに身に付けた英単語や構文を用いて自ら積極的にALTやHLT、友達と英語でコミュニケーションをとりながらゲームをすることができる。
- ピザのトッピングを購入するゲームを通して、「Can I have a slice of pizza, please?」「I'd like ~.」等の構文やトッピングする物のカードから英語を使うことができる。

1 これまでに身に付けた、「Can I have a slice of pizza, please?」「I'd like ~.」などの構文を使って話したり、歌を歌ったりして本時活動のウォーミングアップをする。

- これまでの英語活動を振り返り、身に付けた言語材料を確認するとともに、本時活用する英単語などの見通しをもつこと

☆ さっき唄った歌の中の英語の言葉が出てきそうだね。

Today's Topic

Let's make a pizza!!

2 ピザづくりに必要な物を買集めて、グループごとにピザを作りあげるゲームをする。

- (1) 各グループに分かれて、ピザづくりに必要な材料を買うためにどんな物が必要なのかを話し合う。

- 同じグループの友達とコミュニケーションを図りながら、ピザのトッピングをする物の英単語や構文を確認できること

☆ 「salami」「cheese」「onion」などを揃える必要があるよ。

- (2) トッピングする物の絵の付いたカードを選択し、トッピングする物の名前を構文内に活用しながら、グループのピザを完成させるゲームを行う。

- 構文内にトッピングする物の名前や数を用いながら、英会話を行うとともに、選択したカードの絵を知らないときには、ALTやグループのリーダー（3組の友達）に尋ねてコミュニケーションを図ることができること

☆ このカードの絵は、「salami」でいいよね。

A1: Can I have a slice of pizza, please?
B1: Yes sure! What topping would you like?
A2: I'd like salami.
B2: Anything else?
A3: Can I have two orange juice, please.
B3: Yes, Here you are.
A4: Thank you!

(topping)
salami cheese
onion asparagus
sausage shrimp
mushroom
green pepper
(drink)
orange fizzy lemonade

3 それぞれのグループで完成させたピザと集めた飲み物の紹介をして、他にどんなトッピングがあるのかを出し合う。

- 各グループから出されたトッピングされる物の英単語を理解し、これまでの学習より増えたこと

☆ ピザに載せる物はいろいろあるので、たくさんの英単語を覚えることができたよ。「Can I have ~」を使えば他にもいろいろな買い物ができそうだよ。

準備

教師側：トッピングのための絵の付いたカード、ピザ型の模型

児童側：名札

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 歌に出てくる英単語が、これまでの英会話に出てきたピザに関わるものであることに気づいている。

【支援】

- ※ HRTが英語活動を楽しめる雰囲気をつくり、ALTのリードにより本時用いる英単語等の発音練習やあいさつを行わせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ これまでに出てきていないトッピングするための英単語をリーダー（3組の友達）を中心に教えてもらい、ゲームに生かしていこうと練習をしている。

【支援】

- ※ 各グループのリーダーを英語が堪能な3組の友達にする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ A2, A3のとき、選択したカードに書いてある絵の言葉を構文に当てはめながら英会話ができることに気づいている。

【支援】

- ※ 選択したカードの英単語がわからないときには、各グループに戻り、リーダー（3組の友達）やALTから教えてもらい、伝えることができるような場の設定をする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ A3のとき、これまでに学習した「数」「トッピングする物」と2つの学んだことが一度にはいることに気づいている。

【支援】

- ※ 追加の注文を取るために「Anything else?」と店員役の教師が飲み物を勧める場を設定する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 「Can I have a ~」を使えば、いろいろな注文ができそうであることに気づいている。

【支援】

- ※ ピザのトッピングのために集めたカードを見直し、自分たちが本時で学んだ英単語を振り返る。

第5学年2組 算数科学習指導案

指導者 島 川 二 郎

単 元 三角形と角～私たちのだまし絵集づくり～

指導 観

本単元について

本単元は，敷きつめ活動を行うことで三角形の頂点や辺に目を向け，3つの角の大きさの和が 180° になることや1点に頂点を集めると一直線になることそして三角形がすべての多角形の基本の形になることを理解させることをねらいとする。また多角形の構成要素に目を向けるような活動を行うことで，図形の見方を豊かにすることをねらいとする。

本単元における統合は，繰り返し敷きつめ活動を行うことで，頂点，辺，角に目を向けると共に，直線は 180° 1回転 360° などを活用する。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは，三角形，二等辺三角形，正三角形の定義，性質，作図を学習している。また角については2本の半直線が作る平面図形として定義し，辺の長さに関係なく，開き具合によって形が決まるという角の意味を学習している。また第5学年の「四角形」の中で，平行と垂直，平行四辺形，台形，ひし形，対角線について学習し，図形の性質についてまとめてきている。さらに，見出した性質を基にして四角形の作図をすることもできるようになっている。

このような時期に本単元を行い，図形の構成要素をより意識し，辺，角，頂点，角の大きさの視点をもちて図形を追究することができるようにしたい。

本単元指導について

本単元の指導

にあたっては，敷きつめた図形の不思議さ，美しさを感じることができるようになりたい。そのために一つ頂点に角を集めると，一回転や一直線になることを意識付け理解させていく。

系統による学びの体験の統合

だまし絵づくりしよう



算数科角と角度の学びの体験 算数科角と角度の学びの体験

目 標

- 1 だまし絵づくりに興味をもち，敷き詰めなどの活動に意欲をもつことができる。
- 2 多角形はいつでも三角形をもとに分割できることに着目し，辺の長さ，角の大きさ，頂点に気を付けて，敷きつめできる図形のきまりを見つけることができる。

計 画 (8時間)

日 数	主 な 学 習 活 動	時 間
見出す	1 だまし絵集をつくる計画を立てる。 ○ だまし絵づくりの計画を立てること ※ 三角形などでだまし絵を計画させる。	1
試みる	2 三角形，四角形でだまし絵をつくる。 (1) 三角形でだまし絵をつくる。 ○ 形も大きさも同じ一般三角形，直角三角形でだまし絵をつくり，内角の和が 180° ，一直線に並ぶことに気付くこと ※ 三角形の角，辺に目を向けさせる。 (2) 四角形のだまし絵をつくる。 ○ 一般四角形，平行四辺形などでだまし絵をつくり，内角の和が 360° ，分割すると辺が一直線になることに気付くこと ※ 分割した三角形が同じ形であることに気づかせる。	4 ②
ひろげる	3 多角形でだまし絵をつくる。 (1) 敷きつめれる多角形と敷きつめられないものを仲間分けする。 ○ 多角形の敷きつめをすること ※ 実際に敷きつめて仲間分けさせる。 (2) 敷きつめれる多角形の秘密をさぐる。 ○ 敷きつめられる多角形を考えること ※ 360° になる組み合わせがないと敷きつめられないことに気付かせる。 (3) 多角形のだまし絵をつくる ○ 敷きつめできる多角形をつくること ※ 360° になる組み合わせを意識して五角形のだまし絵をつくらせる。	3 ① 本時 ①

本時の学習活動の展開

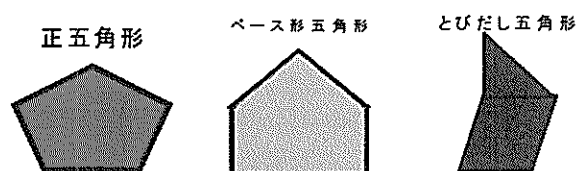
本時授業の目標

- 正五角形とベース型五角形、とびだし五角形とを比べ敷きつめることができた理由を、一回転になる角目に向け意欲的に考えることができる。
- 敷きつめられた五角形には、一回転になる角の組み合わせが共通していること気づくことができる。

1 前時までで、敷きつめてきた図形について想起して、本時で学習する内容について話し合う。

- 内角の和が一回転 360° を越える五角形でも敷きつめることができる図形があることを振り返り、敷きつめることができた理由について話し合うこと

- ☆ 三角形、四角形は、どんな形でも敷きつめできたな。
- ☆ 五角形でも敷きつめられるものがあったな。



本時のめあて

五角形が敷きつめることができた理由を一回転、直線に気をつけて考えよう。

2 分度器で内角を測ったり、対角線で三角形や四角形に分割したりしながら、敷きつめられている五角形に隠れている回転角の組み合わせに気づく。

(1) 敷きつめられた図形の秘密を自分で調べる。

- 敷きつめられている五角形、内角を一点に集めて直線や一回転になる角があることに気づくこと

- ☆ 分度器を使って、一つ一つの角の角度を測ってみよう。
- ☆ 360° 、 180° になる角の組み合わせがきつとあるはずだ。

(2) つくりあげただまし絵を発表し、敷きつめることができた理由を全体で話し合う。

- 3つの図形が敷きつめられることを全体で確認し、敷きつめることができるのは、一回転になる組み合わせがあり、五角形は、組み合わせる角が同じ記号になることに気づくこと

- ☆ 五角形では、3つの角を集めて 360° になるところと4つの角を集めて 360° になっている。

- ☆ 敷きつめられる五角形は、同じ記号の角を集めて 360° になる。一回転する角の組み合わせは、いつも同じなんだ。

3 敷きつめることができた五角形で、自分のだまし絵をつくる。

- ベース型五角形、とびだし五角形でだまし絵をつくること

- ☆ 色を交互にして、ベース型五角形のだまし絵をつくるぞ
- ☆ ベース形を 90° 回転させて横向きのだまし絵をつくるぞ。
- ☆ とびだし五角形でもだまし絵をつくろう。

準備

教師側：板書用ベース型五角形、正五角形、とびだし五角形、

児童側：正五角形、ベース型五角形、とびだし五角形

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 敷きつめられる理由を知りたいという意欲をもっている。

【支援】

- ※ 三角形、四角形のだまし絵を振り返らせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分なりの追究方法をもつことができている。

【支援】

- ※ 追究するために必要な考え方、説明方法を整理して板書する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分が決めた多角形のしきつめを意欲的に行うことができる。

【支援】

- ※ 辺や角を意識付けるヒントカードを用意しておく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 敷きつめることができた五角形とできなかった五角形を比べ敷きつめることができたのは角の組み合わせで合ったことに気づくことができる。

【支援】

- ※ 代表児が発表している間に、一回転や直線になっているところに印を付け強調していく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ どの角の組み合わせも一回転や直線になれば敷きつめることができることに気づくことができる。

【支援】

- ※ 分度器で角度を測り、一回転になる大きさになる組み合わせがあることに気付かせる。

命を輝かせて生きる人の生き方から生きる意味を考え、自分の命を見つめる総合的な学習の時間 第6学年1組 総合的な学習指導案

指導者 木下美紀

単元 命の輝きを!

指導観

本単元について

本単元は、生命の危機にさらされながらも精一杯命を輝かせようとした人との出会いから生きる意味をとらえ、命を輝かせるキャンペーン活動をしていくとする学習である。出会う人は、病氣と闘いながら懸命に生きた猿渡瞳さんとそれを支えた母親、そして現在、病氣と闘っている子ども病院の院内学級の子どもたちである。猿渡瞳さんは、院内学級に通いながら治療を続け、自分の学校に復帰して学習したいという強い思いをもった人である。その生き方から、自分の生命を見つめて、生きる意味をとらえさせたい。そして院内学級の子どもとともに命を輝かせるキャンペーン活動につなぎたい。

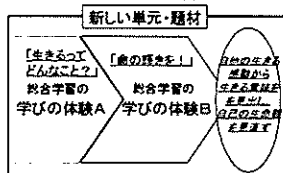
本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、5年生のときに、さまざまな困難（中途失明、臓器移植など）を乗り越えた人との出会いから、その人を支えるボランティアの人に出会い、自分たちのできるボランティアを広げていった。今回は、それらを発展させて、病氣による死に直面しながら懸命に生きた人との出会いから自分たちと協働でできる活動について考えさせたい。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、猿渡瞳さんの病氣と闘い続けた生き方の感動をもとに自分の生き方を振り返り、生きる意味をとらえさせる。そして現在闘

系統による学びの体験の統合



病中の院内学級の子どもたちと出会い、ともに命を輝かせる活動を探り、協働でできる活動を考えて実践する学びを展開する（系統）。

目標

- 1 病氣と闘った人物を追及する課題を設定し、それを支え続けた母親と直接対話したり、メールを交換したりして、多様な調べ方をもとに、現在闘病中の院内学級の子どもと協働でできる活動について考え、実践していくことができる。
- 2 病氣で不安な気持ちや、生きる希望などを追及し、人のすばらしさから、その人とともに生きる生命の共生社会をめざして自分の命についての見方・考え方を見直すことができる。

計画（約10時間）

段階	主 な 学 習 活 動	時間
課題把握	1 猿渡瞳さんの特集した新聞記事をもとに、課題を設定する。 ○ 生命に関する気付きをもつこと ※ 新聞の記事、本を資料として提示し、猿渡さんの生き方に関心をもちさせる。	2
	2 猿渡瞳さんの生き方を追及し、病氣と闘う院内学級の子どもたちと命のキャンペーン活動を実現することを追及する。 (1) 猿渡ゆかりさんの母親に取材し、生きることについての思いや、願いを聞く。 ○ 限りある生命、その生命を輝かせる大切さをとらえること ※ 限りある生命について考えさせるために、猿渡ゆかりさんの母親、救命の現場で働く医師と対話する場を設定する。	6
	(2) 子ども病院の院内学級の子どもたちと出会い、ともにできる活動を考える。 ○ 自他の生命を輝かせることを考えること ※ 活動が実現可能かどうかの検討をゲストの方とともに考える場を設定する。	③
追究	3 いのちのキャンペーン活動を企画・運営し、実践する。 ○ 生命を輝かせることを実践すること ※ 院内学級の子どもとできる活動を実現させる。	③ 本時 2 / 3 2

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 子ども病院の院内学級の子どもたちといっしょにできるという視点から取材し、自分たちの企画について吟味することができる。
- 病気と闘いながら命を輝かせようとした猿渡瞳さんの生き方をともに、自己の生命観を見直すことができる。

1 子ども病院の子どもに取材した内容を紹介し、どんな会を開きたいか話し合う。

○ 相手の視点に立って企画を見直す見通しをもつこと

- ☆ 病院内ですごしているので、何か楽しくなる会にしたいね。
- ☆ わたしたちといっしょに楽しみたいと言っていたので、いっしょにできるプロジェクトを立ち上げたい。

本時のめあて

子ども病院の院内学級の人たちとともにできる活動の案を検討し、よりよいものにしよう。

2 子ども病院の院内学級の子どもたちの役に立ち、ともに楽しめる企画を考え、その内容を吟味する。

(1) 院内学級の子どもたちの役に立ち、ともに楽しめる企画を話し合う。

○ 相手の視点に立った内容を考えること

- ☆ 院内学級の子は、とても心細いだろう。励ましてあげたい。そして、ともに楽しめる企画を考えたい。
- ☆ 一緒にビッグアートに挑戦したい。お手伝いだけでなく、自分たちも参加して、協働で作上げた満足感をともに味わいたい。

作品コーナー

挑戦ビッグアート（貼り絵）
CD作成

体験コーナー

朗読、読み聞かせ、手遊び歌、
見てさわって楽しい絵本

(2) ゲストの先生に自分たちの考えた案について意味づけてもらい、再度、検討する視点を確かめる。

○ 相手の視点に立った内容と、自分の思いの調整をはかること

- ☆ 先生の言った通りに、体力の落ちている子どもたちの負担にならない時間と、内容を選ぶ工夫が大切だな。
- ☆ 自分たちも楽しめる方法で、ともに会を盛り上げたいな。

見直しの視点

- ・体力
- ・交流時間
- ・相手の好み
- ・活動場所
- ・ジョイントの形態 など

3 自分たちの企画を見直し、1つの案にまとめる準備をする。

○ 相手のニーズ、自分の思いの視点に立った案を作成すること

- ☆ 相手のことを思って、自分も満足するような楽しい会を開きたいな。具体的な計画を立てよう。

準備

教師側：ゲストの猿渡さん、医師、院内学級の教師、単元流れ図、VTR
児童側：生き方見つけめファイル、企画書

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 取材してきたことを付箋紙で分類し、相手の願いを考慮して、順位づけを行っている。
- ◎ 「役に立つか」「楽しんでもらえるか」「自分たちも楽しめるか」の3点で案を考えている。

【支援】

- ※ 院内学級の取材活動の内容を紹介させ、一番の願いをもとに企画立案する意欲を高める。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 「役に立つか」「楽しんでもらえるか」「自分たちの楽しめるか」の3点で案について話し合っている。
- ◎ 院内学級の子どもの病状、好み、院内学級の広さ（環境面）などを、前時学習をもとに、話し合っている。

【支援】

- ※ 体力の落ちている子たちに負担にならない時間か、好みに合っているかなど、前時学習したことを流れ図などで確かめながら話し合いを進めるよう助言する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ ゲストの先生からアドバイスいただいたことをもとに、自分の企画を見直している。
- ◎ ゲストの先生からもらった見直しの視点で自分に足りないものを書き足して付箋紙を操作している。

【支援】

- ※ ゲストの先生に、体力、時間、好み、場所など子どもの企画に付加する部分を中心に、それぞれの専門分野でアドバイスをいただく。
ゲストの方には、次のような視点で話していただく。猿渡さん（病気をもつ母親の視点）、医師（子どもの病状の視点）、院内学級担任教師（子どもの好みなどの視点）

【子どもの見取りの観点】

- ◎ ゲストの話をもとに、具体的な案をまとめ、次の時間に決定する内容をまとめている。

【支援】

- ※ 生き方見つけめファイルに具体案を作成するよう助言する。

水溶液の性質を使って酸性雨の原因を確かめたり，活用したりする理科学習

第6学年2・3組 理科学習指導案

指導者 今 泉 伸 一 郎

単 元 生活で活かされる水溶液

指 導 観

本単元について

本単元的主要な学習内容は①水溶液が酸性，中性，アルカリ性に分類できること，②加熱したり金属と触れさせたりなどして調べ，水溶液には気体が溶けているものがあること，③金属を変化させるものがあることをとらえることである。そのために酸性雨について調べることに課題をもち，水溶液の性質を調べる方法を活用していくように単元を構成する。

目 標

- 1 水溶液について物との反応，蒸発による抽出，試薬による分類から多面的に調べることを活用して，酸性雨について探究する。
- 2 水溶液はその性質によって酸性，中性，アルカリ性に分類でき，気体が溶けている物があることや金属を変化させる物があることをとらえる。

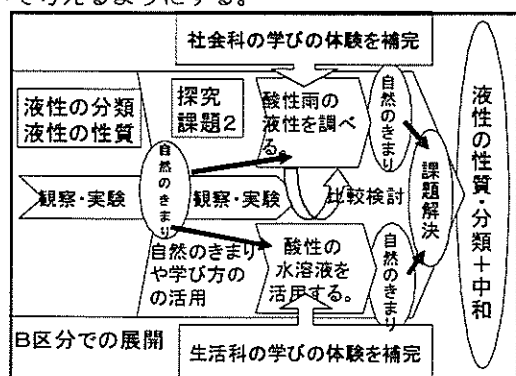
計 画（約8時間）

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは，洗剤等の身近な生活用品や見聞きした情報から酸性，中性，アルカリ性という言葉に気付いている。しかし，これらの水溶液の性質について考えるまでには至っていない。水溶液については，溶けた物の質量保存，溶ける量の限界，溶けた物の温度変化や蒸発による溶質の抽出，水溶液の言葉の意味について学習してきている。

本単元の指導について

まず，社会問題になっている酸性雨について調べることに課題意識をもたせる。次に水溶液の性質をリトマス試験紙やPHの指数で調べられることを実験によって確かめ，雨に溶け込むガスによって水溶液の性質に変化が起きること，酸性の水溶液の活用について考えるようにする。



段階	主 な 学 習 活 動	時間
つ	1 酸性雨について話し合う。 ○ 酸性雨について調べることにについて課題意識をもつこと ※ 社会科での学びを想起させ酸性雨の成分，検出，解決方法について話し合う。	1
か	2 水溶液の性質と液性の分類方法について調べる。 (1) リトマス試験紙，B T B液で水溶液を分類する。 ○ リトマス試験紙やB T B液で水溶液を液性で分類できること ※ 無色透明の水溶液を液性で分類する方法を提示し，実験によって確かめる。	4
む	(2) 水溶液が金属を溶かす性質を調べる。 ○ 強い酸性やアルカリ性の水溶液が金属を溶かす性質に気付くこと ※ 希塩酸や水酸化ナトリウムに入れた金属の反応を観察させる。	②
く	3 酸性雨の成分や酸性雨を解決する方法について調べる。 (1) 酸性雨に溶け込む成分を調べる。 ○ 気体が水に溶けて水溶液になること ※ 二酸化炭素や排気ガスを水に溶かし試薬を使って調べる。 (2) 酸性水溶液の活用について調べる。 ○ 酸性の水溶液に殺菌作用があること ※ 酸性の水溶液が自然にやさしい農薬として有効であることを確かめる。	3
る		② 本時 1/2
る		①

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 酸性雨の原因となる排気ガスを水に溶かし、酸性雨の正体を液性を試薬で分類する方法を活用して意欲的に調べることができる。
- 気体の中には水に溶けるものがあり、溶けた気体によって水溶液の性質が決まることがわかる。

1 二酸化炭素を水に溶かし、水溶液の性質を試薬で調べたことから酸性雨の正体を探究する方法について話し合う。

- 二酸化炭素を溶かした水溶液の酸性の指数が低いことから酸性雨の正体を調べることに課題意識をもつこと

☆ 二酸化炭素を水に溶かしたら、水溶液の酸性の指数が低かった。

問題になっている酸性雨の指数はもっと高いはずだ。

☆ 社会科では、酸性雨の原因は二酸化炭素だけではなく、車の排気ガスが原因だということだった。排気ガスが水に溶けるんだったら酸性雨のような高い酸性になるんじゃないかな。

本時のめあて

酸性雨の原因を確かめるために排気ガスを水に溶かしたり、二酸化炭素の濃度を濃くしたりして、試薬によって指数を調べよう。

2 酸性雨の原因を確かめる実験を行う。

- (1) 酸性雨の原因が排気ガスによるものかを調べる方法について、排気ガスを水に溶かす方法と試薬による分類を観点に話し合う。

- 酸性雨の原因を確かめる方法について見通しをもつこと

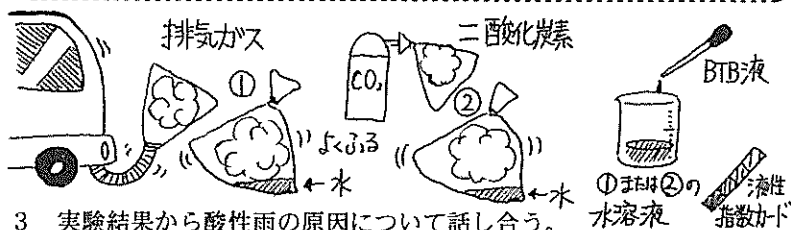
☆ 排気ガスをビニール袋に集めて水に溶かし、試薬で酸性の指数を調べればいいね。

☆ 二酸化炭素の濃度を高くしてみたらどうだろう。

(2) 排気ガスをビニール袋に採取して水に溶かしたり、水に溶かす二酸化炭素の濃度を高めたものを水に溶かししたりして、試薬で水溶液の酸性の指数を確かめる。

- 排気ガスなどの気体は水に溶け、溶けたものによって水溶液の液性が決まること

☆ やっぱり思ったとおりに排気ガスは水に溶けるし、排気ガスが水に溶けた水溶液は、二酸化炭素が多く溶けた水溶液よりも酸性の指数が高くなっている。



3 実験結果から酸性雨の原因について話し合う。

- 酸性雨は排気ガスが雨に溶けて水溶液の液性が酸性に強く傾いたものであること

☆ 酸性雨や強い酸性の温泉によって生き物が住めない環境になっていることを逆に活用することはできないだろうか。

準備

教師側：ビニール袋、試薬、乗用車

ビーカー、液性指数カード

児童側：ノート、社会科資料

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 問題となる酸性雨の酸性の指数の高さと二酸化炭素を水に溶かした水溶液では差があることに気付いて発言をしている。

【支援】

- ※ 二酸化炭素を水に溶かしたことを想起し、酸性の指数が問題の酸性雨の値より低いことに疑問をもたせる。
- ※ 社会科の公害の学びを想起させ、酸性雨の原因が車から排出される排気ガスであることから解決の糸口を見出すようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 水溶液には気体が水に溶けている物があることから排気ガスを水に溶かす方法と高い濃度の二酸化炭素を溶かした水溶液の液性を試薬で確かめる方法について発言している。

【支援】

- ※ 液性を調べるためには、酸性の指数を調べることができる試薬を使うことを話し合いで明らかにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 採取した排気ガスや高い濃度の二酸化炭素と水をビニール袋で混ぜ合わせて、仮想酸性雨を作り、試薬によって酸性の指数を確かめている。

【支援】

- ※ 排気ガスの採取については、安全性を考え教師が行う。また、仮想酸性雨をビーカーに移す時は、排気ガスが漏れないように指導する。
- ※ 酸性雨の液性の指数を調べる指数カードを使い、社会科の資料の値と比較できるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 酸性雨の原因が排気ガスであるという資料で調べたことを実験結果で裏付ける発言をしている。

【支援】

- ※ 実験結果をもとに酸性雨の原因について話し合うようにする。
- ※ 酸性雨や酸性の温泉の川への流出によって水生生物が住めない環境になっていることから発想して、酸性の水溶液を活用する方法について考える次時の学習につなぐ。

楽しみながら数を合わせ、数の合成を身に付けていく算数科学習

第3・4・5・6学年さくら・梅組（Aグループ）算数科学習指導案

指導者 諏訪原佳子

題材 でためを あわせよう! ツーサイコロ すごろく

指導観

本グループの子どもたちについて

Aグループは、さくら組2名、梅組2名、計4名で構成されている。子どもたちは人とのかわりを好み、友だちと一緒に活動したり競争したりすることで意欲的に、最後まで集中して楽しく活動できるという特性がある。また、友達の様子を見ながら活動の仕方を身に付けていくこともできる。このような子どもたちの実態から、友達と一緒に楽しみながら数にかかわることができる本題材を設定した。そして、すごろくの中で繰り返し合成を行うことで合成を確実に身に付けることができる。

本題材について

本題材は、2個のサイコロを使ったすごろくを行う中で数の合成や繰り上げのある足し算を身に付けることをねらいとしている。具体的には①合成の意味をとらえること、②具体物での合成をとらえること、③数字での合成をとらえることなどである。本題材では、個に応じた数のサイコロを提示したりすごろくのマスグループごとに分けたりして、全体で行いながらも個に応じた課題を設定して学習を進めていく。集団で行うことや友だちを助けるという話しを設定し意欲的に取り組めるようにする。

本題材の指導について

本題材の指導にあたっては、サイコロの目を合わせた数だけマスを進むことで数の合成を身に付けさせたい。そこで、子どもたちの特性を生かし集団でゲームを進め、その中で個に応じた課題に取り組むようにする。つかむ段階では、出た目の数だけ進むというきまりをとらえさせる。ひろげる段階では、2個のサイコロですごろくを行い、繰り返し合成を行う。いかす段階では、数字での合成を行い確実に身に付けるようにしていきたい。

目標

- 1 出た目を合わせるというきまりがわかり、数の合成に意欲的に取り組むことができる。
- 2 数の合成や足し算ができる。
 - ・ aグループ：5までの数の合成ができる。
 - ・ bグループ：10までの数の合成ができる。
 - ・ cグループ：繰り上がりのある足し算をする。

計画（約5時間）

段階	主な学習活動	時間
つかむ	1 1個のサイコロですごろくをする。 ○ 出た目の数だけ、一マスずつ進むこと ※ サイコロの目を●で表し、それをマスにおくことで確認できるすごろくの提示	1
ひろげる	2 積み木や数タイルを使って数をあわせてすごろくをする。 (1) ふじ組の友達を助ける。 ○ (a G)合わせることで、(b G)5までの合成、(c G)繰り上げのない足し算をとらえること ※ 数を合わせられる具体物の提示 (2) さくら組の友達を助ける。 ○ (a G)3までの合成をとらえること (b G)8までの合成をとらえること (c G)19までの足し算をとらえること ※ 積み木や数タイル、数え箱の提示 (3) 梅組の友達を助ける。 ○ (a G)5までの合成、(b G)10までの合成、(c G)20までの足し算をとらえること ※ 積み木や数タイル、数え箱の提示	3 ① 本時
いかす	3 先生を助ける。 ○ (a G)5まで(b G)10まで(c G)19までの数字での合成をとらえること ※ 数字で表した2つのサイコロと、前時まで行った合成を書き表した一覧表の提示	1

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 二つのサイコロの出た目を合わせて進み、さくら組の友達を助けるとい活動の見通しをもって意欲的に取り組むことができる。
- 数の合成や足し算ができる。
(a G) 合わせて5までの数の合成 (b G) 合わせて8までの数の合成 (c G) 19までの足し算をとらえること

1 前時にすごろくをしてふじ組を助けたことを思い出し、今日は誰をどうやって助けるのかについて話し合う。

- 2個のサイコロの出た目を合わせて進み、さくら組を助けることをとらえること

☆ さくらぐみを たすけるぞ。

☆ 2つのかずを あわせて、そのかず すすめば いいんだな。

本時のめあて

ふたつの サイコロの でた目を あわせて さくらぐみを たすけよう！

2 2個のサイコロを使ってすごろくをする。

- (1) 具体物を使って、2つの物を一つに合わせる。

- 数を合わせることをとらえること

aグループ	bグループ	cグループ
○ 合わせて5までの具体物での合成をとらえること	○ 合わせて8までの具体物での合成をとらえること	○ 19までの半具体物での足し算をとらえること

☆ 2つを いっしょにすれば いいんだな。

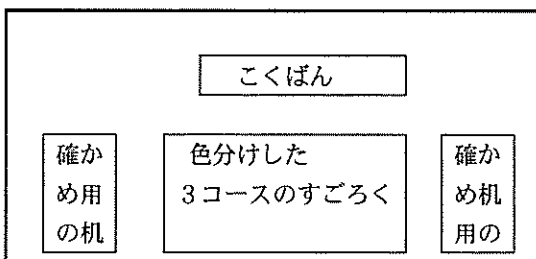
☆ べつべつじゃなくて いっしょにかぞえるんだ。

(2) 数字で数をあわせる。

- 数字で数を合わせることをとらえること

○ 合わせて5までの数字での合成をとらえること	○ 合わせて8までの数字での合成をとらえること	○ 19までの繰り上がりのある足し算をとらえること
-------------------------	-------------------------	---------------------------

☆ つみきや すうタイルを つかって かんがえろと わかりやすいぞ。



① 活動の確認

② サイコロを転がし、数を合わせる。

③ 数を確かめた後マスを進む。

3 ゴールし、さくら組を助ける。

- さくら組を助けたという達成感を味わうこと

☆ やった！さくらぐみさんを たすけたぞ。

準備

教師側：すごろく サイコロ 紙芝居
数え箱 タイル 手順表
学習プリント

児童側：前時までの学習プリント

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 出た目を合わせると言ったり、さくら組を助けると言ったりしている。

【支援】

- ※ 2個のさいころの出た目を合わせて進み、さくら組を助けている紙芝居の提示

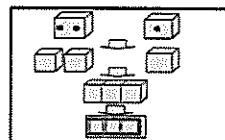
【子どもの見取りの観点】

- ◎ 2つの物を一緒に合わせて、数えている。
- ◎ 数え箱で数を確認め、その数だけマスを進んでいる。

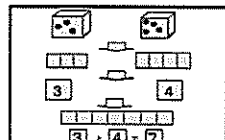
【支援】

- ※ 個に応じたすごろくのマス、サイコロの提示

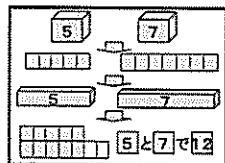
(AG) 2つの物を合わせられる場と、5までの数え箱の提示



(BG) 8までの具体物と、数タイル、数字カード、数え箱の提示



(CG) 19までの数タイル、数字カード、数え箱の提示



【子どもの見取りの観点】

- ◎ 「2と3で5」のように、声に出して確かめている。
- ◎ 正しい数だけ積み木や数タイルを選び出して合成をしている。

【支援】

- ※ 5, 10で色分けをした数タイルの提示
- ※ 合わせた数が確かめられる学習プリントの提示

【子どもの見取りの観点】

- ◎ さくら組を無事に助け出せたことを喜び表現している。

【支援】

- ※ 一人一人への賞賛

自分の生活表づくりを通して時刻と生活とを結び付ける算数科学習

第3・4・5・6学年さくら・梅組（Bグループ）算数科学習指導案

指導者 下川 勝彦

題 材 なんじに なにをするの？ ～ぼくのわたしのせいかつひょう～

指 導 観

Bグループの子どもたちについて

Bグループの子どもたちは、さくら組3名、梅組1名、計4名で構成されている。子どもたちは、日頃の学習のなかで身の回りにある情報を視覚的にとらえ、手順を見ながら学習を進めていくことができるという特性がある。このような子どもたちの実態から、自分の生活スケジュールを時間に沿ってつくっていく本題材を設定した。そして、自分の行動の計画を視覚的にとらえられる時計を用いてつくらせる。このことは、自分から積極的に行動する態度を育てる上でも意義深い。

本題材について

本題材は、自分たちの生活表をつくるために、何時に何をするのかを時刻と自分がすることを結び付けながら時計をよむことができることをねらいとしている。具体的には、①時間に沿った生活表の行動の順番をとらえること、②〇時〇分がよめたり午前・午後がわかること、③1時間＝60分などの単位関係がわかり簡単な時間の計算ができること、などである。本題材では、自分の行動と視覚的にとらえられる時計を結び付けながら学習を進めていく。

本題材の指導について

本題材の指導にあたっては、時計を操作したり絵や写真と結び付けながら時刻をとらえさせたい。そのために、子どもの特性に応じて活動の場や教具を工夫していく。まず、つかむ段階では、模型時計を使いながら時計のよみ方をとらえさせる。ひろげる段階では、時刻と絵や写真をつないで自分の生活表をつくっていく。そこでは、活動の場や手順等を工夫し、主に視覚的な支援を多く用いる。最後に、いかす段階では、自分のつくった生活表を家庭や学校で使うことで学習の深化を図っていく。

目 標

- 1 時計で表される時刻と自分の行動を結び付ける自分の生活表を意欲的につくることができる。
- 2 自分の生活表づくりを通して、aグループは、30分単位の時刻をよむことができる、bグループは、5分単位の時刻をよむことができる、cグループは、1分単位の時刻をよむことができる。

計 画（約5時間）

段階	主 な 学 習 活 動	時間
つかむ	1 日常生活での過ごし方からどの時刻でどんな行動をしているか調べる。 ○ 時刻と時間に興味をもちながら何時にどんなことをしているのか振り返ること ※ 時計を提示し、時計にふれさせる。	1
	2 自分の生活計画表をつくる。 (1) 朝起きるとき、寝るとき、食事のときなど生活のなかでの計画表をつくる。 ○ 〇時という時刻をよむこと、また〇時間といった時間をとらえること ※ 時間や時刻と自分の行動を視覚化する。	3
ひろげる	(2) 下校から学校から家に帰って過ごす生活計画表をつくる。 ○ 〇時〇分という時刻で30分、10分、5分といった時刻をよむこと ※ 本時の進め方等を視覚化していく。	①
	(3) 校外学習（山笠見学等）の行動を考えた生活計画表をつくる。 ○ 〇時〇分という時刻で〇十分間といった時間をとらえること ※ 時刻を読む場や時刻と行動を結び付ける場を分けた学習の場を設定する。	① 本時
いかす	3 生活計画表の発表会を開き、時刻と時間と自分の行動を結び付けて発表する。 ○ これまで身に付けた時刻のよみ方や時間のとらえをいかすこと ※ 表した時計と行動の絵などを使って発表させる。	1

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 山笠見学の予定をたてて、山笠見学での生活表を意欲的につくりながら時刻をよむことができる。
 - aグループ：時間の前後の関係をとらえながら、〇時30分の時刻をよむことができる。
 - bグループ：行動の順番をとらえながら〇時〇分（5分単位）の時刻をよむことができる。
 - cグループ：〇分を加えながら〇時〇分の時刻をよむことができる。

準備

教師側：行動する絵や写真
 操作時計 活動経路
 操作する場
 手順表
 児童側：これまでの生活表

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

- 1 山笠見学で、何時に何をするのか考えながら山笠見学の生活表をつくることを話し合う。

- これまでつくった生活表から、山笠見学での生活表をつくることをとらえること

☆ せいかつひょうを つくって たのしい やまかさけんがくにしよう。

本時のめあて

やまかさけんがくの よていを きめて けんがくのときのせいかつひょうを つくろう。

- 2 自分の山笠見学での生活表をつくる。

- (1) 山笠見学の場面を思い出しながら、どのような行動をするのかをとらえながら、生活表をつくる。

- 時計を見ながら行動する絵や写真を選んで時間の経過によるスケジュールの流れをとらえること

☆ やまかさけんがくでの よていを かんがえて じぶんのせいかつひょうを つくるぞ。

- (2) 自分の行動を順序よく並べながら、時間を計算したり時計を用いて行動と時刻を結び付けた生活表をつくる。



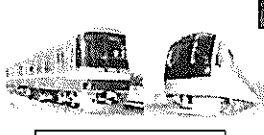
9 じ



しゅっぱつ



9 じ 30 ふん



ちかてつにのる

☆ とけいを よんで せいかつひょうを つくるぞ。

aグループ	bグループ	cグループ
○ 時間の前後の関係を とらえて、〇時30 分の時刻をよむこと	○ 行動の順番をとら えながら〇時〇分の 時刻をよむこと	○ 〇分を加えながら 〇時〇分の時刻をよ むこと

- 3 生活表を振り返り、行動と時刻を結び付けて発表する。

- 山笠見学での時間に沿って、順序よく発表しながら行動と時刻を結び付けること

☆ やまかさけんがくでは せいかつひょうを つかうよ。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ これまでつくった生活表をもとに山笠見学を思い出してどのような行動をするのかを振り返りながら本時の課題をとらえている。

【支援】

- ※ これまで自分たちがつくった生活表を提示することと山笠見学の写真を提示する。
- ※ 山笠見学の想起により生活表づくりの意欲をもたせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 時計を見ながら行動する絵を選び、行動の流れをつかみながら生活表をつくろうとしている。

【支援】

- ※ これまでの生活表を提示しながら生活表の作り方を振り返り生活表をつくる手順をつかませる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 山笠見学のスケジュールをたて、自分の行動と時間の前後関係や分、時の関係から行動と時刻を結び付けている。

【支援】

- ※ 行動の絵や写真と時計を用いて繰り返し身に付けさせる。
- aグループ
 - ・ 行動する前後を手がかりに時計を用いて時間の前後をとらえさせる。
- bグループ
 - ・ その時刻の行動を絵や写真でとらえさせる。
- cグループ
 - ・ 〇分を加えての時刻を計算を用いて行わせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ できあがった生活表を時間に沿って順序よく発表している。

【支援】

- ※ 生活表と写真を順番に提示して時刻に沿って発表させる。

買い物場面で金種の対応表を使いながら、違う金種への両替ができる算数科学習 第3・4・5・6学年さくら・梅組（Cグループ）算数科学習指導案

指導者 原 田 敏 男

題 材 いくらはらうの？ ～ただしくはらっておかいもの～

指 導 観

Cグループの子どもたちについて

Cグループの子どもたちは、さくら組1名、梅組4名である。数唱は100以上を唱えられるとともに、2位数のたし算やひき算ができる子もいる。しかし、大きな数を数えたり、言ったりすることができても、日頃の生活でそれらを活用することはほとんどない。そこで、生活に密接な関係のある買い物場面に取り組みさせることで、学んだことを生活に活かすことができるとともに、金銭についての知識や技能を身に付けさせることができる。

本題材について

本題材は、買い物場面で違う金種への両替ができるようにすることがねらいである。具体的には、①金種の違う硬貨を同じ額に揃えること、②金種の違う硬貨を組み合わせる必要な金額をつくることである。お金を両替できることは、日常生活において、所持金を正確に管理できたり、買い物場面でおつりのないように買い物できたりする価値がある。

本題材の指導について

本題材の指導にあたって、両替でき日常生活に活かせるために、買い物で買う品物の変化と支払いの繰り返しで学習を進める。つかむ段階では、手紙をもとに買い物をして、お金を払う学習であることをとらえさせる。ひろげる段階では、1つの品物を買って支払いをさせるとともに、品物を複数個買わせることで、硬貨の枚数が増えて両替するの必要を感じさせる。その際、金種対応表を活用させて考え両替できるようにする。この場面で買う品物を変えながら繰り返し取り組ませることで金種対応表を活用しなくても等価交換ができるようにする。いかす段階では実際にお店に買い物に行くことで学んだことを実生活に活かせるようにする。

目 標

- 1 買い物をする場面において、楽しみながら必要な金額を支払う活動に取り組むことができる。
- 2 等価変換をし必要な金額を選び出せる。
 - a G：金種1つに対する両替ができる。
 - b G：どの金種でも自由に両替ができる。
 - c G：複数金種を組み合わせる両替ができる。

計 画（約7時間）

随	主 な 学 習 活 動	時
つ	1 家の人の手紙を読み、買い物をする。 ○ 指示された品物を買うことを知り、同一金種を数枚使った買い物ができること ※ 模擬の店と模擬硬貨の提示	1
か	2 模擬の店で買い物をする。 (1) 10円玉と50円玉を組み合わせる買い物の支払いをする。 ○ 10円玉5枚と50円玉1枚が同じ金額であることをとらえること	3
む	※ 2種の金種の対応表の提示	①
ひ	(2) 複数の金種を両替して買い物の支払いをする。 ○ 10円玉10枚で100円、50円玉2枚で100円、50円玉1枚と10円玉5枚で100円であるというように金種の等価価値をとらえること	①
ろ	※ 金種の対応表の提示	本
げ	(3) 買い物をして、おつりが少なくなるように支払いをする。 ○ 金種の組み合わせ方を複数とらえ、おつりが少なくなる支払いをすること	時
る	※ 金額構成表の活用による比較	①
い	3 実際にお店に出かけ、複数のおやつを買う。 ○ 財布に入っている金種を組み合わせる等価交換できるとともに、学んだことを実際の生活で活かせること	3
か	※ お店への買い物活動の設定	
す		

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- おつかいの手紙を読み、指示された品物を選び、必要な金額の支払いを楽しんで行うことができる。
- 複数の金種を使って、等価変換をしながら買い物の支払いに必要な金額を選び出すことができる。
 - a G：硬貨1枚に対する等価変換ができ、それを組み合わせて必要な金額を選ぶことができる。
 - b G：数えたしをしながら、どの金額でも等価変換ができる。
 - c G：複数の金種を組み合わせて等価変換ができる。

- 1 おうちの人からの手紙を読み、財布を受け取り、おつかいに行くことを話し合う。

- 手紙に書かれた品物を、財布に入っている硬貨を使って支払い、買ってくるということをつかむこと

☆ スーパーマーケットには、いろいろな品物を売っているな。

本時のめあて

スーパーマーケットで、かいものをしよう。

- 2 手紙に書かれた品物を選んで、レジで支払いをする。

- (1) 手紙に書かれた品物を1個選んで、支払いをする。

a G	b G	c G
○ 10円玉3枚で30円 というように1つの金種を使って、支払い金額になるように枚数を数えて、代金を支払うこと	○ 10円7枚で70円というように1つの金種を使って、50円を超える金額について、10円玉を数えて代金を支払うこと	○ 70円に対して50円玉1枚と10円玉2枚というように数種の金種を組み合わせて代金を見つけ出して支払うこと

- (2) 手紙に書かれた品物を複数個買って、支払いをする。

○ 10円玉5枚で50円、50円玉2枚で100円、10円玉10枚で100円になることをとらえ、1つの金種で区切りのよい金額の支払いをすること	○ 10円玉5枚で50円、50円玉2枚で100円になることをとらえ、それをもとにして、どんな金額でも等価変換しながら代金で支払いをすること	○ 支払う金額に対して50円玉と10円玉、5円玉、1円玉など様々な等価交換と金種を組み合わせて代金を見つけ出して支払いをすること
--	---	--

☆ いろいろなお金を混ぜて使っても、買い物をすることができるんだな。お金がたりないときは、10円や1円を使うと、たりることもあるんだな。

- 3 教師から頼まれたおつかいに行き、品物を選んで支払いをする。

- 新たに提示された品物でも等価変換して買い物をできた達成感を味わうこと

☆ どんな金額でも、自分の力で支払いをすることができたぞ。

準備

教師側：計画表、手紙、買い物の場、模擬の硬貨、等価交換表、など

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ おうちの方からの手紙を読んで、頼まれたおつかいをしに行くことと、買い物するには、お金を支払う必要があることを発言している。

【支援】

- ※ おうちの方からの手紙を配布するとともに、買い物の様子を演示することで支払いの必要感を感じさせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 手紙とスーパーマーケットの模擬の場を見て買い物に行きたいことを発言している。

【支援】

- ※ おうちの方からの依頼の手紙とスーパーマーケットの模擬の場の提示

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 依頼された品物をスーパーマーケットの場で選んで支払いをするときに、グループの実態に応じた金種を使って正しい金額を見つけ出し、支払っている。

a Gは、等価変換を行い、硬貨1枚を使って支払いをしている。b Gは、等価変換を1回した上で、数えたしを行って支払いをしている。c Gは、1円玉や5円玉までを使って等価変換して支払いをしている。

【支援】

- ※ 必要に応じて数え箱を使って、代金を支払わせるようにする。

a Gは、10円玉を並べて5枚を50円玉に変換する数え箱を使わせること、b Gには、50円玉2枚を100円玉に変換する数え箱を使わせること、c Gには、10円が構成できるように1円玉が10枚、5円玉が2枚入る数え箱を使わせること

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 新たに頼まれた品物でも、等価変換しながら少ない枚数での支払いをしている。

【支援】

- ※ 等価変換が必要になる品物の金額を設定しておくとともに、1人ずつ買い物させることで、達成感を味わわせる。

全 体 会 (2日目)

▼ あ い さ つ (10:20~10:35)

初 等 教 育 研 究 部 委 員 長

校 長 鈴 木 清 一

▼ 教 科 等 発 表 (11:05~11:25)

・ 数 理 的 な 処 理 の よ さ を 実 感 す る

算 数 科 学 習

ー 収 集 ・ 分 析 活 動 を 取 り 入 れ た 学 習 の 展 開 ー

算 数 科 部 永 尾 健

▼ 主 題 発 表 (10:35~11:05)

・ 学 び を 強 め 確 か に す る 学 習 の 創 造

ー 学 び の 体 験 を 活 か す 3 つ の 統 合 に よ る 授 業 づ く り ー

研 究 副 主 任 下 川 勝 彦

▼ 児 童 発 表 (11:30~11:45)

・ 創 り 出 そ う ! 私 達 の ハ ー モ ニ ー

指 導 者 有 川 陽 子

第2日目 午後の部 学習指導案

▼ 学習指導（12:45～13:30）

学年 組	教科領域等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
2年1組	体 育 科	とんで かわして すりぬけじんとり	渡邊 正則	附属中体育館
4年2組	社 会 科	つくろう！あらつ防災調査レポート	高瀬 雄大	4年1組教室
5年2組	国 語 科	筆者の意図を読み取ろう～生き物全体のつながりとは～	平島 健二	5年2組教室
6年1組	算 数 科	平均データで比べよう	田中 健悟	6年1組教室
6年2組	総 合	祝！築城400年、わたしのまちの福岡城プロジェクト	高良 祐治	6年2組教室

▼ 帰国子女教育学習指導（12:45～13:30）

3～6年 3組合同	国際交流タイム	世界の音楽を奏でよう ～民族楽器と民族衣装で着飾って～	永尾 健 有川 陽子 長門 直子	子どもスタジオ
--------------	---------	--------------------------------	------------------------	---------

▼ 特別支援教育学習指導（12:45～13:30）

ふく く じら 組 組	合同生活単元学習	ふじ・さくら・梅まつりをしよう！	下川勝彦，原田敏男， 諏訪原佳子，弘松英樹	特学棟運動場
-------------------------	----------	------------------	--------------------------	--------

走・跳の技能をつないで、場に応じた動きに高めながら、楽しさを味わう体育科学学習 第2学年1組 体育科学学習指導案

指導者 渡 邊 正 則

単 元 とんで!かわして!すりぬけじんとり~てきの宝をゲットしよう~

指 導 観

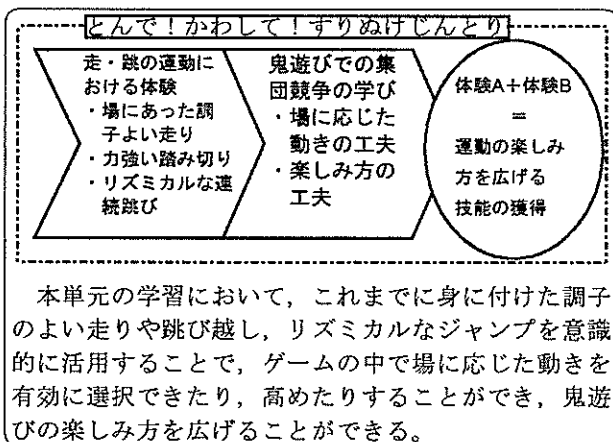
本単元について

本単元は、調子よく走ったり、利き足で力強く踏み切り遠く、高く跳んだり、リズムカルに調子よく連続して跳んだりといった走・跳の運動の動きと相手に勝つために相手を見て素早く動いたり追いかけたり逃げたりする鬼遊びの動きを効果的につないだゲームである。そのねらいは、よりスリルが増すように変化する場で、鬼遊びを楽しむ中で、これまでに身につけた走・跳の運動の動きを効果的に活用したり、場にあったよりよい動きに高めたりすることである。主な学習内容は、①自分のできそうなコース、やってみたいコースを選んで活動し、動きの幅を広げること②すり抜けるコースを作り替え変化させることで楽しみ方の幅を広げたり動きの質を高めたりすることである。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、これまでリレーを楽しんだり、お宝冒険を通して巧みな動き作りを体験したりしている。鬼遊びについては、日常や体育学習でも友達を追いかけたり鬼から逃げるスリルを楽しんだりできている。また走・跳の学習を含めて調子よく走るなどの技能や勝敗への態度、きまりつくりのよさを学んでいる。このような時期に本単元を取り上げ、動きを系統的・総合的に高めたり、動きを発展させる規則を工夫したりしながら、楽しく運動ができるようにするとともに、体力の向上を図る。

本単元の指導について



目 標

- 1 とんで!かわして!すりぬけじんとりを楽しむために、調子よく走る・跳ぶなどの技能を活用したり高めたりして、場に応じたより効果的な動きを作り出すことができる
- 2 すりぬけコースを選んだり、作り替えたりして動きの幅を広げ、友達と競争を楽しみながら楽しくゲームに参加することができる。

計 画 (約8時間)

時 間	主 な 学 習 活 動	時 間
み い だ す	1 試しのゲームを行い、学習のねらいを理解し、これまでに身に付けた動きを確認するとともに、学習のめあてを作る。 ○ すりぬけじんとりの基本のルールやマナー、学習のねらいを知ること ※ モデルゲームの位置付けと試しのゲームによる体験の位置付け。	1
う み だ す	2 いろいろなチームとゲームを行い、場に応じた動きを工夫して高めたり、場を作り替えて、動きや楽しみ方を広げたりして競争を楽しむ。 (1) 基本の場でいろいろなチームとゲームをして、これまでに身に付けた動きを意識的に活用したり、場に応じた動きを工夫したりする。 ○ ルールや場に応じて、身に付けた動きの効果的な活用の仕方や高め方を工夫し変化させること ※ いろいろなチームと対戦させ、友達の動きのよさや課題を見付けさせる。 (2) 同じ対戦相手とゲームを行い、自分たちの動きにあった場を設定したり、相手に応じた簡単な戦術を工夫したりして、動きや楽しみ方の幅が広がるじんとりを楽しむ。 ○ 楽しさが増す場の作り方やそれに応じた動き方、楽しみ方を理解すること ※ 動きの広がりやよさの取り出しと賞賛や道具の工夫による意欲付け。	6 ③ 本 時 2 ／ 3
あ じ わ う	3 『2の1』とんで!かわして!すりぬけじんとり大会をする。 ○ 楽しみ方の工夫のよさや動きの高まりを実感すること ※ 場の工夫や動きの高まりを評価させ、鬼遊びを楽しんだ充実感を味わわせる。	1

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 高まった動きを生かせる場の設定や簡単な戦術の工夫を行いながら、すりぬけじんとりゲームに意欲的に参加することができる。
- 大きく跳んだり、スピードやコースを考えてかわして走ったり、作り替えた場や相手の守りに応じた動きを工夫することができる。

1 前時のゲームをふりかえり動きの高まりや工夫した戦術のよさを確認して、学習の方向を話し合う。

○ 跳ぶ、かわすなど場に応じた動きの高まりと次の方向性の理解

☆ 考えたコースにうまくあわせてうまく動けるようになったぞ。

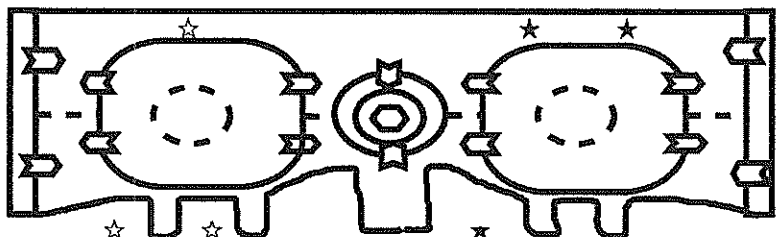
本時のめあて

あんぜんリングのおきかたをくふうして、うごきをはやくしたり、じょうずにかわしたりして、たくさんたからをゲットしよう。

2 ゲーム1・2を行い、場や相手にあったより有効な動きを、チームで協力して考え、楽しくゲームを行う。

(1) 前時の課題をふまえて考えた動きを試すゲーム1を行う。

・予想される安全リングの使い方 (☆☆が安全リング)



☆ 安全リングが上手に使えたぞ。

○ 安全リングの設定(戦術)やそれに応じた動きの有効性の吟味

(2) ゲーム1の成果や課題を吟味して、安全リングの使い方(戦術)やそれにあった自分の動きの修正やチームの動きの再確認や練習直しをする。

○ 戦術の有効性やそれにあった自分の動きの見直しをすること

☆ リングを素早く動けるように置くとよさそうだ。

(3) ゲーム2を行い、見直した戦術の有効性や自分の動きの高まりを実感し、仲間と協力して遊ぶことのよさを味わう。



☆ リングを利用して動きを速くしたら宝がとれたぞ。

○ 考えた動きの有効性の実感

3 今日のゲームをもとによかった動きや楽しかったことを発表したり、ルールやマナー上の問題点を話し合う。

○ 勝つ喜びを増やしたり、友達の動きのよさの確認と学習の方向性の把握

☆ 友達の動きをよく見て動くと、つかまらないで動けたぞ。

準備

教師側：ルール・マナー表、ビブス

鬼遊びのコート、宝(ボール)

児童側：学習ノート フラフープ

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

◎ 前時の動きや活動をもとにめあてを持ち、本時学習への意欲を高めている。

【支援】

※ 前時のゲームの様子をVTRや写真で掲示して動きの高まりやマナーのよさを賞賛する。

【子どもの見取りの観点】

◎ 前時の課題から考えた動きを試している。

【支援】

※ めあてを発表させ、課題の共通認識をはからせる。

【子どもの見取りの観点】

◎ ゲームを振り返り自分やチームの動きのよさや安全リングの使い方の課題を見つけ出している。

【支援】

※ 場は有効か、上手な人はどう動いているか、チーム内の動きの関係はどうか等、視点を決めて動きのよさや課題を見付けさせる。

【子どもの見取りの観点】

◎ 話し合いをもとに点を取る動きを試している。

【支援】

※ 声の出し方や動きのよさを見だし賞賛する。

【子どもの見取りの観点】

◎ 今日の学習を振り返り、よさや課題を見だし、次時への意欲を高めている。

【支援】

※ 今日のスーパープレーを紹介し、チームや個人の課題解決の意欲をもたせる。

地域住民の安全を守るために、防災施設や消防活動の調査をくわえる社会科学学習 第4学年2組 社会科学学習指導案

指導者 高 瀬 雄 大

小 単 元 つくろう! あらつ防災調査レポート

指 導 観

本単元について

本小単元は、学校周辺における火災発生時の問題点や対応策を記した防災調査レポートを作成することを通して、火災から地域の安全を守る人々の工夫や努力を考え、社会の一員としての自覚をもつことをねらいとしている。そのために、学校周辺を歩き、消防車が通れる道幅や消火栓の位置や数を実際に調査したり、結果を交流したりする活動を行い、消防活動のしくみや、関係機関との連携のあり方をとらえることができるようにする。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、第3学年での「福岡市に広げよう! ゴミ減量の輪」の学習において、ゴミ処理に従事する人々の工夫や努力について考えたり、ゴミを減らすことで地域の一員として役立とうという意識が高まってきたりしている。このような時期に本小単元を行い、地域の安全を守りたいという意識から行動する学習を行い、地域の一員としての自覚をさらに深めさせたい。

本単元の指導について

補充による学びの体験の統合

つくろう! あらつ防災調査レポート

算数科
・時刻と時間
・長さ

あつ防災調査レポートの作成

国語科
・調べ学習をやってみよう

地域を実際に歩き、住民の安全を確保する必要がある。

- 道路の幅や交差点半径を巻き尺を使って測定し、消防車の進入可能道路を割り出すことで、狭い道に住宅が密集する地域での消防活動の問題点を見つける。
- 調べたことをまとめる防災調査レポートの体裁や紹介する内容の小見出しを考えたり、見る人が関心をもって見る表現の仕方を工夫したりする。

目 標

- 1 人々の安全を守るためのしくみとそこに携わる人々の願いから、火災被害を最小限に食い止める方法について意欲的に追究することができる。
- 2 防災調査レポートの作成を通して、関係機関が連携をとりながら迅速に活動していることをとらえることができる。

計 画 (約 12 時間+課外)

階	主 な 学 習 活 動	期 間
つ か む	1 火災の恐ろしさについて話し合う。 (1) 火災の原因や被害状況について調べ、気付いたことを話し合う。 ○ 尊い人命や貴重な財産が一瞬にして奪われること ※ 火災で家を失った人の話を聞き、防火意識を向上させる。	4 ①
	(2) 火災被害を最小限に止める「あつ防災調査レポート」作成の計画を立てる。 ○ 消防士の仕事をとらえること ※ 荒戸出張所を見学させる。	③
し ら べ る	2 学校周辺の消防活動と予防活動について有効な対策を考える。 (1) 伊崎、唐人町地区の消防活動で、問題点となる場所を調べる。 ○ 消防活動のしくみをとらえること ※ 消火栓の位置や消防車の進入経路を測定したり、計算で求めさせたりする。	5 ③
	(2) 調査したことをもとに、被害を最小限に食い止める方法について話し合う。 ○ 関係機関の協力体制をとらえること ※ 火災時に、警察に協力を依頼する内容を考えさせる。	② 本 時 1/2
ま と め る	3 あつ防災調査レポートを作成する。 ○ 地域の特性に応じた関係機関との連携があること ※ 当仁地区自主防災組織の中村さんにレポートを渡して啓発に生かしてもらう。	3 + 課 外

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 消防車の車幅と道幅の関係、消火栓の位置について調べたことを元に、消防活動の問題点について意欲的に説明することができる。
- 消防車の通行や、消火栓付近の状況を調べたことから消防署と警察署が行う予防活動について考えることができる。

準備

教師側： 伊崎・唐人町の拡大地図

児童側： 発表ボード 伊崎・唐人町の地図

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

- 1 住宅密集地や交通渋滞が激しい地域における消防活動の問題点について話し合う。

- 消防活動の開始がおくれる状況に対する解決策について話し合うことが目的であることを確認すること

☆ 消防や警察が素早く動けるように連絡がとれるといいね。

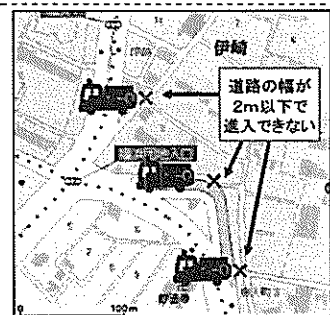
本時のめあて

伊崎地区、唐人町地区で火災が起きたときの問題点を明らかにし、解決策を考えよう。

- 2 通報から消火活動開始までの時間を短縮するための方法について考える。

- (1) 伊崎、唐人町地区の消防活動における問題点を比較する。

- 通信指令情報を各機関に連絡し、迅速な消防活動が行われていること



☆ 伊崎地区は道幅が2m以下の場所が多く、火災現場まで消防車が入られないので、消火栓からの放水を考えなくてはならない。

☆ 消防団の初期消火が大切だけど普段地域にいない人が多いので消防車よりも遅れてしまう。

- (2) 消防活動を速く開始できるための方法について話し合う。

- 消防署や警察署などの関係機関が連携をとりながら協力して活動していることを理解すること

☆ 荒戸交番のお巡りさんは、4人で勤務しているので、応援に行くときは他の交番や警察署の応援も必要になるぞ。

☆ 違法駐車取り締まりの呼びかけは、地域住民の協力も必要なので、情報を消防団と荒戸出張所に送り、常にあらつ周辺の状況を把握してもらう必要があるぞ。

- 3 当仁校区自主防災組織の中村さんに報告することをまとめる。

- 消防車の台数と消防士の人数を元に、実際の消火活動を想定して警察官の協力体制を確認していること

☆ 消防士さんが素早く消火活動を行えるように、荒戸交番のお巡りさんに普段のパトロールをお願いできるといいな。

☆ ゴミを出す日に放火が多いから、道幅がせまいところやマンションのゴミ置き場をチェックして住民に注意をよびかけた方がいいな。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 学校周辺の消火活動について調べたことをもとに、唐人町、伊崎地区の消防車が通れる道幅や消火栓から伸ばすホースの展開時間を地図に書いている。

【支援】

- ※ 被害が大きくなりそうな場所を地図で提示させ、消火活動が遅れる可能性がある場所の被害を少なくしようとする意識を高めようとする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 消防車が通行可能な道路や消火栓の位置から消防活動の問題点と解決策について発表している。

【支援】

- ※ 実際に歩いて確認した場所の状況や消防車の車幅や車長を提示して、具体的に障害となるものや問題事象を説明できるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 災害発生時の警察署の動きについて調べたことをもとに、応援ですぐに來れる人数を考えている。

【支援】

- ※ 荒戸交番で話を聞いたことをもとに、応援する警察官の人数や仕事の内容について考えさせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 警察官の応援状況と消防署の応援状況について見直し、修正する必要がある部分とその理由について書き込みを行っている。

【支援】

- ※ 状況がはっきりとしない場所については再度調査を行い、消火開始までの時間を確定する必要があることに気付かせる。

情報を取り出し、活用しながら意見をつくる国語科学習

第5学年2組 国語科学習指導案

指導者 平 島 健 二

単 元 筆者の意図を読み取ろう～「サクラソウとトラマルハナバチ」～

指 導 観

本単元について

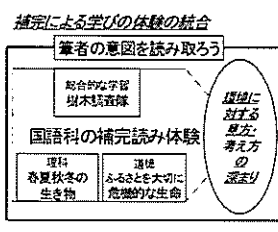
本単元は、事例の取り上げ方や文章構成に着目して、筆者の意図を明らかにし自分の考えを広げ深めていくことをねらっている。具体的には、①筆者の考えを追究する課題をもつこと、②事例の取り上げ方や文章構成などから筆者の考えを読み取ること、③自分の感想を深め、発表することが主な学習内容である。本教材は、大きく4つのまとまりで構成され、人間と自然とのかかわり方を論説している。題名や冒頭の問題提起、2つの事例と意見を比較しながら関係づけ、筆者の意図を確かにして意見をつくっていくのに適した文章である。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、中心となる語や文をとらえて、部分をまとめたり、比べたりしながら段落相互の関係を考えながら読むことができるようになってきている。しかし、筆者の考えがどのような事実によって支えられているのか事実と意見を読み分けて考えたり、必要な情報を取り出して吟味したりして読み深める読み方はまだできていない。そこで、題名や文章構成を手がかりにして、自分の考えをつくりあげていく読み方を身に付けさせたい。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、必要な情報を取り出し、補完しながら解釈し、自分の応えをつくりあげる力を身に付けさせるようにしたい。そのために、題名と事例、意見とのズレから筆者の意図を追究する課題をもたせる。事例の価値、意見との整合性という視点から自らの応えをつくらせていく。



目 標

- 1 題名や文章構成から課題をつかみ、必要な情報を取り出し活用しながら、自分の考えをつくることができる。
- 2 事例と意見の関係や文章構成から要旨を読み取り、自分の考えをつくることができる。

計 画（約9時間）

時	主 な 学 習 活 動	時間
1	「サクラソウとトラマルハナバチ」との出合いから筆者の述べ方についての学習課題をとらえる。 ○ 筆者の意図について課題をもつこと ※ 題名と意見に着目させ、2つの事例を取り上げた理由などを具体的に挙げる。	2
2	学習課題をもとに「サクラソウとトラマルハナバチ」を読み深める。 (1) 課題に対する自分の考えをつくる。 ○ 題名や冒頭部分、事例1・2、意見にどのようなつながりがあるのか明らかにしながら筆者の意図について考えをまとめること ※ 文章構成を意識して追究できる学習ノートを工夫する。	4
3	題名や文章構成を手がかりにして、筆者の意図に対する考えを話し合う。 ○ 筆者の意図と述べ方を読み取り、根拠をもった考えをつくること ※ 事例どうしを比較させたり、それぞれのまとまりをつながせたりする。 ※ 二つの事例を取り上げた意図や題名の意図について発問する。	③ 本時
4	筆者の考えに対して自分の考えを書きまとめる。 ○ 情報を判断し、考えを広げ深めること ※ 学習課題を振り返らせたり、学習ノートを活用させたりして、自分の解釈を加えながら書きまとめるようにさせる。	3

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 筆者の論理を納得したいという思いをもとに、筆者の意見と事例との妥当性を検討したり、情報を付加・交換したりしながら筆者の考えを解釈しようと意欲をもち、自分の考えが深まったことに自信をもつことができる。
- 筆者の意見と事例との妥当性を文章構成から追究し、課題に応じた情報を補完したり友達の考えと比較したりしながら、筆者の意図を解釈し、情報を活用して自分の意見をつくることができる。

○ 準備

■教師側：板書用カード、流れ図、拡大本文

■児童側：学習ノート

<各活動の子どもの見取りと支援>

1 前時学習を想起し、本時学習のめあてを話し合う。

- 文章構成や筆者の意見を明らかにして、めあてを把握すること
- ☆ どうして、筆者は「サクラソウとトラマルハナバチ」という題名にしたのかな。今までの自分の考えをもとに、筆者の意図を明らかにしたいな。

本時のめあて

4つのまとまりをつないで、「サクラソウとトラマルハナバチ」という題名にした筆者の意図を明らかにしながら、「生き物たち全体を守っていかなければならない」という言葉には筆者のどんな思いがこめられているのか自分の考えをつくろう。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 「サクラソウ」でも「いろいろな花やネズミ」でもなく、どんな意図で題名がつけられたのか明らかにしようと学習ノートに書いている。

【支援】

- ※ 題名と筆者の意見、事例を比較させ、ズレが起きていることに気付かせる。

2 4つのまとまりのつながりを検討し、情報を比較したり、補完したりしながら、筆者の意図について読み深め、話し合う。

- (1) 事例1と2を比べたり、冒頭と事例1・意見、冒頭と事例2・意見をつないだりして、筆者の述べ方の意図を話し合う。

- 自然の生き物の結びつきの深さ・広さに対して、人間の環境破壊や行為の意味を筆者の考えとして読み深めること

- ☆ 何百万年という長い長い時間をかけて築いてきた生き物のつながりを人間の都合だけで数十年で崩していいはずがない。一つの生き物は、いろいろなたくさんの生き物とつながっている。だから、一つの生き物だけを守っても意味がない。

- (2) 「サクラソウとトラマルハナバチ」という題名にこめた筆者の思いを取り上げた事例や意見とをつないで、話し合う。

- 事例1で生き物同士のつながりの深さ、事例2で生き物たちのつながりの広さを述べながら、人間の力を超えて自然が生み出した偉大な関係を象徴しているということを読み取ること

- ☆ 「サクラソウ」は二者の深いつながり、「トラマルハナバチ」は、一つの生き物と多数の生き物との広いつながりを象徴していて、この関係を壊してはいけないと思いがこめられているなあ。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 「数十年」と「何百万年」という時間や「人間の世話、タネが実らない」と「他の花々がなくなって、ネズミがすめないような所」という人間の行為との因果に着目して比較し、人間の行為に対する筆者の思いを発表したり書いたりしている。

【支援】

- ※ 冒頭、事例1・2、意見のそれぞれのまとまりのつながりが見えるような学習ノートを準備する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 題名と冒頭、事例、意見をつないで、題名は生き物の関係の象徴であり、人間が崩すべきものではないという筆者の思いが込められていることを発表したり書いたりしている。

【支援】

- ※ まとまりのつながりがとらえやすいように、板書を構成的に工夫する。

3 これまでの情報を活用して、自分の意見を書きまとめる。

- 読み深めたことの意義を感じ、情報を比べたりつないだり補完したりする読み方への自信をもつこと

- ☆ 計り知れない自然の深さ・広さを守ることが人間にできるのだろうか。安易に自然を変えてはいけないと思う。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 文章中から必要な情報を取り出し、自分の解釈を加えながら、筆者の意図について意見を書きまとめている。

【支援】

- ※ 題名とまとまりをつないで筆者の考えを読む読み方のよさを書かせる。

第6学年1組 算数科学習指導案

指導者 田 中 健 悟

単 元 平均データで比べよう（平均）

指 導 観

本単元について

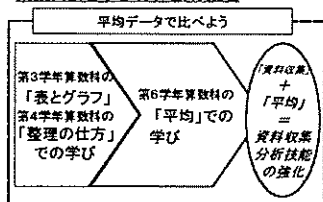
本単元のねらいは、平均の意味について理解し、それを活用できるようになることである。具体的には、①集団の特徴を表す値として代表値や測定値や期待値に平均が用いられることがわかること、②平均を用いて身の回りにある事柄について統計的な考察をしたり表現したりする能力を伸ばすこと、などである。ここでは生活事象を平均データで考察することを教材化し、これまでに学習してきた統計領域での表やグラフの学びの体験が生きるようにする。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、ある特徴を数学的に分析する方法として、第3学年では表や棒グラフを、第4学年では二次元表を、第5学年では同種の量の倍関係で比較する割合を学習してきた。しかし、いくつかの数値の代表値や標準値、期待値等を導き出し比較するまでには至っていない。そこで、平均の意味をとらえさせるとともに、平均による分析のよさを味わわせる指導を行っていきたい。

本単元の指導について

系統による学びの体験の統合



本単元は、平均の意味を理解し、それを活用できることをねらいとしている。そこで、まず、見いだす段階では、身長や体重のデータから平均の意味を導入する。次に、試みる段階では、身の回りで用いられている様々な平均のデータに関して、その代表値や標準値を平均で求めることができるようにする。最後に、広げる段階では、歩幅に関する測定値の平均で求め利用することができるようにする。

目 標

- 1 身の回りにある事柄についての平均を調べることによって、集団の特徴を考察することに意欲的に取り組むことができるようにする。
- 2 集団の特徴を明らかにするために、必要なデータを収集し、そのデータをもとに平均値を導き出して考察したり表現したりできるようにする。

計 画（約7時間）

段階	主 な 学 習 活 動	時間
見 い だ す	1 健康的な生活を送ることができているかを判断するために必要な情報について話し合い、その情報を集める。 ○ ならすことや平均の意味がわかること ※ 平均寿命が世界で1位である事実を提示し、生活の平均から生涯に考えられる回数を予想する活動を設定する。	2
試 み る	2 身の回りで用いられている様々な平均の利用について調べる。 (1) 平均を計算で求め、代表値と自分の記録とを比べ、健康生活を判断する。 ○ 平均＝合計÷個数で計算し、平均を求めること ※ 代表値としての平均を求める簡単なモデルを提示しする。 (2) ボーリングの得点記録から、同じぐらいの力をもったチームをつくる。 ○ 平均をうまく利用して、組み合わせを考えること ※ 得点記録の結果を提示し、チーム編成を行う必要がある状況に出合わせる。	3 ②
広 げ る	3 歩幅の測定値から平均を求め、運動における自分の記録を見直す。 ○ 測定値として平均を求め、概測を行うのに利用すること ※ 複数回、記録をとって測定値の平均を求める場を設定し、ある程度正確な概測ができるようにする。	2

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- チームにおけるボーリングの得点結果から、それぞれのチームをだいたい同じ力になる組み合わせを意欲的に調べるができる。
- 平均の考えを利用し、個々の記録の組み合わせによって、等質の力をもったチームをつくることができる。

1 複数のチームで行ったボーリングの得点結果から、チームの力について話し合う。

- どのチームが強いのかを判断する際に、チームの平均を求めれば判断できるという見通しをもつこと

☆ チームの力は、チームのメンバーの平均点で決めることができるけど、この結果では、チームの力がそろっていないな。

本時のめあて

どのチームも同じくらいの力のチームになるように、平均点を考えながら、チームのメンバーの組み合わせをつくり直そう。

2 ボーリングの得点の記録をもとに、チームの平均点を考えながらチームのメンバー構成を変える。

- (1) 個々のチームのボーリングの得点をもとに、チームの力が同じ位になるように、1チームの平均点を調べる。

- 新たに組み直すチームのメンバーの力が同じくらいになるように、各チームの平均点を割り出すこと

Aチーム：128点、136点、112点

Bチーム：145点、124点、108点、114点

Cチーム：118点、126点、142点、105点

☆ ボーリングに参加した人数で合計点を割ったら、一人の平均点が出てくるな。でも、チームの平均点を考えないといいな。

☆ チームの平均点はだいたいこのくらいになるはずだな。チームの平均点に近づくようメンバーの得点を見ながら入れ替えよう。

- (2) 各チーム毎の同じ位の平均点になるように、メンバーの得点を入れ替えながらチームのメンバーを編成する。

- 「平均＝合計÷個数」という公式を利用して、割り出したチームの平均点に近づくようにメンバーの得点の合計を考えること

☆ 平均＝合計÷個数の公式に、記録を当てはめて考えていけば、チームの平均点にできるだけ近い得点で、力が同じ位になるチームをつくることができるな。

3 どのようにして、チームの力が同じ位になるようにメンバーを配置していったか、その筋道と結果について話し合う。

- 集団の記録を比較するときにも平均を用いることがわかり、平均を逆に利用して、メンバーを組み直すことができること

☆ ばらばらな記録を比べるときには、その記録の平均を求めて、平均の数値どうして比べることができるんだな。

☆ メンバーの力は人数が異なっても平均で設定できるんだな。

準備

教師側：ボーリングの記録が書かれた表
電卓

児童側：学習ノート

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ どのチームが強いのかを考える際に、前時までに学んだ平均を求める公式を用いればよいことに気付いている。

【支援】

- ※ 複数のチームのそれぞれの記録を提示し、集団としてのチームの力を判断するときにも平均の考えを使うとよいことに気付くことができるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ ボーリングの記録について考える際に、代表値である平均点を求めてチームの力が同じになるようにメンバーの構成を考えようとしている。

【支援】

- ※ 人数が異なる場合のチームの記録を提示し、平均点を割り出して考えることができるようにする。その際、100点以上の部分の数字のみに着目して考えることができるように、数値を設定しておく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 3つのチームの平均点から、そのチームの合計点を計算で求め、その合計点に近づくようにメンバーを構成しようとしている。

【支援】

- ※ チームの力が均等になるには、3つのチームの合計点をもとに考えるとよいことに気付かせるとともに、チームの合計点を割り出して、メンバーの入れ替えを考えることができるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 集団の記録を比較する際に、平均を求めて比較したことを筋道立てて説明しようとしている。

【支援】

- ※ チームの平均点からチームの合計点を考えて、メンバーを構成していったことが視覚的にわかるように、棒グラフを用いて確認する。

福岡城と自分とのかかわりを調べた体験を築城400年記念イベントづくりへとつなぐ総合学習

第6学年2組 総合的な学習指導案

指導者 高 良 祐 治

単 元 祝!築城400年 わたしのまちの福岡城プロジェクト

指導観

本単元について

本単元は、自分たちが学ぶ福岡のまちの礎となった福岡城築城400年を記念して、様々な人々とかかわりながらイベントをつくることをねらいとしている。主な学習内容は、①福岡城を舞台に実現可能なイベントの企画を立てること、②福岡城の400歳を祝う思いが伝わる内容をつくること、③管理事務所など様々なところとの交渉を重ね、イベントを実現することなどである。このように実社会とかかわりながら、自分たちの計画を実現させていくことは、学びの意義を実感させるうえからも意義がある。

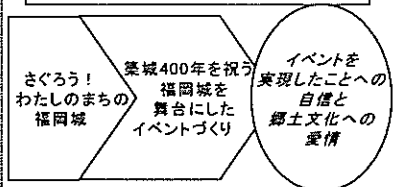
本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、商工会主催の「福岡城貼り絵事業」や西日本新聞に掲載された「夢の福岡城づくり」への参加などを通して福岡城への関心を高めてきた。また、福岡城市民の会の方々との交流を重ねて、福岡城と自分たちが学ぶ地域とのかかわりや、福岡城がつくられたおかげで今の福岡のまちがあることに気付いている。そこで、この思いを築城400年を迎えるこの期にイベントづくりで表現することは、郷土愛を深める意味からも意義深い。

本単元の指導について

系統による学びの体験の統合

祝!築城400年わたしのまちの福岡城プロジェクト



5年生での福岡城と自分とのかかわりの追究を築城400年イベントづくりへとつなぐ。そのために、熊本城の400年祭を参考にしたり、イベントプロデュース、演劇、歴史など様々な分野の方々とかかわりを旺盛にしたりしていく。

目 標

- 1 自分たちが学ぶ福岡のまちの礎をつくった福岡城が築城400年を迎えることを祝うことで、郷土や郷土の歴史への愛着を深めることができる。
- 2 歴史やイベントなどの専門家とかかわりながら福岡城の築城400年を祝うイベントを実現することができる。

計 画 (約20時間)

段階	主 な 学 習 活 動	時間
課題設定	1 福岡城と自分とのかかわりを確かめたり、熊本城400年祭を調べたりする。 ○ 福岡城の400歳を祝いたいという思いをもつこと ※ 福岡城と熊本城の新聞記事の提示	2
課題追究	2 イベント実現のために、調査・計画・準備を行う。 (1) 自分たちにできることを調べる。 ○ 福岡城を舞台としてできることを判断すること ※ 実際に福岡城を訪れ実地調査を行う。 (2) 全体計画を作成し、専門チームに分かれ準備を進める。 ○ 全体像をつくり、自分の役割を把握・追究すること ※ チームごとにアドバイザーを招聘 (3) イベント準備の報告・検討をする。 ○ 不十分なところを把握し、再追究の方向性を見出すこと ※ イベントアドバイザーの招聘 (4) 再追究し、イベント準備を行う。 ○ 実現可能な準備を整えること ※ リハーサル場の設定	15 ② ⑦ ② 本時 1/1 ④
課題達成	3 築城400年イベントを行う。 ○ 福岡城での築城400年イベントを実現すること ※ 管理事務所へ協力を依頼しておく。	3

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 自分たちが準備してきたイベントをよりよいものにしたいという思いから、計画を見直し、再追究の必要性に気付くことができる。
- イベントの計画を、時間、内容、実現可能性などの視点から見直し、各チームの再追究の方向性を明らかにすることができる。

1 各プロジェクトチームから進捗状況の報告を行う。

- 各チームごとの準備内容を総合的に見てみることで、イベントとしてよいものになりそうかどうか検討してみる必要があることに気付くこと

- ・ 総務チーム：開催場所の交渉、場所の活用方法、宣伝など
- ・ 演劇チーム：調査、シナリオ作成、配役、演技など
- ・ 道具チーム：衣装、背景画、音楽、電気機器など

☆ それぞれのチームが準備を進めてきているね。だんだんイベントができあがってきているみたいだ。

☆ だけど、いいイベントになるかどうか総合的に見てみる必要もありそうだよ。

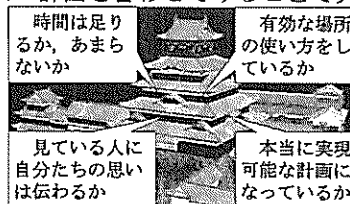
本時のめあて

各プロジェクトチームの計画を合わせてみて、イベントとしてよりよいものにするための検討会議を開こう。

2 築城 400 年をお祝いするイベントとして内容の検討を行う。

- (1) 時間軸と場所の状況に各チームの計画を合わせてみることで実現可能かどうか調べる。

- 限られた条件に合わせてよりよいものをつくるために、変更したり工夫したりする必要があることに気付くこと



- ☆ シナリオの内容が福岡城に初めて来る人にはわかりにくい。
- ☆ 時間のことをよく考えずにつくっていたことがわかるね。
- ☆ どうすればもっといいイベントになるのかな。

- (2) 現段階の理想のイベント案を交流し、これからの再追究の方向性を明らかにする。

- 各プロジェクトチームがこれからの活動の方向性を見出すこと

☆ 調べたことをそのまま劇にしてみてもだめだ。初めて来た人にもわかるように資料をつくって配ったらどうかな。

☆ もっと音楽を流したりして臨場感を出したい。だけど、大きな音を出していいのか管理事務所に聞いてみないといけな。

3 各プロジェクトチームのこれからの計画を報告し合う。

- 各プロジェクトチームが横の連携を図っていく必要があることに気付くこと

☆ 今後は、互いに連絡を取り合いながら、準備を進めていく必要があるね。

○ 準備

教師側：タイムスケジュール表

イベント開催の場所の図

児童側：各プロジェクトチームの計画書

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 各プロジェクトチームが、どのような計画を立てて、その実現のためにどのような準備を進めてきたのか具体的に説明している。

【支援】

- ※ 事前に他のチームにも伝わるように説明資料をつくらせておく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 各プロジェクトチームの計画を合わせて検討する必要性に気付いた発表したりノートに書いたりしている。

【支援】

- ※ 夢動力ふくおか推進特別委員会委員長新開裕司氏を招聘し、意見を言っていたいただく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 時間軸や場所の状況、観客に内容が伝わるか、実現可能性などの観点から改善すべき点を発言したりノートに書いたりしている。

【支援】

- ※ 空白のタイムスケジュール表とイベント開催の場所の写真や図を提示して、計画を当てはめて考えさせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ これまでの話し合いをもとに、どのように改善すればよいか、そのためには、どのような活動が必要となってくるか、ノートに書いたり発言したりしている。

【支援】

- ※ ゲストの新開氏に質問できるようにし、新開氏からも積極的にコメントをいただく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 各プロジェクトチームが、何を調べたり、つくったり、行ったりするのか明らかにしており、横の連携の必要性に気付いた発言をしている。

【支援】

- ※ イベント開催日までのカレンダーを表示したり、新開氏から意欲付けのコメントをいただく。

第3・4・5・6学年3組 国際交流タイム学習指導案

指導者 永尾 健・長門 直子・有川 陽子

単元 世界の音楽を奏でよう～民族楽器と民族衣装を着飾って～

指導観

本単元について

本単元は、子どもたちが滞在した国の伝統的な音楽と民族衣装と日本の音楽と民族衣装との比較によって文化の違いや、国の歴史的な背景について捉えることをねらっている。具体的には、①琴や尺八などの日本の伝統的な楽器から気候や歴史的な背景を捉え、日本のよさに関心を持つこと、②世界の楽器や音楽、民族衣装との関連から世界の国々の気候や歴史的背景などを捉えること、③滞在していた国のよさを実感し、一層愛着と誇りを持つことである。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、複数の学年が集まって構成される帰国子女学級の集団である。滞在国内、滞在時間、滞在期間などさまざまである。また、日常生活の環境も、滞在国内のスタイルで多くの時間を過ごしていたり、いなかったりとさまざまである。そのため、滞在国内のよさの理解もないまま帰国してきていることもある。そこで、滞在国内で日常よくふれることの多かった音楽と民族衣装を課題にし、自他国の文化を多面的に理解していこうとする態度を育成することは、意義深いと考える。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、音楽と民族衣装を通して、その国の文化を理解しようとする補完の学びを展開する。まず、日本の伝統的な音楽と民族衣装について関心をもたせ子どもたちの実態に応じて音楽性、楽器、歴史、民族衣装などの課題を把握させる。さらには、帰国子女学級の特性を生かし、それぞれの国の方にインタビューをしたり、いっしょに演奏したりしながら、文化の特性を捉えさせる。最後に滞在国内のよさを知らせる、ワールドミュージックフェスティバルを行い、達成感を味わわせたい。

目標

- 1 日本や滞在国内の音楽や民族衣装について課題を追究し、友達や外国の方と交流することで自他国の文化を尊重し理解を深めることができる。
- 2 自分の課題を解決するために、情報を収集し、相手に伝わるようにまとめたり、ミュージックフェスティバルで表現したりすることができる。

計画（約18時間）

段階	主な学習活動	時間
つかむ	1 日本や滞在国内の音楽についての気かりから、学習課題を考える。 ○ 音楽と民族衣装がかかわっていること ※ 琴の演奏の際、民族衣装に着目させる。	6
追究する	2 音楽と民族衣装との関係を考える。 (1) 滞在国内の音楽や民族衣装について調べ、特徴について追究する。 ○ 自分の国や滞在国内の音楽や民族衣装の特色をとらえること ※ 滞在国内の文化にふれさせるために、課題や実態に応じたコース別学習を行う。 (2) 滞在国内の音楽や民族衣装について調べたことを交流する。 ○ 各国の音楽と民族衣装との関連を、歴史的背景や気候、風土に特徴があること ※ 滞在国内での生活の基盤や滞在国内の理解度に応じて、調べる項目をコース別にし歴史的背景や気候、風土と音楽を関連をさせてまとめさせる。	8 ⑤ ③ 本 時 2 / 3
つくる	3 ワールドミュージックフェスティバルについて話し合い、視聴してもらうための工夫を考え、まとめる。 ○ 滞在国内の特色が分かるようなフェスティバルにすること ※ ゲストティチャートの交流によって、肯定的に評価していただくとともに、音楽と衣装を組み合わせ、競演させ、滞在国内のよさを味わわせる。	4

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 自分が調べた滞在国の音楽や民族衣装についてわかりやすく発表したり、滞在国の共通点や差異点に気をつけて聞いたりできる。
- 他国の文化を理解したり、自分が滞在していた滞在国の音楽や民族衣装の文化をを多面的に見ることができる。

1 音楽や民族衣装について、それぞれの課題について追究したことから、それぞれの滞在国の特徴を話し合う。

- それぞれの滞在国の音楽と音楽性や楽器の素材、気候、風土などに関連があること

☆ どの国も、音楽と民族衣装との関係がありそうだね。

本時のめあて

各自の課題追究をもとに、滞在国の音楽や民族衣装との関係を話し合い、ワールドミュージックフェスティバルに向けて改善する点などについて考えよう。

2 各自が調べたことをもとに、「ワールドミュージックフェスティバル」に必要なことを話し合い、自分の課題追究に付加修正を行う。

- (1) それぞれが調べたことをもとに、各国の音楽と民族衣装についての特徴を出し合い、各国の音楽と民族衣装の特徴の共通点や差異点について話し合う。

- 各国の音楽と民族衣装は、歴史的背景や気候風土にかかわりあることの気付くこと

☆ どの国の音楽と民族衣装はかかわりがあって、歴史や気候が関わっている部分がたくさんあることが共通しているね。

「ワールドミュージックフェスティバル」で取り上げる情報

音楽、楽器	歴史	気候、風土	民族衣装
・曲のテンポ ・楽器の素材	・音楽の歴史 ・音楽に関わった民族や人物	・気候と楽器の素材となる植物等の樹生について	・音楽を演奏する際の衣装 ・民族衣装の特徴

- (2) 話し合いによって、自分の調べたことに付加修正を行った点について話し合いを行い、実演してみたり、衣装の工夫を行ったりしてフェスティバルについて話し合う。

- 4つの観点で、もっとも滞在国の特性が表現できそうな点についてわかり、音楽と民族衣装が関わっていること

☆ どの国の音楽もその国の気候や歴史、そして、民族衣装が深く関わって、その国独特の雰囲気を出していることが分かったよ。

3 ワールドミュージックフェスティバルに向けて、表現の見直しを確認し合い、お互いの音楽についての考え方を話し合う。

- 音楽と民族衣装の特徴から各国のよさをとらえ直していること

☆ 楽器や民族衣装の紹介を工夫すれば、ワールドミュージックフェスティバルでその国のよさを伝えることができるね。

準備

教師側：学習ノート、世界地図、

滞在国の楽器

児童側：発表資料、滞在国の楽器や衣装

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 音楽と民族衣装、気候や歴史など、いくつもの観点でかかわりがあることに気づいている。

【支援】

- ※ 課題追究の4つの観点（音楽、歴史、気候、民族衣装）に着目させる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 各国の音楽や民族衣装には、その国独自の特徴があることに気づいている。

【支援】

- ※ いろいろな国の衣装を掲示したり、楽器の見直したりして共通点や差異点に着目できるようにしておく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 事前に持ってる資料集から共通点や差異点を見つけ出し、チェックを入れている。

【支援】

- ※ 各自が調べた内容について資料集としてまとめ、事前に共通点や差異点として確かめることができるようにしておく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ これまでの歴史や、その国の気候などが関わって、楽器が作られたり、曲のテンポとして表現されたりしていることに気づいている。

【支援】

- ※ 実演してみたり、ゲストの方に音楽と民族衣装について話していただいたりして、自分の考えにたりない点に着目させ、付加修正を行うことができるようにさせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 音楽だけでなく、民族衣装やその音楽や衣装にまつわる、気候や歴史などの話があるから各国のよさが現れるということに気づいている。

【支援】

- ※ その国のよさを表現するためには、音楽だけでなく、その国の雰囲気を出すための工夫として何があるのかゲストの方に話していただく。

友達とかかわりながら、まつりの実現に向けた課題を解決する合同生活単元学習

ふじ・さくら・梅組 合同生活単元学習指導案

指導者 下川 勝彦 原田 敏男

諏訪原 佳子 弘松 英樹

単元 ふじ・さくら・梅まつりを しよう!

指導観

本学級の子どもたちについて

これまでの合同学習で目的意識を共有したり、意欲をもって力を合わせて活動したりすることを身に付けつつある。また目的の達成に向け上級生が下級生に言葉や態度で行動を促すとともに、下級生はその働きかけに応じて行動するといった異学年間でのかかわりが見られつつある。A Gの子どもは他者からの要請に行動しようとするが適切な行動にはなりづらい。B Gの子どもたちは、他者に依頼をしようとするが、わかりやすく依頼することが難しい。

目 標

- 1 まつりをする目的を達成するために、友達とかかわりながら課題を解決し、まつりを開催する目的が達成できた満足感を味わうことができる。
A G：要請に応じて協力して活動できる。
B G：自分から要請して、協力して活動できる。
- 2 まつりに必要な飾り山をつくるとともに、招待した人にまつりを披露するなど、まつりの開催に必要な知識や技能を身に付けることができる。

計 画（約20時間）

本単元について

本単元は、博多山笠への感動から自分たちもすてきなまつりをつくって開きたいという目的のもと、まつりの準備をして披露することをねらいとする。具体的には、①まつりの開催に向けて必要な事柄を見通すこと、②まつりに必要なものを準備し、まつり運営に関する事柄を身に付けること、③互いに意志を伝えたり応じたりすることが主な内容である。まつりをつくり上げることは、協力して開催するとともに、役割が複数あるため、子ども同士のかかわりや役割が必然的に発生するよさがある。

本単元の指導について

本単元の指導にあたって、つかむ段階で福岡紹介VTRを提示し、山笠に気付かせる。また、飾り山を見学し、まつりへの意欲と見通しをもたせる。つくる段階では、見学の見通しに基づき、まつりに必要な準備を友達とかかわりながら行う。ひろげる段階では、家の方をふじ・さくら・梅まつりに招待する。飾り山を担いで練り歩いたり、担ぐ際に参加してもらったりして、自分たちの力で人とかかわりながらまつりを開催した満足感を味わわせる。

階	主 な 学 習 活 動	時間
つ	1 福岡には有名なまつりである博多山笠があることについて話し合う。	5
か	○ まつりをつくる目的と意欲をもつこと	
む	※ 福岡の紹介VTR提示と飾り山の見学	
つ	2 ふじ・さくら・梅まつりに必要なものをつくったり、準備したりする。	12
く	(1) ふじ・さくら・梅まつりの飾り山の部品をつくって組み合わせる。	⑥
る	○ 友達とかかわりながら、飾り山の部品をつくり、組み立てること	本時
	※ ペアを中心とした制作活動の設定	1/6
	(2) まつりを開くための衣装や雰囲気を出すための道具の準備を行う。	④
	○ 衣装やうちわがいることを確かめ、友達とかかわりながら準備すること	
	※ グループを中心とした活動の設定	
	(3) 飾り山を動かすための準備をする。	②
	○ 担ぎ方、歩き方、かけ声の出し方などを身に付けること	
	※ 個に応じた役割の設定	
ひ	3 まつりを開催し、飾り山を担いだり、まつりの紹介をしたりする。	3
ろ	○ 目的を達成した達成感を味わうこと	課外
げ	※ 達成感を味わわせるためのまつりを見た人からの賞賛	

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 飾り山をつくるという課題のもと、外枠づくり、人形づくり、背景づくりの3つのチームに分かれて、ペアの友達と力を合わせて課題を達成する喜びを味わうことができる。
AG：ペアの友達からの要請に応じて協力して活動できる。
BG：飾り山を組み立てる活動において、協力して欲しいことをペアの友達に要請する。
- 飾り山を飾るために、各チームで作った部品を組み合わせるとともに、飾り山を担ぐために役割を果たすことができる。

1 山笠の写真やまつりのための計画表、飾り山の材料を見て、飾り山のどの部分をつくってきたのか発表する。

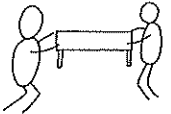
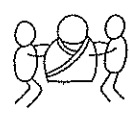
- 飾り山を組み立てるという課題を理解し、飾り山の外枠や人形、背景を組み合わせるという意識と意欲をもつこと

☆ 早く飾り山を完成させたいな。

本時のめあて

ふじ・さくら・梅まつりの かざりやまを くみてよう。

2 3つのチームに分かれて、部品を組み合わせる飾り山をつくる。

外枠チーム	人形チーム	背景チーム
(1) 外枠を飾り山に取り付ける。 BG 外枠を支えるように頼むこと AG 要請に応じて外枠を支えること 	(1) 人形を飾り山に固定する。 BG 人形と一緒にかかえるように頼むこと AG 要請に応じて人形をかかえること 	(1) 飾りを飾り山に取り付ける。 BG 飾りを支えるように頼むこと AG 要請に応じて飾りを支えること 

☆ 一人で持てなくても、友達と協力すれば持てるんだな。
頼まれた通りに協力すると、飾り山ができていくんだな。

(2) つくった飾り山をみんなで協力して担いでみる。

BG：担ぐ場所をペアの友達に教えたり、力を入れるように励ましたりすること

AG：友達からの指示に従って担ぐ場所を知るとともに、タイミングを合わせて一緒に担いだりすること

☆ 重たいけど、力を合わせて担ぐぞ。

3 飾り山を担いで試みにコースを練り歩く。

- 飾り山をつくり、実際に動かせた満足感を味わうとともに、まつりを盛り上げる役割の必要感を感じる

☆ 飾り山ができたぞ。かけ声を合わせたらにぎやかになるぞ。

準備

教師側：計画表、写真、飾り山の本体、飾りのための部品、工具、ヒントパネル、手順パネルなど

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 計画表を見て、まつりをすることを発言するとともに、今日は飾り山を組み立てることを発言している。

【支援】

- ※ まつりの開催までの段階ごとに取り外しができるような計画表を提示して、段取りを視覚的に把握させる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 飾り山の完成予想図を指さしながら、自分たちのチームがどの部分をつくったのか発言している。

【支援】

- ※ 飾り山の完成への見通しがもてるようにするために、飾りの取り外しができる完成予想図を提示する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ ペアの友達に飾り山の部品を取り付けるための協力を自分から要請したり、それに応じたりしている。BGは、困っている状況に応じて、ヒントパネルを見ながら、ペアの友達に要請している。AGは、要請されたことに応じて材料を支えたり、かかえたりしている。

【支援】

- ※ 目的を意識して他者とかかわれるかどうかの視点により高低学年、中学年同士でペアを組ませるようにする。ヒントパネルには、困った状況を示す写真とその時の声かけを示し、活動場所の横に提示しておく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 声かけしたり応じたりしながら力を合わせて飾り山を担いでいる。

【支援】

- ※ チームごとに場所を確定させ、声かけのヒントパネルを提示する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分から進んで飾りの部品を見せるとともに、部品を飾った飾り山をうれしそうに見ている。

【支援】

- ※ つくった部品を一時的に取り付けられるように固定具を用意しておく。

指導力アップ講座

全体講演

演 題

「今、求められる教育の
方向と教師の授業力」

講 師

京都ノートルダム女子大学

教授

加 藤 明 先生

研究紀要の部

■ 研究紀要 目次

◎ 研究主題構想 94

・ 学びを強め確かにする学習の創造

ー 学びの体験を活かす3つの統合による授業づくりー

国語科学習の構想	113
・ 言語で論理的に考え表現する国語科学習	
社会科学習の構想	120
・ 社会形成者としての合理的意志決定ができる社会科学習	
算数科学習の構想	127
・ 数理的な処理のよさを実感する算数科学習	
理科学習の構想	134
・ 自然のしくみを実感する理科学習	
音楽科学習の構想	138
・ 音楽的な感性を育み、技能を高める音楽科学習	
図画工作科学習の構想	142
・ 自ら価値ある表現を創り出す図画工作科学習	
家庭科学習の構想	144
・ 家族の一員として楽しい家庭生活を創り出す家庭科学習	
体育科学習の構想	148
・ 調和する動きをつくる体育科学習	
生活科学習の構想	152
・ 気付きを自分の生活に生かす生活科学習	
特別活動の構想	156
・ 他者とのかかわり合いを大切にする学級活動	
道徳学習の構想	160
・ 他者とのかかわりを深める道徳学習	
総合的な学習の時間の構想	164
・ 実社会に生きる学びをつくる総合的な学習の時間	

◎ 特別支援教育部主題構想 172

・ 共生社会を豊かに生きる子どもを育てる教育の創造

ー 一人一人の特性をいかした授業づくりー

国語科学習の構想	174
・ 状況に応じたことばを使う国語科学習	
生活単元学習の構想	178
・ 子ども自ら生活をひろげる生活単元学習	

◎ 帰国子女教育部主題構想 182

・ 自信と誇りを育む帰国子女教育

ー 個の実態に応じたコース別活動を位置付けた授業づくりー

国際交流タイムの構想	184
・ 個性と相互交流を重視した国際交流タイム	

知的にたくましく生きる子どもを育てるために

学びを強め確かにする学習の創造

～学びの体験を活かす3つの統合による授業づくり～

■ 学びを強め確かにする学習の創造

□ 学びを強め確かにするとは

「学びを強め確かにする」とは、子どもが学習の意義をとらえ、学ぶ意欲を高めながら、自分の方法で文化的に価値ある知識を身に付けていくために、現実社会や自分の生活の場面において身に付けた複数の知識から選択したり、組み合わせたりすることで、学びと実社会・実生活の関係を両方から思考し、とらえることができるようになることである。

現在、義務教育の目標である「人格の完成」において、具体的には「知的にたくましく生きていくためのバランスのとれた人間を育てること」とされている。ここでいう「知」とは、生活を更新する生活知、文化を創造する文化知、生き方を向上する人間知の総体のことである。「知的にたくましく生きる」とは、他の人間や社会とかかわり、身に付けた資質や能力を総合的に発揮しながら、社会を形成し、自分自身の生き方を創り出していくことである。そこで、「知的にたくましく生きる人間」を育てるためには、教科・総合等のあらゆる学習において調和的に、子どもの文化創造・生活更新・生き方向上をめざすようにしなければならない。また、現代社会において「他者のなかにあって自分らしく生きる」ことを可能にするためには、確かで活きる知を身に付ける必要がある。そのためには、子どもの学習意欲を高め、学びにおける、活動の目的をしっかりとめさせる指導を行うことが必要である。

では、今、子どもの学習意欲が低下しているのはなぜだろうか。その原因の一つとして『学習への必要感』の低下が考えられる。また、それは、学習材と子どもの内面との『関係性』の薄さからくるものであると考えられる。つまり、社会生活を全体と考えるならばその部分である学習内容が、教科内容として一人歩きしてしまい、子どもにとっては、今、学んでいる学習内容の日常生活での必要性を感じることができなくなっているのである。

そこで、子どもが教科・領域の学習において、自分の力で獲得した能力を個人内で確かで価値あるものに強めるとともに、実生活で生きていく上での力として活用できる確かなものにするように学習指導を考えなければならない。それは、教科の基礎・基本を明確にし身に付ける学習と知識と社会生活を統合・関連させる学習を構想し一元化することを通して、自分も他者も納得できる「応え」を創り出すことで実現する。



□ 学びを強め確かにする学習の創造とは

問題に対して、子どもが自ら追究方法を定め、そして自他ともに納得しうる「応え」を創り出すために、知を身に付けることができるようにするとともに、日常を想定した場面で知を発揮したり、活用したりすることによって知的にたくましく生きる力にすることができるカリキュラムを組織し、構成することである。

具体的には、教科等で確かな知を身に付ける学習と生活場面を想定した場面で、知を選択したり組み合わせたりしながら活用することで、価値を高める学習活動をバランスよく編成し、全体計画であるカリキュラムを構想することをいう。そのためには、子ども一人一人がしっかりと自己追究できる学習目標の設定や、達成のための学習の見通し、すなわち、学習していく対象や方法、順序を考える等の学びを子ども自らの力で進めていくことができることが前提となる。

ここで、カリキュラムとは、一般的には教育目的に即して児童生徒の学習活動を指導するために、学校が計画的・組織的に編成して課す教育内容の全体計画のことである。それに対して、近年、一人一人の学習過程を重視する教育観によって、「教育内容の計画」から「学習経験の履歴」へというカリキュラム概念のパラダイムの転換が行われ、“学習者に与えられる学習経験の総体”としてとらえられてきている。

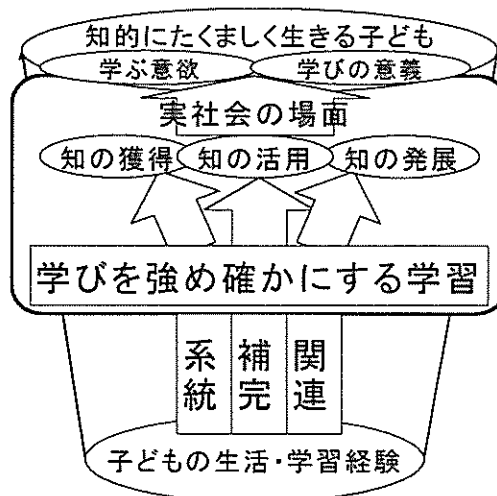
そこで本校でも、計画的・組織的なカリキュラムの構想をベースとして、各教科等で身に付けるべき力を割り出し、子どもの実生活で活用できるように、単元・題材のあり方について研究を進める。つまり、他者と共に学びの過程や結果（応え）から、自分でできたという実感をもったり、自分の変容や成長を自覚したり、今まで気付かなかった新しい自分を発見したりして、より高い自分の可能性を理解し、自分の生き方への強い自信・自覚へと高めていくことができるように学習活動を構成し、各教科等でカリキュラム構想に位置付けていくことを考えなければならない。

そのためには、単に教科で、その親学問の文化としての学習内容を繰り返し教授するだけではなく、子どもの実生活で活用できる場の設定を考えていかなければならない。また、領域・総合においてもこれまで以上に教科で身に付けた知を総合化する方向で学習を構想しなければならないのである。

□ 学びを強め確かにする学習の研究構想

学びを強め確かする学習の研究構想を図で示すと右図のようになる。

各教科等における子どもの目的意識で展開する学習活動において、まずその学びは、子どもの生活からスタートする。そして、出合いの目的意識から導き出された課題を解決するために子どもが自分の方法を決め、選び、工夫し、変えながら自己追究が展開する。その学習過程で身に付けていく知識をタイムリーに活かすことができる場面を設定することで、知識を確かに身に付けたり、組み合わせ活用したり使いこなしたりすることができる。



そのことでめざす子どものゴールとして、知的にたくましく生きることにもつづいていくのである。

学び確かにし、それを活かしていくために、教科学習では、もっと教科文化に根ざした学習を構想することや道徳、特別活動、総合的な学習の時間だけではなく、教科学習でも社会生活場面を意識した学習を構想することが必要になってきており、その考え方を研究していくことは、本校の特色あるカリキュラムを編成する上でも意義のあることである。

□ 学びを強め確かにする学習の具体的方途は？

今、自分が行っている学習（部分）が、社会生活や産業のなかでどのように活かされているか、また、社会生活（職業）、人間とのかかわりに対してどのようなつながりがあるのかを子どもが意識せざるを得ない状況下（学習の場）で、子どもの学習に対する「必要感」を高め、学習と自分との「関係性」を明らかにする学びの過程をつくることである。

その目的は、学びによって獲得することができる様々な知識を統合することで、新たな知識を創造し活用できるようにしていくことである。教科等で身に付けた知を活用できるとは、具体的な社会生活の場面において、自己追究で導き出した問題に対する「応え」を他者とのかかわりによって互いに補いながら、文化的に社会的に人間的により高い価値の「応え」につくりかえていくことである。つまり、今までの自己追究の活動の更新・創造・向上の「応え」をより発展的に高めていくことである。このことは、認識と社会性、人間性の発達という面から価値のあることであり、学びを量的に積み上げるだけでなく、生活に活用することのできる調和のとれた人間を育成していくことにつながる。

そこで、学びを強め確かにする学習のつくり方として次のことを考えている。各教科・領域における単元・題材づくりレベルで子どもの知的好奇心を高め、知を確かにするために、子どもの現実問題場面で教科と領域・総合的な学習を学習内容の面でまとめて単元・題材をつくること（関連）や、教科等内でその領域の学習内容をつないで単元・題材をつくること（系統）、さらに、知を活かすために、社会生活をモチーフとした場面設定の課題で、各教科等の学習内容をくわえて単元・題材をつくること（補完）が考えられる。

□ 学びを強め確かにするために子どもの学びの体験を『統合』する

子どもの学びの体験を「統合」し授業をつくることは、現実社会や自分の生活をモチーフとした問題場面で子どもが身に付けた力をいかせるよう、学びの体験をつないだり、くわえたり、まとめたりして単元・題材をつくることである。

そのために従来、教科等で区切られた学びの体験を意図的・計画的に統合し、授業づくりをする。学びの体験の具体的な統合のさせ方は、「他教科等の学びの体験」、「教科等内における異なった学びの体験」、「教科と領域の学びの体験」をまとめる、つなぐ、くわえることを行い、教科等部で学習過程における学びの体験の統合のさせ方の可能性を考えて、学習場面の設定、自己追究の手だてを具体的な仮説実証授業の実践で明らかにしてきた。

□ 子どもの学びの体験を活かす3つの統合による授業づくり

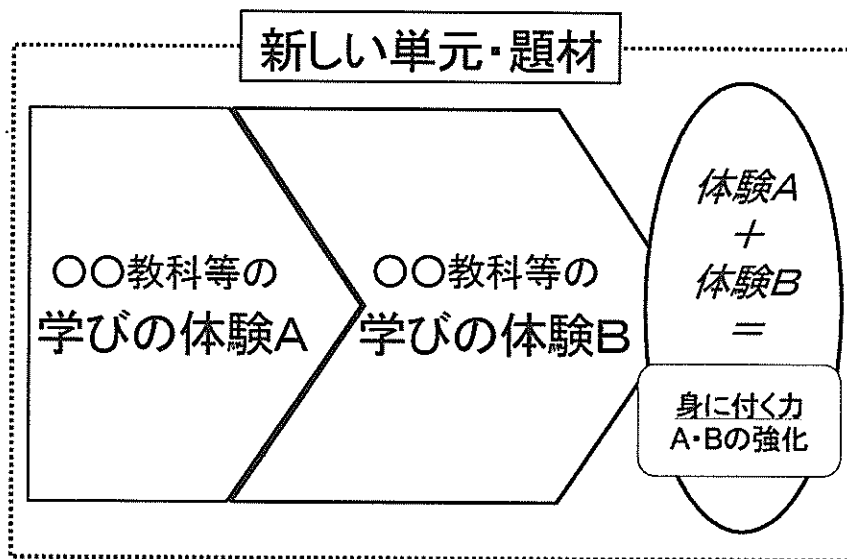
各教科等で、学習過程における学びの体験の統合のさせ方の可能性を考え、学習場面の設定、自己追究の手だてを実証授業で明らかにしてきた。これまでの実証で授業づくりの3つの形が明らかになってきた。

<各教科等で学びの体験を統合し、授業づくりに活かす3つの方法>

【系統】「自己のもつ知識・技能を駆使しながら、新たな課題に挑戦していく追究」

1つ目は、異なる学びの体験を系統的につなぐ方法である。たとえば、学びの体験Aで身に付けた知識・技能を活かしながら、学びの体験Bにおける新たな課題に挑戦できるように学びの体験をつなぐ単元・題材をつくる。これにより、子どもが新たな体験を行うときに、以前に行った体験の知を活かしたり、子どもが行った体験を、他の体験の知で意味付けたりすることで、現在行っている学びの体験の意義や身に付く力が強化されるというよさがある。

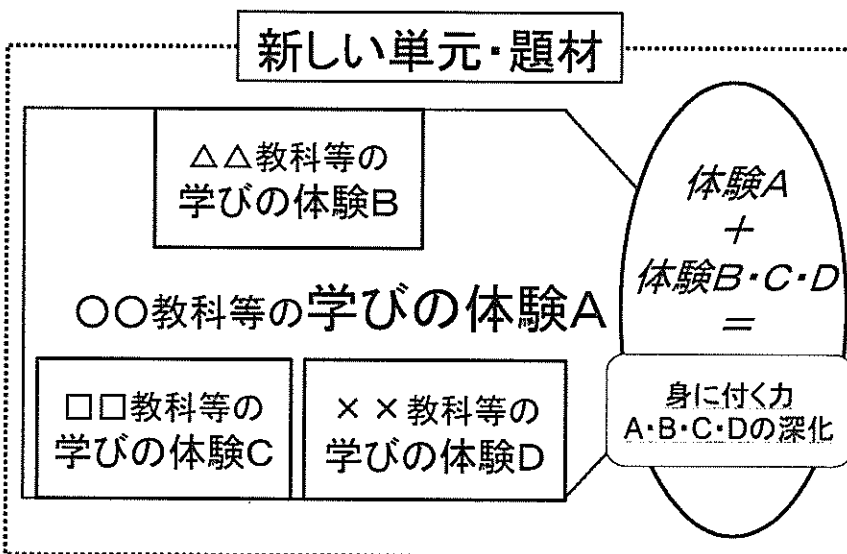
系統による学びの体験の統合



【補完】「自己追究を進め、他教科の知識・技能を加味しながら、根拠をより強化していく追究」

2つ目は、学びの体験にほかの学びの体験を補完的にくわえる方法である。たとえば、日常生活における課題は、いろいろな学びの知を合わせた形で応えを求めてくる。何かを計算するときにも、算数の力以外にデータをよむための社会科の資料をよむ力や、妥当性を判断するための自然科学の見方・考え方など、さまざまな力を合わせて解決しなければならないことが多いことに気付く。そのために、追究を進めるなかで得た知識・技能では足りない部分にほかの学びの体験で得た知識・技能を補うような単元・題材づくりを行う。このことで自分の見方・考え方がより深まるというよさがある。

補完による学びの体験の統合

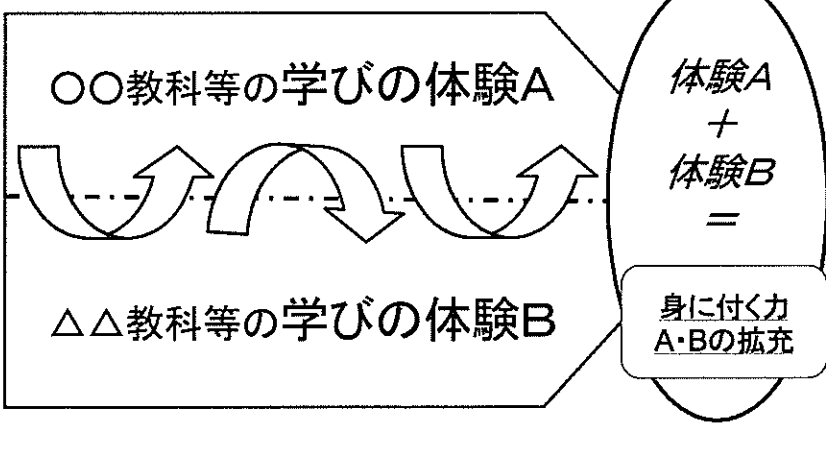


【関連】「共通の学習目標のもと、教科や領域学習の知識・技能が相互に発揮されながら進む追究」

3つ目は、2つ以上の学びの体験が関連的に高まるようにまとめる方法である。たとえば、目標が近い学びの体験が別々に行われるよりも、同時に行われることで、より充実するときにまとめて行っていく。そのために、共通の学習目標のもと、複数の学びの体験が相互に行われながら、力が身に付き発揮されるよう単元・題材をつくる。このように、2つ以上の豊かな体験を繰り返しながら行うことで、子どもたちは、より内容が充実された豊かな力を身に付けることができるというよさがある。

関連による学びの体験の統合

新しい単元・題材

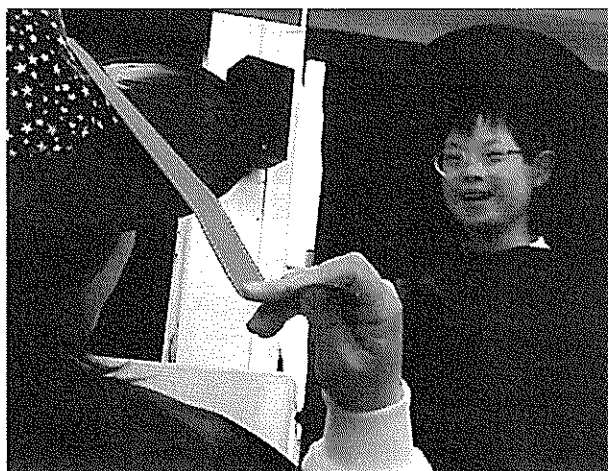


これら3つの学習内容の統合のさせ方の可能性を考えてきたことと、学習場面の設定、自己追究やその手だてを明らかにすることを考えてきたことが本年度の研究の主張である。そして、つくり出した単元・題材の調和的展開を通して本校のカリキュラムの構想づくりにつなぐ。

■ 特別支援教育研究「共生社会を豊に生きる子どもを育てる教育の創造」

これまで特別支援教育部では、個別の教育支援計画をいかした授業づくりを中心に研究を進めてきた。

本年度は、子ども一人一人の将来の自立的な生活を見通し、身の回りのもの、人、こととのかかわりを通して、できることやわかることを増やし、自分から働きかけることができる子どもをめざしている。そこで「選ぶ力、やりとりする力、知識・技能」を育むために取り組んできた。具体的には、一人一人の特性をいかした授業づくりを行っていくために、次のことを具体的に構想していく。



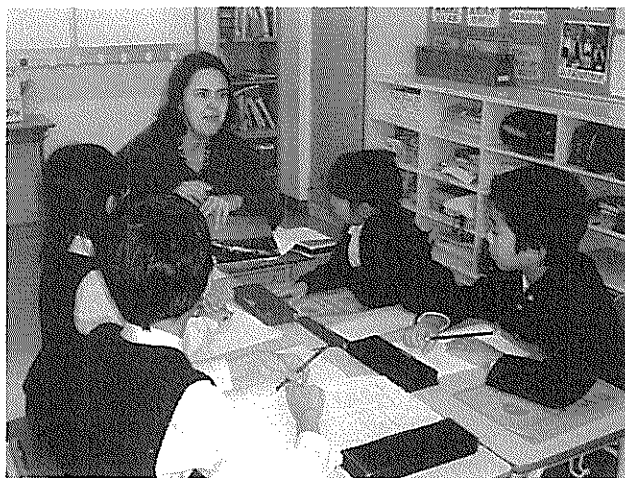
- ① 個別の教育支援計画から指導内容を明確にし重点化を図る。
- ② 一人一人の特性に応じる学習スタイル(教材開発・学習過程)の具体化
- ③ 障害の特性や個の特性に対応した指導形態、学習形態、学習空間、教材・教具などの具体的な支援の工夫

以上の3つのことを大切にしながら、現実社会や生活場面をとりいれた単元や題材の開発、学習過程の工夫、個別の教育支援計画から学習を構想し、支援の在り方を明らかにしている。

■ 帰国子女教育研究「自信と誇りを育む帰国子女教育」

学習適応と特性伸長をめざし、国語科、算数科、社会科での知識・技能を整理し、国際交流タイムと関連を図りながら、個に応じた学力を確実に身に付ける方向で教育課程の編成の研究を進めてきた。

本年度は、学習適応・個性伸長を調和的に図るために、各教科等での実態把握をもとに個人差を重視したコース別活動と国際交流タイムで発揮される個性を重視したコース別活動を仕組む授業づくりと支援の工夫を行っている。また、個人差を



重視する、国語科、算数科、社会科のコース別活動においては、一人一人に応じた個別のカリキュラムを作成している。その個別のカリキュラム作成の主な手順については、次の通りである。

- ① 各教科等の指導内容表を作成する。
- ② 指導内容表から、一人一人の未習内容と既習内容を明らかにする。
- ③ その教科等の柱となる領域の内容について系統性に配慮して配列する。
- ④ 柱となる領域の他の領域との関連を考慮して、関連付けられる内容について検討する。
- ⑤ 関連付けられる内容については柱の領域の内容と合わせて指導する。
- ⑥ 卒業までの残日数から配当時間を決める。
- ⑦ 学習内容が、通常学級に追いついた場合は、通常学級との交流を図る。

(研究主任 北 田 尚 雄)

<参考文献>

- (1) 奈須正裕／福岡教育大学附属福岡小学校「子どもが本気になる授業づくり
～各教科等・領域の単元づくりから発問・板書まで～」 明治図書 2007年
- (2) 中野和光・飯田慎司・大坪靖直・堺 正之／福岡教育大学附属福岡小学校
「評価で変える カリキュラムづくりー未来を拓く教科・総合の学びー」 明治図書 2003年
- (3) 奈須正裕 学校を変える教師の発想と実践 金子書房 2002年
- (4) 奈須正裕 学ぶ意欲を育てる 子どもが生きる学校づくり 金子書房 1996年
- (5) 安彦忠彦 著 「カリキュラム開発で進める学校改革」 明治図書 2003年
- (6) 安彦忠彦 編 新版カリキュラム研究入門 勁草書房 1999年
- (7) 市川伸一 編 学力から人間力へ 教育出版 2003年
- (8) 梶田叙一 〈自己を育てる〉真の主体性の確立 金子書房 1996年
- (9) 梶浦 真 協働学力～知の創造とこれからの学び～ 教育報道出版社 2005年
- (10) 梶浦 真 「学べる力」を伸ばす授業 教育報道出版社 2006年
- (11) 加藤 明 評価規準づくりの基礎・基本ー学力と成長を保障する教育方法ー
明治図書 2003年
- (12) 加藤 明 総合的な学習の基礎・基本ー評価規準による自立への挑戦ー 明治図書 2002年

第1学年の〈ふくおかプラン〉 (平成19年度 構想プラン)

時数	4 月	5 月	6 月	7 月	9 月
国語	272	えをみて はなそう	おはなし きかせて うたにあ わせてよ (10)	はなのよさをみつ けよう「どうぶつ みんなに おしえよう ほんよみ はっぴょうか げきをしよ う大きな かぶ (22)	くらべ てみよ う (16)
			せんせい あかね (20)		がっこうでみつけた 知らせよう (18)
算数	114	なかよしの はなしを つくろう (6)	10までのか ずをかぞえ よう (9)	わかざりを つくろう (ながさ) (9)	みんなでやって みよう！いくつ といくつゲーム (6)
				たしざん えほんを つくろう (7)	ひきざん えほんを つくろう (10)
				系統	系統
音楽	68	うたとともだちに なろう (4)	森のどうぶつ のリズムをつ くろう (4)	わくわくり ずむでたの しくあそぼ う (6)	どれみと ともだちになろう (10)
			補完		どんなようすか うかべてえんそう
図画工作	68	すきな ものがつ まったポ ケット (2)	ばんとなかよし (2)	ここは、ぼくの わたしのいきもの ランド (6)	キラキラゆらゆら かぜのおまつり (6)
				わたしのすてきな どうめいパック (6)	ペーパーボットで おもちゃづくり (8)
					関連
体育	90	うんどうの ですと (4)	たのしもう！ジャングルランナー (系統)	ウォーターランドで あそぼう (11)	忍者リ レーを愉 しもう (4)
			うまく あてよう よけよう！ ころころドッジボール (8)		リズム 変身あら つ ランド (6)
			系統		補完
生活	102	みんなだいすき ふぞくしょうがっこう (7)	おおきくそだてよう！ ころをこめたはなのおくりもの (14)	つくろう！コトコトカーレース (12)	にしようえんのむし とふれあおう (6)
			補完		わくわく おもちゃらんどであ そぼう (11)
					関連
学級活動	34	○学校のいきかえり (1) ○学校のきまり (1)	◎係を決めよう (1) ○給食のようい (1) ○よいあいさつ (1)	○虫歯きんをやっ けろ (1) ○雨の日の すごし方 (1) ◎教生先生さよなら 集会Ⅰ (2)	◎学級の歌をつくろう (2) ○水はこわいぞ (1) ○はじめての夏休み (1)
					○きょうから2学期 (1) ◎2学期の係をきめ よう (1) ○はじめての運動会 (1)
道徳の時間	34	・学校ってどんな ところ？ (1) ・時間のきまり (1) ・元気な声で、(1) 「おはよう」	・学校ってすてきな ところだね (1) ・ともだちパワーを あつめよう (1) ・さいごまで がんばろう (1)	・わき出る力を 感じよう (1) ・きまりは だれのもの (1)	・やさしい心って あたたかいね (2) ・自分の成長を 見つめよう (1)
					・危険から 身を守る (1) ・わがままを しないで (1) ・黙って いけないで (1)

10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
おんどく はっぴょう かい (16) ものをいえの人に	あつめたふ ゆのことば でカルタを つくろう (18) ふじだなぶんしゅうをつく ろう (10) 本はともだち「ともだちの どうぶつさん」(10)	おみせやさん ごっこを しよう (20) どうぶつの赤ちゃん のちがいをかんがえ てよう (20)	かみしばいを つくろう (読書活動) (20)		
たしざんを しよう (12)	かたちげえむを しよう (10)	ひきざんをしよう (13)	かずづくりゲーム をしよう (11) (100 までのかず) 系統	かずづくりゲームをし う (8) (100 までのたしざん ひきざん) 系統	
おもい しょう (10)	すてきなおとを みつけよう (6)	あそびうたを えらんであそぼう (8)	にっぽんのうた みんなのうた ランド (6)	おんがくで おはなししよう (8)	みんなであわ せて (6)
べたべたどろど ろへんしんねんど (6) 系統	すてきな たいようさん (6) 系統	つづきえ どんどん (8)	すてきな かたちが あつまると (4)	たまごパックが たくさんあつまると (8)	かみのつつが うたっておどっ て (6)
とびっこ ランドであそぼう (7) 系統	おしだし あそび (8)	マットで つぼうとび ばこランド であそぼう (8) 系統	うまく とってね！ 森のキャッ チボールゲ ーム (8)	なわとびあそび かけっこあそび (10)	ゲーム大かいを しよう (10) ※けりっこあそびを ふくめて
大すきかぞく (9) 補完	にしこうえんの あきとあそぼう (10)	学校のお正月をつ くろう (11) 補完	花いっぱい そつぎよ うをおいまいしょう (12) 補完	みんな大す きにしこう えん (6)	せいちょうにつき をしょうかいしよ う (5) 補完
○みんな友達 (1) ◎教生先生さよな ら集会Ⅱ (1) ○正しいせい (1) ○きれいな片付け (1)	○本の借り方返し方 (1) ◎好きな本のしょう かいをしよう (2)	◎クリスマス集会を しよう (2) ○冬休みのくらし (1)	◎3 学期の係を決め よう (1) ○ありがとう給食 (1)	○もし火事になった ら (1) ◎ありがとう 6 年生 (2) ○もうすぐ 2 年生 (1)	◎新 1 年生へのプレ ゼントをつくろう (2)
・いつも正直に (1) ・進んで手伝う (1) ・ありがとうの気持 ちを伝えよう (1)	・美しい心を 見つけよう (1) ・ぼくの町って すてきだよ (1) ・命の温かさ (1)	・みんなにもあるね 温かい心 (1) ・自分の成長を 見つめよう (2) ・大切に使う (1)	・何度も ねばり強く (1) ・礼儀正しい生活 (1) ・お世話になって いる人 (1)	・正直で素直な心 (1) ・正しい行い (1) ・きまりを守って 使う (1)	・家族の人の願い (1) ・自分の成長 (2)

第2学年の〈ふくおかプラン〉（平成19年度 構想プラン）

時数	4 月		5 月		6 月		7 月		9 月			
国語	280		よんで楽しもう「ふきのとう」(20)		作り方を教えますわたしのすてきなアクサリー！(20)		どのようなかわり合っているのかな？～サンゴの海の生き物たち～(20)		仲間とふれあう生き物の話を読もう「スイミー」ほか(選択読書)(20)		はっぴょう名人になろう(21)	

10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
読書をつなごう～ たんぼぼのちえを 比べて～ (20) 補完	「がまぐんとかえるくん」 シリーズを読もう (10)	ふじだな文集を書こう (10)	ことばのおもしろ さ発表会をしよう (25)	2 年生の思い出を書 きまとめよう (25)	お話を楽しもう 「スーホの白い馬 ほか」 (22) (選択読書)
お話大好きはっぴょうかいをひらこう (35)					
かけ算をしよう I (23)	かけ算をしよう II (26) 系統		かけ算九九表の クイズをつくろう (14) 系統	長いものさしを作っ てくらべよう (10)	大きい数をか ぞえよう (10) へんしん形 づくりゲー ムをしよう (7)
	すてきな音を見 つけよう (6)	あそび歌めぐりを しよう (8)	にっぽんの歌 みんなの歌ランド (5)	ビンゴに おくるリ ズムをつく ろう! (5) 補完	つくろう森 の音楽会 (3) ようすを思いうかべて 歌おう (7)
あきをあつめて たのしくあそぼう (8) 関連	おしゃれなすてきな 紙テープ (8)	きらきら シャボンから 何が見えた (4)	ねん土 であそ ぼう (2)	すてきな ペンケース ～おりぞめ和紙～ (10)	ありがとうの 気持ちをこめて (6) 関連
ジャングル リレーを 楽しもう (9)	おしあいひき あいあそび (5)	ころころドッカン! ターゲットゲー ム (9)	マット・とびば こランドであそ ぼう (8) 系統	なわとびあそび かけっこあそび (7)	つくろう! わくどきラ ンド (6) 系統
大きくそだて、みんなの秋やさい (継続 13)					
あらつのあきのまち (13) ↓	あらつフェスタをもちあげよう (5)	ぼくの・わたしのちゃんこ まつりを つくろう (11)	あらつ博物館をつくろう (13)	ぐんぐんのびる、 ぼく・わたし (6) 関連	
◎教生先生との お別れ会 (2) 系統	◎音楽のひみつ (1) ◎友達と仲良く しよう (1) ◎本のあつかい方 (1) ◎係のがんばりを 伝えよう (1)	◎友達のよさを見つ つけよう (2) ◎冬休みの過ごし方 (1)	◎3 学期の係を 決めよう (1) ◎楽しくなる食事 (1)	◎心の鬼を おいだそう (1) ◎さようなら 6 年生 (1)	◎学級文集をつく ろう (2) ◎もうすぐ 3 年生 (1)
・うそと正直 (1) ・自分の健康を見つ めよう (1)	・感謝の気持ち (1) ↓ ・助け合う 友達 (1) ・勇気をもって (1) 補完	・清らかな心 (1) ・自分の成長 (1) ・学級の仕事 (1)	・上手に使う (1) ・ねばり強く がんばる (1) ・みんなのものを 大切に (1)	・生き物の気持ち を考えて (1) ・美しさに感動する 心 (1) ・見つめよう自分の 生命! (1)	・支えられる生命 (1) 関連 ・やさしく親切に (1) ・自分の成長を見つ めよう (1)

第3学年の〈ふくおかプラン〉 (平成19年度 構想プラン)

時数	4 月	5 月	6 月	7 月	9 月		
国語	235	3 学年の読書計画をつくろう (13)	伝えよう！からし明太子、味のひみつ (20) 「きつつきの商売」 (8) 関連 系統	昔話から読書を広げよう 日本の話・世界の話 (選択読書) (25)	めざせプレゼンターⅠ (10) どの特長が大事なのかな？ (25)		
算数	150	全部でいくつ (かけ算九九) (8)	表とグラフに表そう 3 年調査隊 (13)	あなあきクイズをつくろう (15)	ばたばた絵をつくろう (12)	わり算をかたちで考えよう (6)	生活の時間や時こくを (8)
社会	70	あらつの町たんけん！ 附属小のまわりの特色を見つけよう (6) 系統	しょうかいしようわたしたちのまち福岡 (10) 系統 関連	発見！スーパーマーケットにひみつ (11)	福岡市の仕事をまとめよう (5)		
理科	70	植物のそだちをついせきしよう (種から発芽へ) (1)	昆虫のひみつをさぐろう (8)	磁石のはたらきを調べよう (10) 系統	植物のそだちをついせきしよう (花の咲くころの様子) (2) 補完	植物のそだちをついせきしよう (花の咲くころの様子) (3)	
音楽	60	楽き大好き！うたうの大好き！みんなで合唱そう (7)	ふしとリズムを楽しもう (8)	リコーダーと友だちになろう (4)	曲の感じをとらえよう・リコーダーと友だちになろうⅡ (7)		
図画工作	60	くねくね、ぐによぐによ絵の具のダンス (4) 系統	発見！まほうのつぼ (4) 系統	つくろう！教室のなかのふしぎな世界 (8)	水の世界を描こうカッパアーティスト (4) 関連	とう明カッパから生まれたものは (6)	
体育	90	スポーツテスト (4)	チャレンジてつぼう (4)	キックハンドベースボールを楽しもう！ (7)	あらつ障害物リレー (6)	めざせ！カッパ大賞 (9) 補完	楽しく表現・ダンスをしよう (6)
総合		あらつカッパ伝説～昔話から探検 あらつの町～ (18) 関連				夏休み自由研究 (7)	
英語		Shall we dance? (10)					
学級活動	35	○ぼくは○○です (1) ○学級目標を決めよう (1) ◎係を決めよう (1) 補完	◎教生先生ウェルカム集会をしよう (4) 補完	◎教生先生とのさよならパーティー (2) ○雨の日のすごし方 (1) ○けじめのある学習 (1)	◎1 学期の係活動をふり返ろう (1) ◎1 学期の集会 (1) ○夏休みの生活 (1)	○2 学期のめあて (1) ◎2 学期の係 (1) ○運動会に向けて (1) ◎教生先生のかんげい会Ⅱ (1)	
道徳の時間	35	・新しい気持ちで (1) ・きまりのある生活 (1) ・真心をこめてあいさつを (1)	・すばらしいお母さん (2) ・正直のよさ (1)	・わたしたちのふるさと (2) ・生き物を大切に (1)	・身の回りをきれいに (1) ・自分の成長を見つめよう (1) ・本当の友達 (1)	・めあてに向かって (1) ・お年寄りに感謝 (1) ・生命を大切に (1) 補完	

10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月			
「盲導犬の訓練」	あらつフェスタのパンフレットをつくろう (20) 系統	物語から命の大切さを考えよう (20)	ふじだな文集をつくろう (10) 詩を読もう (10)	「福岡のうまかもん」を説明書に書きまとめよう (20)	想ぞうをふくらませて書こう (20)	自分の力で読もう (選択読書活動) (27)		
長いものさし作りをしよう (11)	かけ算九九をひろげよう (11)	大きな数を調べよう (9)	長方形と正方形 (9) 系統	宝箱をつくろう (10) 系統	同じ数ずつわけよう (10)	なんでも重さダービー (10)	かけ算をひっ算でしよう (11)	そろばんで計算しよう (7)
3年キク部会を開いてこれからのキク作りについて考えよう (14)	あらつの今と昔 ～あらつ昔図かんをつくろう～	考えよう！福岡市紙ごみげんりょう作戦 補完 (15)						
昆虫や植物の成長図鑑をつくろう (6)	豆電球のおもちゃをつくろう (11) 系統	太陽の動きを調べよう (11)		さぐろう！日光のはたらき (12)	自分たちが育てた虫や草花は… (4)			
場面を音楽で表そうふしの流れやリズムにのってうたおう (8)	日本と世界のあそび歌集をつくろう (8)	リコーダーと友だちになろうⅢ (6)	ふしや音をえらんで表そう (5)	6年生への思いをこめて歌おう (7)				
光とかげのハーモニー (6)	とびらを開くと見える世界 (6)	ダンボールアーティスト (8)	集まれ！ すてきなカラフルなかま (8)	にじ色花畑をつくろう ※卒業式をかざろう (6)				
つくって楽しもう！探検マップ (9) 系統	あらつずもう (6)	バウンドゲームを楽しもう (10)	チャレンジとび箱 (8)	ちょうせん！なわとび遊び かけっこ遊び (10)	つくろう！わたしの元気もりもりブック (4)	つくろうラグハンドボール (7) 系統		
もっと知りたい福岡のうまかもん (15)	あらつフェスタ (10)	あらつなんでも会社 (20)						
Halloween party (15)			Let's play together (10)					
○正しい言葉づかい (1) ◎教生先生とのさよならパーティー (2) ○忘れ物をなくそう (1)	○ぼくわたしのいいところ (1) ◎係新聞コンクールをしよう (2) 補完	○男女なかよく (1) ◎2学期の集会 (1) ○夏休みの生活 (1)	◎3学期の係を決めよう (1) ○給食への感謝 (1)	◎係発表会をしよう (2)	○6年生へのプレゼントの内容を決めよう (1) ◎3学期の集会 (1) ○4年生に向けて (1)			
・みんなの使うもの (1) ・真心の行い (1) ・励まし合う友達 (1)	・困っているだれかのために (2) ・みんなが使う場所 (1) ・やさしい心 (1)	・正しい心、強い心 (2) ・自分の成長を見つめよう (1)	・友達のよさ (1) ・命を大切に (1) ・不思議なものに感謝する心 (1)	・みんなクラスの仲間 (3) ・わたしたちのふるさと (1)	・くじけない心 (2) ・自分の成長を見つめよう (1)			

第4学年の〈ふくおかプラン〉 (平成19年度 構想プラン)

時数	4 月	5 月	6 月	7 月	9 月
国語	235 4 学年の読書計画を立てよう (10)	詩を読もう (10) 自分が必要なものを選びたい。かきことの力 (15) 話し合ってよりよい意見にまとめよう (20)	松井さんの人柄を読み広げよう (25)	読書リレーをしよう (選択読書) (20)	めざせプレゼンターⅡ (10)
算数	150 大きな数を表そう (9) コマをつくろう (14) 系統	仮分数・帯分数と帯分数を帯分数(変わり方)へ (11)	変化をグラフに表そう (11) 系統	整数のわり算をしよう (12)	およその数を表そう (10) 考え方と式に表そう (11)
社会	85 わたしたちの住んでいる福岡県 (3)	ぼくらが守る！福岡市の水 (12)	あらつ防災調査レポート (10) 補完	星野村み力探検隊 (11)	
理科	90 春の生き物を調べよう (6)	空気や水の性質 (9)	補完 自然の中の水の行方を探ろう (12)	夏の生き物を調べよう (6) 金属や水のあたためり方熱気球 (15)	夏の星の神秘にふれよう (6)
音楽	60 みんなのアンサンブルをつくりだそう！※さくらさくら (4)	ボイスリズムアンサンブルをつくろう！ (6) 補完	曲の感じをとらえて歌おう (5)	ふしやリズムの流れにのって演奏しよう (6)	みんなのアンサンブルをつくりだそうⅡ (10)
図画工作	60 形や色から生まれたものは (6)	唐人町ランタンフェスティバル (10)	ストローと針金でおもちやをつくろう (6)	トントングコギコふしぎな生きもの (6) 系統	
体育	90 スポーツテスト (4)	私たちの成長ブックをつくろうⅠ (2) 補完 挑戦！鉄棒名人 (3) かわそう！つなごう！オリジナルタグラグビー (8)	いろいろな泳ぎに挑戦しよう (9)	リズムダンスレポリューション (6)	
総合		あらつ みんなにやさしいかんきょうプロジェクト (20)	夏休み自由研究 (7) 補完	アジアの	
英語			Have a nice trip! (6)		
学級活動	35 ○学級目標を決めよう (1) ○係を決めよう (1) ○はじめてのクラブ活動 (1)	○友達関係向上プロジェクト (3) ○教生先生のかんげいパーティーⅠ (1)	○教生先生さよならパーティーⅠ (2) ○唐人町フェスティバルに参加しよう (1)	○第1学期○○集会 (2) ○たばこと健康 (1) ○チャレンジ夏休み (1)	○2学期のめあて (1) ○2学期の係を決めよう (1) ○教生先生のかんげいパーティーⅠ (1)
道徳の時間	35 ・4年生になって (1) ・生きた礼儀 (1) ・目標をもって (1) ・まっすぐな心 (1)	・身近な動植物を大切に (1) ・友達のために (1) ・なるのは (2) 補完	・あたたかい思いやり (1) ・生きるⅠ (1) ・命を守る仕事 (1)	・ふるさとを思う (1) ・自然や動植物へのやさしさ (1)	・自分のことは自分で (1) ・古いものを大切に (2) ・目標に向かって (1)

10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
バリアフリーについて考えを発表しよう (26) 関連	目的に合わせた伝え方について読み深めよう (30)	ふじだ文集 (10) 学校づくりに参画しよう 1枚の写真から (10)	発信しよう～すてきな附属福岡小学校～ (23)	音楽遊びを作って遊ぼう (25)	自分の力で読もう (選択読書) (21)
はしたの数の表し方を調べよう (10)	三角形のステンドグラスをつくろう (15)	いろいろな数で同じずつ分けてみよう (20)	角度当てクイズをつくろう (10)	はしたの数の表し方を調べようⅡ (分数) (8)	面積の求め方を工夫しよう ～面積ランキング～ (16)
大島不思議隊探検隊 (11)	どうする？これからの八女ちゃん (15)	広めよう！ひきつがれる博多の行事 (7)	黒田節を伝えた二川相近を紹介しよう (7)	福岡県みか紹介ツアーをつくろう (9)	
月い不思議を調べよう (6)	秋の生き物を調べよう (4)	体積変化のなぞ (6)	冬の生き物を調べよう (6)	モーターカーパワーアップ作戦 (8) 補完	
お祭りの音楽めぐりをしよう (9)	にっぽんの歌 みんなの歌ランド (4)	音楽で北風こぞうを表現しよう (6)	オーケストラの音楽を楽しもう (5)	6年生への思いをこめて歌おう (5)	
もみじ他にからのおくりもの (8) 系統	心の四季を版に込めて (10)	オリジナルタングラムをつくろう (10)	かんしゃの気持ちと色と影に込めて (6)		
2種競技に挑戦しよう (6)	チャレンジマット (7)	あらつ相撲 (5)	セストボールを楽しもう (10)	つくろう！ハンドジャンプ (8) 系統	私たちの成長ブックをつくろうⅡ (2)
				なわとび・持久走に挑戦しよう (8)	スリーゴールサッカー楽しもう (9)
ひみつを探ろう (18)	あらつフェスタ (10)	附属小樹木調査隊 (15)			
X'mas card (14)			英語 Let's play card game (12)		
◎目を大切に (1) ◎学級文庫をつくろう (2) ◎教生先生さよならパーティーⅡ (2)	◎友達のよいところ (1) ◎係活動発表会をしよう (2) ◎献立と栄養 (1)	◎男女仲良く (1) ◎冬休みの計画 (1)	◎3学期の係を決めよう (1) ◎ボランティア作戦をしよう (2)	◎食物の秘密 (1) ◎学級文集をつくろう (1)	◎さようなら6年生 (1) ◎もうすぐ高学年 (1)
・日本のすばらしさ (1) ・思いやりの心をもって (1) ・学校のよさ (1) ・家族みんなで (1)	・進んで活動する (1) ・きまりを守る心 (2)	・勇気ある行動 (1) ・目標をもって生きるⅡ (1)	・何が大切かを考えて (1) ・みんなのために働く (2)	・おとしよりを大切にする心 (1) ・みんなのために (1) ・本当の友達 (1)	・真心の美しさ (1) ・自然を大切に (1) ・目標をもって生きるⅢ (1)

第5学年のくふくおかプラン (平成19年度 構想プラン)

時数	4 月	5 月	6 月	7 月	9 月
国語	180 5 学年の読書計画を立てよう (10)	詩を読み味わおう (13) 筆者の意図を読み取ろう「サクラソウとトラマルハナバチ」 (13) 関連	言葉の研究 レポート (15)	千年前の不思議を読み深めよう (16)	めざせ！プレゼンターⅢ (10) 関連
算数	150 整数と小数の関係を調べよう (14)	四角形を調べよう (20)	角度あてクイズをつくろう (9)	つくろう！分数カードゲームの攻略法 (14)	小数のかけ算やわり算をしよう (13)
社会	90 国土に生きる人々Ⅰ・発見！日本の地形 (3)	国土を生きし、食料生産に励む人・どうする？これからの米づくり (10)・福岡とらふぐアピール大作戦 (7) 関連		われら食料安全調査隊 (8)	国土を生きし工業生産に励む人々・発見！くらしの中の工業製品 (9)
理科	95 植物の成長の秘密を探ろう 発芽と養分 (8)	植物の成長の秘密を探ろう 肥料と日光 (9)	おもりの動きを調節する秘密 (11)	メダカの成長やひとの誕生 (11) 関連	生命のつながりを探ろう植物 (10)
音楽	50 豊かな表現をつくり出そうⅠ (5)	楽器で表そう！私たちの世界 (6)	歌い継ごう！博多の歌・博多の心 (5)		豊かな表現をつくり出そうⅡ (4)
図画工作	50 ギザギザベッタンから生まれたものは (6)	スチロールのカーニバル (6)	附小のわたしの自慢 (6)		夏の思い出を絵手紙で届けよう (2)
家庭	60 見つめよう！家庭生活 (10)	日曜日はおまかせ～とっておきのモーニングスूपづくり～ (6)	つくってみよう！オリジナルワッペン (7)		マイエブロンをつくろう (9)
体育	90 スポーツテスト (4)	スリーコースリレーを楽しもう (7)	つくろう！オリジナルバスケットボール (6) 系統	安全マップをつくろう (3)	あらかつ水泳に記録に挑戦 (10)
総合	75 挑戦！わたしたちの米づくり (18) 関連			夏休み研究レポート (7) 関連	米から広がるわたしたちの生活 (11)
英語	35 英語 Let's guide our school (12)				Let's make
学級活動	35 ○学級目標を決めよう (1) ○学級の組織を決めよう (1) ○学級の合い言葉を つくろう (1) ○つくろう！5の○プロジェクト (1)	○5の○集会の計画を立てよう (1) ○学級のシンボルマークをつくろう (1) ○5の○係の内容を見直そう ○○○集会の内容を決めよう (1)	○教生先生の歓迎会をしようⅠ (1) ○5の○集会をしよう (1) ○教生先生とのお別れ会をしようⅠ (2) 関連	○アドベンチャースクールに向かって (1) ○アドベンチャースクールでの遊びを決めよう (1) ○夏休みの計画	○2学期の学級組織をつくろう (1) ○運動会に向けて (1) ○5の○係活動しよう (1)
道徳の時間	35 ・5年生としての自覚 (2) ・あいさつの大切さ (1) 関連 ・ふるさとを大切に (1)	・男女の理解 (1) ・日本人のすばらしさ (1) ・約束や規則の尊重 (1)	・危機的な生命？仕事の責任？ (2) ・生きがいを見つけ (2)	・広場はだれのもの (1) ・自分の成長を見つめるⅠ (1) ・友達のために (1)	・工夫して新しいことを (1) ・困難を乗り越えて (2)

10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
筆者の意図を読み取ろう～インスタント食品と私たち～ (25)	人ともとのつきあい方 (23)	人物の生き方を读もう わらぐつの中の神様 (15) 藤棚文集を作ろう (10) 関連	言葉の研究レポートⅡ (8)	自分の考えを広げまとめよう「コマーシャルと私たち」 (10) 本の世界を旅しよう (選択読書) (12)	
計算ゲームで小数のかけ算を考えよう (15)	小数の割り算をしよう (15) 割合をグラフで表そう (15)		面積ハンドブックをつくろう (21) 系統	樹冠面積エコ調査隊 (8) ～円の面積を調べて～ 系統	形をつくって面積取りをしよう (6)
国土を生かし工業生産に励む人々 ・徹底追究！わが国の自動車生産 (15)		国土を結ぶ人々 ・発見！情報を活用する私達 (8) ・挑戦！コンビニ一日店長 (12)		つくろう！日本列島探検旅行プラン (10)	取り戻せ！青空 (8)
天気の変化と自然災害 (6)	流れる水のはたらき (8)	てこを使ったリフトゲーム (14) 補完	つくろうミネラル結晶 (14)		ジャガイモを植えよう (4)
豊かな表現をつくり出そうⅡ (2) 音楽の形や仕組みを生かそう (7)		心をいやす音楽をつくろう (6) 関連	ふしとリズムを組み合わせて (6)	音楽でえがこう (4)	6年生への思いをこめて歌おう (5)
切り抜き！切り立て！フィッシュレリーフ (8)	みんなでつくろう！ライトセラピーの世界 (10) 関連		ペットボトルとスチレンボールから (10)		美しい色、楽しい形 (2)
野菜で健康大作戦！～ゆでたりいためたりしよう～ (6)	スッパリ大作戦 (10) 関連		家族がそろう場所をコーディネートしよう！ (10)	できるようになったことを生かして (2)	
ソフトバレーボールを楽しもう (3)	ハイジャンプのひみつをさぐろう (7)	心の健康 (3) つくろう！コープジャンプ (6) 系統	なわとび・クロスカントリーに挑戦しよう (10)	サッカーを楽しもう (10)	
	あらつ場所 (5) 系統	つくろう！器械運動 (8) 系統			
つくろう！みんなにやさしいまちづくり (14)	あらつフェスタ (10)		めざせ！野菜ソムリエ (15) 補完		
a ghost pumpkin (12)			Let's cooking (11)		
○男女の協力 (1) ◎教生先生とのお別れ会をしようⅡ (2) ◎5の○ボランティアの計画を立てよう (1)	○あらつフェスタに向けて (1) ○5の○集会Ⅱをしよう (3)	○これが5の○遠行会 (1) ◎5の○ボランティアをしよう (1) 系統	◎2学期の学級組織をつくろう (1) ◎5の○ボランティアⅡの計画を見直そう (1) 系統	◎5の○係発表会をしよう (1) ◎5の○ボランティアⅡをしよう (2) 系統	◎5の○プロジェクトを振り返り、お祝いをしよう (3)
・力強く生き抜く (2) ・健康と安全 (1) ・自分に誠実に (1)	・私の学校じまん (2) ・本当の親切とは？ (1) 補完	・高い目標をもって (1) ・温かい家族 (2) ・自分の成長を見つめるⅡ (1)	・公平な心で (1) ・大切に思う心の美しさ (1)	・希望をもって (1) ・広い心 (1) ・自然を愛する心 (2)	・本当の思いやり (1) ・自分の成長を見つめるⅢ (1)

第6学年のくふくおかプラン (平成19年度 構想プラン)

時数		4 月		5 月		6 月		7 月		9 月	
国語	175	6 学年の読書計画を立てよう (15)	短歌と俳句を読み味わおう (8)	わたしがとらえた筆者の考え!!～あなたはどうか考える?～ (12)		わたしはこう考える～優先席は必要か?～ (15)		広げよう! 読書ネットワーク、本の楽しさお届け隊 (18)	めぐせプレゼンターⅣ (10)		
算数	150	整数のなかまづくり (12)		見積もって調べよう (5)	平均データで比べよう (8)	分数のたし算・ひき算クイズをつくろう (15)	ブロックパズルのピースをつくろう (12)	立体の大きさを調べよう (17)			
社会	100	Ⅰ 日本のあゆみ (67)									
理科	95	私たちの周りの環境を見つめよう (4)	養分のつくられ方について考えよう (4)	生活で活かされる水溶液の性質 (14)		ものを燃やす仕組み (14)		生きるために必要な養分のつくられ方について考えよう (6) (動物)	電磁石パワーアップ作戦 (13)		
音楽	50	豊かな表現をつくり出そうⅠ (12)				世界の音楽めぐりをしよう (6)				豊かな表現をつくり出そうⅡ (8)	
図画工作	50	ぼくの私のすてきなフェイス (4)		形と色のファンタジー (6)		くらしにおしゃれな空間を～創造インテリア～ (8)		すてきなオブジェ展を開こう (4)			
家庭	55	私にできることを見直そう (2)		おいしいごはんとおみそしるを作ろう! (12)		さわやかライフをコーディネート (9)		我が家のオリジナルバッグをつくろう (15)			
体育	90	スポーツテスト (4)	ワープリレーを楽しもう (7)	つくろう! ユニバーサル・ホッケー (9)		あらつ水泳記録に挑戦 (10)		テーマ表現 21 (5)	スピードジャンプの秘密をさぐる (6)		
総合	75	祝! 築城 400 年 わたしのまちの福岡城プロジェクト (20)						夏休み自由研究 (3)			
英語	35	Let's enjoy brekfast! (10)									
学級活動	35	○最高学年としての役割 (1) ○学級目標を決めよう (1) ○1 学期のテーマを決めよう (1) ○学級組織をつくろう (1)		◎1 年生のお世話をしよう (1) ◎わたしたちの委員会活動をつくろう (2) ◎教生先生の歓迎会Ⅰ (1)		◎学級の歌をつくろう (2) ◎さようなら教生先生Ⅰ (2)		○アドベンチャースクールに向けて (1) ○夏休みの計画 (1)		○2 学期のめあてを立てよう (1) ◎2 学期の学級組織 (1) ◎最後の運動会・月見学芸会 (1) ◎教生先生の歓迎会Ⅱ (1)	
道徳の時間	35	・最上級生として出発 (2) ・役割と責任の自覚 (1)		・かがやけ生命 (2) ・何のために生きるⅠ (1)		・親切とは? (2) ・本当の友達 (1)		・素直な反省 (1) ・感謝する心 (1) ・男女の友情と協力 (1)		・生きる輝きをもって (1) ・公德を守る心 (1) ・自分らしさって? (2)	

10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
ともに生きるために筆者の考えをもとに伝え合おう (15)	ふじだな文集をつくろう (10) 表現を味わおう「やまなし」 (15)	文化について考えを発信しよう (18)	情報を使って考えよう～人類よ、宇宙人になれ～ (24)	「ことば」について考えよう (10)	卒業するあなたたちに (選択読書活動)「海の命」、「生きる」ほか (10) 関連
単位数あたりの大きさで比べよう (16)	分数のかけ算・わり算の仕方を調べよう (29)	比を使って比べよう (4) 系統	比例するものを調べよう (9) 系統	算数のまとめ (23)	
文化を創った人々Ⅱ 日本文化の源流をさぐるⅢ 文明開化 (5)	時代を創った人々Ⅱ 陸奥宗光 (5)	時代を創った人々Ⅲ 15 年戦争 (5)	Ⅱ 生活と政治 (15) ふくふくプラザができるまで (7) 日本国憲法 (8)	Ⅲ 世界の中の日本 (18) 世界の国を訪ねよう (8) スポーツ交流会 (4) 世界はひとつ国際連合の働き (6)	
生きるために必要養分のつけられ方について考えよう (10) (植物)	私たちの体の不思議を探ろう (13) 補完	土地のつくりと変化 (12)	私たちの周りの環境を見つめよう (8)		
音楽の発展につくした音楽家たち (6)	日本の歌 みんなの歌ランド (4)	室内系の音楽を奏しもう (4)	音楽でえがこう (5)	6 年間の思いをこめて歌おう (5)	
ベニヤ板のカーニバル (8)	木版画アーティスト (6)	伝えよう！私たちのポスターメッセージ (6)	お世話になった方に絵手紙をおくろう (6) 関連		
	家族も元気！マイオリジナル弁当をつくろう (9)	家族の一員としての自分 (2)	伝えよう！ありがとうの気持ち (6) 関連		
ソフトボールを楽しもう (7)	あらつ場所 (5)	健康な生活をしよう (4) ゆがみ運動をつくろう (5) 補完	器械運動発表会を開こう (8)	縄跳び・持久走に挑戦しよう (10) 補完	サッカーを楽しもう (10)
つくろう！あらつ座 (18)	あらつフェスタ (7)	あらつコーポレーション (15) 補完			
Let's enjoy communication! (15)		Let's play foreign music! (10)			
○学習環境をつくろう (1) ○さようなら教生先生Ⅱ (2) ○思い出をつくる修学旅行 (1)	◎進めようボランティア活動 (2) ◎修学旅行を自分たちで (1) 補完 ◎第 2 学期の○○集会の計画を立てよう (1)	○心も体もリラックス (1) ◎第 2 学期の○○集会 (1)	◎3 学期の学級組織をつくろう (1) ◎アルバムクラス用ページの内容を決めよう (1)	◎第 3 学期の○○集会の計画を立てよう (1) ◎後輩へ思いを伝えよう (2)	◎第 3 学期の○○集会 (1) ○中学校へ向けて (1)
・深い思いやり (1) ・世界の中の私 (1) ・すぐれた文化財 (1)	・奉仕する心 (2) ・環境と資源を大切に (2) ・集団の中での役割 (1)	・生きることの素晴らしさ (1) ・過ちを許す (1)	・家族の一員として (2) ・何のために生きるⅡ (1)	・地球を救えるか？ (2) ・人間の力を超えたもの (1)	・礼儀は心の表れ (1) ・何のために生きるⅢ (2) 関連

各教科等の構想と指導の実際

○ 国語科学習の構想

言語で論理的に考え表現する国語科学習

○ はじめに

近年の国語科学習では、子どもの関心・意欲を大切にするあまり、言語活動を活発に営むことに重点が置かれ、肝心の言語活動を通して知識・技能を身に付けさせることや、論理的に思考することが軽視されるきらいがあった。その結果、学力調査等で、読解力、記述式問題に課題があることが分かり、基礎・基本の徹底や思考力の重視が叫ばれるようになった。そこで、本校では、国語科はすべての教科等の基盤となる教科であり、〈ふくおかプラン〉の土台としての役割・立場を担っているという、国語科固有の目的を全うする。つまり、言語で思考することを大切にし、基礎・基本を確実に定着させていく。

1 主題について

言葉で論理的に考え表現するとは、比較したり関係付けたり推論したりすることにより相手から得た情報の意味を理解し、自分の立場で解釈して書いたり話したりすることである。そのためには、「話すこと」「聞くこと」「書くこと」「読むこと」という言語活動を営むための基礎・基本となる知識・技能と、「比較する力」、「順序をたどる力」、「原因・理由・根拠を求める力」、「定義づける力」、「類別する力」、「推論(類比・対比)する力」という論理的思考力の両面を高めることが大切になる。

そのためには、教師が基礎・基本となる知識・技能をスキルとして機械的に子どもに理解させようとする授業ではいけない。子どもが追究の必要性を感じ、強い課題意識をもって、言葉と自分から進んでかかわる言語主体となる授業づくりが必要となるのである。

つまり、言葉で論理的に考え説明する国語科学習とは、強い課題意識のもと、子どもが言語に自分からかかわりながら、考える力と連動した形で、正確に理解し適切に表現するための知識・技能を高める国語科学習である。

そのためには、次の2つの条件をふまえた国語科学習づくりが不可欠となる。

関係性…追究する対象が自分とのかかわりでとらえられ、追究の必要性を感じるものであること
総合性…国語科で学んだ知識・技能とともに、他教科等で学んだ知識・技能も駆使しなければ、自分の応えを出せないものであること

- 解決すべき課題を自らが意識して、自分から進んで、課題解決にあたる子ども (学ぶ意欲)
- 学んだ知識・技能を駆使して相手の伝えたいことを正しく理解し、自分の考えをつくる子ども (能力)
- つくった自分の考えが他者に認められ、自分に自信をもっている子ども (自己の自覚)

～筆者の考えとの比較活動の展開～

光 延 正 次 郎

2 副主題について

筆者の考えとの比較とは、筆者が文章を通して伝えたいことを、自分の学習体験と比べたり、関係付けたり、推論したりしながら正しく理解し、自分の立場で解釈することである。筆者の考えとの比較活動とは、筆者が文章を通して伝えたいことを、「本当にそういえるのか」という課題意識をもちながら、教科等での自分の学習体験と比べたり、関係付けたり、推論したりしながら分析して「こう考えると納得できる」と正しく理解し、「自分はこう考える」と自分の立場で解釈することである。

筆者の考えとの比較活動の展開とは、筆者の考えを、①他教科等で学んだ体験との比較、②国語科や他教科等で学んだ体験との比較、③国語科で学んだ体験との比較の3通りの組み合わせ順で比べ、筆者の考えを正しく理解し、自分の立場で解釈することである。

3 具体的構想

● 教材文を選定し、子どもたちの学習体験を分析する

(1) 教材文を選定する

- 子どもたちが社会科や理科など他教科等で学んだ知識を重ねて読み進めていくもの
- 文章の情報だけでは解決することができず、他の情報を求めることが予想されるもの

(2) 学習体験を分析する

筆者の考えと自分の学習体験とのズレから生み出された課題を解決するために、筆者の考えに子どもたちが比較することが予想される国語科や他教科等で学んだ知識・経験を分析しておく。

● 活動構成の工夫

(1) 筆者の考えとの比較活動の構成

「筆者の考えとの比較活動」を「他教科等で学んだ体験との比較活動」から「国語科や他教科等で学んだ体験の比較活動」へ、そして「国語科で学んだ体験の比較活動」へという順に位置付ける。

(2) 筆者の考えとの比較活動の具体像

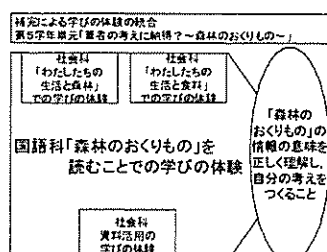
活動	ねらい	具体的な活動
他教科等で学んだ体験との比較活動	「本当にそういえるのか」 文章を追究しようという課題をもつ	・ 文章の結論部分に述べられている筆者の考えと他教科等で学んだ知識や経験を比べ、浮かんだ疑問について話し合う。
国語科や他教科等で学んだ体験の比較活動	「こう考えると納得できる」 課題を追究し、筆者の考えを正しく理解する	・ 筆者の考えやその根拠となる事象との関係が妥当か、国語科や他教科等で学んだ知識や経験から分析したことを書き込む。
国語科で学んだ体験の比較活動	「自分はこう考える」 正しく理解した筆者の考えを自分の立場から価値付ける	・ これまでの流れ図や板書を参考にしながら、自分の考えを書きまとめる。 ・ 自分の立場にネームプレートを貼る。

第5学年 単元「筆者の考えに納得?～森林のおくりもの～」

(1) 目標

- 1 「森林を育てる仕事のすばらしさ、とうとさを考えなければならない」という筆者の考えやその根拠となる事象について自分が読み取ったことを進んで話し合うことができる。
- 2 自分が学んだ知識や経験と比較したり推論したりしながら、筆者の考えやその根拠となる事象の意味を正しく理解し、理解したことに対する自分の考えをもつことができる。

(2) 単元の考え方

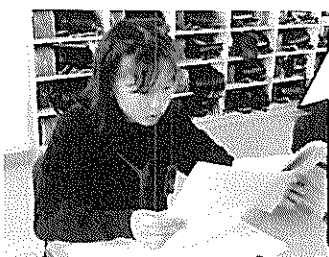


- 「筆者は、何を根拠にして森林を育てる仕事のすばらしさ、とうとさを考えなければならないといっているのか」という課題をもとに、自分が社会科で学んだ知識や経験を補いながら、筆者の考える「森林を育てる仕事のすばらしさ、とうとさ」を正しく理解し、自分の立場で解釈することができるようにする。

(3) 学習の流れ

つかむ段階：1～2/8時

筆者の考えと他教科等で学んだ体験とを比べ、浮かんだ疑問について話し合う。



森林を育てる仕事
がすばらしく尊いなら
ば、林業で働く人は
増えるはずだけど
...

写真1 筆者は何を根拠に…

森林を育てる仕事はすばらしく尊いならば、林業で働く人は増えるはずだ。どうして筆者は、森林を育てる仕事のすばらしさ、とうとさを考えなければならないといっているのだろう。

資料1 ○児の考え

ふかめる段階：3～6/8時

筆者の考えの根拠となる事象の意味を読み取り、自分の考えをまとめる。

つかむ段階では、読むめあてを把握することをねらいとしている。

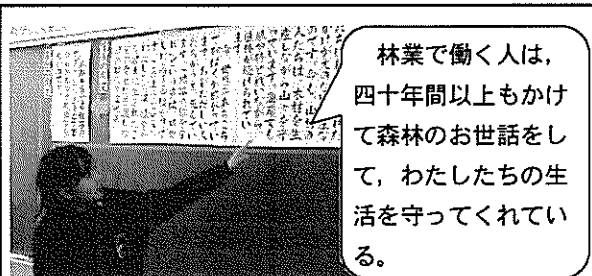
【教師の支援】

※ そのために、結論部に述べてある「森林を育てる仕事のすばらしさ、とうとさを考えなければならないのです」という筆者の考えと、「すばらしく尊いはずの林業で働く人は減っている」という自分の社会科で学んだ知識や経験とを比較させた。

【子どもの様子】

- 子どもたちは、「森林を育てる仕事はすばらしく尊いならば、林業で働く人は増えるはずだ」と考え、「筆者は、何を根拠にして森林を育てる仕事のすばらしさ、とうとさを考えなければならないといっているのか」という読むめあてを把握することができた。

ふかめる段階では、筆者の考えの根拠となる事象の意味を読み取り、筆者の考えに対する自分の考えをまとめることをねらいとしている。



林業で働く人は、四十年間以上もかけて森林のお世話をし、わたしたちの生活を守ってくれている。

写真2 社会科で学習したように…



林業で働く人がいないと森林が破壊され、砂漠化が広がってしまう。

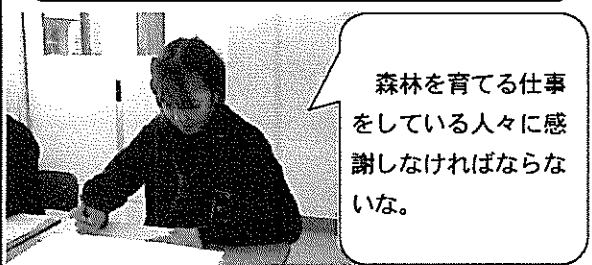
写真3 社会科資料集にあるように…

もし、森林の大切さだけが書いてあったらまだ納得がいかなかったけど、「風砂と戦いながら、植林が続けられています」というところで、山村の人たちが命がけでわたしたちの生活を守ってくれているので納得できました。

資料2 ○児の考え

まとめる段階：7～8/時

筆者の考えに対する自分の考えを書きまとめる。



森林を育てる仕事をしている人々に感謝しなければならない。

写真4 感謝しなければならない

【考察】

- ◎ 「本当にそういえるのか」という文章を追究する強い課題意識をもたせ、他教科等で学んだ体験との比較活動、国語科や他教科等で学んだ体験との比較活動、国語科で学んだ体験との比較活動という3つの筆者の考えとの比較活動を位置付けると、他教科等で学んだ知識や経験を総動員して、①筆者の考えを正しく理解し、②筆者の考えに対する自分の考えをつくることができた。

前時まで、○児は、「森林の大切さについては書かれているが、森林を守る仕事の大切さについては書かれていないから、筆者の考えに納得できない」と考えていた。

【教師の支援】

※ そこで、筆者の考えの根拠となる事象をに線を引き、社会科等で学んだ体験と比較したり推論したりしながら、納得できるか書き込ませ、話し合わせた。

※ 話し合い終了後、理解した事象の意味から、筆者の考えに対する自分の考えをまとめさせた。

【子どもの様子】

- すると、○児は、「林業で働く人は、四十年間以上もかけて森林のお世話をし、わたしたちの生活を守ってくれている。また、林業で働く人がいないと森林が破壊され、砂漠化が広がってしまう。納得できる」と社会科で学んだ体験と比較したり推論したりしながら事象の意味を理解し、筆者の考えに納得することができた。

まとめる段階では、筆者の考えを自分の立場で解釈させることをねらいとしている。

【教師の支援】

※ 学習の様子を流れ図で振り返らせながら、筆者の考えに対する自分の考えを千字程度で書きまとめさせた。

【子どもの様子】

- 森林を育てる仕事のすばらしさ、とうとさを正しく理解し、「感謝しなければならない」と自分の考えをつくっていた。

～目的に応じて表現を高める検討活動の展開～

平 川 洋 一

2 副主題について

目的に応じてとは、「今自分は何のために書いているのか」、そのために「どんな内容」を「どのように表しているのか」を、行きつ戻りつしながらふり返ることである。ふり返る必要感をもたせるためには、指標となるモデルを提示することが不可欠である。

目的に応じて表現を高める検討活動とは、自分の表現とモデルとの比較の中で、問題点に自ら気づき、必要とあらば、言語活動の内容・方法・方向性を修正していくことである。また、自分で納得しながら、確かに表現を高めていくことができるように、「学級全体でのモデル検討活動」、「個の表現の検討活動」、「同じ問題点をもっていた友達との検討活動」の順に位置付けるようにする。

目的に応じて表現を高める検討活動の展開とは、「何を」「どのように」という表現の内容と方法を、具体的なモデルを示してその妥当性を見直す必要感を生み出し、読み手に分かりやすく表していこうとしていく書くことの学習過程である。

3 具体的構想

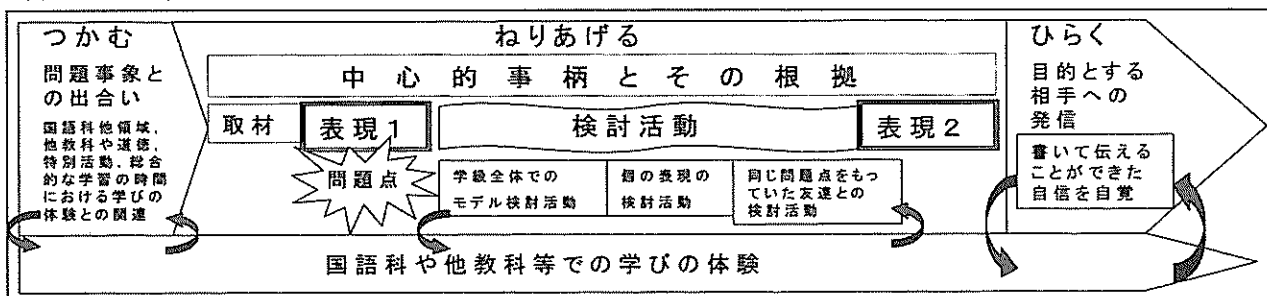
● 教材化の工夫

子どもが、目的意識を持続しながら、書くことの学習に取り組めるように、国語科の他領域、他教科や道徳、特別活動、総合的な学習の時間との学びの体験の統合（関連）を図ることによって、以下のような視点で題材を選定し、各活動を具体化していく。

● 活動構成の工夫

(1) 目的に応じて表現を高める検討活動の活動構成

書くことの内容と書き表し方を検討しながら、表現を確かにする学習を以下の図のように構成する。



(2) 目的に応じて表現を高める検討活動の具体像

検討活動	ねらい	活動の詳細
①学級全体でのモデル検討活動	学級全体で、モデルのよさをとらえ、見直す観点を生み出す。	学級全体の問題点をとらえ、指導内容の数だけモデルを提示し、目的や相手への効果を考えながらよさを話し合う。
②個の表現の検討活動	見直す観点をもとに、自らの表現を修正する。	修正していく内容について、付箋紙に書き出す、まとまりごとに区切りを入れる、不必要なことを削除する。
③同じ問題点をもっていた友達との検討活動	個の表現の検討活動の妥当性を他者と吟味し合うことによって表現を確かにする。	自分の表現の問題点とその修正点を、根拠を明らかにして説明し合う。互いが納得した点にはシールを貼る。さらに修正が必要な場合は、書き加える。

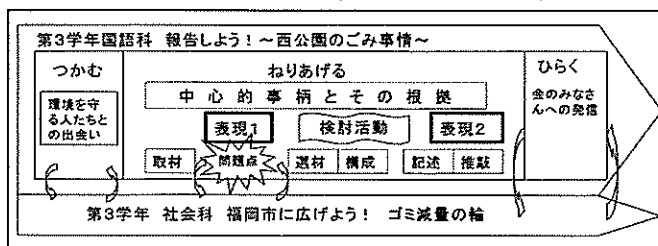
第3学年 単元「報告しよう!～西公園のごみ事じょう～」

(1) 目 標

- 1 環境を守る人たちとの出会いをきっかけに、身近な環境を調べることを通して、社会科で追究した福岡市のごみ減量対策の意味を再考したり、自分の生活の問題点をふり返ったりしながら、環境を守っていく人たちの輪を広げていこうとする意欲を高めることができる。
- 2 伝えたい西公園のごみ事情を示す材料と伝えたいことの中心、その構成の在り方を明らかにしながら、相手意識や目的意識にもとづいた報告文に書きまとめることができる。

(2) 単元の考え方

- 本単元は、社会科でごみを減らすための福岡市の取り組みをもとに、ごみを取り除いて地域の環境を守っていこうとする「黒門川・菰川を守る会」の人との出会いを位置付ける。そのすばらしさをもとに、身近な西公園のごみ事情を調べ美化活動に取り組んだことを、会の人たちに向けて報告文にまとめていくことができるようにすることをねらいとしている。本単元は、社会科で追究した福岡市ゴミ減量対策について、関連による学びの統合によってごみに対する見方・考え方を深めていくよう構想していく。



(3) 学習の流れ

つかむ段階：1～2/8時

ごみを取り除く人と出会い、身近な環境のごみ事情への課題をもつ



今日、西公園の掃除をしました。全然ごみがないかと思っていただけ、よく見るとごみが多くてびっくりしました。会のみなさんにこのことを知らせたらいいと思います。

資料1 ごみ探検のA児の感想

つかむ段階では、社会科で追究してきた福岡市のごみを減らす取り組みとごみを取り除いて環境を守る人々とを比較し、身近な環境のごみ事情に課題意識をもたせることをねらいとしている。

【教師の支援】

- ※ 黒門川・菰川を守る会の人たちが川の清掃活動に取り組む様子をVTRで視聴し、感想を交流し合い、自分たちにもできそうなことについて話し合う活動を行った。
- ※ 自分たちに身近な西公園のごみ事情を調べていく計画を立て、取材活動を行った。

【子どもの様子】

- 子どもたちは、VTRから「ごみを取り除く」という視点に気付き、会のみなさんの取り組みに驚きをもっていた。感想の交流、ごみ探検では、意外にも多いごみの量から、会のみなさんに伝えていく必要感をもつことができた。

ねりあげる段階：3～7/8時

会の方々への報告文を書きまとめる。

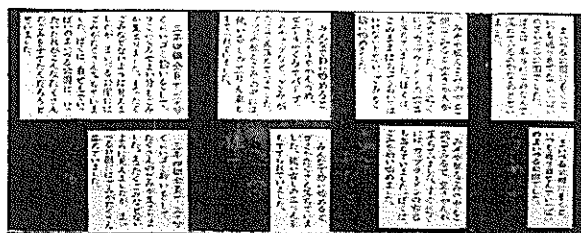
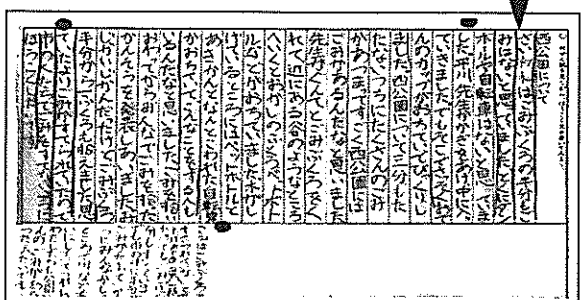


写真1 比較提示したモデル文1・2

- ◎ そのときの思いを入れる
- ◎ 様子を入れてくわしくする。

資料2 モデルから生み出した観点



資料3 まとまりごとに区切りを入れ、付箋紙に
思いを書き出したA児の構想

あじわう段階：8/8

会の方々に報告文を発信する。



資料4 単元終末でのA児の発言(感想)

【考 察】

社会科と関連による学びの統合で単元を構成していったことで、ごみに対する見方・考え方を深めながら新たに発信していく目的、表現方法や内容を高めていくことができた。また、モデルを提示してその問題点を学級全体で共通理解し、個とペアによる検討活動を位置付けたことで、自己の構想の問題点を修正していくことができた。これは、子どもの問題点を把握し、モデルを提示したこと、同じ問題点をもつ子ども同士で検討させたことが有効に作用したためであると考えられる。

ねりあげる段階では、会のみなさんに、ごみを取り除く視点から追究したことを知らせる報告文の構想を高めていくことをねらいとしている。

【教師の支援】

- ※ 子どもが個でまとめた構想を、「文のまとまり」、「思いや様子の具体化」という観点から問題点を把握し、2つの観点から2つのモデルを比較しながら提示した。
- ※ モデルから観点を見出させ、自分の構想を見直す検討活動を位置付けた。
- ※ 個で検討した構想を、同様の問題点をもつ子どもと検討し合う場を位置付けた。

【子どもの様子】

- 資料3のように、2つのモデルから、検討する観点を「まとまり」「様子の具体化、ごみに対する見方の変容」の2点から生み出し、A児は個の検討と同様の問題点をもつB児との検討によって、自己の構想を高めることができた。
- まとまりをつくり、具体化した事柄をもとに、構想を立て、記述していくことができた。

あじわう段階では、報告文を会の方々に発信し、目的達成の満足感と書いて伝えることの有用感を味わわせることをねらいとしている。

【教師の支援】

- ※ 会の方々に具体的な感想をいただくように依頼する。

【子どもの様子】

- 会の方々から、「ごみを取り除く」という視点を見出したことへの評価、美化活動に取り組んでみたことへの評価をいただき、資料4のような単元の感想をまとめることができた。

○ 社会科学習の構想

社会形成者としての合理的意思決定ができる社会科学習

○ はじめに

子どもたちを取りまく現代社会は、高度化・複雑化し、その変化は加速の一途を辿っている。このような状況において、社会科には、社会を形成する一員として、主体的かつ調和的に対応できる力を身に付けることが求められている。つまり、社会の変化に柔軟に対応しながら自分の生き方をつくることのできる人間の育成が求められているのである。そのために、社会科では、社会生活について理解を図ることと、社会生活で遭遇しうる様々な状況に知識や技能を活用しながら公正に判断し、社会のあるべき姿や社会生活のなかで自らの行動を決めることのできる子どもの育成が求められている。そこで、実社会の事象を分析し、判断する学習を意図的・計画的にカリキュラムに位置付けていく。

1 主題について

社会形成者としての合理的意思決定ができるとは、一市民としてよりよい社会生活を実現するために、社会生活の構造を把握し、それを活用した価値判断に基づいて選択や決定ができることである。実社会に存在する様々な判断場面では、複雑な背景を反映しての判断が必要になってくる。そのためには、対象となる社会的事象に対しての社会認識内容を豊かに育成し、それを判断材料として価値判断→意思決定を行わせる必要がある。そこで、①問題把握②問題分析③達成すべき目的・目標の明確化④行動案（解決策）の創出⑤行動案（解決策）の結果の予測と修正補強⑥行動案（解決策）の選択と根拠付け⑦決定という一連の追究過程が必要となる。具体的には①基盤となる知識を習得している②行動案（解決策）のメリット・デメリットを検討した上で優位性を見出している③根拠に基づきこれからの行動を決めているなどの姿である。

社会形成者としての合理的意思決定ができる社会科学習とは、社会生活のなかから問題を見出し、そこにかかわる社会的事象について知識を構造的にとらえ、解決策を吟味し、より客観性のある根拠に支えられた意思決定を行う活動を通して、自分の社会事象とのかかわり方を見つけ、よりよい社会を実現していこうとする社会形成者としての自覚を高める学びである。そのために、社会生活にかかわる問題と自分とのかかわりを自覚させ、分析的に追究する場と、解決策を他者と検討する場を意図的に設定する必要がある。

- | | |
|--|---------|
| ○ 社会的事象と自分とのかかわりに気づき、よりよい社会実現のために追究する子ども | (学ぶ意欲) |
| ○ 社会的問題の構造を多面的にとらえ、社会的事象とのかかわり方を決めている子ども | (能力) |
| ○ 社会を多面的・分析的に見る必要性と主体的に社会生活を送る自信を自覚する子ども | (自己の自覚) |

～シミュレーション活動を位置付けた学習の展開～

高 良 祐 治

2 副主題について

シミュレーションとは、現実の形態では体験したり仕組みを解明したりすることが難しい社会的事象について、モデルをつくることで、模擬的に実験したり、仮想的に体験したりすることである。社会科にシミュレーションを取り入れることには、①子どもの活動意欲を高めることができる②一定のデータを集積して、現実に行った場合の適切な意思決定の材料とすることができるなどの効果がある。

シミュレーション活動とは、シミュレーション→シミュレーションの振り返り→より確かなシミュレーションのための情報収集→再シミュレーションを繰り返すことで、モデルの修正を行い、実社会の認識モデルを獲得していく活動である。このなかで行われる振り返りとは個々のモデルを持ち寄り、「どのモデルのがよりよいのか」検討する話し合い活動を位置付けることである。

シミュレーション活動を位置付けた学習の展開とは、シミュレーションを行ったり振り返りを行ったりすることで、子ども自身が現実社会の認識モデルをつくり、より根拠が明確な意思決定を行っていく学習構想である。そのためには、単に子どもがシステムモデルを理解し、内面化することによって社会認識が形成されたとするのではなく、一人一人のつくったモデルを批判的に検討することによって、よりよい社会生活の実現に向けて実社会にいきる判断力を身に付けていくことを大切にする。

3 具体的構想

● シミュレーション活動を位置付けた学習の教材化の条件

- 子どもたちの生活とかかわりが深い社会的活動であるものの、その仕組みや意味をとらえることは難解であり、子どもたちがその解決を強く求めることが考えられること
- シミュレーションを展開する上で、その解決のために状況の読解やデータ処理など他教科で学んだ内容や技能が必然的に活用されることが可能で、その結果、より社会システムの概要を実感としてとらえ、学習内容の深化が期待できること

● シミュレーション活動を位置付けた活動構成

つかむ段階において、達成したいと思える課題を設定し、そのために解決しなければならない問題点を明確にする。次に、さぐる段階においては、基礎的な知識を習得した上でシミュレーション活動を行い、実社会のモデルを獲得していくことで、これからの社会とのかかわり方を意思決定していく。最後につくる段階では、自分の意思決定を社会に発信して、成就感を味わわせる。

【表 シミュレーション活動を位置付けた活動構成】

	つかむ段階	さぐる段階	つくる段階
学習活動	1 社会生活にいきる意思決定を行うための学習問題の設定 (1) 題材となる事象と出会い、関心をもつ。 (2) 問題点を見出し、解決すべき点を明らかにする。	2 シミュレーション活動を通して応えをつくる。 (1) 事象についての基本的な知識を習得する。 (2) シミュレーションによる個々の解決モデルづくり ↓ ↑ (3) 振り返りによる改善策の明確化	3 意思決定をもとに、これからの生き方をつくる。 (1) 見出した応えの発信と反応の受け取り (2) これからの自分の生き方の決定を行い、表現する。
支援	※ 子どもたちがやってみようという達成動機を生み出す教材の提示	※ 現実社会で実際に関わっている方の招聘 ※ より現実に近いシミュレーションの工夫	※ 見出した応えの発信の場の保障

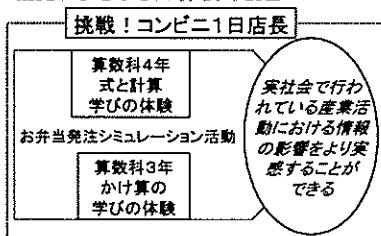
第5学年 小単元「挑戦!コンビニ1日店長」

(1) 目標

- 1 コンビニエンスストアのお弁当発注活動を通して、情報が産業活動にどのように活用されているのか具体的に調べることができる。
- 2 コンビニエンスストアでは、様々な情報を有効に活用しながら発注活動が行われていることをシミュレーション活動を通してとらえ、これら情報の影響の大きさを実感することができる。

(2) 小単元の考え方

補完による学びの体験の統合

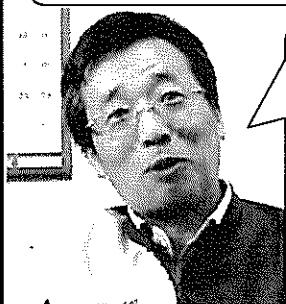


- お弁当発注活動をシミュレーション活動として学習に取り入れ、「どのお弁当をどれくらい発注するか」を決めさせることで、店長の立場を疑似体験し、情報活用の影響力について考える。
- シミュレーション活動では、発注金額や利潤の計算などで、算数科で学んだ計算の力を活用していく（補完）ことで、情報活用の影響力を実感させていく。

(3) 学習の流れ

つかむ段階：1～2/9時

コンビニのお弁当の発注活動に関心をもち、お弁当発注シミュレーションを行うことに意欲をもつ。



100%のお客様を満足させることができるような発注というのはとても難しいのです。ピッタリ当たるようなコツがあるのならば教えてほしいくらいですよ。

店長さんは1つでも多く買ってもらい利益を上げたいと思っています。だから「コツがあったら知りたい」と強く思うのだと思います。
小畑さんですらうまくいかない発注をわたしがかまくできるかどうかは分からないけど、挑戦して小畑さんに一つでもコツを教えてあげたいです。

店長の立場になって発注活動を行うことへの意欲を高めている姿

つかむ段階では、お弁当の発注の仕方によって売り上げに大きな影響を与えることに気がかりをもち、「自分たちも発注活動に挑戦してみる」という目的をもって学習の見通しを立てることをねらいとしている。

【教師の支援】

※ 異なる日のお弁当の売り上げが違う理由を話し合わせ、発注の過不足が損失につながることを調べさせた。

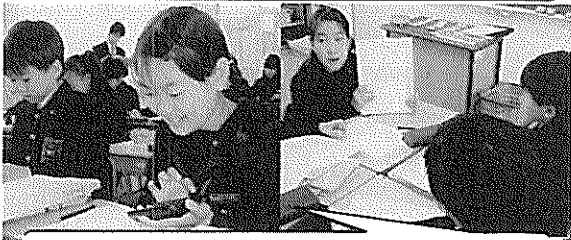
※ コンビニエンスストアの店長の小畑さんが発注について語る様子を提示し、発注活動への関心を高めた。

【子どもの様子】

- 発注しすぎても廃棄する弁当が出るし、足りなくても品切れとなり、どちらも損失が出ることから、発注の難しさに気付いた。
- 小畑さんの話を聞き、発注活動への関心を高め、情報をうまく使ってよりよい発注をするという学習への見通しをもった。

さぐる段階：3～7/9時

お弁当発注シミュレーションを行い、
情報活用の在り方を検討する。



どれくらいのもうけが出たかな？どんな情報
を使えばうまく発注ができたのかな？

わたしは、このシミュレーションを通して、必要のない情報なんてないと思いました。情報を使うときは、一つの情報にたよるのではなく、総合的に見ていく必要があると思いました。

偏った情報利用ではなく、広い視野をもって情報
を活用していく必要性に気付いた姿

つくる段階：8～9/9時

見出した「お弁当発注のコツ」を発信
し、自分の情報とのかかわり方を決める。



わたしたちが
つくった「お弁
当発注のコツ」
を読んでもら
い！

わたしは、「うわっ赤字だ。」なんていっていた
けど、これを毎日生活をかけてやっている人がい
ることを知って、情報の大切さが少しわかったよ
うな気がします。自分に必要な情報が何か考え本
当に必要な情報を選び、責任をもつことが大切だ
と思いました。

情報活用の大切さに気付き、情報とのかかわり方
を決めた姿

【考 察】

- ◎ 産業における情報の活用をとらえさせる場合、できるだけ実社会で行われている活動を学習に取り入れていくことが大切である。そのために、実際の発注に使われている情報と同様の情報をもとに利益や損失という経済活動への影響を実感できるように、計算機を利用して算出する活動を取り入れ、販売金額として表れる活動を行うことが有効である。
- ◎ さぐる段階のシミュレーション活動では、お弁当発注→売り上げから成果や課題の検討→再び発注の一連の活動を位置付けることで、より情報活用の必要性やその影響を実感させることができる。

さぐる段階では、シミュレーション活動を通して、情報が産業活動に重要なはたらきをしていることをとらえさせることをねらいとしている。

【教師の支援】

※ 天気予報、地域行事、顧客データ、過去の売り上げを参考データとして与え、特徴の異なる4種類の弁当を発注させた。

※ 販売データと比較し、損失や利益を計算させ、少人数での「店長会議」を開き、情報活用の在り方を検討させた。

【子どもの様子】

- 発注シミュレーションを通して、思い通りの発注の難しさを実感した。
- 情報の活用の仕方と販売データの比較検討からさまざまな情報を十分に検討して活用する必要性をとらえることができた。

つくる段階では、発注のコツを発信し、情報とのかかわり方を決めることをねらいとしている。

【教師の支援】

※ 一人一人がつくったお弁当発注のコツを冊子にまとめ、小畑さんに届けさせた。

※ 小畑さんからの冊子を読んだ感想を提示し、情報活用の在り方を決めさせた。

【子どもの様子】

- シミュレーションの結果や小畑さんの話をもとに、複数の情報を組み合わせて発注をしていくコツをあらわすことができた。
- 実社会を意識して情報との関わり方を決めることができた。

～受容的対話活動を位置付けた学習の展開～

社会科部 高 瀬 雄 大

2 副主題について

受容的対話とは、自分の考えと相手の考えを比較することを目的とした対話のことである。そのためには、お互いの考えの共通点と差異点を明らかにすることで、考えの違う相手と話したいという思いを高め、自他の考えを比較する観点をつくり出すことが大切である。

受容的対話活動とは、受容的対話→対話のふり返り→再追究→受容的対話を繰り返すことで、社会認識内容を深めていく活動である。この活動の中で、考えの根拠となる事実を集める情報収集活動や分析活動を行い、社会の見方、考え方が広がり、より客観的な判断をすることが大切である。

受容的対話活動を位置付けた学習の展開とは、受容的対話を行ったり、再追究を行ったりして自他の考えを比較、検討し、学習問題の解決にもっとも有効な方法を判断し、意思決定を行うことを目的とした学習構想である。そのためには、対話によって明らかになった比較の観点（価値判断の基準）をもとにして、さらに追究活動を行い、対話を繰り返すことによって価値判断を行い、実社会の向上に向けて意思決定を行うための判断力を身に付けることが大切である。

3 具体的構想

● 社会で活用することを目的とした問題解決を行う教材化の工夫

- 内的必要感を高め、主体的に学習を行うための教材として以下のものを条件として考える。
 - ① 子どもの生活経験と深いつながりがあり、興味関心を喚起するもの
 - ② 子どもの既存の知識・経験を用いて探究していけるもの
 - ③ 社会の生活現実と根差し、現代社会にとってより重要なもの
- 受容的対話活動を展開する中で、自分の考えを主張するためのデータ処理や、相手に伝えるための表やグラフの作成など、他教科で学んだことが必然的に生かされることができると

● 受容的対話活動を位置付けた活動構成の工夫

○ 受容的対話のしくみ

まず、自分の考えを主張し、問題を解決するためのよさについて根拠を明らかにして述べ、その後友達の考えを聴き、観点に基づいて共通点や差異点を明らかにする自己内対話を行う。そして異なることと納得できることに整理して、相手に質問を行うことを繰り返す。繰り返すことによって自他の考えの不十分な点が明らかになり、さらに詳しく追究する必然性が高まることで他教科の学びを生かす場面が増え、学びを強めることができる。

○ 活動構成のしくみ

単元に「つかむ」「しらべる」「まとめる」の段階を設定し、それぞれの学習活動を以下のように仕組む。まず、つかむ段階においては、現実には起きている社会的現象と自分の生活のかかわる場面を提示することから解決したいと思える学習問題を設定し、必要な情報収集の方法や内容について明らかにする。次に、しらべる段階において収集した情報から明らかになった社会のしくみや、人々の願いから考えた解決策について受容的対話をくりかえし行い、調査を続けながら比較の観点を明確にしていく。最後のまとめる段階では、最終的に意思決定したことをもとに、社会の向上に向けて活動する内容を考え、実践への計画を立てて社会の一員としての自覚を深める。

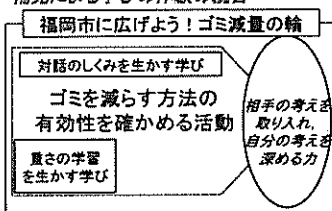
第3学年 単元「福岡市に広げよう! ゴミ減量の輪」

(1) 目 標

- 1 増え続ける福岡市のゴミを減らす方法について調べ、ゴミを資源化するリサイクルと、ゴミの発生を抑制するリデュース・リユース・リフューズについての具体的な解決策を意欲的に考えることができる。
- 2 ゴミの処理にかかわる対策や事業は、処理にかかわる人々の工夫や努力を中心に、計画的、協力的に進められていることを理解すると共に、地域住民の一人として主体的に協力していくことが必要であることをとらえることができるようにする。

(2) 単元の考え方

探究による学びの体験の統合



- 福岡市のゴミを減らすための有効な解決策を意思決定するために、ゴミの種類や量の調査や、ゴミの処理・再利用・発生抑制について意欲的に追究することができる。
- リサイクル・リデュース・リユース・リフューズをどのように組み合わせる効果的なゴミ減量の方法を意思決定すればよいかの判断を、国語科の対話活動での学びの体験が生かして行うことができる。

(3) 学習の流れ

つかむ段階：1～2/10時

福岡市で増え続けるゴミを減らすための有効な解決策を考える学習問題を設定する。



家庭ゴミの量の多さから、減らす方法を考えなければ行けないという強い課題意識をもった。

ほくは、埋め立て場があと10年でいっぱいになり、次の埋め立て地がまだ決まっていなかったことを知ってとても心配になりました。ゴミをなくすことは難しいけれど、ごみをへらすことはできると思うので、これからの学習で考え、自分の生活で出るゴミをへらしていきたいです。

資料1 学習後の感想

つかむ段階では、年々増え続ける福岡市のゴミの搬出量に気付き、最終処分場があと10年で限界となることとその後の処分場が決定していないという状況を知ること、ゴミを減らさなければならないという切実な意識をもち、学習問題を設定することをねらいとしている。

【教師の支援】

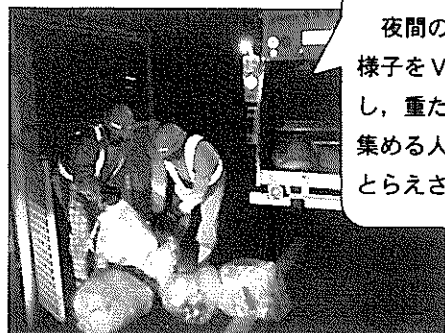
※ 家庭から大量のゴミが出ている写真と、年々増加する福岡市のゴミの量を棒グラフを提示して思ったことを出し合い、学習問題を設定した。

【子どもの様子】

- 家庭から出るゴミの量の多さに驚き、その行き先について意欲的に話し合った。
- 自分達の生活が原因でゴミ処理が限界に近づいていることから、ゴミを減らす方法について考える学習問題を設定することができた。

しらべる段階：3～8/10時

ゴミ処理の実際について調べ、有効な解決策について意思決定する。



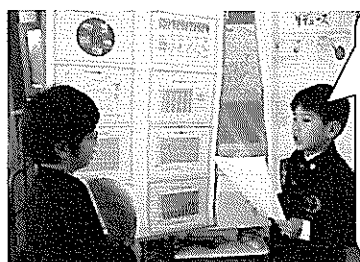
夜間のゴミ収集の様子をVTRで視聴し、重たいゴミ袋を集める人達の努力をとらえさせた。

ほくはリフューズが一番ゴミをへらすのにいい方法だと思いました。理由は、レジ袋をことわることで減量になる石油をつかわずにすむし、捨てることがないのでゴミにもならないからです。

資料2 学習後の感想

まとめる段階：9～10/10時

ゴミ減量について意思決定したことを受容的対話で深め、これから自分がしていくゴミ減量の計画を立てる。



対話活動では、相手の考えをじっくり聞いて検討したり、相手に納得いくまで質問したりして意思決定を行った。

リフューズには効果があるけどマイバッグで買い物をする問題点を質問されてなるほどと思いました。だから、リフューズだけではなく、楽しく工作できるリサイクルの取り組みも行ってゴミを出さないようにしようと思いました。

資料3 学習後のふりかえり

しらべる段階では、追究したことをもとにゴミ減量の解決策について意思決定することをねらいとしている。

【教師の支援】

※ ゴミの収集や処理の様子、4R（リサイクル・リデュース・リユース・リフューズ）の方法を調べたり、自分達でできるゴミ減量の取り組みを実行したりして、有効な方法について判断させた。

【子どもの様子】

- 収集業者や清掃工場の人達が大量のゴミを処理している姿からゴミを減らしていきたいという意識をさらに高めることができた。
- 実際にゴミを減らす取り組みを行い、リサイクルやリフューズなどのよさを実感してその有効性を確かめることができた。

まとめる段階では、4Rそれぞれのよさと課題について、有効性、継続性の観点をもとに吟味し、活動内容を決めることをねらいとしている。

【教師の支援】

※ 4Rのメリットとデメリットを受容的対話活動と再取材によって明らかにし、ゴミ減量の方法について意思決定を行った。

【子どもの様子】

- お互いに選んだ方法のメリットやデメリットを質問し、自分の考えと比較していった。
- 自分がこれから取り組んでいくゴミ減量の取り組みについて選んだ方法のデメリットを補った方法を付加したり、違う方法に修正したりすることができた。

【考察】

- ◎ ゴミ減量の必要性という緊急課題を学習問題として設定したことは、社会をつくる一員としての自覚を深めながら解決策をつくり出し、他者と考えを吟味する必然性を生み出す上で有効であった。
- 対話活動と再追究を繰り返すことで、自他の考えを整理し、検討してから判断したり、不十分な点は再追究を行い、根拠を増やしたりするなど、より主体的に活動を続けていく上で有効であった。

○ 算数科学習の構想

数理的な処理のよさを実感する算数科学習

○ はじめに

算数科の究極的なねらいは、論理的な思考力の育成である。従来から算数科では、既習の数理を発展させ新たな数理をつくり出したり、数理を問題解決のために用いたりするなかで、筋道立てて考える力を育成してきた。しかし、昨今算数教育においては、学力低下と学ぶ意欲の低下の2つの問題点が指摘されている。そして、学力低下の問題に対しては、学力フロンティアなど全国的に基礎基本の定着を図る取り組みがなされた。しかし、学ぶ意欲の低下の問題に対しては、問題が解けるようになれば、学ぶ意欲も同時に高まるという発想にとどまっており、学ぶ意欲を高める直接的な取り組みは、あまり進んでいない。また、PISA 調査では、算数の学習で学んだ数理を実生活・実社会のなかで柔軟に活用していく力の育成が課題とされている。そこで、算数科では、「知的にたくましい子どもの姿」を、従来から大切にされてきた「筋道立てて考える能力」に加え、「数理的な処理のよさに気づき、生活に生かすことのできる力」を発揮している姿としてとらえ、この2つの力に重点化する。

1 主題について

数理的な処理のよさを実感するとは、算数を使うことで問題解決が容易になり、「算数の学習が役に立った」、「算数の学習を使うと便利だ」といった算数の価値や算数を学習する意義がわかり、その数理を柔軟に活用していくことである。単に数理を習得するだけにとどまらず、子どもがそれまでに学んだ数理と新たな数理とを組み合わせ、柔軟に数理を活用していく力が必要である。

数理的な処理のよさを実感する算数科学習とは、子どもが自分との関わりの強い問題事象に出合い、その問題事象を数理的に考察・処理することによって、問題の解決が容易になったり、自由に工夫することが可能になったりし、有用性や実用性といった機能面での算数のよさを感じながら、数理を活用していく学習のことである。算数の学習では、算数の学習が次の学習内容を生み出すために役立つことが多いが、これに加え、算数で学習したことが生活の中で直面した問題の解決に生かされることで、学習が意味あるものになり、算数のよさを実感をできるようになる。そのために、日常の問題事象との関わりをもたせるとともに、関数的な見方・考え方を重視した学習を構想し、数理的な処理方法の高まりを実感させることが必要となってくる。

- 算数の学習で学んだ数理が身の回りの生活の中に役立っている有用性や実用性を感じる子ども（学ぶ意欲）
- 異なる単元で学んだ数理内容を活用し、新たに学んだ数理と組み合わせて問題解決を図る子ども（能力）
- 自分の考えに自信をもったり数理的な処理の技能の高まりに気付いたりして満足感を味わう子ども（自己の自覚）

～関数的な見方・考え方との関連を重視する学習の展開～

田 中 健 悟

2 副主題について

関数的な見方・考え方との関連を重視するとは、「数と計算」「量と測定」「図形」の領域の学習場面において、問題事象の中に含まれる数量の関係に着目し、関数的な見方・考え方をを用いながら問題を解決していく問題事象を積極的に取り入れ、学習内容の理解を深めていくことである。

関数的な見方・考え方との関連を重視する学習の展開とは、算数の問題解決の場面で、子どもが関数的な見方・考え方をを用いて、問題を分析したり解決に納得したり、解決方法を簡潔化、明瞭化、一般化したりすることである。ここでの問題事象の設定条件としては、これまで学習してきたことを整理し、さらに構造化してとらえることができるための学習内容であることがあげられる。

3 具体的構想

● 関数的な見方・考え方との関連を図るための問題事象の選定について

教材化においては、次の3つの条件を満たすものを考える。

【数理性】これまでの学習内容を構造化できることのできる新たな数理が含まれること

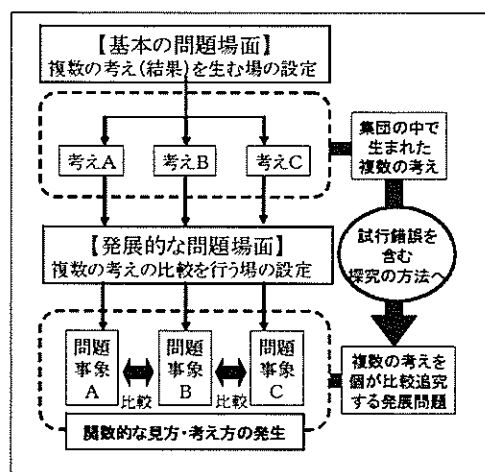
【工夫性】子どもが独自に工夫できる作品づくりが最終的な目的として位置付くものであること

【関係性】問題事象を追究していくなかで、規則性や対応関係が存在し、それらを見つけ出して利用していくことで問題の解決が容易になること

また、学習のなかに関数的な見方・考え方をを用い、学びの統合を図ることで、実生活を取り扱った問題の解決場面に対し、数理的な処理のよさを感じることが可能になると考える。

● 活動構成の工夫について

ここで取り扱う問題事象は、複数の問題事象を追究した結果である複数の多様な考えから、その結果を比較する問題場面を設定することによって、関数的な見方・考え方が発生し、新たな数理を生み出す仕組みをもっている。ここで、複数の事象を比較する問題を設定することは、子どもが一つの事象の追究のみで簡単に問題を解決させてしまうのではなく、粘り強く複数の問題事象の追究を行う必然性を生み出され、子どもが自ら数理を粘り強く追究する姿が発揮されることになる。関数的な見方・考え方をを用いて解決する問題事象には、何らかの規則性や対応関係が含まれていなければならないが、この規則性や対応関係は、どの問題場面にも当てはまるかといった一般性や、あるいはそれ自体が別の問題場面を追究していくなかで変化し、さらに新たな数理へと拡張されていくこともありうる。また、単元における活動構成は、算数的な作品づくりの活動が段階的に位置付けられ、最終的には、独自の算数的な作品が完成するように構成する。



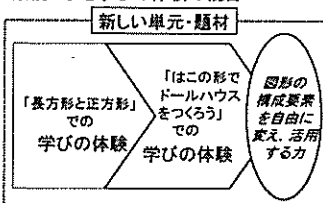
第3学年 単元「はこの形 ～はこの形でドールハウスをつくろう～」

(1) 目標

- 1 箱の形を構成要素に着目して、ドールハウスづくりに意欲的に取り組むことができる。
- 2 展開図や面カード等の平面図形と、立体図形の構成要素とを関係づけてとらえることができる。

(2) 単元の考え方

系統による学びの体験の統合

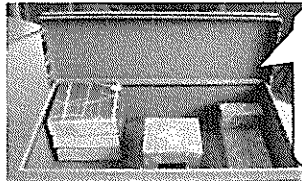


- 子どもが立体図形を分析的にとらえ、その構成要素に目を向けながらも、つくりたいドールハウスの中の家具類に使用する箱が最終的には製作できるようになることをめざしている。
- ドールハウスづくりの活動で、前単元「長方形と正方形」での学びの体験が生かされ、意味づけされるようにする。

(3) 学習の流れ

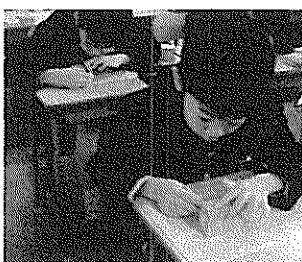
見いだす段階：1～3/11時

箱の形でできたドールハウスに出会い、基本の箱の形について調べる。



最初に提示したドールハウスのなかには、3つの家具を設置している。

写真1 提示したモデルのドールハウス



面を6枚つくらないと箱の形ができないんだな。同じ長方形が2つずつあるんだな。

写真2 箱の面の形や数がわかったぞ

私はドールハウスの家具を作る前に、正方形や長方形の面がつかなくてはならないかと思いました。そこで正方形や長方形の面は6つということをおぼえました。そして、んかい図の組み立て方もおぼえました。正方形は、1つ1つの面カードが同じ大きさだったけど、長方形の面カードは大きさが3つの大きさのカードが2つずつでした。

資料1 ドールハウスと出会ったA児の感想

見いだす段階では、ドールハウスに出会い、そのパーツである家具類の箱の形のつくりを調べながらオリジナルのドールハウスをつくる学習課題を設定することををねらいとしている。

【教師の支援】

- ※ 教師が作成したモデルのドールハウスのを提示し、ドールハウスへの関心を高めた。
- ※ ドールハウスのパーツの基本となっている立方体や直方体の箱の形についてその構成要素を中心に、箱のつくりを調べる場を設定した。

【子どもの様子】

- 画用紙にモデルの箱の面を写し取って箱をつくっていった。
- 資料1のように、正方形の面で作られた箱は同じ大きさの面カードを組み合わせればできることや、長方形の面で作られた箱は大きさが異なる面カードが3種類あり、それぞれ2枚ずつ必要であることに気付いていった。

試みる段階：4～8/11時

面と面とのつながり方を調べる。



写真3 面のつながり方やのりしろを考えるA児

ふつのはこのもので、2本で、ついで、うしろが5つ。
「1-5」だから、のりしろは「1」になんか、今、わかった。
それと、ついで、うしろが5つと、①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ののりしろの
数になんか、うかがい、わかった。

資料2 平面と立体の辺の数に着目したA児

「1-5」だから、のりしろは「1」になんか、今、わかった。
それと、ついで、うしろが5つと、①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ののりしろの
数になんか、うかがい、わかった。

資料3 A児が調べた辺の長さの必要数

広げる段階：9～11/11時

オリジナルのドールハウスをつくる。



「1-5」だから、のりしろは「1」になんか、今、わかった。
それと、ついで、うしろが5つと、①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ののりしろの
数になんか、うかがい、わかった。

資料4 A児がつくったドールハウスと感想

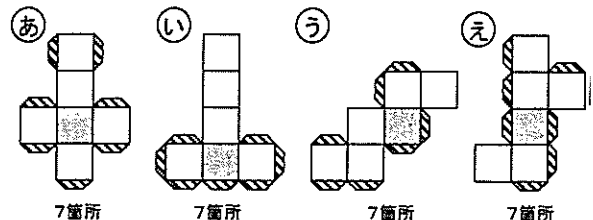
【考 察】

- ◎ 数理を活用した作品づくりをが最終的な目的となるように 教材化を図ったこと、作品のいくつかの部分が学習が進むにあたって段階的に解決し、完成に向かう活動構成を行ったことは、子どもが数理的な処理のよさを実感する上で有効であった。
- 比較対象となるものを複数設定したことは、子どもが関数的な見方・考え方を発揮し、数量に着目して構成要素を分析する上で有効であった。

試みる段階では、立体図形に表れている構成要素と、平面図形に表れている構成要素と対応づけてとらえることをねらいとしている。

【教師の支援】

※ 立方体の箱をつくるのに必要なのりしろの位置とその数を調べる活動を設定した。



※ 直方体の箱をつくるのに必要な長さの測定箇所について調べる活動を設定した。

【子どもの様子】

- 資料2のように、平面と立体との構成要素の数の関係に着目させることができた。
- 資料3のように、辺の長さの相等関係に着目しながら箱の形を組み立てることができた。

広げる段階では、これまでの箱の形の作り方の学習を活用してオリジナルのドールハウスを作成できることをねらいとしている。

【教師の支援】

※ 面カードや展開図をつくための点線入りの方眼紙を準備しておき、使用させた。

※ 子どもたちが組み合わせてつくった家具類を紹介しながら活動を進めた。

【子どもの様子】

- 資料4のように箱を組み合わせた、面の数を1枚だけ取り去ってふたなしの箱をつくったりすることができた。そして、箱の形を自由にすることができるようになった喜びを味わうこともできた。

～収集・分析活動を取り入れた学習の展開～

永 尾 健

2 副主題について

収集活動とは、解決を図る過程において基礎的な知識や技能の獲得を担ういわば、習得的な活動のことである。実生活の課題場面からより抽象化された数や形をとりだし、解決の見通しを容易にする。分析活動とは、これまでに獲得した数理を組み合わせたり、式や表に置き換えて数量の関係のきまりを見取るという関数的な見方・考え方をもとに論理的に解決を図っていく、探究的な活動のことである。そして、収集・分析活動を取り入れた学習の展開とは、収集活動による数理の習得と、分析活動による発展的な数理の獲得をねらう探求的な活動という、系統の学びのことである。つまり、実生活場面の解決方法の基礎となる活動を繰り返して数理を獲得し解決への明確な考えをもつ。さらに、複雑な数や量、形などに置き換え、その過程で関数的な見方・考え方が強化されるのである。

3 具体的構想

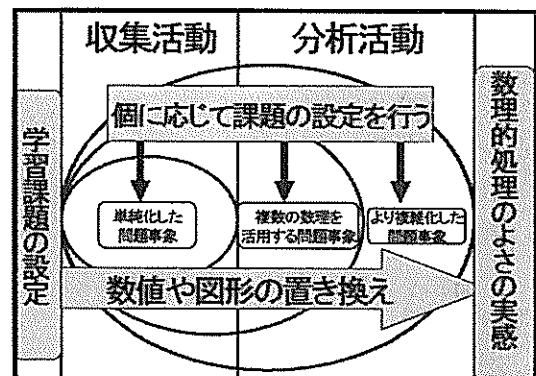
● 収集・分析活動を取り入れた学習の教材化

課題解決にあたり、そこで、次のような条件が大切である。

- ①具体性…子どもたちに身近な問題であること。また、具体的な数値を抽出し見通しをもちやすい事象
- ②活用性…数理を生活場面に広げ用いることができる事象、また、数理を用いるよさを実感でき、成功体験を持ちやすい事象

● 活動構成の工夫について

活動構成の工夫について、「収集活動」「分析活動」の2つの活動を位置付ける。1点目の「収集活動」とは、まず実生活の課題場面からより抽象化された数や形を取り出し、2つの問題場面から共通点、差異点をとらえ、見通しをもちやすくする。2点目の「分析活動」とは、次第に実生活場面に近付けるために複雑な数値や量、形などに置き換え、一般化を図るために自分の考えに付加修正を行っていく。そこで、「見いだす段階」「試みる段階」「広げる段階」の3つの段階で収集・分析活動を位置付けて考える。まず「見いだす段階」では、問題場面から単純化された数値や図を取り出し、類推的な考えをもとに解決の方法の見通しをもつ。次に、「試みる段階」では、解決の方法の見通しを子ども自らが次第に複雑化させ、式化や図表に表現したものから共通性や差異性に着目し、より効率的な解決の方法を探る。さらには、より効率的な解決方法として考えた規則性をより複雑な問題場面に当てはめ、式や図表に表し論理的に考え、根拠をもって数理を獲得させる。その際、関数的な見方を生かして、式や図から簡潔、明瞭、統合の見方をもとに根拠を明確にし、自分の考えを確かにしていく。最後に、「広げる段階」では、これまでに獲得された数理を組み合わせながら、より実生活場面の多くの問題を解決する場を設定する。



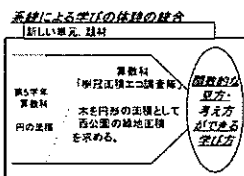
第5学年 単元「樹冠面積エコ調査隊! ～円の面積を求めて～」

(1) 目標

- 1 樹冠（樹木を上から見た円形）面積から二酸化炭素吸収量を割り出し、学校や自宅、公園の環境について意欲的に調べ環境の在り方について考えることができる。
- 2 二酸化炭素の吸収量を測定するために、樹冠の直径や半径を測定し、円（樹冠の面積）の求積を活用し、工夫をして円の面積を求め、二酸化炭素の吸収量を測定することができる。

(2) 単元の考え方

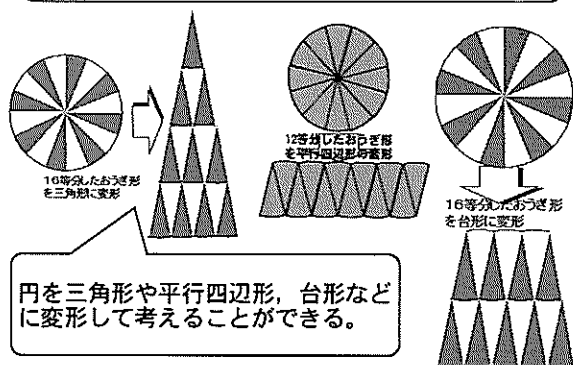
- 本単元では、二酸化炭素の吸収量を樹冠の面積から割り出すために円の求積公式や円周率を活用することをねらいとしている。そこで、第5学年単元「円の面積」の学習内容を生かして一般化を図り、式化したものを関数的な見方・考え方をもとに論理的に考えることができることをねらいとしている。



(3) 学習の流れ

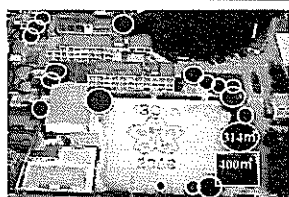
見いだす段階: 1/8時

樹冠面積（円の面積）の求め方を既習の三角形や四角形の面積の求め方をもとに調べる。



試みる段階: 2～6/8時

円の求積公式と円周の公式を組み合わせながら、校内の樹冠面積とさらに範囲を広げた樹冠面積を調べる。



福岡小学校の樹冠面積を測り、二酸化炭素の吸収量を計算したら、9人分の二酸化炭素の吸収量しか緑がないよ。

見いだす段階では、身の回りの円を見つける活動から校内の樹冠面積と円の面積との関わりから「温暖化」という社会問題を取り上げ、自分たちの排出する二酸化炭素と樹冠面積（円の面積）の関係について考えることをねらいとした。

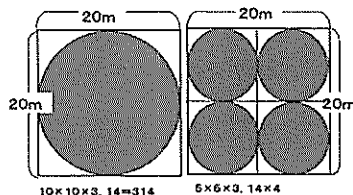
【教師の支援】

※ 既習の三角形や四角形の求積方法の帰着させ、円の等積変形して考えさせた。その際、導き出した公式を既習の公式と組み合わせて考えさせた。

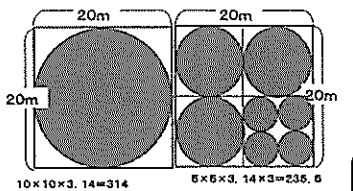
【子どもの様子】

- 1 m^2 の樹冠面積による二酸化炭素の吸収量を提示し、全校児童が排出する二酸化炭素の量の求め方を考える課題をもった。

試みる段階では、円の面積の求め方について既習の図形に帰着して考え、自分の仮説に基づいた円の求積公式を導き、複数の場面に当てはめながら現実場面の樹冠面積について考えることができることをねらいとしている。



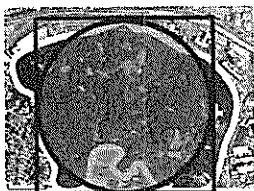
正方形の中の1つの円と4つに分けたときの円は同じ面積です。



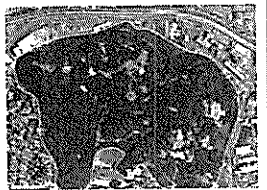
どんなに細かく円を分けても、式からわかるようにすべて「100 x 3.14」になります。

広げる段階：7～8／8時

様々な場面の樹冠面積をもとめ、樹木に二酸化炭素の吸収量を小学生の人数に置き換えて数値化し、適用範囲を広げて調べる。



前の学習で求めた正方形の中の円をもとに考えました。500 mの正方形に西公園が収まるので、500 mが直径となるため半径 250mをもとに面積を求めました。



西公園のまわりが 1.6 kmなので、西公園を円として考え、1.6 kmが円周なので①円周の公式を用いて 1600 m ÷ 3.14 で直径が 510m になるため、半径 255m をもとにして面積を求めました。

広い場所に広がる木の面積を求めるとき、小さい木が集まった場合でも、正方形の中に収まる大きな円としてまとめて考えれば、式を1つにして簡単に計算をすることができるとわかりました。



【教師の支援】

※ 抽象化された数値や形を抽出させ、円の面積の求め方を捉えやすくしながら、次第に複雑な実生活場面に戻しながら一般化を図ることができるようにし、自分なりの考えを確かめさせる場の設定を行う。

【子どもの様子】

- 式から、1つの大きな樹冠として考える根拠を分配法則の考えをもとにとらえ、数式から読み取るよさを実感し、複数の数理を組み合わせで簡単な求積方法を見出していった。

広げる段階では、既習の数理内容を組み合わせながら西公園全体の樹冠面積を求めることをねらいとした。

【教師の支援】

※ 西公園の周回の距離 1.6 キロメートルや前時の正方形に内接する円の求積方法を生かすことができる場面の設定を行う。

【子どもの様子】

- 西公園などの樹冠面積を求める問題事象の解決場面を位置づけることによって、これまでに獲得された円の求積公式や円周の公式、さらには、正方形に内接する円の考え方を組み合わせながら解決できた。
- 前時までの一本一本の木の樹冠面積、正方形内の樹冠面積と、適用範囲を広げることによって、西公園を円と見立てて正方形内に内接する一本の樹冠面積として求めることができた。

【考察】

- ◎ 自分たちの身近にある西公園の樹冠面積を身につけた面積の公式や円周などの数理を活用して、二酸化炭素の吸収量を調べる系統の学びによって、学習への必要感を高め、数理を活用して処理をするよさを実感させ、子どもたちの学習意欲を旺盛にすることができた。これは、実生活から抽出した問題事象から想定した場面から自分の考えをつくり、その自分の考えを演繹的に確かめる活動を位置付けたことが有効だったからだと考える。また、適用範囲を広げて調べていくことによって、進んで生活に活用していこうとする子どもを育むことができたと思う。今後は、より自分の生活に、身近な問題事象を抽出し、課題解決を行い獲得した数理を活用できる教材化を図っていきたい。

○ 理科学習の構想

自然のきまりを実感する理科学習

○ はじめに

理科が主としてねらうのは、自然事象を対象として科学的な見方や考え方を培うことである。科学的な見方や考え方とは、実証性、再現性、客観性を満たした自然のしくみや規則性、それを導き出した学び方、そして、自然を愛する心情のことである。科学的な見方や考え方を培うことで、子どもたちは、ものごとの本質をとらえ、正しく判断し、自信をもって行動することができるのである。また、これからの理科教育において、科学的な見方や考え方を身近な環境に当てはめたり、活用したりして自分の課題を自分のやり方で探究していく能力が求められている。このことで子どもたちは、自然を学ぶことが面白く、自分にとって意味のあるものであると実感できるとともに自然を調べ、新しい発見ができた自分の姿に「自分はできるんだ」という自信をもつことができるのである。

1 主題について

自然のきまりを実感するとは、まず、「自分の考えを確かめたい」「どうしても調べたい」といった自分の課題や目的を達成するために自然を対象に実証的に調べ、自然事象とそれを引き起こす要因との関係、自然事象の変化の規則性、自然事象どうしの相互の関わり合いを一般化したこと、習得した自然のきまりとそれらを導き出した学び方に有用感を味わうことである。また、それらを活用することで自力で課題を解決できた自分に自信をもつことである。つまり、①自然事象と要因とを関係付けたり、根拠をもとにして変化のきまりの予測をしたりすること、②自分の考えとのズレや友だちと対立した考えを既存の自然認識や体験、調べた結果や情報をもとに調整して問題解決すること、③一般化した自然のきまりや学び方を活用して新たな課題を探究することで有能感をもつことである。

自然のきまりを実感する理科学習とは、課題を解決するために自然を探究したことが、自分にとって意味があることを価値付け、課題を自力で解決できたことに自信をもつことで学びが強まり確かなる構想である。理科で学びが強まるとは、課題を達成するために繰り返し自然にはたらきかけている姿である。学びが確かなになるとは、科学的な見方・考え方がより客観的になっていることである。そのためには、まず、自然のしくみと学び方を確実に習得して課題の達成に活用していくこと、より客観的に調べるためにあらゆる学びの体験をつかい相互に考えのよさを比べることが必要である。

- 自然事象を調べ、活用することが自分の課題を達成することに役立っていることがわかる子ども（学ぶ意欲）
- 自然を調べる学び方によって既存の自然認識をあらたな自然のしくみとしてつくり変えている子ども（能力）
- 自然のきまりの発見や自分の課題を達成することで自分ができるんだという自信をもっている子ども（自己の自覚）

～比較検討活動を位置付けた学習の展開～

今 泉 伸 一 郎

2 副主題について

比較検討活動とは、新たな課題を探究するために、自然事象と既に習得した自然のきまりとを比べたり、学び方を活用したりして問題を解決していくことである。つまり、既に習得した自然事象とその要因との関係や自然事象の変化の予測を問題に当てはめ、共通点と差異点を見出すのである。そのことによって何を調べるのかを明らかにする。次に、どのようにして調べるのかを既に習得した学び方を適用して探究していくものである。

比較検討活動を位置付けた学習の展開は、まず、子どもが既にもっている考えとズレを生じる自然事象や子どもどうしの考えの対立が生じると予想される自然事象と出合わせる。次に、既に習得した自然のきまりと自然事象との比較検討活動を行い、学び方を適用して自然を探究し、新たな自然のきまりを習得していく。この時、これまでに習得した学び方での問題解決が困難な場合、教師が適時、観察の視点、実験の方法や結果の処理等の学び方について伝達したり、他教科の学びを想起させて確実に結果を出せるように支援する。例えば、算数科の面積や角度の測定方法を活用して結果を求めたり、観察、実験の方法をグラフ化したり結果を分かりやすく処理したりしていくのである。そして、結果の考察から新たな自然のきまりを習得したり、それを活用したりしていくのである。

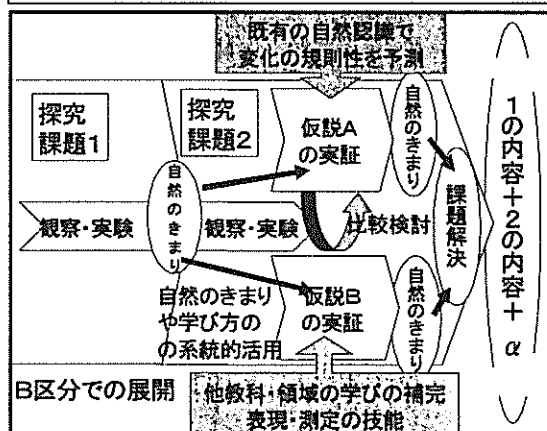
3 具体的構想

● 教材化の工夫

各段階で位置付ける課題を以下のように設定する。

つかむ段階	つくる段階・ひろげる段階
- 自然認識のズレや考えの対立が生じると予想される自然事象 - 事象がとらえやすく実証可能な内容	- 自分の生活や周りの環境を見直すことができるテーマ（A，C区分） - 自然のきまりと科学的方法を量，形，類，位置関係，はたらきかける要因や条件を変えて適用して解決できる課題（B区分） - 自然のきまりと学び方，知の統合を図るものづくり（B，C区分） - 競争意識がはたらくゲームやコンテスト等の課題（B区分）

● 活動構成の工夫



○ 系統すべき学び方

- ・ 簡略化モデル，抽象化モデルでの考えの表出
- ・ 概念地図やマトリックスの活用
- ・ 観察・実験の手順，方法，視点

○ 補完すべき技能

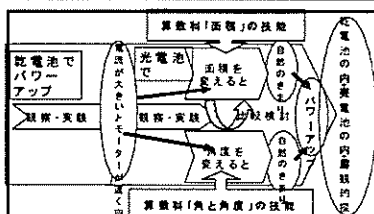
- ・ 課題解決のための方法知として活用できるものを表やグラフ等で整理（他教科・領域等）
- ・ 算数科での測定方法
- ・ 社会科での調査の仕方

第4学年 単元「電池のはたらき ～モーターカーパワーアップ作戦～」

(1) 目標

- 1 モーターカーをパワーアップするために乾電池のつなぎ方、光電池の面積や当てる光の条件を変えてモーターの回転数の変化と回路を流れる電流の量の違いを探究することができる。
- 2 乾電池のつなぎ方や容量、光電池の面積や当てる条件による回路を流れる電流の量とモーターの回り方を関係付けてとらえることができる。

(2) 単元の考え方



- つかむ、つくる段階では、乾電池でのパワーアップを電流の大きさを視点に探究し、モーターカーをパワーアップする課題を達成する。ひろげる段階では、光電池の面積や光の当て方に視点を当てて探究し、ソーラーカーを速く動かす課題を達成できるようにする。

(3) 学習の流れ

つかむ段階：1～3/11時

モーターカーが逆走することに疑問をもち、電流の流れる向きとモーターの回転の変化に気付くものづくりを行う。



モーターと乾電池でモーターカーを作って走らせたけれど逆走するのはなぜだろう。乾電池の向きがポイントでは。

資料1 A児のノートから

乾電池の＋を入れかえると、モーターが逆に回るのは知っていました。でも、検流計で、かん電池を入れかえたら針のふれが反対になったのを見て、電流が逆に流れていることを確かめることができました。

つくる段階：4～6/11時

モーターカーを速く動かす課題をもたせ、電流の大きさと乾電池の大きさやつなぎ方の関係を調べる。

つかむ段階では、モーターカーが逆走することに課題をもたせ、電流の流れる向きとモーターの回り方に気付き、電池のはたらきに課題をもち、探究の見通しをもつことをねらいとしている。

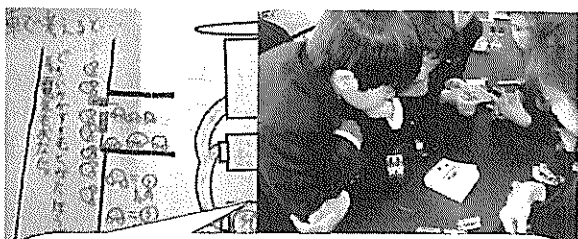
【教師の支援】

- ※ モーターと乾電池1個の回路のモーターカーを作り、走らせる活動を設定する。
- ※ 電流という用語を押さえ、見えない電流の流れをモデル図でイメージ化させ、自分の考えをつくらせる。電流が流れる向きや強さが検流計で測ることができることを教える。

【子どもの様子】

- A児は、乾電池の＋極と－極とを入れ替えるとモーターが逆回転するという現象面でもらっていたことを電流の大きさを視点として探究することでモーターの回転する向きと電流の流れる向きと変化とを関係付けることができた。

つくる段階では、モーターカーを速く動かす課題を乾電池の大きさを変えたり、2個の乾電池のつなぎ方を工夫したりして電流の大きさの変化の違いを視点に探究することをねらいとしている。



導線がつながっているところで、車でいえば渋滞を起こすので、並列つなぎはあまり電流は流れないと思います。

資料2 A児のノートから

乾電池2個並列つなぎは、直列つなぎとくらべて速くなかった。並列つなぎでモーターを回している時、乾電池の1個を外すと検流計の針の振れが2個の並列の時と同じだったので、モーターの回る速さも1個の乾電池の時と同じことが分かりました。

ひろげる段階：7～11/11時

ソーラーカーを作って日光に当てて走らせ、速く走らせたいという課題を解決する3つの条件で整理し、最も効果的な条件について定量的に調べていく段階



算数で習った角度の測り方をつかって太陽高度に対して何度の角度が一番効果的かを光電池の傾きを変えて調べよう。

資料3 A児のノートから

光電池の角度をいろいろと変えると電流の大きさが変わることがわかりました。約130度位が一番電流が流れていて0.3Aでした。その時の太陽高度は約40度だったので、太陽の光が光電池に垂直に当たるときが一番効果的だということがわかりました。

【考察】

- ◎ 子どもが、乾電池や光電池のはたらきを調べ、その有効性を実験するためには、「モーターカーを速く走らせたい」というもとめを大切に、それを達成するための視点（モーターの回り方と電流の向きや大きさ）の取り出しと関連付けて調べる活動を設定することが有効である。
- 光電池の条件のようにいくつかの考えが予想される場合、最も効果的だと判断した条件を選択してソーラーカーの速さを競い、有効性を実感するために、条件の効果を客観的に調べていく方法として面積や角度と電流の量を関係付ける算数科の学びの体験を補完していくことが有効である。

【教師の支援】

- ※ 乾電池のつなぎ方、電流の大きさ、モーターの回り方を視点にモデル図で自分の考えを具体的に表す活動を設定する。
- ※ 2個の乾電池の直列つなぎと並列つなぎでのモーターの回転する速さと検流計の電流の大きさを視点に実験によって自分の考えを確かめる活動を設定する。

【子どもの様子】

- 資料2から乾電池2個の並列つなぎの時の回路を流れる電流の大きさと1個のときの電流の大きさが同じことから、並列つなぎのモーターの回る速さは、乾電池1個のときと同じで、モーターの回り方をより速くするには直列つなぎの方が有効であることに気付くことができた。

ひろげる段階では、光電池の最も効果的な条件を算数科の技能を活用し、探究することをねらう。

【教師の支援】

- ※ つくる段階の探究とひろげる段階の試しの活動を比較検討し、調べる観点や変化させるものなどの探究の見通しをもたせる。
- ※ 光電池の面積、光の強さ、光電池の傾きを変えて電流の大きさとを関連付けて調べる活動を設定する。そこで、算数科での角度と面積の学びの体験を補完する。

【子どもの様子】

- 資料3から、太陽高度を測定し、一番電流が流れるのは、光電池の角度が太陽高度に対して垂直に近いことが分かったことがうかがえる。

○ 音楽科学習の構想

音楽的感性を育み、技能を高める音楽科学習

○ はじめに

音楽科の究極の目標は、豊かな情操を養うことである。そこで、音楽科では、音楽活動を通して、心情と感性を育成する面と能力を伸長する面とを同時に育てていく役割を担っている。そこで、本校では、直接的音楽活動を通して、子どもたちが、自分にとっての音楽の価値を見出す感性を育み、自分の想いを表現していこうとするために必要な音楽的感受力と技能の二つの力に重点をおいていく。これらの力を付けていくために、表現意欲を高め、表現する目的を明確にしていく。

1 主題について

音楽的感性を育みとは、音楽の様々な特徴である、リズム感、旋律感、和声感、強弱感、速度感、音色感など、感覚的に受け取る音楽の諸要素に関する刺激に対して、音楽に合わせて体を動かしたり、歌ったりするなど音楽的に反応し、音楽の美しさや楽しさを感じ取って感動するといった感性を豊かにすることである。ここでいう、音楽とは、既成の楽曲だけではなく、友だちや自分のつくった音楽作品も含むものとする。

音楽的感性を育み、技能を高める音楽科学習とは、子どもに表現したいという場面を設定し、楽曲や自分や友だちのつくった音楽作品から聴きとったことを生かして、自分の想いをもとにクラス全員やグループでお互いに音を試したり、聴き合ったりしながら、創造性を発揮して、表現をつくり出すことを通して、技能を高めていきたいという求めをもち、繰り返し音とかかわりをもつ子どもの姿をねらう。さらに、つくり出した表現を発表し合い、聴き合うことで音楽的なよさを認め合うことのできる子どもの姿をねらう。このことは、みんなでつくり上げた表現を共有することのできるよさや、友達により明確に伝えたいという想いを膨らませたり、聴いてもらいたいという想いを強めていくよさがある。

以上のことより、個人の考えを活かしながら、友達と聴き合うことで、よりよい表現をつくり出したり、上手な演奏を聴かせたいという想いをもちたりすることから、音楽的な観点に着目したり、技能を高めていったりすることで、自分たちの表現をつくり上げた充実感や、発表するときの満足感がより大きくなるものと考えらる。

- 音楽的な感受を深めながら、自分の想いを膨らませ、自分の課題を見出している子ども (学ぶ意欲)
- 自分の表現をつくり出すために、音楽体験を通して音楽的要素を感じ取っている子ども (能力)
- よりよい音楽を求め、音楽経験を生かして自分の生活をより潤いのあるものにしようとする子ども (自己の自覚)

～ストーリーの中にリズムづくりを位置付けた学習の展開～

有 川 陽 子

2 副主題について

ストーリーの中にリズムづくりを位置付けるとは、ストーリーをリズムづくりの目的意識、相手意識、表現の高まりへの求めがもてるように構成し、子ども一人ひとりが登場人物となって、リズムづくりをする状況をつくることである。

ストーリーの中にリズムづくりを位置付けた学習の展開とは、まず、ストーリーの中の登場人物になりきるリズム遊びを通して活動の見通しをつかむ。次に、ストーリーを追いながら、リズムづくりをしていく。最後に、つくったリズムを発表できる場を設定するものである。

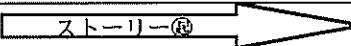
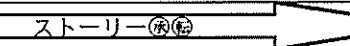
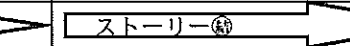
3 具体的構想

● 教材化の工夫

- ストーリーの内容構成
 - ・起承転結とがあり、場面がはっきりとした変化のあるもので、音楽が必要とされる内容のもの
 - ・リズムづくりへの目的意識、相手意識、表現の高まりへの求めがもたせられる内容のもの
- 楽曲選択
 - ・曲にのりやすいテンポがよいもので、フレーズに繰り返しがあったり、リズム遊び（リズムリレー、まねっこ遊び等）が仕組めたりする、すぐに覚えられる8～16小節程度の長さの楽曲
 - ・ストーリーとの関連がある歌詞が含まれる楽曲（登場人物をテーマにした歌詞等）

● 活動構成の工夫

「である」「つくる」「ひろげる」の3段階で構成し、特に、「つくる」段階に、友達とともに、音を試したり、聴き合ったりして表現を高めていく、リズムづくりの活動を位置付ける。

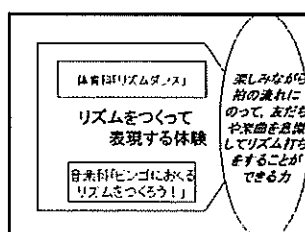
段階	である段階	つくる段階	ひろげる段階
学習活動	 ストーリー(である)	 ストーリー(つくる)	 ストーリー(ひろげる)
習得する技能	・リズム遊びをする。	・リズムづくりをする。 ・つくったリズムの楽譜を見ながら演奏することができる。 （視奏の能力）	・発表会をする。 ・友だちや楽曲に合わせて演奏することができる。
ねらい	リズムづくりの楽しさを感じて、活動への意欲をもつこと	音を聴き合ったり楽譜を示したりして、グループのリズムをつくり上げること	ストーリーにのせて、発表会をし、表現の楽しさを感じる
支援	※ 挿し絵を入れたストーリーの拡大カードの提示と場の設定 ※ テンポよく、リズム遊びが仕組める、フレーズに繰り返しのある楽曲の選択	※ 求める表現が含まれる、楽曲を聴くことで、自分の表現に活かす。 ※ 視覚的効果を図るために、つくったリズムを円（四分音符）や半円（八分音符）を使った楽譜にあらわす。	※ ストーリー中のリズムを表現する場面を再現し、臨場感をもたせることで、表現意欲を高めさせる。 ※ それぞれのグループのよさを認め合うための観点を提示しておく。

第2学年 題材「ビンゴにおくるリズムをつくろう!」

(1) 目標

- 1 友だちと聴きう活動を通して、強弱や楽器の特性が出たリズムを6小節つくり、「こいぬのビンゴ」の2拍子の拍の流れにのって演奏することができる。
- 2 リズム、強弱、音色に気を付けて、「こいぬのビンゴ」「タン布林、すず、トライアングルによる演奏」を聴くことができる。

(2) 題材の考え方

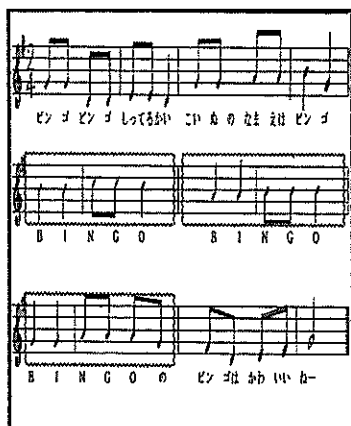


- 悲しんでいるビンゴを元気づけたいというストーリーを追いながら、リズムづくりをする。このとき子どもたちは、ビンゴに楽しんでほしいという気持ちを強くもつ。そこで、曲にのってリズムを打つことができたり、視覚的にも楽しさが伝わったりするように、体育科「リズムダンス」における学習を生かす。

(3) 学習の流れ

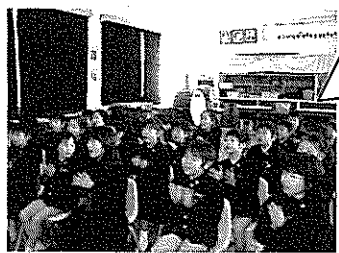
つかむ段階：1/5時

鑑賞し、リズム表現の楽しさをつかむとともに、ストーリーを聴く。



「こいぬのビンゴ」の楽譜を提示し、まねっこ遊びなどのリズム遊びを手拍子→楽器の順で再現させることで、リズム表現の楽しさに浸らせる。

資料1 「こいぬのビンゴ」の楽譜



「こいぬのビンゴ」の曲にのって教師が打ったリズムをまねっこしている子どもたちの姿

写真1 リズムのまねっこは楽しいな

つかむ段階では、鑑賞曲「こいぬのビンゴ」「タン布林・すず・トライアングルによる演奏」を通して、リズム表現の楽しさをつかむことをねらいとしている。

【教師の支援】

- ※ 「こいぬのビンゴ」では、リズム表現の楽しさに浸らせるために、楽譜を提示し、言葉抜き遊びやリズムリレーなどを手拍子や楽器を使って遊ぶ場を設定した。
- ※ こいぬのビンゴが登場するストーリーを提示し、元気がないビンゴを励まそうとリズムをプレゼントしようという意欲をもたせた。

【子どもの様子】

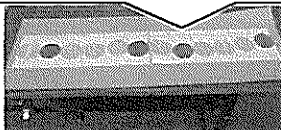
- 「こいぬのビンゴ」の曲にのって、子どもたちは、リズム遊びを何度も繰り返して楽しむことができた。
- 歌いながらリズムを打つことができた。
- ストーリーを聞いて、ビンゴを元気づけたいという気持ちをもった。

つくる段階：2～4/5時

ビンゴに贈る八分音符を使った2拍子6小節のリズムをつくり演奏する。

スプレーのりで貼り替えが容易にできるようにしておく。音符はピンク、休符は青と色を変え、円、半円で音符の種類を識別させた。

すてきな演奏
ありがとう。また
みんなで演奏
したいな。



資料2 ビンゴからの手紙

写真2 貼り替え可能な楽譜

音を試した後
に、楽譜を貼り
替えている子ど
もの姿



写真3 これを入れ替えよう

ひろげる段階：5/5時

つくったリズムをストーリーに入れて発表する。



「こいぬのビン
ゴ」の曲にのって体
を動かして、楽しさ
や拍の流れを意識し
てリズムを発表をし
ている様子

・ 友だちとリズムを
合わせてつくるのは
難しかったけど、曲
にぴったり合ったの
が楽しかった。

発表を終えて、
本題材で楽しかったことや学んだこと
を書いた子どもの感想

つくる段階では、奏法の工夫、楽器を増やすなど表現を高めていくことをねらいとしている。

【教師の支援】

※ 視覚的に、分かりやすいようにつくったリズムを円(●)や半円(◐)を使って記譜させたり、聴き合う活動の場を位置づけてアドバイスを出し合わせた。

※ 曲を流すことで、自然と体を動かしたくなる状況を設定した。

【子どもの様子】

- ビンゴからの手紙を読んで、くまくん(小鳥さん)と一緒に演奏しようという想いをもちた。
- 鑑賞曲「タンブリン〜」から、掛け合いや組み合わせのあるリズムをつくることができた。
- 曲に合わせて身体で拍をとることができた。

ひろげる段階では、発表を聴き合い、よさを出し合わせることをねらいとしている。

※ ストーリーの中に入り込ませるために、情景図や小道具を使った場づくり、ビンゴに聞かせる状況を設定する。

※ 友達の表現のよさを感じ取らせるために、発表者につくった楽譜を提示させ、みんなで体験するコーナーを設定した。

【教師の支援】

【子どもの様子】

- ストーリーを追いながら、役になりきって発表することができた。
- 曲にのって体を揺らし、楽曲や友達のリズムを意識して、楽しく演奏することができた。

【考察】

- ◎ 体育科の学習を補完し、曲に合わせて友達と一緒に体を動かすことで、友達の演奏や曲に合わせて演奏できたり、楽しさを表現したりすることができた
- ◎ ストーリーを提示し、登場者の気持ちを考えながら学習を展開したことで、目的意識、相手意識をもって楽しみながらリズムづくりに取り組むことができた。
- つくる段階のリズムづくりでは、つくったリズムを、貼り替え可能な円や半円で記譜させることで、友達とリズムを一緒に打ったり、よさを認め合うときに、具体的なリズムを指し示しながら発表したりすることができた。

○ 図画工作科学習の構想

自ら価値ある表現を創り出す図画工作科学習

○ はじめに

中教審の答申にある「生きる力」の育成については今後も継続的に取り組んでいくことが考えられる。その中でも「創造性のある人間の育成」は重要な課題となるであろう。人は美しいもの、心地よいものを創り出していきたいと根源的に求める。それは未来志向的な求めであり、それを創り出すプロセスにおいて、あるいは創り出した結果について、自らも他からも認められたとき、自分の人間としての価値(自己効力)を見いだしたり、人間として生きることの喜び(生きがい)を見いだしたりするのである。図画工作科は、創造性をはぐくみ美の文化の継承や新たな創造の基礎を培っていくものである。そのような教科の特性から考えて、図画工作科が担う役割は、美の文化の継承や創造を通して、発想・構想力や創造的な技能といった創造性を育成し、さらに新たな文化創造への感性を高めていくことである。しかし、表現方法や表現技能の伝授により、それだけを知識として身に付けたとしても子どもたちのたくましく生きる力にはなりえない。その方法や技能を使っていく動機と目的とともに、それらを活用していく力が必要になってくる。そこで、これからの図画工作科では、他の学びと積極的にかかわりをつくりながら、自らの美を創り出していくことを通して、自分の表現に意味や価値を見だし、造形的に自分の求めを実現させていくことが大切となってくる。

1 主題について

「価値ある表現」とは、自分だけでなく、他にとっても、美しさや心地よさを感じることでできる表現物を創り出すための、意味ある表現方法や表現内容のことである。「自ら価値ある表現を創り出す」とは、自分にとってあるいは、他からも認められる造形的な美を創造していくために、新たな表現の方法を見つけてそれを駆使したり(方法創造)、新たな表現の意味を見いだしたり(内容創造)しながら、新たな表現方法や表現内容を発見し、表現のプロセスにおいてそれらを活用しながら、自らの表現を練り上げていくことで、一人一人の創造性を高めていくことができる。

- 材料や造形対象とかかわり合うことを通して、自分にとってあるいは他者にとって、美しいもの、心地よいものを自ら意欲的に創り出していこうとしている子ども (学ぶ意欲)
- 材料と造形対象に対して多面的に特徴をつかみ、その特徴から表現の見通しをもって、形や色を構成したり、材料や用具を効果的に用いながら表現する子ども (能力)
- 自他の表現過程や表現物をふり返り、自他の表現の意味や価値を見だし、これからの自分の造形的な表現に生かしていく求めをもつ子ども (自己の自覚)

くらしの場や空間を構成する対話型造形活動の展開

北 田 尚 雄

2 副主題について

「くらしの場や空間を構成する」とは、作品が一層引き立つように、場や空間を飾ったりしていくことや、材料や自分のもてる知を活かしながら場や空間自体を表現していくことを通して、作品や材料と場や空間が、一体感をもてるように創っていくことである。「対話型造形活動」とは、自分や自分の身近な人や身の回りの環境や材料と、双方向に対話していくことである。場や空間と作品を一体化していくためには、自分や友達の表現の意図を読み取り、その意図にあわせた表現が大切である。

自分の身の回りの人や環境を、自分の表現に取り入れながら、新たな表現内容や表現方法を生み出していくことで、自分にとって美しいもの、おもしろいもの、心地よいものを創り出していく活動になるのである。それにより、自他にとって価値のある作品となり、それを創り出した達成感や効力感を味わうことができる。色や形に意味をこめて表現する、想像をめぐらし、自分なりに考えて意味を見いだそうとする、対象を自分なりにとらえて表現するという活動は、創造的な思考を培いながら、繰り返し技能を駆使し、活用できたという自分への意義を感じることができる。

3 具体的構想

● くらしの場や空間を構成する対話型造形活動の題材の条件について

子どもにとって魅力ある学びを具現化していくために、子ども一人一人の内発的な学びの意欲を引き出すことが大切である。そこで感性に訴えかける学びが展開できるように題材を選定する。

- 造形活動を行う上で、学習者全体に共通の目的(テーマ)や共通の造形空間があり、それぞれの学年にあった、創造的な思考力や技能が高まるような材料を用いていく題材 (必要感)
- 学ぶ見通しや手順が明確で、「こうやってみたい」「こうすればどうか」など意欲を生み出す題材 (期待感)
- 身の回りの場所や環境とのかかわりから、新たな表現内容や表現方法が生まれたり、造形活動にかかわる人と、お互いの表現について積極的な情報交流が期待できる題材 (受容感)
- 創り出す表現や作品が生活のなかで生かされるとともに、その美しさや心地よさが造形的な感性を高めていく題材 (満足感)

● くらしの場や空間を構成する対話型造形活動における活動構成について

	構 想 段 階	表 現 段 階	展 示 段 階
活動と内容	1 自分の表現のテーマに合わせて、材料や表現方法の構想を考える。 ○ 表現内容や方法を発想し、表現の見通しをもつこと	2 自分が決めた表現構想にしたがって、材料や表現方法を選択しながら表現する。 ○ 形や色の構成の美しさを考えながら表現すること	3 自分の表現テーマや作品をさらに生かすような展示表現をする。 ○ 飾り付けや展示方法を考え、空間に表すこと
対話	◎ 身の回りの自然や環境にある美と出会い、表現テーマを設定する。 ◎ 表現テーマや方法について友達と情報交流する。	◎ 作品と身の回りの場所や環境との調和を考える。 ◎ 表現方法について、お互いのよさを交流する。	◎ 作品と場所や環境との調和やテーマ性を話し合い、新たな展示方法を考える。
支援	※ 表現についての自他(友達や先人)の考えの交流活動 ※ 生活のなかの美について気付く、ヒント資料提示	※ 表現テーマに合った方法を選択するための材料提供 ※ 場所や環境との組み合わせを試しながら表現する活動設定	※ 作品を引き立てていくための装飾材や展示環境の提供 ※ 自他の作品や表現の表現の価値に気付く鑑賞会の設定

○ 家庭科学習の構想

家族の一員として楽しい家庭生活を創り出す家庭科学習

○ はじめに

家庭科が究極的なねらいとしているのは、生活に必要な知識と技能の習得や、生活を工夫しよりよいものに創造する能力を育てるとともに、家族の一員としてよりよい生活を築いていく意欲と実践的な態度を育てることである。家庭科学習では、生命の維持や心身の成長発達などにかかわる基本的な営みである家庭生活に焦点を当て、家族とのかかわりや環境から衣食住など自らの生活を考え、よりよいものに変えていくことは重要なことである。家庭生活における人間関係を大事にし、人が生活する根幹のところでの生き方を学ぶことは、将来変化の激しい社会に対応し、自尊感情を高め未来の夢や希望を実現する力の原動力となり、知的にたくましく生きる子どもの育成に深くかかわると考える。

1 主題について

家族の一員として楽しい家庭生活を創り出すとは、自分が家族から支えられ、自分の存在があって家族が構成されているという相互関係に気付くことで、家族への思いを手と知識を使って具現化し、実践できたことで心が満たされることである。そのためには、よりよい生活に向けて必要な情報を多面的に収集選択し、我が家にあった生活の工夫を集めた情報から判断し、家庭生活に活用できる力が必要である。特に、学習の対象である自らの家庭生活を観察する力、よりよい生活を構想する力、集めた情報からよりよい方を選択する力、自分にあった家庭生活へと工夫する力が大切になってくる。

家族の一員として楽しい家庭生活を創り出す家庭科学習とは、家族の生活を見つめ、家族の思いや願いをうけとめ、よりよい生活を送るための方法を模索し、家族のために何ができるか考えて行動し、家族への思いとその表現として実践力を育む学習のことである。そのためには、まず自分の家庭生活を見直し、自分の家庭生活を吟味する視点を把握することが必要である。そして、実験・観察などをもとに、集めた情報から自分の家庭生活を分析することにより、我が家の中で大事にしていること、我が家らしいこと、そして新しい観点等に気づくことができる。つまり、自分の家庭生活をよりよくするための生活の工夫を判断することが自分の家庭生活にいきる力となる。

- 家族の一員として自覚をもって、家族や回りの人々と協力してよりよい生活をしようとする子ども (学ぶ意欲)
- 衣食住などに関する実習や観察・実験などを通して、生活課題の解決に必要な基礎的・基本的な知識や技能を獲得し、自分の身の回りの生活に活用できる子ども (能力)
- 自ら獲得した知識や技能を生活実践することで、自分自身の生活向上や家庭生活の大切さを実感し、家族に役立っている自分に満足感や充実感をもつ子ども (自己の自覚)

～家庭生活の観点を判断する活動を位置付けた学習の展開～

脇 本 孝 枝

2 副主題について

家庭生活の観点を判断するとは、①経済性（お金のことを考えて）、②健康・安全性（健康や安全を考えて）、③合理性（簡単で便利に）、④環境性（人にやさしく、地球にやさしく）、⑤嗜好性（家族の生活に合わせて）の観点から自分の家庭生活を見つめ、どの観点から自分の家庭生活の工夫を考えるのか分析することである。どの観点を重点に考えるかにより家庭生活は変わってくる。

家庭生活の観点を判断する活動を位置付けた学習展開とは、多様な価値の中から自分が大事にする価値を重点化し、どのようにかかわっていけばよいか考え、自分の家庭にあった工夫の方法を決定していくことである。家族からの情報をもとに自分なりに描く家庭生活像へのかかわり方を家族との人間関係の中で総合的に考え実社会で生きて働く力とする学習構想である。

3 具体的構想

● 家庭科の観点がうまれる場の工夫

家庭科の活動を「人とのかかわり」「ものとのかかわり」「家庭生活とのかかわり」の3つの視点から見ていくことにする。かかわりの視点を生み出すものとして、他教科の学びの体験が必要となる。

人とのかかわり	ものとのかかわり	（家庭生活）とのかかわり
自分・家族・近隣の人 友達	家庭生活の用具・作品・製作物 教具	時間面・金銭面・情報面・環境面・労力面

● 家庭生活の観点を判断する活動を位置付けた基本的な活動構成について

つ か む 段 階（価値の把握）	つ く る 段 階（多様な価値の認知・選択）	生 か す 段 階
活 動 1 家庭生活の見直しと個別課題の設定 2 個別課題解決への見通しと自分なりの仮説立て ※ 課題を見出す体験活動の場の設定 ※ 課題の明確化 家族の考えや行動を見つめ、家族の思いや願いを感受する課題把握のための情報収集活動	1 個別の課題解決の仮説をもとに課題解決の方途を検討、共通課題を設定 2 共通課題追究のため「共通の仮説」をもとにした実験・実習・観察 ※ 定性的・比較数量的な計測をともなった活動の場の設定 家族の考えや行動を自分にあてはめ、立場を変える。生活体験を普遍化し再構成する。課題解決のための情報収集活動	1 共通課題解決の方法を個別課題解決へ生かす活動 2 家庭実践の交流を行い家庭実践の継続 ※ 個別課題解決の場の設定 ※ 家庭実践カードの活用 家族からの評価家庭実践のための情報収集活動
観 点 を 判 断 す る 家族を見つめる観点 安全性、保健性、利便性、経済性、環境性、健康性 ※ 自分の価値認識の方向性を自覚する生活分析の実施	他者への思いやりを知識と手を使って具現化する力 自分の世話が自分でできる力・基礎基本の習得 ※ 多様な価値を認識できる交流の場の設定 ※ 自分の生活に合わせて多様な価値を自分なりに選択し評価する場の設定	家族の生活に合わせた 視点の広がり 視点の深まり 視点の重点化 ※ 価値観の意識化、家庭実践の報告の場の設定

【図1 家庭生活の観点を判断する活動を位置付けた家庭科の基本的な活動構成】

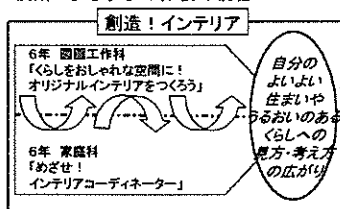
第6学年 題材「生活にうるおいを!～めざそう わが家のインテリアコーディネーター～」

(1) 目標

- 1 自分の住まい方に関心を持ち、家族がより快適に住むために実験や調査などを通して調べ、課題を解決して生活に生かし、家族とのかかわりを深め、家族に役立つ喜びを味わうことができる。
- 2 住まいの機能、家族のふれあいなどから生活を明るくする快適な住まい方についてとらえることができる。

(2) 題材の考え方

横断による学びの体験の統合



- 図画工作科「ぼくわたしのオリジナルインテリア」の学びの体験を統合することにより、形や色、材料の特徴や構成の美しさなどから、家のあるコーナーをコーディネートするときの観点につなぐ。
- 本題材のねらいは、よりよい住まい方をするために、課題を見つけ、計画を立て、工夫し実践することができるようにすることである。

(3) 学習の流れ

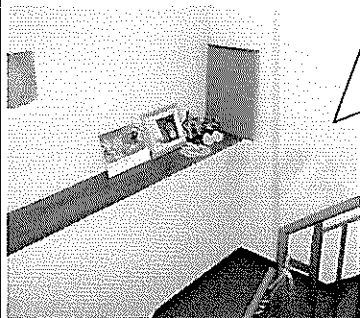
つかむ段階：1～2/6時

自分の住まい方をふり返り、よりよい住まい方について学習計画を立てる。

家族にとって、住まいは、休養・団らん・食事・衛生（お風呂やトイレ）・仕事や勉強・自然災害から身を守る場である。

住まいの働きについてそれぞれが情報収集してきたことをもとにまとめます。
快適な住まい方の工夫は？

資料1 A児の住まいに対するとらえ



資料2 A児のコーディネートしたい空間

階段のおどり場がさびしいな。みんなが通るところなので、どうにかしたいな。家族はどうしたら喜んでくれるかな。

つかむ段階では、住まいの働きを考える場を設定し、家庭生活の観点を見つけることをねらいとしている。

【教師の支援】

※ 住まいの働きを、家の中でいつ、だれが、どこで、どんなことをしているのかという視点を与えて見つめさせ、友達と交流する場を設定した。

※ 住まい方の工夫を①経済性、②合理性、③環境性、④嗜好性、⑤健康・安全性から考えることにより、わが家の家庭生活の観点を見直す活動を位置付けた。このことにより『生活にうるおいをもたせたい!』という共通の願いを明らかにさせた。

【子どもの様子】

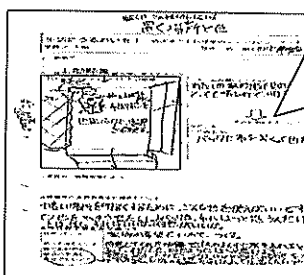
- 住まい方の工夫を家族の活動場面や部屋の用途という観点で見つめ、自分の家庭生活を見直し、個別の課題をもつことができた。
- 資料2のように、A児はわが家を見直し階段の踊り場を明るくしたいという願いをもった。

つくる段階：3～4/6時

個別課題の解決の見通しをもつために、共通課題を設定し追究する。



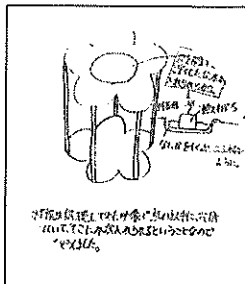
G Tの建築家水野先生から住まいについての話を聞き、住む人の目的によって住まいが変わることを知り、観点が広がりました。



G Tの建築家水野先生の話を聞いて、もっと家族の思いを情報収集しようと考え、家族の好みを設計図の中に取りこんで家族のスペースをつくります。

いかす段階：5～6/6時

個別課題を解決し、家庭実践を行い、家庭実践報告会をする。



お花が好きなお母さんの好みも入れて、花が飾れるように水を受けるところも作ろう。このコーナーを見たら家族の心がなごむよ。



Aちゃんが作ってくれた階段のコーナーのおかげで家がとても明るくなりました。少しの工夫で楽しくなりますね。ありがとう。

【 考 察 】

- ◎ 図画工作科「ぼくわたしのオリジナルインテリア」の学習と学びの体験の統合を図ることにより、家庭実践につながりにくい家庭科「住まい」の学習に学ぶ意義を実感し自分の力で楽しい住まいにしたいという意欲を高めることができた。
- ◎ 家庭生活を見つめる観点をつかみ、自分の家庭で大事にする観点を判断することにより、自分の家庭生活を家族とのかかわりの中で見直し、自分らしい家庭生活を創り出すことができた。

つくる段階では、生活にうるおいをもたらすためにどのようにしたらいいのか共通の課題を解決することをねらいとしている。

【教師の支援】

※ 共通の願いをもとに共通のテーマ「めざせ！わが家のインテリアコーディネーター」を設定し、どのようなところを工夫すればいいのかを共通課題とした。

※ G Tの話により、住まいは住む人の暮らしに対する思いが表れるものであることに気付かせ自分の生活環境を変えたいという意欲を高めさせた。

【子どもの様子】

- G Tの話を取り入れ、嗜好性ということに焦点化して、作品を見直すことができた。

いかす段階では、自分の家庭にあった解決方法を見つけ、家庭生活をよりよいものとし有用感を感じることをねらいとしている。

【教師の支援】

※ 自分がコーディネートしたいコーナーに既習学習を生かして布等も加えることにより、よりうるおいのある空間となることを情報コーナー等で知らせる。

【子どもの様子】

- 自分がコーディネートしたい空間を観点をもとに工夫することができた。家族の好みや願いを情報収集することで、より家族を意識したコーナーを創り出すことができた。
- 家族に評価され、有用感をもつことができた。

○ 体育科学習の構想

調和する動きをつくる体育科学習

○ はじめに

どことなくぎくしゃくとしていて、ぎごちない不自然な動きをする子どもが増えている。外遊びに限らず子どもたちの生活からは体を使うことが減る一方である。子どもたちには、いつでも、どこでも、だれとでも、汗をびしょりかきながら笑顔を輝かせて体を動かす楽しさを生活に取り入れてほしい。このことで、懸念されて久しい体力の低下傾向にも歯止めをかけることができる。そのためにも、思い通りに体を動かしたり、自分に合った運動を創造したりする楽しい運動経験を積み重ね、生涯に渡って運動・スポーツに親しみ続ける健康・体力の育成が体育科には求められている。

1 主題について

調和する動きとは、運動を楽しむために思い通りに全身を操り、仲間や用具、ルールなど刻々と変化する状況に応じた巧みな身のこなしのことである。調和する動きは、動きの方向や大きさ、タイミング、姿勢を変化させることで生まれる正確さをもっている。また、次の動きに備えて膝を曲げたり、体を向けたりするなどして動きと動きを流れるようにつなぐスムーズさをもあわせもっている。複雑に大きく変化する状況においても無駄なく安定してダイナミックに対応することに価値がある。

調和する動きをつくるとは、自分やともに運動する友達の能力や楽しみ方に合った運動を創造しつつ、走るや跳ぶ、投げる、捕るなどといった基本的な動きを同時に行ったり、続けて行ったりするなど組み合わせて運動の目的を達成する身体動作を獲得することである。運動を創造するときには、これまでの運動を行った結果をもとに全力で運動してやっと成功するかどうかの難しさをめざす。そのために、子ども自身が運動する場にある用具と用具の位置関係や種類の組み合わせ方を変えたり、用具を加えたりする。また、ともに運動する仲間の人数や相手を変える。

調和する動きをつくる体育科学習とは、複数の動きを用いたり、他に動きを同調させたりすることで楽しさを味わえるよう教材化された運動に対して「楽しそう」や「勝ちたい」などと強い求めをもって基本的な動きを習得し、活用することである。習得する動きはこれまでに経験した動きをもとにして楽しめるものとする。習得した動きを活用するときには、能力や楽しみ方に合うように友達と協力しながら用具やルール、仲間といった運動に働きかけて段階的に難しい運動へと再構成する。

- 運動の楽しさを求め、実現するために運動の再構成と動きの習得・活用を繰り返し続ける子ども(学ぶ意欲)
- 自分に合った運動をつくるとともに状況に応じて思い通りに体を動かすことができる子ども (能力)
- 精一杯の力を発揮して体を動かす心地よさや運動をつくるよさを味わう子ども (自己の自覚)

～状況の変化を重視する学習の展開～

久保勝美

2 副主題について

状況の変化を重視するとは、動く方向や大きさ、タイミングなどといった動きの正確さや、より速くより大きくより多くなるといったダイナミックさを求める用具やルールなどへと段階的に変化させることである。はじめは走る、跳ぶ、投げる、捕るなどの経験している動きで楽しめる状況から複数の動きを同時に行ったり続けざまに行ったりすることで楽しさを味わえる状況へと変化させる。

状況の変化を重視する学習とは、能力や楽しみ方に応じて用具の位置や種類、数、ルール、ともに運動する仲間の人数や相手など正確さやダイナミックさを求める運動の状況へと子どもが再構成することである。正確さにダイナミックさを加えることを基本とする。

状況の変化を重視する学習の展開とは、教師が提示した活動の場で運動経験をもとに基本的な動きを習得し、子ども自身が運動の状況を再構成して習得した動きを活用することを繰り返すことである。

3 具体的構想

● 教材化の工夫

これまでの多様な運動領域での運動経験で身に付けた調和する動きを取り出し、まとまりのある運動へと融合させて教材化を図る。そして、複数の運動領域に渡る運動経験を基盤にした系統の学びで「動きの習得」から「動きの活用」へと段階的に運動の楽しさを追究する。健康や音楽、ストーリーなどを手がかりとする場合には、他教科・領域の学習経験をもちこむ補完や横断の学びとなる。発達段階から着目する調和する動きの具体的な内容と運動像を以下に示す。

定位の動き…姿勢や用具、仲間の位置変化に対応して姿勢や位置、方向を変化させる運動
 リズムの動き…音楽や目標物の配置に対応して動きにアクセントをつける運動
 結合の動き…複数の動きを同時に行ったり、続けて行ったりして動きを組み合わせる運動
 バランスの動き…体の重心を不安定にして復元したり、保ったりする運動
 反応の動き…音や光などの合図をきっかけに素早く決められた通りに体を動かす運動

● 活動構成の工夫

「動きの習得」から「動きの活用」を中心に運動の楽しさを追究する活動を連続・発展させる。

階	であう	つくる	あじわう
活動	1 簡単な運動を試し、学習の進め方について話し合う。	2 正確さとダイナミックさから運動を再構成しながら繰り返し楽しむ。 (1) 教師が示した簡単な運動を楽しむ。 (2) 運動を再構成して運動を楽しむ。	3 つくった動きや運動を総合的に発揮するまとめの会を行い、運動の楽しさを味わう。
手だて	※ 簡単な運動を試す活動の設定	※ 調和する動きに着目した運動づくり ※ 運動の再構成を繰り返す活動の設定	※ 動きと運動を総合的に味わう活動の設定
	①体が触れると音がでたり、揺れたりする評価機能を果たす、②位置や大きさの変更、種類の組み合わせの変更ができる、③動きの系統に沿って段階的である、用具を用いる。		

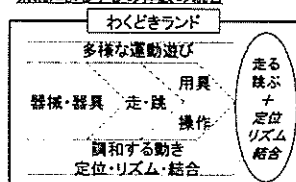
第2学年 単元「つくろう!楽しもう!わくどきランド」

(1) 目標

- 1 わくどきランドに対する自分の特性に応じて用具の位置や大きさ, 組み合わせを操作しながら友達と力を合わせてわくどきランドを楽しむ動きをつくる活動へ意欲的に取り組むことができる。
- 2 跳ぶと捕るを組み合わせたり, 用具に合わせてリズムカルに連続して跳んだり, 先を見越して姿勢や方向を変えて走り進んだりするなど結合やリズム, 定位といった調和する動きができる。

(2) 単元の考え方

系統による学びの体験の統合

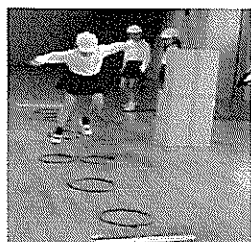


- 走・跳の運動遊びと器械・器具を使つての運動遊び, 用具を操作する運動遊びでの走る, 跳ぶ体験を基盤としている。それらを融合させて教材化を図った。調和する動きを発達段階から吟味し, 結合の動きに焦点化したターゲットランド, リズムの動きに焦点化したリズムランド, 定位の動きに焦点化したすりぬけランドの3つでわくどきランドを構成した。

(3) 学習の流れ

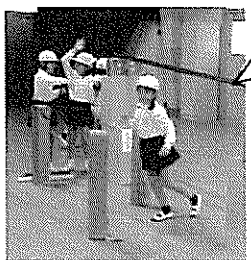
であう段階: 1/6 時

わくどきランドを試し, 学習の進め方について話し合う。



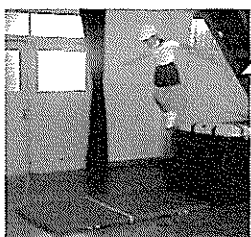
リズムランドの用具に合わせてびよん, びょん。リレー遊びの楽しさに似ている。

資料1 リズムランド



当たらないよう右に左に動いてかわし進もう。慣れてきたので1年生のとびこ遊びのようにもっと難しくしたいな。

資料2 すりぬけランド



狙った所へジャンプ。1年生で空中でポーズをして楽しんだときよりもっと難しくしたいな。

資料3 ターゲットランド

であう段階では, わくどきランドの楽しさと出会うとともに, 自分の運動実態や学習の進め方をとらえ, 意欲をもつことをねらいとしている。そのために, これまでの運動経験や学び方を想起できるリズムランド, すりぬけランド, ターゲットランドそれぞれを試して, 楽しさや学習の進め方について話し合う活動を設定した。

【教師の支援】

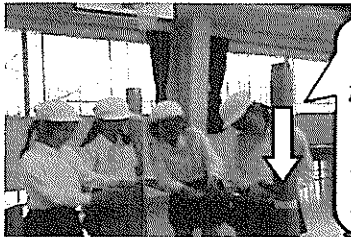
※ すべての子どもたちがそれぞれのランドの楽しさを味わえるように正確さを中心に条件付けした3つのランドそれぞれを巡りながら試す活動を設定して楽しませた。

【子どもの様子】

- 資料1～3のように子どもたちは, 現在の能力に合った設定のリズムランド, すりぬけランド, ターゲットランドのそれぞれを楽しんだ。
- 資料1～3のように子どもたちは, これまでの運動経験を生かして自分に合ったランドをつくってもっと楽しみたいという意欲をもった。

つくる段階：2～5/6時

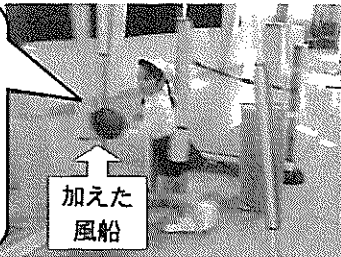
わくどきランドをつくり変えながらランドへのチャレンジを繰り返し楽しむ。



くぐる棒を低くしたり、風船を付けたりして（通る幅を狭くして）もっと難しくしよう。

資料4 ランドをつくり変える

用具をよく見て、体を横向きにして素早くすり抜けるよ。身体がくるくると素早く右に左に動くようになったよ。



資料5 姿勢を変えて抜ける

あじわう段階：6/6時

わくどきランド交流会を楽しむ。



難しく（連続して）なってもううまくできるよ。

資料6 交流会での活動の様子

わくどきランドは、自分に合うように自分たちでつくれたのが楽しかったです。わくわくどきどきするようにどんどん難しくしていても、どんどんできるようになったのがうれしかった。

資料7 交流会後の感想

つくる段階では、3つのランドを楽しむための動きを習得し、ランドをつくり変えながら習得した動きを活用することをねらいとしている。

【教師の支援】

- ※ 正確さを引き出す用具で構成したランドで基本的な動きをつくる活動を設定した。
- ※ それぞれのわくどきランドにダイナミックスを段階的に加える再構成と動きづくりを繰り返す活動を設定した。

【子どもの様子】

- 資料4のように子どもたちは、運動を再構成しながらランドでの活動を繰り返した。
- 資料5のようにこれまでに経験している動きを組み合わせるだけでなく、次々と変化する状況に応じて正確で素早い動きができた。

あじわう段階では、つくった動きやランドづくりの総合的な発揮をねらいとしている。

【教師の支援】

- ※ これまでにつくったわくどきランドを続けて行い総合的に味わう交流会を設定した。
- ※ わくどきランドでの動きやランドづくりについて話し合う活動を設定した。

【子どもの様子】

- 資料6のように子どもたちは、ジャンプして風船をさわったり、用具を揺らしたりしてこれまでにつくったわくどきランドを楽しんだ。
- 資料7のように子どもたちは、自分自身で運動を再構成することや動きをつくって楽しむランドのよさを総合的に味わうことができた。

【考察】

- ◎ これまでの運動経験に類似したランドを提示したことは、動きづくりだけでなく、動きの楽しさや少しずつ難しくしていくことで楽しさが増す学び方を発揮させることにも有効であった。
- 体が触れるとわかる用具を用いたことは動きの正確さを、坂道を転がるボールは動きの素早さを引き出しつくとともに、動きの評価にもつながることから運動の再構成にも有効であった。
- 個性的な動きや学びのリズムをもつ子どもたちに対応するために、つくる段階の習得した動きを活用するときに全体で活動を区切らずに複線化した活動を設定することが必要である。

○ 生活科学習の構想

気付きを自分の生活に生かす生活科学習

○ はじめに

今日の生活科の現状においては、直接体験を重視して学習活動の展開から、意欲的な学習や生活をしようとする態度の育成は図られているが、課題として、単なる活動になっているので、思考力の高まりに向けた指導や気づきの質を高める指導の工夫が求められている。そのためには、自分とのかかわりから対象のもつよさをとらえたり、自分自身へのよさや可能性をとらえたりする気づきを高め、主体的に働きかけていくことが大切である。そこで、具体的な活動や体験を重視する生活科においては、身近な対象へのかかわりを通して、対象や自分への気づきがその後の知的な行為を生み出すよう支援をしていくことが大切である考え、本研究では、対象への気づきの質を実際の自分の生活に生かしていけることができるよう、気づきを知的なものへ高めていく。

1 主題について

気づきを自分の生活に生かすとは、身近な人や社会、自然に対する直接的・具体的な働きかけを通して、自分とのかかわりから対象の様子、関係、価値をとらえ、自分の働きかけを変えたり役立てたりすることである。対象の様子とは、対象にもつ様子や状態のことである。対象の関係とは、自分とのかかわりから見た、事象の原因と結果のしくみである。対象の価値とは、対象のもつよさや可能性である。この対象の様子、関係、価値をとらえ、働きかけを変えたり役立てたりするためには、課題を設定する力、活動を見通す力、課題解決を図る追究力、活動を振り返る力、自分の活動を表現する力が大切であると考え。

気づきを自分の生活に生かす生活科学習とは、自らの思いや願いを実現しようと、切実感や必要感をもって五感を使った、具体的な活動を通して、対象の様相、関係、価値をとらえ、対象のもつよさを生かすために、さらに働きかけを変えたり繰り返したりすることで、これからの自分の生活に役立てたり活用したりしていく学習のことである。そのため、次の条件をふまえた学習づくりが大切である。

切実性・・・ 目的意識をもとに問題解決の体験ができること

価値性・・・ 働きかけによる気づきをもとに、他の教科等の知識・技能を生かしてより実感的な気づきが生まれるものであること

- 身近な対象に切実感をもって、意欲的にかかわっていくよさや自分の高まりを実感している子ども（学ぶ意欲）
- 自分とのかかわりで対象の様相、関係、価値に気づき、対象に主体的・継続的に働きかけながら、自分の生活に活用したり、役立てたりする子ども（能力）
- 対象への働きかけや人とかかわりを振り返り、支えてくれた人への感謝の気持ちをもって、自己肯定感や自信を高めている子ども（自己の自覚）

～人とかかわる体験を位置付けた学習の展開～

塚 本 正 典

2 副主題について

人とかかわる体験とは、自分の思いや願いをもとに、身近な対象や対象とかかわる人に五感を通して働きかけ、対象を比べたり焦点化したりしながら対象と人の関係性に気づきをもとに働きかけを変えたり、対象に対する人の思いや願いのよさに気付いて実感的にとらえたりすることである。

人とかかわる体験を位置付けた学習の展開とは、身近な対象との出会いをもとに、対象と人との関係から課題を見だし、人とかかわる物や人への直接的な働きかけを通して、自分と人との関係をとらえたり、人の思いや願いのよさを追究し実感したりする中で、自分がとらえたよさを広げる活動を位置付けた学習のことである。

3 具体的構想

● 人とかかわる教材化の工夫

気づきを自分の生活に生かすことができるよう、次の3つの視点から教材化を図る。

- 切実性→ 必要感をもち実際の生活場面における目的意識をもとに問題解決を行う体験ができること
- 総合性→ 他の教科で学んだことを駆使したり、次への活動や生活に生かしたりする場があること
- 価値性→ 対象とかかわる思いや願い、切実な課題意識をもとに、新たな気づきが生まれること

● 人とかかわる体験を位置付けた活動構成の工夫

出会いの体験により、子どもの思いや願いを課題として設定し、人に関係するものや、直接的に人とかかわる体験を繰り返し位置付ける。まず、であう段階では、対象や人との出会い、直接的なふれあいの場を設定する。次に、ふかめる段階では、人と関係のあるものから実際に情報収集をしたり、自ら試行的な体験から、対象と人の関係性に気付くことができるようにする。次に、いかす段階では、人と直接的にかかわる本格的な体験を通して、自分とのかかわりから、人の思いや願いのよさに気付くことができるようにする。最後に、ひろげる段階では人の思いや願いのよさから、そのよさを広げていく発信的な体験を位置付ける。その発信的な体験により、子どもは、対象のよさから自分の成長の喜びを実感し、これからの生活に自信をもつことができる。

【表1 人とかかわる体験を位置付けた活動構成】

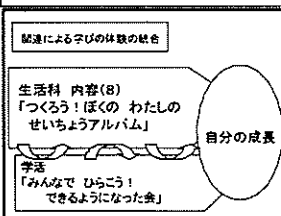
	であう	ふかめる	いかす	ひろげる
学習活動	1 対象や対象を支える人、ものに出会い、見通しをもつ。 (1) 対象や人とふれ合い、出会う。 (2) 人との関係にかかわる課題を決め、見通しをもつ。	2 共通の課題から試行的な体験を進め、人の思いに気付く新たな課題や活動の見通しについて話し合う。 (1) 人に関するものを調べたり、実際に試してみたりする試行的な体験を進める。 (2) 試行的な体験をもとに理由を話し合い、新たな課題を見いだす体験をする。	3 情報収集をもとに本格的な体験を進め、実践的・発信的活動への見通しについて話し合う。 (1) 新たな課題や見通しをもとに、人の思いや願いを明らかにする本格的な体験を進める。 (2) 本格的な体験をもとに話し合い、これからの活動の見通しについて話し合う。	4 実践的発信的な活動を進める。 (1) 活動の計画を立てる。 (2) 発信的な体験を進める。 (3) 学習のまとめをする。
支援	※ 直接的な感動的な体験の場や切実な課題提示の工夫と選択の場	※ 課題解決を図る試行的な体験の場 ※ 新たな課題を見出す、人とかかわるものにふれる体験の設定	※ 意図的計画的に働きかける体験 ※ 対象の価値を実感するGTへのインタビューの場の設定	※ かかわった人によさを広げる実践的発信的場の設定

第1学年 単元「つくろう! ぼくのわたしのせいちょうアルバム」

(1) 目標

- 1 附属福岡小学校に入学してからの自分の成長について関心をもち、意欲的に家の人にインタビューをしたり自分ができるようになったことを絵や文にまとめたりして、支えてもらった人々に感謝の気持ちをもつとともに、これからの目標をもって意欲的に生活することができる。
- 2 自分の成長アルバムづくりやありがとうの会を開く活動を通して、人々の励ましや心配な思いや願いがありながら、多くの人の支えがあったことに気付くことができる。

(2) 単元の考え方



- 本単元においては、自分の成長の内容を、学活との統合（関連）を図りながら、単元づくりを進める。
- 自分自身に自信をもって自己成長を図ることができるよう、人とのかわりからこれまでの成長について振り返るようにする。

(3) 学習の流れ

であう段階：1～2/14時

幼稚園のころからの自分の成長の様子について話し合い、調べていくことや方法について決める。



自分の成長に
気付くことができ
るよう、幼稚園
のエピソード
を紹介する場を
設定する。

これは、ようちえんのころ、とてもたのしかった、まめまきのえです。このえと、1年生になってかいてえをくらべたら、1ねんせいのえが、とてもじょうずになってせいちょうしたなとおもいました。↓
「これからのこと」
これから、もっとじぶんがせいちょうしたことをまとめです。そして、わたしだけの大せつなアルバムをつくっていきたいです。

自分の成長の
様子を具体的に
とらえ、振り返
ることができ
ている。そして、
それを成長アル
バムに生かす必
要感をもってい
る。

であう段階では、幼稚園のころと小学校1年間のことを比べながら自分の成長の様子について話し合い、調べていくテーマや方法について見通しをもつことができる。

【教師の支援】

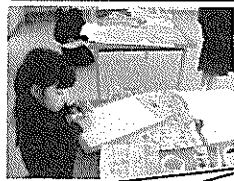
※ 自分の成長について振り返り、活動の見通しをもつことができるよう、小学校の時の作品と比べながら、幼稚園のころの思い出のものを紹介する場を設定した。また、これまでお世話をしてきた、うずらの観察から、人との関係から自分の成長を見ていく視点やまとめ方について提示した。

【子どもの様子】

- 幼稚園のころと比べながら自分の成長の様子を振り返るとともに、自分の成長についてまとめていこうという必要感をもつことができた。
- 生き物のお世話を通してうずらが成長していったように、自分の成長を人のかかわりから、まとめていく見通しを立てることができた。

ふかめる・いかす段階：4～9/14時

自分の成長の理由について思い出のものを調べたり、自分を支えてくれた家の方にインタビューをしたりする。



だんだんとせものびてきたし、ようちえんのころ書いた絵日記と今の日記をくらべると、わたしも上手にかけようになったなあとおもいます。



たくさんの準備や手伝いをしてくれるから、私も成長したし、家の方が、がんばってねという気持ちでいつも大切に見守っているんだな。

ひろげる段階：11～14/14時

自分の成長のよさに気づき、家の方への感謝の気持ちを込めた「ありがとうの会」を開く。



お母さんやお父さんがわたしのことを大切に思っているの、とてもうれしいです。1年生のお手本になるやさしい2年生になりたいです。

ふかめる・いかす段階では、幼稚園のころからの成長の様子を成長アルバムにまとめ、自分が成長した理由に気付いたり、さらに自分を支えてくれた人々の思いや願いに気付いたりすることができていることをねらいとしている。

【教師の支援】

- ※ 自分の成長の様子を人との関係から気付くよう、自分の入学前の写真や作品を調べる場や家の方からの手紙を読む場を設定する。
- ※ 家の方の大変な準備や手伝いの視点から、家の方へのインタビューの場を設定する

【子どもの様子】

- 自分の成長の様子を、自分の努力とともに多くの人の支えの点や大切に見守っている人の思いや願いの点から気付くことができた。

ひろげる段階では、家の方に感謝の気持ちを伝え、これからの学校生活に向け目標をもって取り組む意欲を高めることをねらいとしている。

【教師の支援】

- ※ 感謝の思いを伝える、ありがとう会を開き、家の人に感想を聞く場を設定する。

【子どもの様子】

- 感謝の気持ちを伝える「ありがとうの会」を通して、自分の成長の自覚と多くの人に支えられ成長した喜びを味わうことができた。
- 自分の成長を大切に見守ってくれていることに自信をもち、2年生に向け目標をもって取り組もうとする意欲を高めることができた。

【考察】

- ◎ 自分の成長を見つめながらアルバムにまとめることを教材化し、自分の成長（8）と学活との統合を図ったことは、自分の成長を紹介する会の目的や内容を話し合う学活の学びと、支えてくれた人の思いや願いに気付く学びの体験が生かされ、自分の成長を実感することができ、有効であったと考える。
- 人とのかかわる体験を位置付けたことは、自分の成長と人との関係性の気づきから、価値の気づきへと高めることができたので、課題を生み出す活動が有効であったと考える。

○ 特別活動の構想

他者とのかかわり合いを大切にする学級活動

○ はじめに

特別活動は、望ましい集団活動を指導原理とし、集団の一員となすことによって学ぶ活動を通して、自主的、実践的な態度を身に付けることをねらいとしている。現在、子どもたちの他者や集団とかかわる力の低下が指摘されるなか、人間関係形成力を育てる必要がある。このことは、学級や学校の生活を形成する仲間と協力して自分たちの生活をよりよい生活へとつくりかえていく過程で具体化されていく。そこで、学級や学校生活の諸問題に対し、他者と互恵的なかかわりを大切にしていきながら自他のよさをとらえることを重視していく学級活動を展開していくこととする。

1 主題について

他者とのかかわり合いを大切にするとは、子ども自らが学級や学校の友達、教師、家族、地域の方など自分の学校生活に関係するすべての人たちと好ましい関係をつくりながら生きていくことである。具体的には、①友達と協力しながら話合いの活動や実践活動を行うこと②自分が担う役割を主体的に責任もって行うことである。

他者とのかかわり合いを大切にすると学級活動とは、学級生活の充実と向上をめざして、学級や学校生活の諸問題の解決にあたって学級の友達を中心として他者と協力して活動していくことである。つまり、話合いの活動において、集めた情報のなかから自分の考えをしっかりと持ち、友達と意見交流することで自分では思い付かなかった納得できる友達の考えに触れ、お互いの考えの共感できる部分を取り入れることである。そして、よりめあてに合った集団決定を行い、実践に向かって協力して活動していくことである。学級活動で取り上げる対象は、自分たちの学級や学校生活そのものである。この特性を生かすことによって、自分たちの意志で、学級や学校生活をつくりかえようとするのが可能になる。しかも、その活動のなかで他者と協調しながら一人ひとりの個性が発揮できる場を提供できる。このことは、学級での凝集力を高め、学級目標の具現化にもつながる。また、集団で活動を行う過程では、集団のルールを守ること、共通の感情体験をもつこと、思いやりの心をもつことなど協力の精神を培うことで人間関係形成力を育成することができる。学校、学年、学級、小グループやペアなど様々な集団と交流することで、民主社会を営んでいく上で基礎となる自治的能力も培っていく。

- 自ら学級や学校生活の諸問題に気付くとともに、積極的に問題を解決する子ども (学ぶ意欲)
- 活動の過程でお互いの考えのよさを認め合い、他者と折り合いを付け、応えを導き出す子ども (能力)
- 役割分担を行い集団の一員としての責任を果たし、やり遂げた達成感や有用感を味わう子ども (自己の自覚)

～共創型対話を位置付けたプロジェクト活動の展開～

黒 澤 真 二

2 副主題について

共創型対話とは、対話の「意思や感情の伝え合い」の機能である説明、説得、納得、共感などの行為をペアや小グループで行うことで、新たな考えや結論などをつくり出すことである。

共創型対話を位置付けたとは、集団決定する際、「立場の異なる友達との意見交流」を自分が正しいと思った根拠をもとにお互いに説明する活動を仕組むことである。そして、自分の考えを一生懸命説得しようと話し掛けたり、友達の話に納得、共感しながら聞いたりしてかかわりを一層強めることである。そして、自分の考えに付加・修正する考えが生まれ、友達のよさを取り入れることを実践の準備まで変化、発展していくことで、多くの人と友好的な関係を築いていくことである。共創型対話を位置付けたプロジェクト活動の展開とは、活動過程を「ゴール像の設定」「計画・情報収集の話し合いⅠ・Ⅱ」「実践活動」とし、話し合いの活動のなかにフェーズ（困難な局面）を取り上げ、共創型対話を繰り返し、困難な場面を乗り越え、学級の凝集力を高めていく活動のことである。

3 具体的構想

● 教材化の工夫

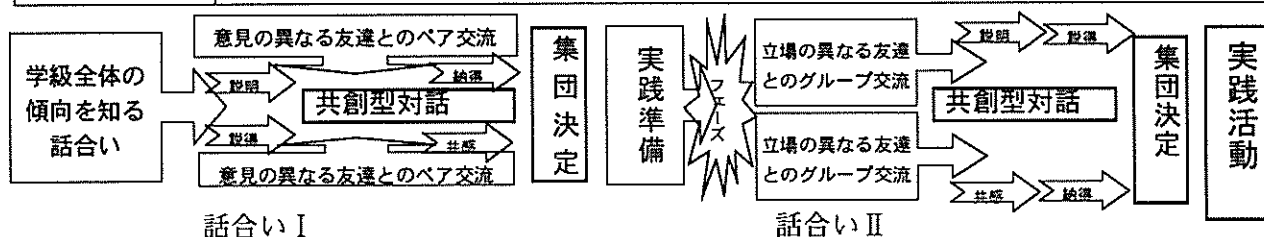
年間を通して、各学期に1～2回、題材につき3～4時間配当の重点題材を設定する。学級活動(1)と(2)を意図的・計画的に位置付けるが、題材を重点化するにあたっては、以下の観点に留意する。

- 学級や学校生活の諸問題に気が付きやすく、学級目標の具現化が図られやすいもの（目的性）
- 学級や学校生活をよりよくするという観点から友達とのかかわりを強められるもの（相互性）
- 学級の凝集力が高まり、やり遂げた達成感や有用感を実感しやすいもの（感動性）

● 活動構成の工夫

「計画・情報収集の話し合いⅠ・Ⅱ」を「決める段階」とし、共創型対話を次のように位置付ける。

段階・時間	「決める段階」における具体的な活動
話し合いⅠ 内容(1)	全体の傾向を確かめる全体交流→意見の異なる友達との根拠に基づいた説明によるペア交流→新たな考えと今までの考えを比較し集団決定する全体交流
話し合いⅡ 内容(2)→(1)	内容(2)による問題の共通化（フェーズ＝困難な局面）→立場の異なる友達とのグループ交流（原因・理由の追究・把握）→内容(1)による集団決定



【図1 「計画・情報収集の話し合いⅠ・Ⅱ」における共創型対話の展開】

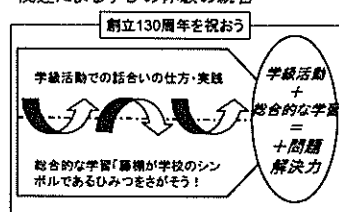
第5学年 題材「よみがえれ藤棚! ～130年の歴史とともに～」

(1) 目標

- 1 学校のシンボルである藤棚の下で、藤棚に関する歴史資料の展示会やミニ学芸会を披露するというゴール像のもと、友達と協力しながら話合いの活動や実践活動を行うことができる。
- 2 藤棚での題材において、学級全体にかかわることについて話合いの活動の仕方を理解するとともに、各係ごとの役割が分かり、実践することができる。

(2) 題材の考え方

関連による学びの体験の統合



- 創立 130 周年を祝いたいという共通の目標のもと、学級活動では、藤棚の下で藤棚歴史資料館やミニ学芸会を開き、全校のみんなや参観者に紹介することができる。また、総合的な学習では、あらつフェスタの日に学校の歴史について調べたものをクイズにしたり、展示したりすることができる。

(3) 学習の流れ

決める段階：1 / 4 時（学級活動）

歴史案内係からの提案で、藤棚の資料をどのように展示するかを話し合う。

A 児：美術館形式だったら落ち着いた雰囲気で大人も見られるからいいと思う。

Y 児：1 年生は説明があった方が分かりやすいよ。

A 児：説明がきらいな人は？

Y 児：自由に見て回る方がいいかもね。

A 児：選べたらいいかもね。

資料1 Y児とのペア交流の様子



写真1 どちらの原案にもよさがあるね

附属小出身の先輩方をGTとして招聘し、藤棚の下で学芸会が行われていた当時の様子や藤棚への思いを聞き、自分たちも藤棚プロジェクトを行いたいというゴール像を設定することができた。

決める段階では、藤棚プロジェクトを成功させるために、必要な係を考え、学級全体で解決していかなければならない内容や方法を係から提案し、集団決定することをねらいとしている。

【教師の支援】

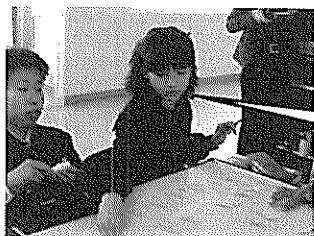
※ 全体での意見交流後、意見の異なる友達とペア交流を仕組み、考えの根拠を説明させ、納得できるものを取り入れ、新たな考えをつくり出すことができるようにした。

【子どもの様子】

- Y 児とのペア交流のなかで A 児は、低学年のことも考え、受付で説明を選ぶ案を考えた。
- 最後の全体交流のなかで付加・修正した自分の考えを提案し、集団決定することができた。

決める段階：2 / 4 時（学級活動）

当日雨で実践ができなかったが、このままプロジェクトを続けるか、続けるとしたらどのように人を集めるかを話し合う。



進行係として
は...

写真2 どうしたら人が集まるかな？

行う段階：3～4 / 4 時（学級活動）

係ごとに役割分担し、藤棚の下で歴史資料展示会やミニ学芸会を行う。

一列に並んで
ください



写真3 すごい行列！



問題分かつ
た？

写真4 藤棚の歴史について説明するよ

この学習を通して、みんなで協力したり、責任をもって行動したりすることの大切さが分かった。このことをこれからどんどん生かして行って、附属福岡小学校を支えていける6年生になっていきたい。

資料2 A児の活動後の感想

○ 計画は進められ、あらつフェスタ当日をむかえたが、雨や不測の事態で藤棚プロジェクトを実践することができなかった。そのことをフェーズに次の話合いの活動が始まっていった。

【教師の支援】

※ 参観者をどのように集めるかを共通の問題とした。そして、4つの係のグループ交流を仕組み、計画ボードに各係の案を付箋で貼らせ、全体交流で集団決定を行うことができるようにした。

【子どもの様子】

○ 参観者の集め方として、A児は、数日間藤棚に資料を展示し、全校児童に昼休みに見てもらうこと、その最終日にミニ学芸会として合奏や合唱を行う案を出し、全体の場で集団決定した。

行う段階では、藤棚進行係、歴史案内係、学芸会道具係、藤棚宣伝係に分かれ、歴史資料展示会やミニ学芸会の準備を行った。そして、藤棚の歴史について調べたことを模造紙にまとめ、全校に向かって発表したり、藤棚ミニ学芸会を開いたりすることをねらいとしている。

【教師の支援】

※ 藤棚宣伝係を中心に全校に呼び掛けたり、ちらしをつくったりして藤棚プロジェクトの参観者を集めることができるようにした。

【子どもの様子】

○ 藤棚歴史展示会やミニ学芸会では、多くの児童が参観したなか、友達と協力して活動することができた。A児はツアーコンダクターとして、1年生と積極的にかかわりをもつことができた。

◎ 計画・情報収集の話合いにおいて、意見の異なるペア交流や立場の異なるグループ交流での共創型対話を仕組むことで、自分では思い付かなかった友達の考えのよさを取り入れ、新たな考えをつくることができた。また、創立130周年を祝いたいという共通の目標のもと、総合的な学習と学級活動を関連させることで、学級の友達や全校児童、参観者と積極的にかかわり、問題を解決する過程で人間関係形成力や自治的能力を高めることができた。

○ 道德学習の構想

他者とのかかわりを深める道德学習

○ はじめに

道德教育が、究極的なねらいとしているのは、自他ともによりよく生きる人間の育成である。その基盤となるのが道德性である。道德学習での「知的にたくましく生きる」とは、善悪の判断をもとにさまざまな場面で自分や他者の立場や心情を推し量り、その調整を図り、人間としての生き方を追究することで、自己を見つめ直し、「自分らしい生き方」を創造していくことである。ここでの知とは、人としてよりよく生きるための善悪の判断となる道德的価値である。これからの道德学習は、自尊感情を持って自分自身を大切にすること、他者とともに助け合うこと、それにともなって、他者との調和性や人間関係調整力などが必要になる。つまり、今後の道德教育に求められるのは、自尊感情をもって自分自身を大切にする「自助」、かかわり支え合って生きる「共助」、その両面の「自分」と「他者」の関係を調整していく視点であり、共感性と推量を大切にしていく。

1 主題について

他者とのかかわりを深めるとは、主人公や友達などの自分以外の人との関係を、自分・他者の両面から吟味する視点ができ、2者を調整しようとする姿である。具体的には、次の3つの側面とらえる。①自分や相手の状況を正しくとらえる、②道德的な問題場面において今何ができるかを考える、③自分や他者の立場や心情を吟味して調整していくことである。特に、道德的な問題場面においては、自分や他者の関係をみていく視点をもって、ともによりよい状態を考える道德的判断力が必要になる。大切にしたいのは、道德的判断をする際の根拠に含まれる心情面である。

他者とのかかわりを深める道德学習とは、道德的場面に身を置き、様々な要因を分析し、道德的価値のよさから、自他ともによりよい生き方を調整していこうとする道德学習である。相手の心情や立場を見つめる共感性と多様な見方・考え方を求める多面性による価値追求、結果予測で展開する学習である。大切にしたいのは、「自分」と「他者」の視点を意識し、よりよい関係へと調整していくことである。道德的場面で働く力として、道德的判断力があるが、これは、道德的な問題場面对して、対話を通して、もし自分だったらどうするか考え、自分や他者などさまざまな視点から検討し、自分の経験と結んで考え、道德的価値から見て、判断し、自他を調整し、自己決定することができる。その決定する際、「自分」「他者」の心情の両面を考慮して、他者の状況や心情から最善策を考える。

- 他者の生き方をもとに、自分の生き方について課題をもち、自己の生き方を高めていこうとする子ども（学ぶ意欲）
- 資料の主人公や友達から大切な道德的価値を理解し、自己の生き方を高めていく子ども（能力）
- 自分の中に、主人公と似た心情面の共通性に気づき、積極的に生かしていこうとする子ども（自己の自覚）

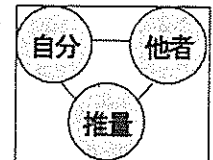
～対話型シミュレーションの展開～

木下美紀

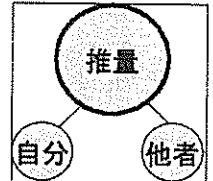
2 副主題について

シミュレーションとは、道徳的な問題場面における状況や相手を想定し、自分の行動がどのような影響や結果をもたらすか予測し、問題解決のためによりよい考えや行為をさぐる体験的活動である。

対話型シミュレーションとは、道徳的な問題場面で、資料の場を再現し、とりうる立場について役になって意見を交流し、よりよい方を自己分析して意思決定していく体験的活動であり、次の2つの活動がある。①道徳的な問題場面において相対する立場の意見を聞き、とりうる立場を吟味するシミュレーション1である。右上図のように、自他の視点から推量していくことを大切にする。②シミュレーション1の中で、どちらも価値が含まれ、判断がつかず問題となった場面を、



シミュレーション1



シミュレーション2

時間軸、立場を移動させ創造的に演技するシミュレーション2である。この活動は、上図のように、自他のよりよい関係を推量する部分を大切にし、道徳的価値に迫っていく。役割演技との違いは、自分の体験を常に意識し対話の場面でその体験を根拠として交流し自己内対話ができることである。

3 具体的構想

● 教材化の工夫

取り扱う資料は、右のような視点で選んでいく。他者の考えを参考にせざるをえないような強い求めの生まれる教材を選定する。資料のなかの道徳的場面の問題を自分や他者の視点を大切にしたい自分を調整しよりよい人間関係を構築する特別活動、国語科などの他教科領域の学びの体験（方法や内容）を生かしながら問題解決に向かう。

- ①道徳的な価値葛藤がおこるもの…どちらの行為や考えにも価値が含まれており、どちらをとっても道徳的価値からみて、間違いがない。
- ②心理葛藤（弱さと道徳的価値）の場合でも、両方に価値が多様に含まれており、判断に多様な視点による分析が必要なもの。（弱さへの共感）
- ③生活経験に近く、一人一人の経験や状況、価値観にズレが生じ、実際に体験して確かめてみたいと思うもの。
※葛藤については、①、②のどちらかを考慮する。

● 対話型シミュレーションを位置づけた活動構成の工夫

中・高学年では、人間を多面的に取り上げるということで、複数時間で構成する（図1）。第1次で、道徳的問題場面で主人公の行為を想定し演技するシミュレーション1、第2次で、シミュレーション1で解決しなかった場面を時間軸、立場を移動し想定した場を創造的に演技し、問題解決を図るシミュレーション2により自他を大切にしたい心情面から解決するという問題解決的な構成をする。低学年は、発達特性から基本的に1単位時間とする。対話型シミュレーションが活性化する手だてとして、①他者との考えの相違が起これ問題場面が明確になるような資料との出合わせ方を工夫する。②対話の進め方を示す対話カードの視点（比較、関係づけなど）を司会が活用する。③実際に道徳的問題場面を設定し、自己決定していくシミュレートする役割演技など話し合う必然性を持たせる場の工夫をする。

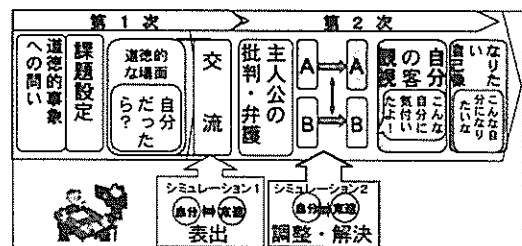


図1 対話型シミュレーションの基本的な構成(中・高学年)

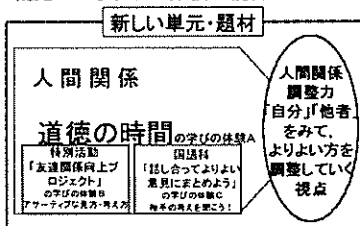
第4学年 主題「どちらが友達のためになるか？」

(1) 目標

- 1 道徳的問題場面において、とりうる行為を想定し、そのときの心情を吟味し解決する対話型シミュレーションを通して、自分の友達に対する行為や心情について見直すことができる。
- 2 資料『大きな絵はがき』を通して、相手の状況や立場を信じ考えて、助け合って友達関係を深めていくことの大切さをつかむことができる。

(2) 主題の考え方

補充による学びの体験の統合



- 人間関係ということ 키워ドにして、推量の部分を「道徳の時間」で重点化して担う。自分の体験を意識させるシミュレーションを行い、実生活に生かしていけるようにする。
- 特別活動「友達関係向上プロジェクト」での学びの「自分」「他者」の視点を明確にもち、その心情を追求する際の視点を、また、対話という点で、国語科の伝え合う力を生かしていく。

(3) 学習の流れ

見つめる段階：1 / 2 時

友達のあやまちを伝えるということから
本当の友情について話し合う。

- (1) 1 枚絵をもとに、自分の友達関係について自己評価し、課題について話し合う。



私は、友達関係が
崩れるのが嫌で、な
かなかアドバイスで
きない。幼稚園のど
きに、けんか別れし
た経験があるから。

- (2) 資料『大きな絵はがき』前半部分から、立場を決め、シミュレーション1をする。



(黙っている)
本当の友達だから
こそ、黙っておいた
方がいい。わたしの
経験から、言うとな
らば、傷つけてしまうから。

見つめる段階では、2 時間を通して追求する「本当の友達とはどんな友達か知りたい」という課題をつかませることをねらいとしている。

【教師の支援】

- ※ 友達に忠告する 1 枚の絵から、現在の自分の友達との関係を自己評価させた。
- ※ 定形外郵便の絵はがきをもらった主人公広子が、迷いながらも相手を信じ手紙で伝えるという資料『大きな絵はがき』を活用した。
- ※ 伝えるか迷う場面で見（突き放す友情）と母（かばう友情）、その意見を聞いて考える主人公に分かれてその場をシミュレーションした。ここでの視点は、友人関係を保つということでの自分の意見の表出である。

【子どもの様子】

- 子どもたちは、兄、母、広子役、司会者を決めてシミュレーションを行った。
- 左写真のように、自分の経験を重ねながら、その場の心情を吟味することができた。

求める段階：2/2時

自分と主人公や友達の気持ちや行為を比べて、シミュレーションしながら友達関係について話し合う。

- (1) 道徳的場面で時間軸、役を移して演技し、主人公の行為や考えを話し合う。

シミュレーション2

実際に手紙を書いて、どんな気持ちになるか確かめてみよう！



黙っているときと、伝えた場合は、どんな気持ちだろう？シミュレーションして確かめよう！

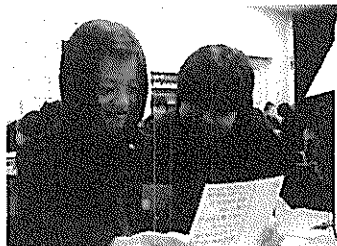
- (2) 資料の後半を読み、自分にある友達を思う気持ちについて話し合う。

伝える「心の変化表」自己評価3 (その理由)

相手を信じて伝えるのが本当の友達。友情の意味を考えたい。伝えて、きっとわかってくれるという信じる気持ちがとても強くなった。

資料1 自分の友達に対する傾向性A児（対話後）

- (3) 今までの自分の行為や考えについて見直し、なりたい自己像について記述する。



親友なら、相手を信じて伝えることが大切。これからは、相手のことを本当に心から思いやって、分かり合いたい。

【考察】

- ◎ 対話型シミュレーション1として、経験の異なる子どものペアリングをし、その場の状況を再現し、創造的に演技させたことは、常に自分の体験を意識しながら、友情観を吟味するのに有効であった。
- ◎ シミュレーション1で出された判断に迷う問題を解決するシミュレーション2では、時間軸、役の移動をして、自分と他者の自他というアサーティブな視点から心情面を考えさせて、よりよい方を選択させることで、実生活への実践意欲を高めることができた。

求める段階では、シミュレーション1で出された課題を解決し、忠告するという信頼友情の価値をとらえることをねらいとしている。

【教師の支援】

- ※ 時間軸を移動して「伝える」場合と、「黙っている」場合のそれぞれの立場で正子に手紙を書いて、伝えた（シミュレーション2）。ここでの視点は、よりよい関係の調整である。
- ※ 名札と蓼科高原の正子からの手紙を模した絵はがき（50円切手）を用意した。

【子どもの様子】

- 子ども達は自分と他者の視点を大切にしながら、正子への手紙を書いて、その手紙を読んで伝えた。
- A児は、左写真のように、黙っていることで、その場はうまく関係は保てるが、手紙を書くときは、相手のあやまちをふせておくことで、心の爽快感が得られず、暗くなることに気付いた。

【教師の支援】

- ※ 主人公の行為や考えは？ということで、資料後半を提示した。後半部分は、手紙にはがきのお礼と、料金不足を伝えることを記すという話である。
- ※ 自分の行為や考えを自己評価させ、学習前と後の友情観のとらえについて比較させた。

【子どもの様子】

- A児は、「相手を信じて、その思いを大切に伝えることが大切」という実生活を意識した発言をした。
- 相手の成長を願って忠告する信頼友情の価値の大切さをとらえることができた。

○ 総合的な学習の時間の構想

実社会にいきる学びをつくる総合的な学習 ～新たな課題を見出し発展させていく学習の構想～

○ はじめに

総合的な学習創設以来、本校は、子どもの生活現実から学びを立ち上げ、子ども自らが抱く気がかかりや願いを出発点に自己を見つめ自らの応えを見つける学びを展開してきた。その結果、「よりよい自己の生き方を創る」という総合的な学習でめざす子どもの姿がはっきりしてきた。しかし、現実社会がめまぐるしく変化、進化するなか、そこに対応できる子どもを育てるために、PISA 型の学力育成が求められている昨今、そこへ向かう方法をよりはっきりさせる必要が出てきている。つまり、これからの総合的な学習では、実社会や実生活とのかかわりを重視しながら育てたい力やゴール像を明らかにし、知を総合化しながら問題解決を図っていくプロセスを明確にしていく必要があるのである。

1 主題について

実社会にいきる学びをつくるとは、各教科等で身に付けてきた知識や技能が、実社会や実生活において活動するとき、そこで遭遇する様々な「壁」を乗り越えるために、存分に発揮されることにより、深化することで、学習することの価値を見出し、意義を実感することである。具体的には①自らの課題を設定し、その解決のために既知の技能などの方法知を活用している②既知の知識や見方考え方を活用している③自己実現を通して学習に取り組む意義を感じ、意欲を高めたり自信を付けたりしている④コミュニケーション能力などを駆使し、社会とかかわっているなどの姿である。

実社会にいきる学力をつくる総合的な学習とは、教室で学んでいる各教科等で身に付けた知を、これから生きていく現実の社会で実際に活用することで、有用感や達成感を味わい、学びの意義を実感する学習である。具体的には、実社会を舞台に活動を行ったり、実社会に自分達がつくり出したものを発信したりすることで、これまでの学びが「役に立つ」ことを実感することである。そのためには、子どもたちのこれからの生活を見据えたときに、価値ある文化や人々の営みに出会い、それらが存在する実社会をステージとして追究活動が展開され、課題を達成するためには、実社会とかかわりながら学校で学んだ知を活用していく必然性に迫られるような学習展開を構想することが必要となる。

- | | |
|--|---------|
| ○ 実生活や実社会から自ら課題を設定し、解決に向けて主体的に探究している子ども | (学ぶ意欲) |
| ○ 追究のなかで、自ら各教科等で習得した知を活用する必要性に気づき、求め、活用している子ども | (能力) |
| ○ 実社会のなかで、自分なりの応えを見出し、自分自身の学びに自信を高めている子ども | (自己の自覚) |

2 副主題について

新たな課題を見出すとは、追究の対象となる文化や人々の営みと出会い、調べたり体験したりすることで、それら自身がもつ価値に気付いていくとともに、それらが属する実社会をさらに追究したり、かかわっていかうとしたりするために乗り越えなければならない壁を明らかにすることである。子どもたちが追究していく対象は、実社会のなかで何らかの意味をもって存在しているからこそ価値があるのである。そのため、子どもたちは学校のなかに教師が用意した対象ではなく、実社会のなかで生きている対象そのものやその対象が息づく実社会を追究する必要があるのである。

新たな課題を見出し発展させていくとは、それまでの追究をもとに、追究対象が存在している実社会を新たな学びのステージとして、これまでに身に付けている知を総動員して実社会に働きかけていくことである。そのためには、「何としても達成したい」と子ども自身が強く願うゴール像を設定することが大切である。実社会を学びの新たなステージとして活動していこうとすれば、そこには今まで経験したことのない様々な障害に遭遇することが考えられる。その壁を乗り越えない限りゴールに到達しないとき、子どもたちはこれまでに身に付けてきた知を自ら求め、総動員し始めるのである。

新たな課題を見出し発展させていく学習の構想とは、子どもたちが実社会に新たな課題を見出し、その解決や達成に向けて、これまでに教科等で習得した知を活用しながら、実社会に目的をもってアプローチし、自己実現を図っていくことで、学びの意義を実感しつつ、自分のこれからの生き方に自信をはぐくんでいく学びの構想である。このような学びを実現していくためには、①価値ある追究対象に出会うこと②この追究対象が存在する実社会をステージとして子どもたちが取り組んでいくべき活動内容やその結果得られるゴール像を明確にすること③課題達成に向けて実社会と往復的にかかわり、働きかけていく場を設定することなどを大切にしていく。

3 具体的構想

● 新たな課題を見出し発展させていく学習の教材化の条件

(1) 学習対象

学習対象は、子どもたちにとって価値高いものでなければならない。具体的には、①地域の文化や生活をつくっている象徴的なものやこと（行事、食、学問、建築、芸術、スポーツなど）②自分の生き方を創っていく際にモデルとなったり参考になったりする人間やその生き方などである。

(2) 学習対象選定の条件

これからの総合的な学習では、学習対象そのものの追究だけではなく、それらの対象が存在する実社会のようすをとらえたり、その実社会で実際に自分たちもその立場になったり活動したりする経験が必要である。そこで、学習対象選定の際には、価値ある対象であることはもちろん、実社会で子どもがこれまでにとらえたことを活用できるような新たな課題を含んでおり、価値ある経験ができるようなステージが設定できることが必要となる。ここでいう価値ある経験とは、試してみたり、交渉したり、働きかけてみたりするなど子どもたちが実社会と本物のかかわりをもつことである。そのため、学習が「学習対象そのものの追究」→「学習対象が存在する実社会をステージにして、学習対象の追究をいかした新たな課題を設定し、その達成をめざした活動の経験」という系統的な学習になる。

(3) 学習対象が備えるべき内容

	内 容	中 学 年	高 学 年
郷土文化	○ 日本の伝統文化に対する理解と愛情を育て、文化を受け継ぎ守っていく態度を育てる。	地域の文化に積極的に親しみ、地域やその文化への愛着をもつこと。 地域や文化を支える人の工夫や努力を理解すること。 地域の一員であることに気付き、郷土の文化を守るための考えをもつこと。	日本の文化や伝統の特徴に気づき、郷土や文化への愛着を深めること。 進んで文化行事や活動に参加し文化を支える人の工夫や問題点を理解すること。 文化を調べたり、つくったりして自分たちの文化として実践すること。
環境	○ 身近な自然や環境と積極的にかかわり、生活と環境の関係について理解し、よりよい環境をつくる。	身近な自然と自分の生活の関係に気付き、愛着をもって接すること。 環境問題を解決するための機関について知り、自然を守る人々の工夫や努力について理解し、自分にもできる方法を考えて試してみること。	地域の自然や環境の美しさ、大切さに気付き環境との共存について考えること。 環境問題の現状について、科学的な方法を用いて調べるとともに自分たちの生活との関係を理解し、環境創造をめざし日常生活に実践すること。
食育	○ 「食」に関する知識を身に付け、健康的な生活を実現できる食生活を実践できる態度を育てる。	食文化について調べることで、食についての正しい知識を身に付けること。 自分自身の食生活を振り返り、食生活と健康とのかかわりについて調べ、これからの食生活の在り方について考えること。	「食」の安全性などの知識を身に付け、選択する力を身に付けること。 「食」とそれを支える「農業」の関係について、体験を通して調べ、環境とのかかわりを合わせて考えることで、その重要性について考えること。
福祉	○ 自分を含め高齢者や障害者、年少者の存在のことを理解し、皆が幸せに暮らせる社会をつくろうとする。	身近な高齢者、年少者、障害者について理解を深め、身近なところの配慮や工夫に気づくこと。 身近な福祉問題解決のために、自分たちにできる方法を考えて実践すること。	毎日の生活が人々の支えや助け合いで成り立っていることに気づき、他者を思いやり大切にすること。 人々が幸せに暮らせる社会をつくるには、どうすればいいか考え実践すること。
生命健康	○ 生きることのすばらしさや、生命の尊さに気づき、自他の生命を大切にし、心身ともに健康に生きる。	動植物の生態や生育環境に関心をもち、生命の神秘さや大切さを感じる。 健康で安全な生活を送るために、必要なことに気付き、よりよい生活習慣や態度を身に付けること。	生命の誕生について理解し自分の命と周りの人や環境との関係を理解すること。 生命や健康を維持するために、自分の生活を見直し、よりよい生活環境や生き方をつくること。
勤労・進路	○ これまでの自分やこれからの自分の将来の夢を考え、自分の個性を生かしていく。	家庭や学校、地域での身近な人々の働く姿や仕事に出合い、その営みが自分たちの生活を支えていることに気付き、職業に関心をもつこと。 身近な人々の職業や生き方に関心をもつとともに自分自信の姿を見つめること。	職業調べや職場体験を通してそれぞれの職業や働く人の生き方を理解し、働く意義を考えること。 自分の個性や将来の夢について考え、なりたい自分に向かって、自分の理想像をもった生き方を考えること。
経済金融	○ 健全な金銭感覚を養いものやお金を大切にし、資源を有効に活用する。	お金の役割を理解し、様々な目的や使い方や貯め方があり、お金や資源の大切さを感じる。 少額のお金を使って金融に関する意志決定を学び、お小遣いや慈善への寄付を含む使い方を考えること。	将来のニーズと貯蓄によって実現されることを学び、お金や資源を取り扱う権利と責任をもつこと。 消費者の選択が他の人々の経済や環境に与える影響を含めお金の使い方についての社会観をもつこと。
法	○ 法への関心を高め、その役割や必要性を理解し法に基づいた社会参加意識を高めていく。	学校や地域のルールや方途自分たちの生活とのかかわりに気付き、そのよさを感じる。 よりよい学校生活や地域社会での生活を送るためにどのようなルールがあればいいか考えること。	社会生活を維持するための法がどのような目的でどのようにつくられているのか理解すること。 法がよりよく活用された社会の在り方について考えること。
国際理解	○ 日本や世界の国々に関心をもち、文化や生活習慣を理解し、他の国々の人々とともに生きていこうとする。	様々な国の人々と交流して文化を知り、互いのよさや違いに気付き、認め合うこと。 外国語に関心をもち、様々な場面での歌や言葉に慣れ親しむこと。	様々な国の文化や歴史、生活習慣を理解するとともに互いの違いを認め尊重しようとする。 外国語におけるごく簡単な日常会話を使って話したり、聞いたりすること。

● 新たな課題を見出し発展させていく学習スタイル

子どもは、はじめから実社会で「何かをしたい」と思うのではない。ある対象に対して追究していくことで、何かしらの「思い」をもつことができたとき、①それをもっと広げたり深めたり角度を変えてみたりしながら本物の社会場面での追究を進める②自分のなかに生まれてきた「思い」を誰かに伝えたい、反応を得たいと願い、発信していくなどの求めが出てくるのである。そこで、学習スタイルとしては、まずはじめに、中心となるあるいはきっかけとなる一つの対象に出合い、十分にかかわり合うことで、知り、感じる必要がある。そして、そこでつくられた対象に対する思いを実感させるなかで、その対象が位置付いている実社会に目を向かせる。その際の支援では、①視野を広げること、新たな発見が期待できそうだという意欲を高めること②実社会で自分たちが何かできそうだという可能性を実感させること③これからの追究のゴール像が子どもたちにイメージできるような課題を設定させることなどが必要になってくる。

次にそこから新たに始まる追究では、ステージが実社会そのものになっていくため、これまでに子どもたちが経験したことのない困難に出会うことが予想される。実社会は、基本的には大人が構成した社会である。そこに子どもたちがかわっていきこうとしているのであるから当然である。しかし、その壁をこれまで学校で培ってきた内容知や方法知を活用し、これまで追究してきた学習対象に対しての思いを支えとして意欲をもって乗り越えていったり、これまで追究してきたことを活用したりしていくことで、主体的に実社会で生きている自分を自覚することができ、自己の学びや今の自分に自信を付けていくことができると考える。

このため、単元はより系統的になり、新たな課題を見出し発展させていくために、実社会で追究していくときには、これまで追究していた内容の不十分さや新たな可能性に気づき、再追究へと振り返ったり、自らこれまで学んだ知や新たな知を補完的に求めたりしていくことが考えられる。

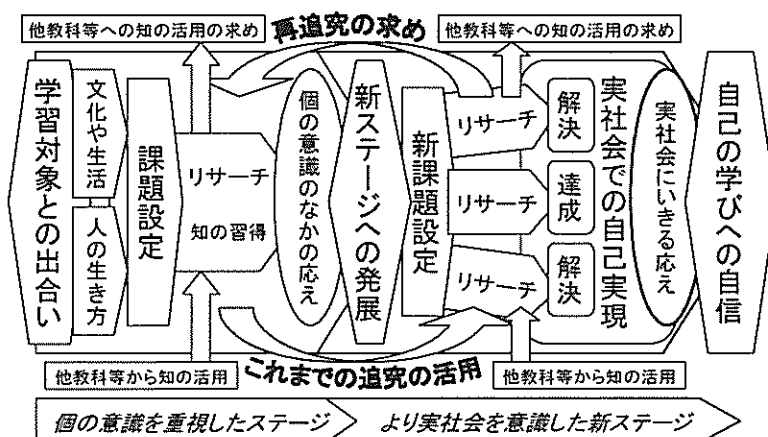


図1 新たな課題を見出し発展させていく学習スタイル

● 新たな課題を見出し発展させていく学習を展開していく際の留意点

新たな課題をつくって発展させていく場合、追究が広がることで、それぞれの追究が薄くなってしまわないように留意する必要がある。そのために、まずはしっかりと対象について「知る」ことを大切にす。そのためには、情報収集、分析、表現という各教科で身に付けてきた知を活用することが必要となってくる。つまり、はじめから活動ありきの総合的な学習ではなく、一人一人の追究に耐え、支えるだけの力を付ける必要がある。次に、実社会とかかわっていく際には、教師がステージを用意してそのなかで子どもを難なく活動させるのではなく、子どもたちが自らの力で実社会への扉を切り開いていくことができるようにする必要がある。そのためには、①実社会へどのように参加していくか、あるいは、実社会をどのように追究していくかの見通しをもたせること②実社会を追究対象とすることができるように、交渉すること③実社会とかかわったことで、その実社会から評価を得ることなどができるように配慮する必要がある。

総合的な学習の時間の実践

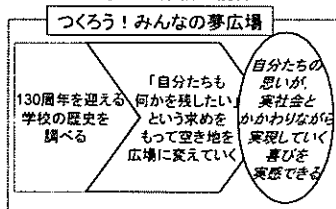
第5学年 単元「つくろう!みんなの夢広場〜祝!創立130周年記念プロジェクト〜」 総合部 高良祐治

(1) 目標

- 1 創立 130 周年を迎えた福岡小学校の歴史を追究することをきっかけとして、その記念に広場づくりを立案し、大学の先生や造園業者とかかわりながら実現に向けて取り組むことができる。
- 2 在校生や卒業生へのリサーチ活動や専門家とかかわりなどの活動を通して、人的環境や空間的環境などを考慮しながら学校に調和した空間づくりを実現することができる。

(2) 単元の考え方

系統による学びの体験の統合



- 130 周年を迎えた学校の歴史について、卒業生などからリサーチすることで調べる。そこから「自分たちも学校に何か残したい」という求めをもち、校内の空き地を有効に活用した「夢広場」をつくるという発展した学習を展開する。その際、環境工学の大学の先生との交流や造園業者との交渉などを通して、実社会とかかわっていく。

(3) 学習の流れ

第1次：1～6/25時

130 周年を迎えた学校の歴史について調べる。



卒業生や以前勤めていた先生から、昔の学校の様子について質問する。

第2次：7～19/25時

130 周年にふさわしい「夢広場」づくりに取り組む。



福岡大学工学部社会デザイン科の柴田先生から、広場づくりに取り組む際に必要なことをリサーチする。

第1次では、130 周年の学校の歴史に関心を持ち、自分たちも学校の歴史となる何かをも残したいという意欲を高めることをねらいとしている。

【教師の支援】

※ 過去の卒業アルバムや文集を用意したり、卒業生や過去の職員を招聘し、聞き取りの場を設定したりした。

【子どもの様子】

○ 先輩たちの学校への愛着と誇りを感じ、自分たちにもそのようなものがほしいという思いを強くした。

第2次では、130 周年の記念として自分たちも何かを残したいという思いのもと、玄関前の有効に活用されていない空き地をみんなが集える広場にかえる夢広場づくりを実現するという新たな課題を設定し、その実現のために、大学の専門家やPTA、造園会社など、実社会とかかわりながら、リサーチ・計画・検討・実行などを実行していくことをねらいとしている。



広場の大きさなどを調べ、図に表していくことで、どのような広場がつかれそうか検討する材料を集める。

工学部の大学生と一緒に設計案の検討を行う。

PTAや代表委員会で広場づくりへの理解と協力をお願いする。

全校児童に協力してもらい、夢広場の芝生はりの作業を行う。

第3次：20～25/25時

夢広場完成をお祝いする式典を計画し、実施する。

これまでお世話になった方々を招待して夢広場完成式典を行う。

芝生が一斉に緑の芽を出し、桜が満開の、完成した夢広場

【教師の支援】

- ※ 柴田先生を招聘し、集う空間を作るために必要なことをリサーチする場を設定した。
- ※ 設計図や模型を使つての検討を環境デザイン科の学生と行う場を設定した。
- ※ 広場制作の許可や協力を得るために、PTAや代表委員会での説明会を設定した。
- ※ 全校児童での芝生はりを造園会社と話し合いながら計画し、実施した。

【子どもの様子】

- 調査やアンケートの結果から①ベンチのある丘②紅葉のきれいな木③芝生をはるなど決め、設計案を作った。
- 制作許可や協力依頼について学校やPTA、広場アピールと芝生はりへの協力依頼を代表委員会でを行うために、効果的なプレゼンを作った。
- 芝生はりなど制作に参加できるところは積極的に参加した。

第3次では、これまでの夢広場づくりへの取り組みを振り返り、自分たちが新たな歴史をつくったことを実感するために、完成式典を計画・実施することをねらいとしている。

【教師の支援】

- ※ これまでお世話になった方々への招待状発送やプログラム作成、会場準備、司会進行などを子どもたち主体で行わせた。

【子どもの様子】

- 大学の先生やPTA役員などから評価をいただくことで、これまでの取り組みの成果を実感し、今後の広場維持・活用へ意欲を高めていた。

【考察】

- ◎ 130周年の学校の歴史を調べ、学校への関心を高めた上で、「わたしたちも何かを残したい」という意欲を高め、「夢広場」づくりという新課題を設定し追究させたことは、目的を明確にし、実現に向けて、これまでに教科等で培った知を活用しながら主体的な活動を促すことができた。
- 環境工学の大学の先生やPTA、造園業者など実社会とかわらせながら広場づくりを行ったことで、これからも有効に活用できる価値のある広場づくりを実現できた。

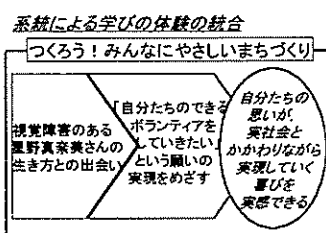
総合的な学習の時間の実践

第5学年 単元「つくろう!みんなにやさしいまちづくり～ボランティアの輪を広げよう～」 木下美紀

(1) 目標

- 1 障害を乗り越えて生きている人物を追究する課題を設定し、直接話を聞いたり、メールを交換して聞いたり、体験的活動（周辺の福祉施設の見学や、福祉設備を見る探検など）をして調べたり、多様な調べ方をもとに、自分のできるボランティアについて考え、実践していくことができる。
- 2 星野真奈美さんの失明の危機にありながらも留学を続けようとした心情や、生活訓練を一生懸命受けて更生しようと努力する心情などを追究する中で、人の生き方のすばらしさから、その人とともに生きる共生社会をめざす福祉的な見方・考え方を見直すことができる。

(2) 単元の考え方

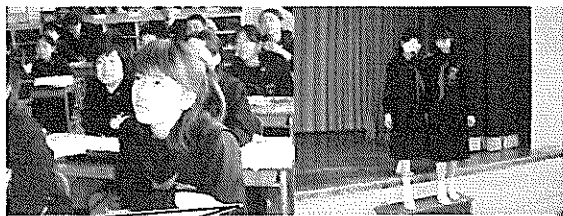


- 失明の危機の中、留学という夢を実現し、その後も、障害を乗り越えて生きている星野真奈美さんという人物をリサーチすることで、その生き方へのあこがれ、感動を抱かせる。そして、星野さんを支えるボランティアの人に出会わせ、相手を共感的に理解する中で、「自分たちのできるボランティアをしていきたい」という思いを実現していく。

(3) 学習の流れ

第1次：1～3/14時

星野真奈美さんの生き方に出会い、課題をもつ。



星野さんは、どうしてそんなに前向きに生きることができるのか? 明るさのひみつを知りたい!

第2次：4～11/14時

ボランティアの方に出会い、自分のできるボランティアを考える。

第1次では、星野真奈美さんの生き方に関心を持ち、前向きに生きる生き方に関する追究意欲を高めることをねらいとしている。

【教師の支援】

- ※ 星野さんからのビデオレター（料理をするVTRと写真）を視聴させた後、星野さんの写真と略歴を提示した。
- ※ 視覚障害のある方への共感的理解が図れるようにアイマスク体験や点字体験をした。

【子どもの様子】

- 星野さんの前向きに生きる姿に感動し、明るさのひみつを知りたいという思いを強くした。

第2次では、星野さんを支えるガイドボランティアの安木順子に出会い、その自然な2人の関係から、ボランティアについて調べ、自分たちのできるボランティアを考えていくことをねらいとしている。



点字ブロックの上に車が止まっています。

みんなにすみよいまちになっているかな？福祉マップをつくろう！

さわって分かるポスター、どうですか？

点字地図ボランティアブルーチーズの宮脇さんに取材する。（保護者もとともに）

第3次：12～14/14時
自分たちのできるボランティアを考え、実践する。

星野さん、わたしたちのボランティアの取り組みはどうですか？星野さんのように前向きに生きていきたい。

体験コーナー点字教室

点字入りポスター

ユニバーサルデザインの企画を作って、会社に提案してみよう！「くつナビ」とってどこにでも連れて行ってくれるものです。

【教師の支援】

- ※ 学校周辺が障害のある方も含めてすみよいまちになっているか、点字ブロックや音声信号、道幅などを視点に探検させた。
- ※ 点字地図ボランティアの宮脇さん、ガイドボランティアの安木さんなどに取材し、ボランティアのあり方を聞く場を設定した。

【子どもの様子】

- 福祉マップに危険箇所や、改善案を付箋紙で貼り、提案するための資料を作成した。
- 視覚障害のある方へ、本の録音や、点字学校案内地図、対外的には触って分かるポスター、ユニバーサルデザイン企画部に分かれてボランティアのあり方を探究していった。

第3次では、これまでの自分たちのボランティアの取り組みを振り返り、実社会へと発信していくことをねらいとしている。

【教師の支援】

- ※ 視覚障害のある方、社会福祉協議会の方、ボランティアの方に自分たちの取り組みを発信する場を設け、みんなにやさしいまちづくりを提案し、みんなが安心して楽しくくらせるまちづくりの視点をもたせた。

【子どもの様子】

- 星野さんなど視覚障害のある方に自分たちの企画を試してもらい、評価をいただくことで、これまでの取り組みの成果を実感していた。
- 自分のできるボランティアを実践し、ボランティアは相手のことを思って、互いに理解する大切さを実感していた。また、あつボランティアサークルを立ち上げ、今後も活動する意欲を高めていた。

【考察】

- 障害を乗り越えて生きている人物の生き方を追究することからスタートし、その人を支える人の存在に着目させ、交流させたことは、「自分たちも自然な形でボランティアをしたい」という意欲を高め、実社会へ発信する活動へと促すことができた。
- ガイドボランティアと視覚障害のある方と相互に交流させたことは、ボランティアする側、させる側を相互に見て、共生社会をめざして生きる福祉的な見方・考え方を見直させることができた。

○ 特別支援教育の構想

共生社会を豊かに生きる子どもを育てる教育の創造

○ はじめに

障害のある児童、生徒への支援を明確にするために個別の教育支援計画の策定が進められている。その理由は、子どもたちが地域で生き、自立し、社会参加していくために保護者や関係機関との連携を強めながら、生涯にわたって一貫した支援が必要となることが課題となっているからである。そこで、本校特別支援教育部では、従来の障害の程度だけでなく、一人一人の教育的ニーズから子どもたちを理解し、子どものもてる力を発揮することができるように認知面や社会性などの特性をふまえたより一層適切な教育を行うことを重視していく。そして、障害のある人々が将来、様々な人々とかわり、自分らしく、豊かな生活を送ることができるように、個の特性に応じて必要な力を身に付けていくことが大切である。

1 主題について

共生社会を豊かに生きる子どもとは、子ども一人一人がもつ教育的ニーズに応じて必要な支援を受けつつも、身の回りのもの、人、こととのかかわりを通して、できることやわかることを増やし、自分から働きかけることができる子どものことである。具体的には、①学びそのものの楽しさや生活に活用するといったよさを感じる「学ぶ実感」、②身の回りのもの、人、ことに働きかけたり応じたりするために必要な「かかわる力」、③できたことやわかったことにより生まれる「やる気・自信」の3つからなる。特に、「かかわる力」では、自分がやりたいことや好きなものなどを選ぶ力、他者と積極的にやりとりする力などがあるが、このような力を高めていくことで生活の幅が広がっていくのである。

共生社会を豊かに生きる子どもを育てる教育の創造とは、生活の目的を達成するために、身近な人々へ積極的に働きかけ自分の気持ちを伝えたり必要な支援を受けたりしながら、身の回りの事象の意味がわかったり生活に必要な事柄を見つけて使ったりできるように、教育活動の種類や配列を工夫することである。そのためには、子どもの実態を障害の程度だけでなく、認知や行動の特性、社会性などからもとらえて一人一人が確実に力が付く授業づくりをめざしていかなければならない。

- | | |
|--|----------|
| ○ 達成したい目的に向かって学習しながら、学ぶ楽しさを感じている子ども | (学ぶ実感) |
| ○ やりたいことや好きなことを自分で選んだり他者に自分からかかわってやりとりしたりする子ども | (かかわる力) |
| ○ 学んだことに自信をもち、自分から積極的にもの・人・ことにかかわろうとする子ども | (やる気・自信) |

～一人一人の特性をいかした授業づくりを通して～

特別支援教育部

2 副主題について

二人一人の特性とは、障害の種類・程度、認知面や社会性の実態など多方面にわたる子どもの実態と将来像をふまえた指導の方法に結び付くものである。これは、個別の教育支援計画や個別の指導計画に記されている実態から将来像、指導目標などにまで反映するものである。個別の教育支援計画とは、将来を見通した一貫性と、子どもにかかわる人々が同じ課題や支援の意識をもつ共通性から、子どもの実態を見直し、教育的ニーズを明らかにしたものである。これには、教師や保護者、関係機関など、その子どもにかかわる人々の共通理解にたった、子どもの将来像が設定される。さらに、将来像をもとにした各領域・教科等の年間目標や長期目標、短期目標、評価などを記したものが個別の指導計画である。

二人一人の特性をいかすとは、①一人一人の教育的ニーズから設定した実態や将来像をもとに、各領域・教科等の指導におけるめざす子ども像を明らかにすること、②めざす子ども像をもとに6カ年のカリキュラムを構想すること、③指導計画の学習内容や単元・題材の見直し及び、これに応じた一人一人への教育的アプローチを行うこと、である。

二人一人の特性をいかした授業づくりとは、個別の教育支援計画や個別の指導計画をもとに、「領域・教科等を合わせた指導」や「各教科の指導」において、①子どもの将来像をふまえた単元や題材の開発、②学びのスタイルに応じた学習過程の工夫、③一人一人が学習できる環境づくりと学習内容をとらえさせるための支援、から学習を構想することである。こうすることで、各指導の形態の特性をいかしながら、一貫した内容及び、一人一人のニーズに応じた支援による学習を行うことができる。

3 具体的構想

● 個別の教育支援計画から各領域・教科等の指導内容の明確化

個別の教育支援計画の策定・活用と個別の指導計画での目標の具体化と評価というように各領域・教科等の授業にいかしていく。具体的には、①策定用シートによる一人一人の特性と教育的ニーズの把握、②将来像から単元・題材の選定と指導内容を明確にすること、③個別の指導計画による指導目標の明確化と新たな目標設定のための評価、として、策定→活用→評価のサイクルを大切にしていく。

● 特性に応じる学習スタイルの具体化

子ども一人一人の実態から、学習の流れを維持しながら内容を高めていくことを中心にしたスタイル（変化と繰り返し）、集団において、もの・人・ことへのかかわりを重視したスタイル、そしてタイプ別（グループ別）学習の具体化を図っていく。

● 特性に対応した具体的支援

具体的な支援として、①学習環境の工夫、②認知特性をふまえた指導方略、③社会性（人とのかかわり）をふまえた指導方略、④操作性・巧緻性をふまえた教材教具の工夫、を行い、各領域・教科等での指導で行っていく。

○ 特別支援教育国語科学習の構想

状況に応じたことばを使う国語科学習

○ はじめに

人とかかわりの中で、自分の意思を回りに伝えることはとても重要なことである。その際、大きな役割を果たすものの一つがことばである。さまざまな場面で、さまざまな人に伝わるようにことばが使えるようになることが大切である。そのためには、相手や回りの様子、自分の立場などに応じてことばが使えることが必要である。例えば、相手とどのような関係にあるかの違いで、伝え方も変わってくる。身近な人であれば簡単なことばで通じるし、あまり親しくない人であれば詳しく伝えなければならない。また、自分の意思を伝えるだけでなく、相手が言うことを理解して、それに答えることも必要である。さまざまな人とやりとりができるためには、簡単なことばから詳しくすることば、話し方や聞き方などを身に付けなければならない。

1 主題について

状況に応じたことばを使うとは、ことばを使う目的や自分の立場、回りの様子、相手によって、簡単なことばで表したり、詳しく表したりしてことばを使うことである。そのためには、相手にわかるように伝えようとする意欲、ことばの理解力、話す力、聞く力、状況をとらえる力が必要になってくる。また、子どもたちが自らことばを使おうとするには、ことばを使わなければならない状況や、ことばを使うよさが実感できることが必要である。そのことで、意欲をもってことばに取り組むことができ、そのことで理解力や話す力、聞く力も伸びてくると考える。

状況に応じたことばを使う国語科学習とは、ことばを使わなければならない状況中でさまざまな人に自分がして欲しいことを伝えていくものである。つまり、明確な目的を設定し、そのためにことばを使わなければならない状況があり、ことばを使って相手に働きかけることで活動が進んでいくようにしていくものである。そのためには、ことばを使わなければならない状況の中で自分の役割を意識し、意欲的に活動できるようにしていかなければならない。子どもたちのことばを引き出すためには、子どもたちよりもことばの能力が高い相手とかかわることが必要である。そこで、かかわる相手は教師が行う。子どもたちの実態に応じて、簡単なことばで通じるようにしたり、詳しく言わなければならないようにしたり、正しいことばを示したりできるようにする。

- | | |
|---|----------|
| ○ ことばを使うことで生活が円滑になることがわかり、ことばを使うよさを感じている子ども | (学ぶ実感) |
| ○ 情報を受け止めたり自分から発信したりして、回りに意思を伝えることができる子ども | (かかわる力) |
| ○ 自分から進んでことばを使い、相手がわかるまで伝えようとする子ども | (やる気・自信) |

～ストーリーのあるごっこ遊びによる学習の展開～

諏訪原佳子

2 副主題について

ストーリーのあるごっこ遊びとは、子どもたちが見通しをもって活動できるように、内容が簡単で誰が何のために、何をするのかということがはっきりとしたお話の中で登場人物になってやりとりを行い、お話を進めていくものである。

ストーリーのあるごっこ遊びによる学習の展開とは、①見通しをもつために話の簡単な内容と役割を理解する、②ことばが表す対象やこ使う場面を変化させながらことばに繰り返しかわり目的が達成されることで意欲や自信を付ける、③複数のことばから場に応じたものを選択していくものである。

3 具体的構想

● 教材化の視点について

以下の視点からお話を選んだり、作り替えたりしていく。

ストーリーの選択・作成の視点	ことばの選定の視点
☐ ことばを使う必要がある状況（目的、役割、場面）が設定できる。 ☐ 教師と子どもとで役割が設定できる。 ☐ やりとりをする場面が設定できる。 ☐ 定型的な活動の中で繰り返しの場面の設定ができる。（場面が激しく変化せずに、話の世界に入りやすいもの）	☐ 人とかかわりの中から課題となることばである。 ・名称 ・肯定・否定のことば ・依頼要求を表すことば ・気持ちを表すことば ・詳しくすることば など ☐ 学級→学校→社会生活へと広がる。

● 活動構成の工夫

「つかむ段階」では対象とするものや活動を変えて繰り返しことばにかかわる。「ひろげる段階」では変化した場面で「つかむ段階」で身に付けた複数のことばを使い分けていく。

【表1 ストーリーのあるごっこ遊びによる学習における活動と支援】

	みとおす段階	つかむ段階	ひろげる段階
ストーリー	登場人物（子ども達の役）が出てくる場面までの提示	子ども達の役が目的のために活動する場面を具体的に表した場面の提示	目的を達成し、お祝いなどをしている場面の提示
ねらい	☐ 活動の見通しや意欲をもつこと	☐ ことばが表すものをとらえたり、依頼や要求の形にかえるのをとらえたりすること	☐ 違う場面や相手でことばを使い分けること
活動	☐ 目的について話し合う。	☐ 頼んだり、聞いたりして問題を解決する。	☐ ことばを使い分ける。
支援	※ 場面が意識できるように工夫した紙芝居の提示 →登場人物の確認 場の確認	※ 正誤の判断や表現を促す登場人物 ※ 個に応じたヒントカードの提示 ・状況を表す絵とことばを書いたカード ・状況の説明→使うことばを書いたカード	※ ことばの振り返りをする場面の設定 ※ 複数のことばカードの提示

第3・4学年 単元「シンデレラごっこ～まほう使いのでしになってシンデレラを助けよう～」

(1) 目標

- 1 シンデレラごっこのお話に見通しをもち、自分から進んで取り組もうとすることができる。
- 2 自分ができることを依頼要求の形に変えて話したり（AG）相手がよくわかるように伝えたり尋ねたり（BG）することができる。

(2) 単元の考え方

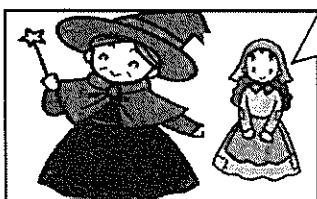
- ことばとそれを使う場面、ことばが表す具体物や、具体的な活動の3つを同時に提示していく。
- 「みとおす段階」では、お話の内容をとらえるとともに自分たちがどうしなければならないかを話し合う。「つかむ段階」では、言い方を状況に応じて変えることや相手に伝わりやすいように話すことができるように繰り返しことばにかかわる。「ひろげる段階」では、違う場面でも前時までと同じことばを使い、複数のことばの中から状況に応じたことばを選び使えるようにしていく。

(3) 学習の流れ

Aグループ a児（3年男子）	Aグループ b児（4年男子）
（実態）前後のつながりがないこと、使い方が正しくないことでうまく伝わりにくい。 ○ ことばを依頼の形に変えたり相手がわかるように詳しくしたりして言うことができる。	（実態）決まったパターンでは言えるが生活場面などで困った時に言えないことがある。 ○ ことばを依頼の形に変えたり、理由を付け加えて言ったりすることができる。

みとおす段階：1/5時

紙芝居を見て、シンデレラを助けることについて話し合う。



魔法使いの杖が折れて、困っているシンデレラを、子どもたちが魔法使いの弟子になって助けていくお話の紙芝居の提示

資料1 シンデレラの紙芝居



お話の世界に入り込み、意欲的に活動をしていくための小道具の提示

写真1 魔法使いに弟子になるぞ！

みとおす段階では、ごっこ遊びに見通しと意欲をもって取り組むことをねらいとしている。

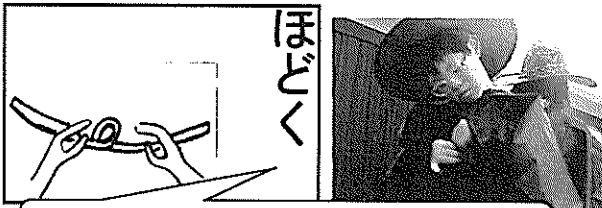
【教師の支援】

- ※ 紙芝居の読み聞かせを行い、どうすればいいかの話し合いを設定した。
- ※ 必要な物の確認と、そのために自分たちはどうすればいいのかを確認させた。

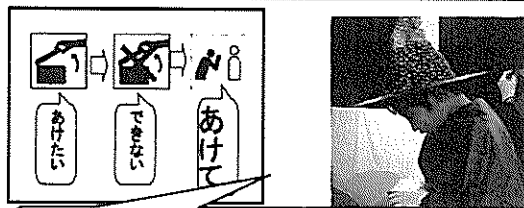
【子どもの様子】

- 子どもたちは、シンデレラが舞踏会へ行かなければいけないこと、そのためにはきれいなドレスと靴が必要であることを発表できた。さらに、自分たちが魔法使いを手伝って、シンデレラを舞踏会へ行かせてあげたいという発言をすることができた。

つかむ段階：2～4/5時 シンデレラがなくしたアクセサリーを見つける。



りぼんをほどきたいけれども、自分ではほどけずに困っている様子



箱を開けたいけれども、自分ではどうしても開けられず困っている様子

※ 自分ではできない状況を設定し、音声カード付きのヒントカードを見て正しいことばを使えるようにした。

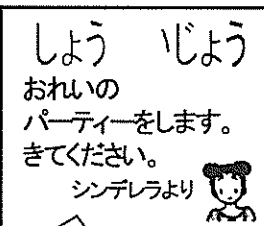
○ リボンがほどけない、そこでヒントカードを見ながら「ほどいてください。」と言えた。次には、うまく伝わらないと、「ぐちゃぐちゃです。ほどいてください。」と言えた。

※ 自分でできない状況、優しく扱わなくてはいけない状況を設定した。ヒントカードで状況と使うことばがわかるようにした。

○ 自分であけようとしたが、「乱暴にしているのかな」と言われ、「あけてください。」と言えた。次にはシンデレラの絵をさして「お花を付けるからあけてください」と言えた。

ひろげる段階：5/5時

シンデレラからのお礼のパーティへお土産を持っていく。



シンデレラからのパーティへの招待状



ヒントカードを見てことばを選んでいる様子

ひろげる段階では、複数のことばを場面に応じて使えることをねらいとしている。

【教師の支援】

※ 「開ける」ということばでは箱→扉というように違う場面で使うよう設定した。

※ 「開ける」「出す」「入れる」の中から状況に合うことばを選ぶようにさせた。

【子どもの様子】

○ 場面に応じてことばを選んだり、考えたりして伝えることができた。

【考察】

◎ ストーリーを設定し紙芝居で提示することで、見通しをもって活動できた。お話のなかにことばを使う場面や相手などを設定することで、相手意識や目的意識、ことばを使って目的を遂げた達成感を味わうことができた。さらに、相手、回りの様子、立場と普段ことばを使う状況に近い状況を設定することで、状況とことばをつなげてとらえることができた。

今後の課題は、より個に応じたごっこ遊びの流れの工夫と、社会生活に生かされることばの系統性について明らかにしていくことである。

○ 特別支援教育生活単元学習の構想

子ども自ら生活をひろげる生活単元学習

○ はじめに

特別支援教育では、個別の教育支援計画に記された子どもの将来像の実現に向けて、障害のある子ども一人一人の教育的ニーズに応じた適切な教育的支援を行わなければならない。その際、子どもの教育的ニーズは一人一人違うので、領域・教科を合わせた指導の形態をとり、生活の中で子どもを育てることが必要になってくる。生活単元学習は、生活上の問題を解決し、その解決の過程において自立的な生活に必要な事柄が学習できるものである。このことから、子どもの将来像に向け、必要な力を付けるためには、生活単元学習の充実を図ることが重要なのである。その際、自分の意志で決定したり、主体的に参加したりできるようにすることが大切である。つまり、生活単元学習において、問題の解決に向け、子ども自身がよりよい方法を見出したり見分けたりするとともに、生活にかかわる技能を身に付けられるように、自分の意志で方法や内容を決定して生活に必要な事柄を身に付けさせ、目的を達成した満足感を味わわせるような経験を積ませることが大切である。これは、人格と個性を尊重して互いに支え合う共生社会を生きることにつながると考える。

1 主題について

子ども自ら生活をひろげるとは、生活上の目的を達成するために、いろいろな体験をしたり、体験の仕方を変えたりして、生活に必要な事柄を新たに身に付けたり、よりよくできるようになったりするとともに、生活する楽しさを実感することである。そのためには、子ども自身が判断したり決めたりする工夫をすることが必要になってくる。具体的には、活動への意欲、どんな活動をするのか見通す力、よりよくできるために工夫する力、問題解決に伴う知識や技能が必要である。

子ども自ら生活をひろげる生活単元学習とは、目的の達成に向け、結果への見通しをもち、その見通しに近づくように、自分なりに体験し、その体験を活かして、よりよい方法や内容を取り入れ、それをもとに再び体験することで生活に必要な知識や技能を身に付けることである。そのためには、生活経験に基づくために見通しがもちやすく、取り入れるかどうかの見分けをつけやすいごっこ遊びを通して、工夫する力や技能を高めることが必要である。

- | | |
|--|----------|
| ○ 達成したい目的を設定し、解決に向け主体的に取り組み、達成できたよさを感じる子ども | (学ぶ実感) |
| ○ 目的達成に向け友達と活動し、持てる力を発揮し、生活に必要な技能を身に付ける子ども | (かかわる力) |
| ○ 頑張って活動する自分のよさを感じ、新たな事象にも主体的に働きかける子ども | (やる気・自信) |

～他者とのやりとりを繰り返すごっこ遊びによる学習展開～

原 田 敏 男

2 副主題について

他者とのやりとりを繰り返すとは、子どもが友達との関係のもと、学習内容に沿って変化したり、付加されたりした学習の場に、ふさわしい言葉の応答を行うことである。

他者とのやりとりを繰り返すごっこ遊びとは、生活場面を真似した場において、子どもが友達と一緒に活動し、必要なやりとりをつくったり付加したりすることができる真似遊びである。これにより役割が発生し他者とのやりとりが生じる。他者とやりとりしながら遊ぶことで、友達の遊び方を真似したり取り入れたりし、よりよい方法や内容を身に付けることができる。

他者とのやりとりを繰り返すごっこ遊びによる学習展開とは、つかむ段階でVTRから生活経験と関連付けて意欲をもたせた上で、遊ぶ目的を設定する。遊びを楽しむために必要な場や遊具を付加させる。つくる段階でよりよい遊び方を身に付けさせるために、場や遊具を変化させ、それに応じた遊び方や必要なものを工夫させる。具体的には、「遊び活動1－紹介活動－遊び活動2」という活動構成をし、互いの遊びを見合って、よりよい遊び方を見分けて取り入れられるようにする。ひろげる段階で、対象やかかわり方をひろげさせるために友達を招待して一緒に遊ばせ、満足感を味わわせる。

3 具体的構想

● 主体的に取り組めるための教材化

発展が見込め、活動を繰り返しながらかかわりが深まるように以下の3点を含むようにする。

- 子どもが遊び方や遊びの場について工夫して楽しく活動できるもの（遊戯性）
- 役割が複数あり、役割を果たすことで他者とのやりとりを発生させるもの（関係性）
- 他の場面に活かせる知識や技能があり、社会生活に必要な内容を含むもの（価値性）

● 遊びやかかわりが高まるための活動構成

つかむ段階では、遊びに応じた生活場面のVTRにより生活経験の想起させ、見通しをもたせる。そのために、子どもが見たり、経験したりしたことがある場面を取り上げるようにする。そうすることで、活動の理解や意欲付けを図るようにする。つくる段階では、新たな場や遊具の提示により、他者とやりとりしながら工夫し知識や技能が身に付けられるようにする。そのために、「遊び活動1－紹介活動－遊び活動2」の構成を行う。まず、提示された場や遊具で遊ばせる（遊び活動1）。次にその遊び方を友達に紹介させ（紹介活動）、その後、再度遊ばせる（遊び活動2）。これにより、モデルとなる姿を真似したり取り入れたりなどを子ども自身が行い、その後の遊びに工夫が見られるようになる。ひろげる段階では、友達へのかかわりが深まるように、他のクラスの友達を招待して遊ばせる。そうすることで、かかわる対象やかかわり方をひろげ、楽しく遊んだ満足感を味わえるようにする。

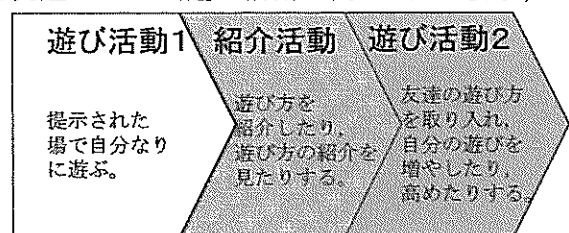


図1 遊びが高まる活動構成

第1・2学年 単元「レストランごっこをしよう」

(1) 目 標

- 1 レストランごっこを行うために場や素材を活用しながら、注文したり支払いをしたりなど友達とかわりながら楽しもうとしている。
- 2 提示された場や素材を活用しながら注文に応じた料理を見立て運んだり、素材を使って支払いしたりなど、場や素材を必要なものに見立てて遊ぶことができる。

(2) 単元の考え方

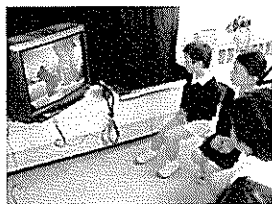
- 教材化として、レストランの利用での注文や調理、接客、支払いなどができるようにレストランの模擬の場を設定し（遊戯性）、お客と店員の立場からの注文や支払いのやりとりをさせ（関係性）、料理や支払いにおいて、素材からの見立て遊びができるように（価値性）する。
- 活動構成の工夫として、つかむ段階においてレストラン利用のVTRに出合わせ、利用した経験を話し合わせ生活と関連付け、レストランごっこ遊びの見通しをもたせる。つくる段階においては、自分の今までの生活経験から提示された場を使って、自由に遊ぶ「遊び活動1」、遊び方を紹介し合い、自分の生活経験からよりよい遊びを見分けて今後の遊びの参考にする「紹介活動」、紹介活動の遊び方を活かして自分の遊び方を増やしなが遊ぶ「遊び活動2」から構成し、見立てやかかわりの遊びが深まるようにする。ひろげる段階においては、友達を招待して一緒にレストランごっこをして、説明やお世話を行うことで達成感と充実感を味わわせるようにする。

(3) 学習の流れ

Bグループ b児（2年男子）	Cグループ c児（2年男子）
○ 人とかわかることに関心が芽生え始めている。決まった友達に一方的な声かけをするが、相手の顔を見ることは難しい。	○ 人とかわかることは好きで、友達への声かけは多い。しかし、自分の意思を一方的に伝えて、やりとりが深まりにくい。

つかむ段階：1/6時

レストランの店内や店員さんが働く様子の映像を見て、行った経験を話すとともに、どんなことをするのかを実際に友達とやりとりして遊ぶ。



あ、レストランだ。
いったことがある。
ジュースもあるよ。

つかむ段階では、課題を設定し、遊びを充実させる見通しがもてることをねらいとしている。

【教師の支援】

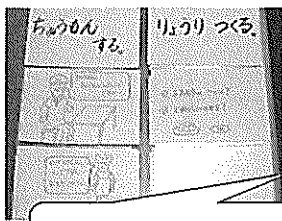
※ レストランの映像を提示し、子どもたちが利用した経験を話させることで、どんなものがあつたかを出し合わせた。

【子どもの様子】

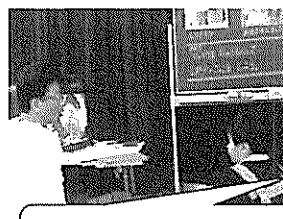
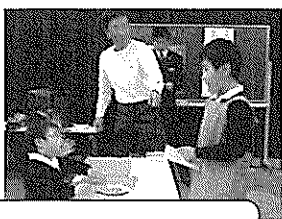
- c児は映像から経験を話すとともに、エプロンを着けて店員になりきり、お客の役でレストランごっこ遊びを始めた。

つくる段階：2～5/6時

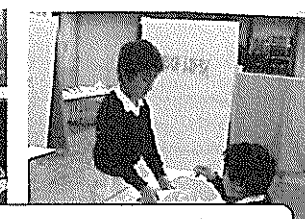
提示されたレストランの場を使って、客と店員に分かれてやりとりしながら遊ぶ。



どれがいいですか？カレーライスですか。お好みですか？



お待たせしました。スパゲッティです。食べてください。味はどうですか？



※ 遊び活動2で参考にして遊べるように遊びカードを配布した。

- 遊び活動1で、注文を聞き間違えて、ハンバーグを作り、お客に料理を持って行き、黙って渡した。紹介活動で、レストランの店員のVTRを見て遊びカードを受け取った。遊び活動2において、遊びカードを参考にして友達からの注文を聞いた後に「カレーライスですか？」と復唱したり、料理を出すときに「お待たせしました。」と言ったりできた。

※ レストランの店員のやりとりの様子をVTRを見せることで参考にさせた。

- 遊び活動1では、料理を出すときに「はい、どうぞ」とだけ言っていた。紹介活動でレストランで店員が働く様子のVTRを見て、その言い方を参考にした。その後の遊び活動2において、料理を出すときにVTRの様子を参考にしながら、友達に「お待たせしました。スパゲッティです。味はどうですか？」と自分からやりとりをすることができた。

ひろげる段階：6/6時

レストランごっこに3・4年の友達を招待し、注文や支払いなど一緒に見立て遊びをして遊ぶ。



おいしかったですか？
100円です。また、来てくださいね。

ひろげる段階では、レストランごっこに中学年の友達を招待し、身に付けた技能を発揮して遊び、満足感を味わえることをねらいとしている。

【教師の支援】

※ 遊びカードを活かしながら友達に働きかけ、レストラン遊びをするようにした。

【子どもの様子】

- c児は自分からいろいろな友達のところへ行き、進んで注文を取り、意欲的に遊んだ。
- 店員の役になって出迎え、注文のとき料理名だけでなく言葉を増やしてやりとりした。

【考察】

- レストランの場を設定し、素材を使って料理の見立て遊びができるように教材化したことは、友達とのかかわりを深め、見立てが高まるという遊びの工夫を主体的にさせる上で有効である。
- 料理の注文のやりとりや料理の盛りつけにおいて、遊び活動1－紹介活動－遊び活動2となるように活動を構成し、個に応じた遊びカードやメニューの提示による支援をしたことは、やりとりや見立ての技能を主体的に高める上で有効であった。

○ 帰国子女教育の構想

自信と誇りを育む帰国子女教育

○ はじめに

国際化、ボーダレス化が進み、海外で生活する人々や海外子女が増えると同時に、帰国子女の数も増加している。また、帰国子女の子どもたちの滞在国での生活経験や学習経験も多様化している。このような現状の中、多くの帰国子女たちに、海外での生活と日本での生活の差による不安やとまどいから、うまく生活に適應できなかったり、海外生活での経験を閉じこめてしまったりする状況がある。このような状況を考えたときに、帰国子女の子どもたちひとりひとりに、今後日本で生活していくための自信や、海外での貴重な経験を生かしていこうとする誇りを身に付けさせることが必要になってくる。

多様な生活経験や学習経験をもつ子どもたちに、自信と誇りを育むためには、画一的な学習ではなく、それぞれの生活経験からくる個性や学習経験からくる個人差に対応できる学習を構想しなければならない。つまり、多様な実態に応じた「個性」を重視した学習を行うことで、子どもたちに帰国子女としての自信や誇りを十分に育成するのである。

本校、帰国子女教育では、日本で生きていくための「自信」と海外生活での貴重な体験を肯定的にとらえ、生かしていこうとする「誇り」を育んでいくことにより、今後の国際社会を生きていく知的にたくましい人間を育成することを目指していく。

1 自信と誇りを育む帰国子女教育について

帰国子女教育において子どもたちに付けさせたい自信とは、自分自身の課題をとらえ、それを解決することを積み重ねることで、自分自身の成長をとらえ、学習や生活に対して「できる」という可能性を自覚することである。また誇りとは、海外で生活したり学習したりする中で身に付けてきた見方・考え方や経験そのものを学習の中で積極的にいかしていくことで、海外生活経験を肯定的にとらえ、積極的に活用していこうとする意欲をもつことである。

自信と誇りをはぐくむ帰国子女教育とは、個の実態を学習面と生活面の両面から把握し、それに応じた目標や方法を設定し、達成できるようなカリキュラムを編成し、実施していく学習活動である。

- 日本でよりよい生活を送るために、生活や学習に対する自分の課題に気づき、学習に取り組む子ども（学ぶ意欲）
- 未習の内容や習熟が不十分な内容を獲得し、海外生活で身に付けた経験を積極的にいかす子ども（能力）
- 課題を克服したり、海外の経験をいかしたりすることを繰り返し、帰国子女の自分に誇りをもつ子ども（自己の自覚）

～個の実態に応じたコース別活動を位置付けた帰国子女教育の展開～

永 尾 健

2 個の実態に応じたコース別活動を位置付けた帰国子女教育の展開について

個の実態とは、帰国子女の子どもたちの個性と学習における個人差のことである。個性とは、その子どものもつ経験そのものであり、個人の全体的特性のことである。個人差とは、子どもの学力（実体的学力）、学習時間や学習スタイル、興味・関心などの状態のことである。帰国子女の子どもたちに、自信と誇りを育むためには、それぞれの個性や個人差に対応できる学習を構想しなければならない。具体的には、個性や個人差に応じた目標・内容設定と複線化された学習形態を取り入れていく。

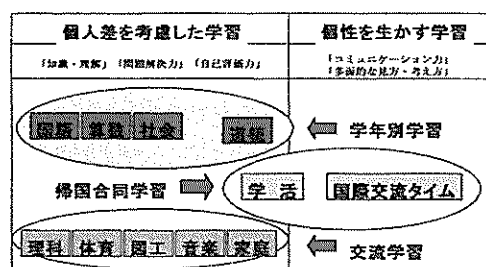
個の実態に応じたコース別活動とは、子どもの個性や個人差に応じて、目標・内容を複数設定し、それぞれの目標や内容ごとの学習活動をグループや個人という形態で行っていくことである。個性や個人差を考えた目標・内容設定については、個性を重視した目標・内容設定と個人差を重視した目標・内容設定を教科や国際交流タイムで重点化して行っていく。また、コース別活動の設定については、子どもの実態に応じたグループを作り、追究場面に依拠してグループを設定していく。グループ化については、①身に付けさせたい力や能力別、②興味・関心別、③滞在国や文化圏別のグループ設定がある。また、グループの人数についても、個別、小集団、全体など、ねらいに応じて設定していく。

個の実態に応じたコース別活動を位置付けた帰国子女教育とは、各教科や国際交流タイムでねらう力をもとに、個性を重視したコース別活動と個人差を重視したコース別活動の2つを設定していくことである。また、その際、個性と個人差の両方を考えた学習を各教科・領域や国際交流タイムを対象に、バランスよく展開していく必要がある。

3 具体的構想

● 2つのコース別学習の位置付け

子どもたちの自信と誇りを育むために、個性を重視したコース別活動と個人差を重視したコース別活動の2つをそれぞれでねらう力をもとに設定していく。個人差を視点として育てる力を、「知識・理解」「問題解決力」「自己評価力」、個性を視点として育てる力として「コミュニケーション力」「多面的な見方・考え方」を設定する。また、「知識・理解」「問題解決力」「自己評価力」を各教科に重点化し、「コミュニケーション力」「多面的な見方・考え方」を国際交流タイムに重点化する。それぞれの学習形態については、「国語」「算数」「社会」では、学年別に帰国子女だけで行い、その他の教科は普通学級との交流学习の形態をとる。「国際交流タイム」では帰国子女学級の学年を解体した帰国子女学級合同での学習を行う。また、帰国子女学級独自の学習以外に、交流学級での学習も行う。交流学級での学習においては、「生活適応」や「学習適応」の面からも価値があるため、海外との違いが少なく、学習活動の適応がしやすい「理科」「体育」「図工」「音楽」「家庭」の教科については、交流学习で行っていく。



○ 国際交流タイムの構想

帰国子女としての誇りを育む国際交流タイムの学習

○ はじめに

これからの帰国子女教育では、「個性」と「相互交流」を重視した学習を行っていくことが強調されている。「個性」や「相互交流」を重視する学習を展開することにより、自分にあった「コミュニケーション力」や「多面的な見方・考え方」を発揮させ、日本や諸外国のよさを肯定的にとらえるようにすることが大切である。このような力を発揮させるためには、子どもひとりひとりの「個性」を生かした主体的な活動の中で、それらを使っていくことが必要である。実際に授業の中で、ひとりひとりがもっているそれぞれの自分の経験を使うことで、海外滞在経験の価値を自覚することができるのである。本校国際交流タイムにおいては、多様な経験をしている子どもひとりひとりの滞在国での経験を個性としてとらえ、それらを生かし、相互交流をする中で、帰国子女としての誇りを育てていかなければならない。

1 帰国子女としての誇りを育む国際交流タイムの学習について

帰国子女としての誇りとは、海外生活経験を肯定的にとらえ、今後の生活の中で、積極的に活用していこうとする意欲をもつことである。

帰国子女としての誇りを育むとは、自分にあった「コミュニケーション力」や「多面的な見方・考え方」を学習の中で発揮させ、日本や諸外国のよさを肯定的にとらえていくことである。

「コミュニケーション力」を発揮させるとは、海外滞在経験で身につけた言語力を使ったり、海外での経験をもとに情報を収集したりすることである。

「多面的な見方・考え方」を発揮させるとは、海外生活で経験した、その国や文化圏の雰囲気や様子を学習と結びつけて考えることである。

帰国子女としての誇りを育む国際交流タイムの学習とは、滞在国やその文化圏の生活と日本や他の国のよさを追究する活動の中で、①自分にあった追究方法を発揮し、②様々な国のよさをとらえ、③自分自身の追究した方法や内容に、満足感をもつことである。そのためには、追究方法や海外での経験という視点で実態をとらえていくことが大切になってくる。

- | | |
|---|---------|
| ○ 様々な国のよさを追究していく中で、海外での経験を生かそうとする子ども | (学ぶ意欲) |
| ○ 自分ができる追究方法を発揮し、様々な国のよさをとらえる子ども | (能力) |
| ○ 海外での経験をいかすことのできる自分に気づき、帰国子女としての誇りをもつ子ども | (自己の自覚) |

～個性と相互交流を重視した国際交流タイムの展開～

清水 隆一郎

2 個性と相互交流を重視した国際交流タイムの展開について

個性と相互交流を重視したとは、帰国子女の子どもたちの「特性」を過度に強調するのではなく、一人一人の海外での経験や学習の背景を理解し、学習内容を設定していくことである。また、それぞれが全く別々の内容を学習するのではなく、見方・考え方や文化の比較・相対化ができる内容を設定していくことである。このような個性と相互交流を重視した学習を展開するには、相互交流と個性両方から目標・内容設定を行い、複線化された学習形態を取り入れることが必要になってくると考える。

個性と相互交流を重視したコース別活動とは、子どもの個性を「コミュニケーション力」「多面的な見方・考え方」など、ねらう力の面から分析するとともに、国際理解を深めていく立場（出身国や滞在年数）からも分析して学習内容を設定し、内容ごとの活動を個人やグループで行ったり、調べた内容をお互いに比較・分類したりしていく一連の活動のことである。

個人やグループでの活動については、その子どものもっている経験を基本に、滞在していた国やその国の文化圏をもとに大グループを構成していく。また、その中で、「興味・関心」に応じたテーマを設定し、「コミュニケーション力」や「多面的な見方・考え方」の面からさらに小グループ化したり個別化したりする。そして、相互交流を小グループから大グループで行っていくようにする。

個性と相互交流を重視したコース別活動による国際交流タイムとは、子どもが共通の追究の求めをもつための内容を設定し、個性に応じたコース別の活動と相互交流を位置付けることで、「コミュニケーション力」や「多面的な見方・考え方」を発揮できるようにしていく学習である。

3 具体的構想

● 「個性」と「相互交流」を考慮した教材化の工夫と内容設定について

国際交流タイムでは、「相互交流」の視点からの共通テーマと、「個性」の視点からのコース別内容を設定する。このような視点をもとに、以下の点に留意して教材化の工夫をはかる。

- ① 全員の子どもが共有できる目的がもてるように、日本国内に多様に存在する文化であり、滞在国内や滞在文化圏でも共通・類似する文化的な事象を取り上げる。
- ② 個性を発揮できる多様な追究方法を保障するために、子ども全ての滞在国内や滞在国内の文化圏の事象や人を活用して追究ができる問題が設定できるものを取り上げる。
- ③ 日本や滞在国内のよさの見直しができるために、目的を達成することにより、満足感を得、その過程で共通点や差異点、その理由を発見したり意味づけたりできるものを取り上げる。

内容設定においては、「コミュニケーション力」「多面的な見方・考え方」の実態を段階に分け、その2つを軸にして学習内容を設定する。

経験の場・経験	身近な人からの情報収集	海外生活者からの情報収集	多様な人や情報物の活用
日本での経験が強い	諸外国と滞在国内の事実比較	諸外国同士の関係把握	国際社会関係と原因追究
海外での経験が強い	日本と滞在国内の事実比較	日本と滞在国内の関係把握	日本と国際社会の関係と原因追究

第3・4・5・6学年3組 単元「作ろう!世界にひとつの陶芸作品!」

(1) 目標

- 1 日本や滞在国の陶器のデザインや形、用途を個性を発揮して調べ、学んだことを生かしたオリジナル陶芸品を作ることができる。
- 2 日本や自分が住んでいた滞在国には伝統的なデザインや形の特徴的な陶器があり、それぞれの作品には人々の生活背景や考え方が反映されていることを調べることができる。

(2) 単元の考え方

- 本単元は、日本の伝統的な陶芸品や海外の陶芸品を追究対象とし、陶芸品の種類や作り方、歴史的背景を探る学習である。ここでは、簡易陶芸品作りの体験や身のまわりの陶芸品の比較を行い、「陶芸品の作り方」や「陶芸品の種類」に気がかりをもたせ、実際に陶芸家の人から陶器の作り方や種類について話してもらったり、滞在国の特徴を考えたりする中で、学んだことや海外での経験を生かした自分だけの陶芸品を作りたいという思いをふくらませていく。

(3) 学習の流れ

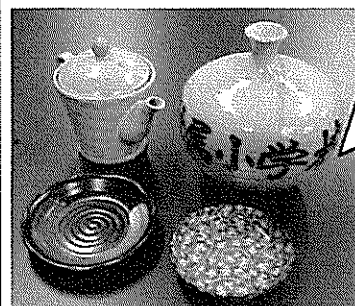
出合う段階：1～3/21時

オープン陶芸用粘土を使って手作り陶芸体験をし、市販品と比較する。



手作り陶芸体験をする子ども

「思ったより形を作るのが難しい」
(粘土への着目)
「ふつうの粘土なのに焼くとお皿になるのかな」
(粘土が陶器になること)



提示した市販陶芸品

「いろいろな種類の陶器があるね」
(種類への着目)
「どうやったら作れるのかな」
(作り方への着目)

出合う段階では、手作り陶芸体験を行い、身のまわりにある様々な陶芸品を観察したり比較したりし、その作り方や種類に着目し、学習問題を設定することをねらいとしている。

【教師の支援】

- ※ 手作り陶芸品とその材料であるオープン陶芸用粘土を提示し、自分たちで手作りの陶芸品を作る場を設定した。
- ※ 用途やデザインの異なる3種類の陶器を提示し、自分たちが作った陶芸品と比較する場を設定する。

【子どもの様子】

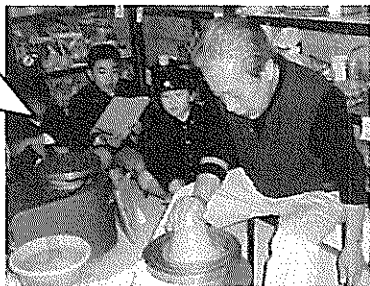
- 子どもたちは、オープン陶芸用粘土を使って、作品を作っていた。作っていく中で、陶芸作りの難しさや熱を加えると粘土が堅くなるといった陶器の特徴に気付いていった。

また、出来上がった作品と市販品を比べ、「どうしたらこんな形になるのかな」「陶器で作れる物は他にもあるのかな」といった作り方や種類に関わる気がかりから学習問題を設定した。

追究する段階：4～15/21時

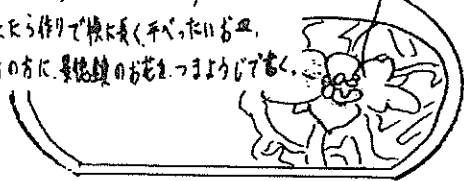
陶器の作り方や陶器の種類を調べ、自分の作る陶器の設計図を完成させる。

陶芸教室の先生から、陶器ができる過程と作り方や種類について調べる



景徳鎮の花(中国風)

- ・土を丸く平べったくする。
- ・右の方に景徳鎮の花をうつすように書く。



子どもたちが「自分の滞在国の特徴」を調べ、デザインしたオリジナル陶芸品の設計図

いかす段階：16～21/21時

陶芸教室に行き、設計図をもとに、オリジナル陶芸品を完成させる。



陶芸教室の方と特徴を表す方法を確認し、作品を作り上げる。

追究する段階では、学習問題をもとに、日本の伝統的な陶芸品を調べたり、グループに分かれ、滞在国の特徴を表すデザインを調べたりし、自分だけの陶芸品を作ることをねらいとしている。

【教師の支援】

- ※ 陶芸教室に見学に行き、陶器を作る過程と計画の重要性について話してもらう。
- ※ 陶芸品作りの計画段階で、課題別のグループで、滞在国の特徴や陶器の特徴を表す方法を話し合わせる。

【子どもの様子】

- 陶芸教室の見学で、陶器の作り方や日本の陶器の作り方について調べ、自分たちでオリジナル陶器を作る求めをもった。
- オリジナル陶器の設計図を書くために、グループに分かれ、日本の陶器についてくわしく調べたり、滞在国の特徴について話し合ったりし、設計図を完成させることができた。

いかす段階では、学んだことをいかして自分だけの陶芸品を完成させる事をねらいとしている。

【教師の支援】

- ※ 陶芸教室の先生から、設計図の鑑定をしてもらい、模様に込められている意味を再確認させる。

【子どもの様子】

- 完成した設計図をもとに、滞在国の特徴をいかすのか、日本の陶器の特徴をいかすのか再度話し合い、自分だけの特徴のある設計図を完成させた。その後、設計図をもとに陶芸品を作り上げることができた。

【考察】

- ◎ 「個性」が発揮され、多様な文化の「相互交流」が行われるように、「オリジナル陶器作り」を取り上げ、グループ別の活動を設定した。その際、単に「陶器を作ろう」という目的ではなく、「自分だけの…」という思いをもたせることが大切である。また、グループ化の際には、日本文化の追究に重点を置くグループと海外文化の追究に重点を置くグループを設定することで、子どもが、生活経験を含めた学びの統合を行うようにすることが大切である。
- ◎ 出会う段階の陶芸体験では、体験の後に、市販品との比較を位置付けることで、子どもが陶器を調べるとい学習問題を設定することができる。

メ 毛

お わ り に

平成19年度は新学習指導要領の告示が予定されています。その内容については教育界のみならず、社会的な関心にまで高まってきている状況にあります。

このような中であって学校は、目の前の子どもたちの状況を見極め、どのような力を必要としているのか、またそのための方策や実践を積み重ねておかななくてはなりません。特色あるカリキュラムはそのような実践が基盤となって生み出されてくるものと思います。

本校は知的にたくましく生きる子どもを育てることを目指して、今年度より「学びを強め確かにする学習の創造」を研究主題としてスタートしました。この研究は、子どもたちが学習への必要感や自我関与を強く持って解決に臨み、自他共に納得できる「応え」を創り出していくためのカリキュラムの構成や編成をねらったものであり、また今問われている日本の子どもたちの「学習意欲の低下」に関してその改善となる授業実践を提案していくものであります。そのために、「教育内容の計画」と言ったこれまでのカリキュラム編成の考えに対して、子ども一人一人の学習経験の履歴を視点としてカリキュラムを構想し、より一人一人に応じた学習過程を具体化できるようにすることと、それに応じて、学ぶ学習内容が子どもたちの日常生活の中からも必要を感じたり、また日常生活に活用できたりする単元づくり、題材づくりを進めていくことを柱にして研究の1年目をスタートしたところです。

本研究を進めるにあたり、昨年度の実証授業は延べ数80回を超えています。いずれの教科においても工夫改善に明け暮れた年でした。その結果は、学習時の子どもの真剣な眼差しに現れてきていると自負の念を持つようになりました。しかしまだ明確にする課題も山積しています。今後、2年目3年目の積み重ねの中で解決・改善に努めてまいります。

本校には特別支援学級、帰国子女学級を併設しそれぞれの教育研究ならびに実践を行ってきています。特別支援教育では「選ぶ力、やりとりする力、知識・技能」を育むために、社会場面や生活場面を取り入れた単元・題材の開発やそれに応じた個別の教育支援の在り方を究明してきています。また帰国子女学級では学習適応と特性伸長を目指し、各教科等で行う個人差に応じたコース別活動と国際交流タイムで発揮される個性を生かしたコース別活動を行っています。どちらの学級も個別の支援計画に応じるカリキュラムについて提議しています。

最後になりましたが、本校研究の深化・充実のためにこれまでご指導を賜りました福岡教育大学の先生方をはじめ、全体講演をお受けいただいた、京都ノートルダム女子大学教授 加藤 明先生ならびに本校先輩、関係の皆様方に深く感謝申し上げます。さらにこれからも私たちの研究に厳しいご指導・ご助言を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年5月

副校長 三 原 英 喜

福岡教育大学附属福岡小学校・福岡教育大学研究同人（平成19年度）

◎ 学 長 大後 忠志						
◎ 大 (国語科)	前田 眞證	(生活科)	寺岡 豪	(道徳)	堺 正之	
(社会科)	河野 智文	(音楽科)	津川 建	(特別活動)	小林 万里子	
(算数科)	豊島 啓司	(家庭科)	平井 大志	(婦国子女教育)	高田 清	
	山下 昭	(図画工作科)	原田 純子	(特別支援教育)	小泉 令三	
	飯田 慎司	(体育科)	甲斐 守之	(養護)	小林 万里子	
(理科)	山口 武志		阿部 紀宏		納富 恵子	
	清水 紀浩		草尾 美彰		猪狩 博行	
	田中 義孝		相部 井		照屋 正和	
	森藤 秀俊				宮田 正和	

◎ 附 属 小 (職名)	(担任)	(専攻)	(氏名)	(出身地区)
校長		理科	鈴木 清一	大分県
副校長		国語	原島 英喜	福岡県
教務主任		図画工作	北田 尚雄○	福岡県
研究主任		国算	光延 正次郎○	福岡県
教諭	1 の 1	生活	塚本 健悟○	福岡県
教諭	1 の 2	徳育	木下 正典○	福岡県
教諭	2 の 1	社会	渡邊 美紀○	福岡県
教諭	2 の 2	理科	高瀬 正則	福岡県
教諭	3 の 1	音楽	今泉 伸一郎	福岡県
教諭	3 の 2	特別活動	久保 勝美	福岡県
教諭	4 の 1	家庭	福原 伸治	福岡県
教諭	4 の 2	国語	有川 陽子	福岡県
教諭	3・4 の 3	算数	黒澤 真二	福岡県
教諭	5 の 1	英語	島川 二郎	福岡県
教諭	5 の 2	数	長門 直子	福岡県
教諭	5 の 3	社会	平川 洋一	福岡県
教諭	6 の 1	理科	高良 祐治○	福岡県
教諭	6 の 2	音楽	弘松 健樹	福岡県
教諭	6 の 3	図画工作	原田 敏男	福岡県
教諭	ふさく梅	国算	諏訪 佳子	福岡県
教諭		英語	下川 勝彦○	福岡県
養護教諭		体育	松尾 七七子	福岡県
研修		算数	原尻 敏広	福岡県
研修		音楽	松藤 勲	福岡県
研修		数	武田 耕治	福岡県
研修		図画工作	平山 哲也	福岡県
研修		徳語	白井 のり子	福岡県
講師		英語	増山 雄一	福岡県
講師		英語	清水 知子	福岡県
講師		英語	セバウン かおり	福岡県
講師		英語	Matthew Love	福岡県
講師		英語	結城 今日子	福岡県

※ ○印は平成19年度研究部員

平成18年度 附属福岡小学校転出教員

永江 誠司 (大 学)	高野 誠一 (筑 紫)	岩城 一磨 (三井・小郡)
清水 隆一郎 (筑 紫)	脇本 孝枝 (福岡市)	河津 有一 (筑 紫)
柴田 喜代子 (糟 屋)	川上 雄一郎 (宗 像)	下川 大祐 (八女・筑後)
石井 雄児 (浮 羽)	二串 英一 (糸 島)	

平成19年5月 印刷・発行
福岡教育大学附属福岡小学校
研究紀要 No.38

発行者 福岡教育大学附属福岡小学校
〒810-0061 福岡市中央区西公園12番1号
TEL 092(741)4731(代)

印刷所 (株)ネオプリンティング
TEL 092(511)8941(代)

Fuzoku
FuKoka

